

---

# 税込み245円の愛。

0.5%

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

税込み245円の愛。

### 【Nコード】

N3596Q

### 【作者名】

0.5%

### 【あらすじ】

来神時代の親友が、急に帰ってに帰ってきた！！

24時間戦争コンビが、最も恐れている存在。それは、来神時代の親友だった。まあ、親友といっても、ソイツのことはあまり知らないのだが……。

いつでもどこでも妄想に走る迷走きみな作者のオリキャラと、デュラの静雄、臨也、その他諸々が織り成す、わけのわからない迷走物

語 じじじに始まる……！（もしじじじに始まっているけど）

× 1 お久しぶり

池袋・某所。今日もにぎわっているこの街は、何一つ、いつもと変わらない。そう。いつもと。

「い〜ざ〜や〜くん」

「あ、シズちゃん。見つかつちゃった」

「待て臨也あああああああつ！！！！」

人々の間を、飛ぶはずのないものが飛び交う。それを避ける、フアー付きの黒いコートを身に纏った、美青年。それを投げている、バーテン服の金髪。

この二人は、池袋では、知らない奴などいない、有名人だ。人々からは、24時間戦争コンビと呼ばれるほどである。

この二人のことを、少し、説明しよう。

フアー付きの黒いコートを、常に着ている美青年。情報屋の折原臨也。人間を愛して已まない奴だ。

金髪のサングラス。平和島 静雄。喧嘩人形と呼ばれている。化け物のような奴で、標識やガードレールを片手で引っこ抜いて投げ、自動販売機を投げ、自動車をサッカーボールの如く蹴り飛ばす。

「池袋には二度と来るなって言っただろーがあああああああつ」

「まあまあ、落ち着いてよ、シズちゃん」

「落ち着いてられるかああつ」

綺麗な弧を描いて、標識が飛ぶ。

疾風を纏って、自販機が飛ぶ。

「ああ、もう、しつこいなあ。しょうがない」

臨也が、溜息を吐いてから、静雄のほうを向く。

「そんなに遊んでほしいなら、相手、してあげるよ」

そう言いながら、サバイバルナイフを出す。

「いい度胸してんじゃねえか。最初っから、そうすりゃあいいものを！」

静雄は、近くの標識を引き抜く。そして。

「おりゃあああつ!!!」

全力で、臨也に投げつける。  
が。

「ざんねえんっ」

臨也は華麗にそれを避ける。

標的を失った標識は、それでも止まることなく、真っ直ぐ飛んでいく。

「っあ!」

「おっと。やばいね、あれは」

標識は、臨也の15メートル程後ろにいた、ベビーカーを押していた女の人を、貫きそうになる。

それに気づいたときには、もう、間に合わない。

「っ、いやあああつ!!!」

女の人が、叫ぶ。

あと数センチ。

その時。

「よっ!」

ガコンッ

そんな声と共に、標識は何もないごみ捨て場の方に飛んでいく。

「……………え?」

「ん?」

「!」

その場にいた人が、キョトンとする。

標識、グーで飛ばした?

標識を見ていた奴らが、そいつのほうを向く。そいつは、座り込んでいる女の人に手を差し出して、声をかけている。

「大丈夫ですか? 怪我、ありません?」

「は、はい。ありがとうございます……………」

「良かった。ご迷惑をおかけしました。お詫びに、このチケット、



な彼が、どうして、池袋にいるのだろうか。

いや、そんなことより、どうしよう。

柚留が、すごく怒っている。このままだと、二人とも、フルボツコにされかねない。

臨也と静雄は、意を決して、謝ることにした。

「柚留、ごめん！ もう人に迷惑はかけないようにするから！」

「だから、フルボツコは勘弁してくれ……………」

「……………。はあ。全く、しょうがないなあ……………」

柚留の一言に、二人が顔を上げた。

「新しくできた喫茶店の特大パフェ。あれ奢ってくれたら、許してあげる」

が、すぐに顔を青くする。

「おい、ノミ蟲。あそこって……………」

「すごい高いんだよね……………」

二人が、同時に財布の中を見る。

そして、柚留のほうを向く。

柚留が微笑む。

二人のお金は、その後、柚留の特大パフェ3つと化して消えていったそうだ。

× 1 お久しぶり（後書き）

どもども。こんな感じで始めました。キャラ崩壊しそうだけど、頑張ってみます。

これからよろしくお願いしますっ！



×2 初めまして

東京池袋・某所。

「でさあ、帝人……って、聞いてるかあ？」

「正臣、園原さん、あれ」

俺が、親友の竜ヶ峰 帝人と、園原 杏里に、語っている途中、帝人がボーっとしているから、話を中断すると、帝人が、ある所を指さした。その指の先を見てみると、そこには、

「あれ。臨也と静雄さんと……、誰だ、あの人？」

24時間コンビと、見かけない人が歩いていて。

誰だ……？ こんなときは……。

「さあ、レッツゴー！！」

「え、ちよ、正臣！？ 何、ちょっと待っ」

「りゅ、竜ヶ峰くん、紀田くん！」

話しかけるのが一番！

俺は、帝人と杏里を引っぱって、三人の方に走っていった。

「臨也さん、静雄さん！」

「あ、正臣くん。帝人くと杏里ちゃんも。こんにちは。どうしたんだい。君たちから話しかけてくるなんて、珍しいね」

「その人、誰ですか？ 見かけない顔ですけど」

臨也の言うことをかろくながし、質問をする。

「かろくながしたよね、正臣くん。まあ、いいや。こいつは、俺とシズちゃんの高校の頃の同級生の、ゆずる袖留だよ。袖留、この子たちは右から、竜ヶ峰 帝人くん、紀田 正臣くん、園原 杏里ちゃんだよ」

「紀田 正臣です」

「りゅ、竜ヶ峰 帝人です……」

「園原 杏里です」

「はじめまして。穴戸鬼門 ししとめもん 袖留ゆずるだよ。なんか、臨也と静雄がいる

いる迷惑かけてるみたいで、ごめんね。これからよろしく」

柚留さんが、ニコッと笑う。かっこいいなあ、柚留さん。背も、静雄さんより少し高いし、スタイルいいし、顔もいいし。何より、優しそうだ。

そんなこと思っていると。

「ねえ」

「ふわあっ!？」

柚留さんが、帝人の顔に、自分の顔を近づけた。途端、帝人が顔を真っ赤にして、変な声を上げる。

「君、かわいい顔してるねっ。名前、エアコンみたいで、面白いし。僕、君のこと気に入った」

そう言いながら、柚留さんは帝人の頭を撫でる。帝人は、顔をフルに真っ赤にして、「え、えあこっ」  
なんて言ってる。

……はあ。帝人って、ほんとに流されやすい。全く。

「……おい柚留。そろそろ行くぞ」

見かねた静雄さんが、柚留さんを止めてくれた。静雄さん、いい人だ!!

「おっと、そうだったね。じゃあ、そろそろ行くか。それじゃ、

また今度ね、みかどくん、まさおみくん、あんりちゃん」

なぜか、柚留さんの俺たちの呼び方が、ひらがなっぽい気がした。

「いい人みたいだね、柚留さん」

「だな。帝人、だいじよぶか？」

帝人が、まだポヤポヤしてるから、とりあえず、声をかける。

「はっ。う、うん。ごめん」

柚留さん、帝人には少し刺激が強すぎたか？

まあ、そのうち慣れてくるだろう。

「さて。なんか腹減ったから、どっか行くか」

「そうだね」

これが、俺たちと柚留さんの初めて会った日のことだった。

×2 初めまして(後書き)

紀田くんたち登場！ やっふー！  
なんか、杏里ちゃんの話し方が  
つかめない。でも気にしない。

都内池袋・とあるマンション

僕は、苛々しながら、パソコンの前にいる。セルティがいるのに、仕事なんてやってられるかあ！　なんて仕事放棄しようとしたら、セルティに、『大事な仕事なんだから、しっかりしろ』と言われてしまった。セルティに言われてなかったら、やってないんだけど。セルティに言われちゃったら、やるしかないよね！！　でも、さすがに、疲れてきた。苛々する。甘いものを食べればいいんだけど、うちには、今、そんなものはない。あるのは、紅茶に入れる角砂糖ぐらい……、あ、紅茶を飲めばいいじゃないか！

そう思って立ち上がったとき。

ピンポーン

インターホンが鳴った。

今、苛々してるからなー。ちょっとむかつくよねー。

だから、居留守を使い込もうとした。鍵もかかっているし。

そしたら、

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポピンポ

っち、連打してきた。あー、もう。

さすがの僕でも、それは腹が立つので、荒々しくドアを開けようと、ドアノブに手をかけた次の瞬間。

バアンツツツツツ！！！！

ドアが、なぜか僕のほうに倒れてきた。僕は、見事にそれに押しつぶされる。

「な、なにぐえっ！！」

「新羅あ？　いないの？」

起き上がるうとしたら、今度は、誰かに踏み潰される。

「あれえ」

『なんだ、新羅！！　すごい音がしたぞ！？』

「あ、セルテイー!!」

『!! 袖留ゆずりじゃないか! どうした、帰ってきたのか!』

「うん! 久しぶり! 会いたかったよ!」

『私もだ!』

「くはっ」

上にいた奴が、跳んだのか、そのせいで、また押しつぶされる。

でも、退いたみたいだから、軽くなった。僕は、ドアをどかして、這いずり出た。

そして目に入ったのは、

「!!!!??」

「あ、新羅。そんなどこにいたの?」

『新羅じゃないか。そこにいたのか』

男と抱き合っているセルテイの姿。

「せ、セルテイ! それ、誰! 何、彼氏!? いたの!? 酷い

よセルテイ、僕という人がいながら、彼氏をつくるなん」

『新羅、それ以上言っと、ゴミ捨て場に捨てるぞ』

「すみません」

「相変わらずだね、新羅」

「あれ、袖留じゃないか。帰ってきたのかい?」

僕の視界に入ったのは、5年ぶりに見る、親友の姿だった。

「うん。池袋も楽しいけど、県外もすごく楽しかったよ!」

満面の笑みで言う袖留。その顔は、5年前と、あまり変わらない。  
無邪気な笑顔だ。

「とりあえず、あがってよ。お茶、出すから」

「ありがとう」

さて、このドア、どうしよう……。まあ、いいか。

「静雄と臨也には会ってきたの?」

「うん。真っ先に会いに行っただけけど、その途中で、二人を見か

けてね。静雄の投げた標識が、ベビーカーをおしてた女の人に当たりそうになってさあ。もう、カチンときたね。人まで巻き込んでその後に、特大パフエを三つ奢ってもらったよ」

ああ、だから、あの二人、財布の中を真っ白になって覗き込んでたんだね。理由がわかったよ。

『お前、あのデカいのを、一人で三つも食べたのか！？』

「うん。おいしかったよー」

『恐ろしい……………』

昔から、柚留は無駄に食うしね。一回、胃袋を診たけど、消化が早いんだよね。柚留って。

「ドタチンには、会ってきたの？」

「うん。明日行こうと思ってる。楽しみだなーっ」

柚留は、本当に楽しみのようで、にこにここと、笑みを浮かべている。

『本当に楽しみなんだな』

セルティが言う。

「うん。だって、ドタチンはお母さんみたいなもんだしね。早く会いたいな」

まあ、確かにね。お母さんみたいな発言、多いし。

「ところで、セルティ。お土産があるんだ」

『？ 土産？』

柚留が、ジーンズのポケットから、正方形の箱を取り出して、セルティに渡す。

「なに？ それ」

『？』

「セルティにピッタリだったから、つい買っちゃって。あ、新羅にも、はい」

「ありがとう」

箱をあけてみると、中には、

「わあっ」

『おお』

指輪が入っていた。

「ペアの。似合うと思う」

柚留が笑いながら言う。

『どうだ？』

セルティが聞く。

「わ、思った以上！　すごく似合う！　ね、新羅」

「うん！　とても素敵だよ！」

そう言ってあげると、セルティは、少し照れながら、『ありがとう』『なんて言ってくれる。』

可愛いなあ、もう！

「それ、新羅のだからね」

柚留が、僕の指輪を指さして言った。

「じゃ、僕はそろそろ帰るね。じゃあね」

『ああ。ありがとうな、柚留』

「また来てよ」

「うん。おじゃましましたあ」

帰った柚留。

さて。

「じゃあ、僕は仕事に戻るよ」

『頑張れ、新羅！』

「うん」

セルティに言われたら、頑張らないわけにはいかないよね！…！

×3 頑張ろっ(後書き)

ああ、押しつぶされて踏み潰されて。なんか可哀想な新羅くんになった。



× 4 行き先を変更します

「ねえ、ゆまつち。やっぱりイザイザとシズシズだったら、イザイザ受けなのかな」

「うーん、どうツスカね。でも、どちらかというところ、静雄さんのほうが受けっぱくはないツスカ？」

「そう？ 私は、シズイザ派かな」

「俺は、イザシズ派ツスカね」

「ドタチン」「門田さん」はどっち派？」

後ろで交わされる腐談議。ああ、もう、俺に話を振ってくんじゃねえ！！

第一に、犬猿の仲のあいづらが、そんなことするわけねえだろ。

俺がそう言おうと、口を開いたとき。

「僕はイザシズ派かな」

「……！！……？？」

狩沢と遊馬崎の後ろから、見かけない奴が出てきた。

驚いて、渡草がハンドルを逆方向に切ってしまう。車が壁にぶつかりそうになる。が、危機一髪。渡草がとっさにハンドルを切ったおかげで、ぶつからずにすんだ。

「わお、アクティビティ！！ すっごくいい！！」

もう少して怪我をしそうになったというのに、後ろの奴は、そんなのんきなことを言っている。

「てめえ、誰だ！ いつ乗り込んだ！」

「誰だつて……。5年経ったら、すぐに忘れちゃう？ ひどいなあ、ドタチン」

「その呼び方はやめろって言って……。ん？ 5年ぶり？」

そう言われて、俺は、そいつの顔をよく見てみた。あれ。この顔

……。っあー！

「柚留か！」

「ピンポンっ。大正解！ さすがドタチン。ちゃんと僕のこと、覚えてたんだね」

「まあ、お前もいろいろとすごい奴だったしな……………」

静雄が捻り潰されたときは、愕然としちまったよ。あの静雄を上回る力をもつ奴なんて、いないと思ってたからな。その上、校長をサラリと罵ったし。

「とうか、お前はいつ乗り込んだ」

「ん？ ドタチンたちが後ろのドア閉めるとき。いやあ、ばれてると思っただけだ」

そう言いながらヘラヘラ笑う柚留。そうだったのか。全然気づかなかった。

「門田さん。この人、誰ッスか？」

「私たち、知らないよー」

狩沢と遊馬崎が、柚留を指さして言う。

ああ、こいつらは、知らないに決まってるよな。

「俺の高校時代の親友、穴戸鬼門あなごもへん 柚留ゆりうだ。柚留。こいつらは、俺の仲間だ」

「狩沢 絵里華よ」

「遊馬崎 ウオーカーッス」

「渡草 三郎だ」

「穴戸鬼門 柚留だよ。よろしく」

それぞれ自己紹介をして、なんとなく和解する。  
と、

「ねえ、ゆずるん、さっき言ったの、本当？」

「ん？ ああ、イザシズ派っていうの？ うん」

「へえーっ。そうなの。私は、シズイザ派だけど」

…………… 柚留。お前も腐談議に参戦してしまうのか。

「やつぱ、身長とかあるじゃん。そこんこ考えると、シズシズが攻めだよ」

「いやいや、狩沢さん。1つの考えにとらわれちゃ駄目ッスよ。臨

也さんなら、できないことなんてなさそうですし」

「それに、静雄のこと、小さい頃からずーっと見てるけど、静雄のデレはヤバいよ。油断していると、免疫がない人は大変なことになるよ」

「ふーんっ。じゃあ、イザシズもいいかもね！」

柚留がどんどん、遠い存在になっていく……………。

そう思っている。

グ……………

「あ」

「ゆずるん、お腹空いてんの？」

「うん、ちよつとねえ……………。ドタチンに会いたくって、朝ごはん抜いてきちゃったんだよね……………」

柚留の一言に、俺は驚く。

「まあまあまああ！ 愛されてるね、ドタチン。会いたくてご飯を抜いてきちゃうなんて、ゆずるん、可愛い」

……………ここは、なんかやらねえと、悪いだろう。

「柚留、食いたいものあるか？」

「え？」

柚留がキョトンとする。……………間抜け面。

「だから。腹、減ってんだろ。食いたいもん、食わせてやるから。

言え」

「いいの？ じゃあ、ドタチンの作った焼きおにぎりー！」  
「は？」

「なんでもいいんでしょ？ だから」

「いや、家、今からいくのか？」

「うん」

コクリ。柚留が頷く。

「お、門田さんの手料理ツスか。俺も食べたいツス！」

「私もー！」

「俺も」

遊馬崎たちもそんなことを言い始める。

「よし。じゃあ、門田の家に行くか！」

「「「おー！」「」「」

「……俺に主導権は無いんだな」

結局、俺は焼きおにぎりとその他諸々を作らされた。

× 4 行き先を変更します（後書き）

ドタチンは料理が上手そう。

× 5 いい加減にしなさい

皆さん、こんにちは。穴戸鬼門しつじんきもん 柚留ゆずるだよ。

今、僕は、情報屋の折原 臨也と、喧嘩人形で有名な平和島 静雄を正座させてるんだ。お説教中なんだよ。え？ どうしてそんなことをしてるかって？ 聞いてくれるの？ 説明、という名の愚痴。あのね……………。

事の発端となったのは、数時間前のこと。

僕は、露西亞寿司を食べに行こうと、歩いてたわけ。そしたらさ。

「待て臨也ああああああつ！！ 今日こそテメエを殺してやるー  
ー……………」

っていう声と共に、自販機が僕の鼻先を掠めたんだ。その声のあとに、

「ざんねーんっ、はずれ！ 相変わらず、馬鹿力だねえっ  
っっていう声が聞こえたんだ。

僕、『ああ、またか』って思っちゃったよ。いつものことで、嫌になっちゃうよね。

「うるせえ！！ ちょこまかと動きやがって！」

「ああ、今日もまた、標識と自販機が減滅していく…………ぬあ！？ し、シズちゃん、ガードレールは人に危害を加えるものじゃないよ！ どちらかというと、人に危害が及ばないようにするための物だから！ 投げちゃ駄目だよ！！！」

「関係あるか！！ 殺す殺す殺す！！！」

「こんにちは、静雄くん。臨也くん」

「ああ？ なんだ、テメエ。今話しかけてくん……………！！！」

「どうしたの、シズちゃ……………！！！」

「ちょっといいかな？」

で、今に至る。

僕は、静雄と臨也をとつ捕まえて、自宅の和室で正座させながらお説教してるんだよ。そろそろ2時間ぐらい経つかも。静雄が震えてる。臨也なんか、意識が朦朧せつろうとしてきているのか、ボーっとしてる。それでもやめない。さすがに、我慢の限界だよ。毎回毎回。僕が何度言っただって、二人は直そうとしない。いや、直せないんだよな、きつと。

「全く。二人とも、いつも言ってるでしょ。人がいる所では、自販機投げたり、標識投げたり、今日はあるうことかガードレールまで投げて。そういうことはするなって。一体、いつになれば直るの？ 君たちは、そんなに人に迷惑をかけたいの？」

「ごめんなさい」

「謝罪はもう聞き飽きた。たまには別の言葉を聞きたいよ。『今日は喧嘩しなかった』とか、『物投げなかった』とか。まあ、二人は相当仲が悪いから、そんなこと、絶対に無いだろうけど。それでもね、こんだけ言われて、罰まで受けてまだやるって、すごいよ。その根性をもっと別の事に活かしてよ」

そこで区切って、僕は静雄の前に立つ。

静雄は顔を上げる。

「静雄、毎回言うけど、公共物は投げないの。静雄と臨也が喧嘩する度に、自販機とか、標識が減滅していつて、工事する人たちが大変なんだよ」

「はい……………」

「僕だって、静雄と同じくらい力が強いけど、マジ切れしたとき以外は何なんて投げないでしょ？」

「はい……………」

「大変だと思うけど、我慢すること」

「はい……………」

静雄の体がいつもよりすごく小さくなっている。

静雄は感情の起伏が激しいから、我慢するの、大変なんだろうな。でも、だからって公共物を投げるのは駄目だ。

次に僕は、臨也の前に行く。

僕が前に行くと、臨也の肩がビクツ、と跳ねた。それくらい僕が恐いのだろう。じゃあ、最初からやらなきゃいいのに。

「臨也。君、また静雄にちょっかいを出したようだね」

「……………はい」

「わかってるでしょ。静雄は君を見かけるだけで切れるって。その上、さらにちょっかい出したら、静雄だって、我慢するにできないだろ」

「……………はい」

「あのね、わかってるならやらないですよ。僕だって、怒りたいわけじゃないんだから」

「……………はい」

いつもの人を馬鹿にしたような態度とは一変、聞こえるか聞こえないか、ギリギリの音量で返事をする臨也。

「はあ。疲れた。さて。二人とも、深く反省してるみたいだし……………」

「許してくれるのか!？」

「あと2時間、正座しててね」

「「ええ!？」」

「当たり前だよ。前も2時間正座させて反省させたけど、またやっただから、倍にしないと。罰の意味がないでしょ。罰っていうのは、もう二度と同じ事をしないように甚振いたぶることなんだから」

そう言って、僕は泣きそうな顔をして二人に笑顔を向ける。

時計を見ると、丁度、4時だ。

「じゃあ、6時になったら、また来るよ。それまで、ここで正座しててね」

「えっ、どっか行くのか?」



「うん。昨日、まさおみくんたち3人に会ってさ。一緒にお茶しませんでしたか、って、誘われてね。今からだから。行って来るよ」

僕は部屋を出て行くこととする。

あ、そういえば。

「二人とも。僕がいない間に、喧嘩したり、正座してなかったりしたら、どんな目に遭うか、わかってるよね。この部屋、隠しカメラがついてるから」

二人を見て、そう言う。

「臨也が探そうが、静雄が天井や壁壊そうが、……まあ、そんなことしないと思うけど、絶対に見つからない所にあるから」

たぶん、臨也は探さだろうと思ひ、僕は言っておいた。静雄のは、念のため。

「じゃあ、頑張ってる」

僕は、一言言って、家を出た。

「お待たせ」

「あ、袖留さん」

「遅くなってごめん。ちょっと、いろいろあつてさ」

「……また、あの二人ですか」

「うん。そうなんだ。今回は、僕、ちょっと危なかったよ」

「何がですか？」

「マジ切れしそうになっちゃって」

「……………へえ」

「ねえ、何飲む？ 僕は……………」

ニコニコと笑う袖留を見ながら、三人は思った。

あの二人をおさえるこの人がマジ切れしたら、きつと、池袋は崩壊するだろう……………。

そんな三人を尻目に、袖留はメニューを見ながら考えるのだった。きつと、何日かすれば、また喧嘩が始まるんだろうなあ。今度の

罰は、どんなのにしよう？

後日談。

数日後、24時間戦争コンビの喧嘩は再開し、その二人を、一人の青年が捕獲した後、<sup>のち</sup>二週間ほど、臨也と静雄の姿を見た者は、誰もいなかった。

× 5 いい加減にしないで(後書き)

袖留に勝てる人は誰もいない。

×6 気づいてしまった(前書き)

若干、腐要素入ります！ 注意！

× 6 気づいてしまった

皆さん、どうも。池袋の素敵で無敵……いや、無敵では無いな。柚留には勝てない。よし、仕切り直し。

皆さん、どうも。池袋の素敵な情報屋、折原 臨也です！

今、俺は、親友、宍戸鬼門ししどきもん 柚留ゆりゅうの家に来ています。え、なぜかっつて？ 相談だよ、相談。俺にも悩みの一つや二つ、あるよ。だつて、人間だし。人間って、面白いよね。自分の悩みなのに、人に相談して、解決するのを手伝ってもらう。人っていう字は支えあつてできているなんていうけど、頼られっぱなしの間違いだと思つよ。そうだろう？

「そんなこと、僕に聞かれてもねー。困るよー」

「えっ、柚留、なんで俺の思つてることが分かるの？ 超能力？

テレパシー？」

「全部、口に出して言つてたけど。大丈夫？ 臨也。新羅に診てもらつて？」

「いや、別に、頭がおかしくなつたわけではないから、結構です」

だから、そんな哀れみを含んだ眼で見るの、やめてくれない？

馬鹿とか言われるより、なんか傷つくから。

「そんなことより、どうしたの、相談なんて。珍しいね、臨也のくせに」

「今日の柚留、厳しくない？ くせにとか言われたんですけど」

「いやいや、決してそんなことないよ。ただ、今日は一人でゆっくりしようと思つてたのに臨也が来て、楽しみにしていた紅茶を出さないとだめなのかな、それ嫌だな、とか思つて苛々してるだけなんだよ。ねえ、水道水でもいい？ いいよね、はい」

「柚留、本音、駄々漏れだから！ ごめん！ せつかくの休日を妨害して、悪かつたよ！ 心の底から謝るから、俺の相談を聞いて！」

柚留が恐い！ いつも怒るときより、ずっと恐い！

「はあ…………。まあ、いいよ。親友だしね。臨也いじって、少しスツキリしたし」

俺、本当に親友と思われてるのかなあ。最近、よく思うよ。でも、まあ、苛ついててもちゃんと聞いてくれるあたり、柚留は優しいと思う。

「なんかね、おかしいんだ。最近」

「最近じゃなくて、元々だと思うよ」

「苛ついてて、つい口走っちゃっただけだよな」

笑顔で言われると、すごく悲しい。

「いや、来神のころからなんだけど」

「おかしくなり始めたのは、もう少しまえでしょ?」

「ねえ、柚留。これ、真剣な話だから。とりあえず、真剣に聞いてお願いします」

「ごめん、ごめん。つい」

ああ、もう！話が全然、進まない！

「俺は、人間が好きでしょ。愛してる。誰も、平等にね。でも、シズちゃんは違う。なんかわかんないけど、見るだけでむかつくっていうか。俺の予想とは違う行動をしてくれるから、面白いんだけど、それは、また別だ。おかしくない?俺は、人間を平等に愛せるはずだ。なのに、シズちゃんだけは嫌いつて。なんで?」

「臨也、静雄のことが好きなんじゃない?」

「……………はい?」

やっと本題に入れたと思ったら、今度は、素っ頓狂な答えが返ってきた。その素っ頓狂な返答に、俺も素っ頓狂な声を出してしまった。

「柚留。いくら苛々してるからって、その答えは何?馬鹿にしすぎでしょ」

「臨也だけには言われたくないね。馬鹿にしすぎて。さらに苛々するから、やめてくれない?」

本気で苛々してるのか。柚留にしては珍しく、眉間に皺を寄せて

言う。

「ごめん。でも、さっきの答え、本気？」

「そうだよ。冗談言って、話が長くなるのは、絶対に嫌だからね」

「でも、俺もシズちゃんも、男だよ？ 男が男を好きになるなんて、キモいよ」

「そのキモいのがお前だろ」

あ、ヤバイ。久しぶりに、ブラック柚留が出てきそう。ブラック柚留っていうのは、毒ばっか吐く柚留のこと。ほんと〜に、たま〜に出てくるんだけど、いつもの穏和な感じと一変するんだよ。棘棘しいというか、なんというか。

「え、何。俺がシズちゃんを好きっていうの、決定事項なの？」

「だって、言うじゃねえか。嫌よ嫌よも好きのうちって」

「う〜ん……。そっか……」

これ以上なんか言っても、柚留が苛々するだけだろう。俺はそう思って、柚留の家を出て行くことにした。

「今日はありがとう、柚留。お礼に、今度、ご飯奢るよ」

「ほんとに!?!? やった! じゃあね!」

俺の一言に、態度を180度変えた柚留を見て、易い奴…、と思っってしまった。

さて、じゃあ、どうしよう。というか、俺って、本当にシズちゃんが好きなのか？ おかしいな。笑っちゃうな。いや。待てよ……。

そういえば、来神時代、シズちゃんの下駄箱に入ってたラブレター、破って木端微塵にしたことがあったよな。あれ、すぐくむかついたんだよな……。で、でも、あれは、シズちゃんがラブレターもらうとか、マジむかつく〜、とかおもったんだよな！ きつとそうだ！ あれ、ほかにもあったなあ。そう。あれは修学旅行でのことだ。風呂のとき、俺、シズちゃんの上半身裸を見て、鼻血を出したことがあったよな……。その後、風呂上りのシズちゃん見て、ドキッ、なんて純情乙女のような感情を抱いたよな……。

「……………俺も、とうとう末期か……………」

俺は、ポツンと言呟いて、止めていた足を動かし始めたのだっ  
た。



×6 気づいてしまった(後書き)

続く!

×7 告白されました(前書き)

完全に腐。注意ッス。

×7 告白されました

都内、池袋。

俺、平和島 静雄は、昼間の池袋を徘徊していた。アイツの臭いがするからだ。

アイツに出くわしたら、潰して……、いや。とりあえずメンチでも切っておこう。手を出せば、袖留カサネに、また色々、されるから……。

そんなことを思っていると、前方に、見慣れた黒いコートを着た奴を捉えた。っち。タイミングがわりいんだよ……っ。

俺は、姿を隠そうとしたが、周りに俺サイズの物が無く、アイツに見つかった。

「あ、シズちゃん」

そう。折原 臨也、その人に。

クソっ。近寄って来んな、馬鹿っ！ テメエのその面見るだけで苛々すのに、近寄られたら、手エだしちまうだろ！！

そんな俺をよそに、ノミ蟲は近づいてくる。

「また会ったね。何でなんだろうねえ。池袋に来ると、必ず君に遭遇する。これも、腐れ縁とかいうやつかな？」

「うるせえ、ノミ蟲。こっち来んな」

あー、苛々する。

「酷いなあ、シズちゃん。今日はもう帰るから。それに、俺だって、先週あんなことがあったんだから、君に手をだしたりはしないよ」

まあ、とりあえずコイツも、わかってはいるんだろう。二週間も監禁されて、恐ろしい目に遭ったからな。

「でも、言いたい事があるんだ。ちよつと、いいかな」

「は？ ちよ、待て臨也っ」

そう言っつて、俺の返事を待たずに俺の腕を引っ張って歩きだす臨也。俺は、振り払う事も忘れて、ただ、臨也に腕を引かれるだけだ

った。

少し歩いて着いた場所は、路地裏だった。こんな所に連れて来て、俺に喧嘩でも売るのでろうか。

そんな事を思っている。

「シズちゃん」

臨也に、名前を呼ばれた。いつもの声のトーンではなく、何か、真剣な話をするときの、いつもより低いトーンで。俺は、そんな臨也に、違和感を覚えた。なんだろうか。俺に向かって、臨也がこんな声のトーンで話すなんて。キモチワルい。

「なんだ」

俺もとりあえず、臨也に合わせる。いや、いつもなら、こんなことしないのだが、雰囲気とかあるだろう。

「急なだけだよ」

「ああ」

俺がそう返すと、臨也は、長い間をおいた。なんだ、と聞いても、言おうとしない。苛々しはじめてきたとき、臨也は、やっと、口を開いた。

「俺、シズちゃんのこと、好きなんだ」

「……………、は？」

臨也の一言に、俺は、間の抜けた声が出てしまった。

「コイツ、なんて言った？ ちょっと待て。本当に数秒前のことだが、驚きのあまり、忘れそうになっているぞ。えーと、臨也は、俺に……………」

「好きって言った……………？」

「うん」

思わず声に出してしまったが、気にしない。それより、今の臨也の発言が気になる。

『シズちゃんのこと、好きなんだ』

その言葉が、俺の頭を埋め尽くす。

臨也が、俺のことを好き？ あの臨也が、俺のことを？ あるは

ず無い。そんな馬鹿げたことが、あるはず無い。でも、臨也が今まで、おふざけでこんな事、言ってきたか？ いやいや、いくら臨也でも、そんな悪ふざけはしない。じゃあ、本気……？

「え、と、いざ、や」

「ん？」

「本気、か？」

「うん。本気」

「マジで……」

「マジだよ」

臨也の素直すぎる返答に、俺は一気に顔を赤くする。

「え、あつと、その、は？ な、何なんだ？ え、ちょ」

動揺を隠せない。混乱してきた。でも、やっぱり、あの一言が頭を離れない。

また思い出してしまったって、さらに顔が熱くなる。

ああ、もう駄目だ。

「さ、さよなら……！」

「え、シズちゃん？」

俺は、今までの追いかけることは比べものにならない速さで、その場から立ち去った。

ピンポン

インターホンを鳴らすと、中からすごい足音が聞こえて、すぐ後に、ドアが外れんばかりの勢いで開いた。

「俺様の休日を、そんなに妨害したいのか……！ ……って、静雄？」

「袖留……」

怒鳴りながら出てきた幼馴染。普段ならビビるが、今日はそんな気力もない。

「どうしたの？ そんな暗い声のトーンで。なんかあった？」



「静雄、臨也のこと好きなんですよ？」

「ブツッ!!」

その言葉に、俺は、飲んでいた紅茶を嘔き出してしまった。

「静雄、汚い」

「す、スマン。でも、おまっ」

「違うの?」

問いかけられて、俺は、言おうとした。

『決まってる。あんな奴、大嫌いだ』

でも、口が開かなかった。その言葉が、出てこなかった。

なぜ? 俺は、あいつが嫌いなはずだろ? なのに、出てこない。

変わりに出てきたのは、

「……好き」

この言葉は、俺が一番驚いた。自分で望んでないぞ!? 俺は、

すぐに口を押さえたが、時すでに遅し。

「でしょ?」

「で、でも、俺も臨也、男同士っ」

「恋愛に男女は無いと思うよ? だって、異性を好きにならなきゃ

いけないなんて法律、ないし。誰を好きになるかなんて、人の勝手

さ。同性でだって、好きなことに変わりはないでしょ。同性愛者、

キモ。なんていう人いるけど、僕は別にいいと思う。男女の差なん

て、体や性格ぐらいで、ほかはみんな同じ。むしろ言わせてもらえ

ば、どんな君でも好きだ、なんて言う奴、それが同性だったら、態

度は一変するよ。人間の恋愛なんて、そんなものさ。男女が結ばれ

ないと、人間は子孫を残せないからね。だから、『人間は異性を好

きになるようにしこまれている』んだよ

「……」

「同性愛者は、たまたま魅力を感じたのが同性だっただけなんだよ。

ほかの人と、全然ちがわない」

袖留の言葉に、静雄は納得した。

そして、決めた。

「俺、臨也に返事、してくる」

「そう。いつてらっしゃい」

柚留は、笑顔で送り出してくれた。

静雄は、臨也を探しに、足を動かした。



×7 告白されました(後書き)

こちら辺から、腐に走り始めますよ。

× 8 お返事をしに着ました(前書き)

完全に腐!! 要注意だよ!!

× 8 お返事をしに着ました

シズちゃんにコクった。シズちゃんに逃げられた。

俺、折原 臨也は現在、自宅に帰るため、駅に向かっている。

はあ。今、思うけど、本当に急だったな。自分でもビックリだ。さつき、俺はシズちゃんに告白した。いや、別に、する予定は無かった。なぜか、シズちゃんを見たら口が開いた。気づいたときには、自分の気持ちを伝えていて。目の前には、顔を真っ赤にさせたシズちゃんがいて。可愛かったな、シズちゃん。口、パクパクさせて。ウケた。超ウケた。

って、こんなこと思ってる場合じゃない。シズちゃん、光線の如くどこかに行っちゃったんだよ、あの後。そのことがあって、俺、すごく不安なんだけど。シズちゃん、どう思ったんだろう。やっぱり、気持ち悪いって思ったのかな。そうだよな。男同士。ましてやずっと喧嘩してきた奴に、いきなり告白なんてされたら、気持ち悪いことこの上ないだろうな。

今更、後悔なんてしても、遅い。言っちゃったものはしょうがないから、返事を待つことしか、今の俺にはできない。

駅の入り口は、やけにガランとしていて、違和感があった。

はあ。シズちゃんの顔、当分見たくないな。あんなこと言っちゃって。俺って、本当に馬鹿だ。秘密にしておけばいいものを。今までで、一番後悔している。

とりあえず、今日は帰って頭を冷やそう。それで、池袋には来ないようにしよう。1ヶ月ぐらい。

そんなことを思っていると。

「臨也ー!!」

聞き慣れた声。俺は、その声にすぐに反応する。そして、そっちの方向を向いた。

「……シズちゃんっ……」

「み、見つけたっ。はあっ」

いつも以上に走ったのだろう。シズちゃんにしては珍しく、息が切れている。

「シズちゃん、なんでここに」

「ちよつと来い！」

「えっ？ 何？ 何なの？ ちよつ、シズちゃん。待って、ちよつと」

シズちゃんは、俺の声なんて聞こえないようで、俺の腕を引っ掴んで、どンドン歩き出した。

「し、シズちゃん、腕！ 腕、折れそう！ 放して！」

「わっ、悪イっ」

俺は、とうとう耐えられなくなって、叫んだ。シズちゃんの力は強い。しかも、制御ができないから、腕なんか掴まれた日には、1日中、腕が痺れたままだ。

俺の声を聞いて、シズちゃんは俺の腕からパツと手を離れた。

「シズちゃん、一体なんなの」

俺は、腕をさすりながら、シズちゃんに聞いた。周りを見ると、人が全くいない。

「あ、だからっ。お前のあれの返事……っ」

「俺のどれ……、あ。」

シズちゃんのわけのわからない言葉が、一瞬理解できなかったけど、すぐにわかった。

告白の返事を、シズちゃんはしにきたんだ。あの時に息切れしてたのは、俺を探し回ってたからか。

俺がそれに気づくと、シズちゃんは、顔を赤くした。

「あの……、その、」

俺は、シズちゃんの答えを待った。ちよっかいを出さずに、真剣に。

「俺、その……」

シズちゃんは、なかなか言おうとしない。もしかしたら、俺、ふられるのか。そうなのか。

俺が溜息を吐くと、シズちゃんは、覚悟をしたようだ。赤い顔で、俺を見つめてきた。

「あつと、その、俺も……」

そう言っつて、少し躊躇った後に、俯いて、何かを言った。

「え、何？」

今のは意地悪じゃない。本当に聞こえなかったのだ。

そんな俺に、苛つときたのか、シズちゃんは、顔をフルに真っ赤にして、やけくそになって言った。

「俺もお前が好きだつ、つってんだろノミ蟲つっ！……」

「……へ」

そう言っつた後に、シズちゃんは頭を抱えこんで、蹲すくまってしまった。

えつと。シズちゃん、俺のこと、好きって言った……？

嘘！？ あのシズちゃんが！？ 俺のことを好きって！？

「えーと……」

「……んだよ」

シズちゃんが、少し顔を上げてこちらを見上げてきた。

そうか、そうか。両思いか。そっかあ……。

「シズちゃん！……」

「何、うわああつ！？」

俺は、感極まっつてシズちゃんに飛びついた。

「俺、シズちゃんのこと幸せにするかね！！ もう、ベロンベロンに甘やかすよ……」

「はっ、わ、わかったから、離れる臨也……」

「シズちゃんラーイーブ……」

こうして、俺とシズちゃんは、めでたく結ばれましたとき　　終  
わり。

数日後。

「二人とも、おめでとーっ」

柚留は、俺たちのことを笑顔で祝ってくれた。

「僕、嬉しいなっ。喧嘩ばかりしてたあの二人が、結ばれるなんて！ もう、喧嘩なんてしないよね！」

なんか、もう喧嘩すんじゃないかねえって言われた気がした。

たぶん、無理。

× 8 お返事をしに着ました（後書き）

疲れた。でも、なんとか書き終えたからよし。

×9 柚留さん、小さい静雄の世話をすることになる(前書き)

シヨタ化です。苦手な方は注意なの!!



×9 柚留さん、小さい静雄の世話をすることになる

「……………」

「……んだよ。ジロジロみてんじやねえ、のみむし」

「えーと……」

「あはは……」

皆さん、どうも。穴戸鬼門<sup>しつとんきもん</sup> 柚留<sup>ゆりゅう</sup>です。

今、うちに臨也が来たんだけど、なんか、すごいことになってい  
る。顔とかが。まあ、しょうがないよな。無理もないよ。

「この小さいのは……………」

「静雄だよ……」

静雄が、小さくなっているんだから。

数時間前。

僕の家、電話がきた。

「はい。穴戸鬼門です」

『ゆずる……………。どうしよう』

受話器から聞こえてきたのは、聞いたことのあるような、無いよ  
うな、男の子の声だった。その声は、僕の名前を呼んできた。

「？ 誰かな？」

『……………へいわじま しずお』

その名を聞いたとき、僕は、受話器を落としそうになった。

平和島 静雄。池袋最強と恐れられている、化け物。そして、僕  
の幼馴染。

どうして。彼の声は、低い。でも、今受話器から聞こえたのは、  
僕の記憶が正しいと、5、6歳の頃の声だ。懐かしい。いや、そん  
なこと言ってる暇はない。なんで、そんな……………まさか……。

「静雄。今、家にいるよね」

『ああ。いる』

「そこにいてね。今から行くから」  
急いで、静雄の家に向かった。

静雄の家に着くと、いるはずの人物がいなくて、いないはずの人物がいた。

予想通り。僕の目の前に現れたのは、金髪じゃなくて、茶髪の男の子だった。

その子は、僕の姿を見つけると、飛び掛ってきた。

「静雄、だよな」

「うん」

「どうしたの」

「あさおきたら、こんなになってた」

とりあえず、飛び掛ってきた男の子

静雄を、腰から引き

剥がす。

ああ、懐かしいな。茶色の猫毛。幼い顔つき。細い体。あの頃だ。

「……思い当たるふしは？」

「ない」

「即答しないで、少しは考える」

「うーん……。やっぱり、なんもない」

少し困った顔をする静雄。

参ったなあ。静雄は、昨日、新羅には会ってないし。臨也は、そんなことしない。……たぶん。

「僕のうちに帰ろうか」

「うんっ」

で、冒頭の会話。臨也は、確認のため、呼んだ。

僕の膝の上には、静雄がのっている。ジロジロ見てくる臨也にを、睨みつける。

「なんで、シズちゃんはこんなことになってるワケ？」

「わかんないんだよ。臨也、変な薬、盛ってない？」

「しないよ！ 盛るなら媚薬をへぶうつつ！！」

「きもいんだよ、のみむし！！ にんげんのくず！！」

変なことを言う臨也に、静雄は、傍にあつたクツションを投げながら、そんなことを言う。

「ちょ、シズちゃんつ。俺たち、付き合ってるんだよ！？ さすがにそんなこと言われると傷つく！ 見た目が小さいから、さらに傷が深い！！」

確かにそうだけど、今は臨也が悪い。いくらなんでも、あの発言は、僕も気持ち悪いと思った。だから、静雄を叱らない。

「付き合ってるからつて、それはマズイよ、臨也。人間のクズつて言われても、仕方ないよ」

「袖留までそんなことを！！ 俺はまだクズじゃない！！」

まだつて。これからなることは確定しているんだね。

つと。話がずれてる。

「静雄、どうしようかな……」

「ねえ、袖留。俺、これから行くところがあるんだけど。帰っていい？」

「ああ、うん。別に」

「その言い方、なんかちょっと傷つくよ……」

臨也は、そう言いながら、背中を丸めて帰っていった。

さて。これからどうするべきだろ。外に出ても、まあ、静雄だつてわかる人はいないだろうし、平気かな。でも、わざわざ出なくても、いいし。

そんなことを考えていると。

「ゆずる」

「ん？ 何？ 静雄」

膝の上にいる静雄が、僕の服をくいくい引つ張つてきた。あ、可愛い。

「プリンがほしい」

「プリン？ あったっけ。ちょっと、見てくる」

「ん」

うーんと、プリン……。あった、あった。

冷蔵庫からプリンを取り出して、スプーンを持って、リビングへ向かう。

「静雄！。プリンあったよー」

「ほんとか！」

静雄にプリンを見せると、嬉しそうな顔をする。

「はい、どうぞ」

「ありがと、ゆずる！ー」

プリンを渡すと、静雄は、パッと笑って、食べ始めた。

ああ。静雄があんな風に笑うなんて。やっぱり、子供になったから、そういう面は180度変わるんだな。なんか、久しぶりだな。こんな静雄を見るのは。

「静雄は、ほんとにプリン、好きだよね」

「ああっ。だって、うまいじゃんっ」

可愛いなあっ。静雄、小さい頃、先生とか年上の人から、可愛い言われてたな。その時はわからなかったけど、今ならわかるよ。ほっぺはふにふにだし。目、大きいし。なにより、小さいし！小動物みたいで、すごく可愛い。

「ごちそーさまっ」

静雄がプリンを食べ終わった。さて。どうするかなー。

「どうしようか。このままずっと、小さいままだったら、困るよね」

「」

僕がそう言うと、静雄はなぜか、泣きそうな顔をした。

「お、おれ、ずっとこのままなのか！？」

「へっ」

「も、もどれないのか！？」

「そ、それはないと」

「ぶえっ、や、やだっ、このままなっ、て、やっ」

「どうしよう！ 小さいから、涙腺がユルユルなんだ！ 泣きやさない！」

「うわああんっ」

「し、静雄っ。大丈夫！ 絶対に戻れるから！ だから泣かないで！」

「そ、なごこと、いわれても、とまっ、ねっ」

「あああ、もう！！ 小さい子の世話って、大変！！」

「こうして、小さくなった静雄の面倒をみる日々が幕を開けたのだ。」

×9 柚留さん、小さい静雄の世話をすることになる（後書き）

はじまりました、シヨタ化編。うん。ちょっと、危ない。静雄のシヨタとか、核兵器同然だと思う。書いてて、萌える。

これから何話が続きます！

×10 袖留さん、2日目の午後に腰が痛くなる

どうも。穴戸鬼門しつじく鬼門 袖留ゆずりです。

今、僕は、大変な状況下に置かれています。

「すー……すー……」

誰か、助けてください。

昨日の昼、体が小さくなった静雄が、僕の家に来ました。静雄に原因を聞いても、わからないそう。

で、昨日、静雄に内緒で、新羅に電話をして聞いてみたら、やっぱり、そうだった。

静雄の体が小さくなる1週間前。頭痛がするから、新羅のところにいった静雄。その時、新羅は急患がいて、すごく急いでたんだそう。それで、静雄に、頭痛薬を渡したつもりだったんだけど、横に置いてあった頭痛薬と間違えて、体が小さくなる薬を渡してしまっただらしい。新羅は、僕の電話で、そのことを思い出した。なんでそんな薬を作ったのかは、敢て聞かなかった。人には人の事情つてものがあからね。それに、世の中には、聞かないほうがいいこともある。

それにしても、薬が効くの、1週間後って、遅くない？ なんてだろう。新羅曰く、『静雄の体は特殊だからね。本来なら、薬なんて、ほとんど効かないんだけど。今回は、何かが原因で、薬が少し残って、

遅れて体内に回ったんじゃない？ 効果があったのは、その薬と静雄の免疫力の相性が悪かったからかも。ホントなら、二週間ぐらいそのままんだけど、静雄なら、6日ぐらいで戻ると思うよ』だそう。で、なんか、新羅の薬が、すごく怖いことに気づいた。

まあ、そんなこんなで、僕は静雄の面倒をみることになった。

因みに、新羅のことは、黙っておくことにした。別に、故意があつてやったわけじゃないから。それに、このことを静雄に言ったら、

元に戻った後、新羅はきつと、還ってこない人になるだろう。いくらなんでも、親友が逝く姿は、見たくないよ。

静雄は、小さい体にも慣れたようで、もう、騒がなくなった。

それは、いい。いいんだ。でも、全然よくない点が、いくつがある。そのうちの3つを挙げよう。

### 1. 服

これは、非常に大変です。下着は、必要だから、買いに行った。ここで、予想外の出費。でも、出費なんて、べつにいい。それよりなにより、静雄が上に着る服。普段の静雄の体は、でかい。だから、小さくなった体には、合わない。大きい。でも、ここで子供用の服を買うのは、お金が無駄だ、と僕も静雄も判断した。なので、静雄は、自分のワイシャツを着ることにした。そのワイシャツを着た静雄がさあ……。けしからん。実に、けしからん。服が大きいせいで、ぶかぶか。肩が出ちゃうときがある。このせいで、迂闊に臨也を呼べない。来ても、静雄は前に出さない。だって、あの臨也のことだよ。きつと、静雄になんかするって。まあ、させないけど。だから、外にも、あまり出れない。食料とか、必要なものは、セルティが持ってきてくれる。とても助かる。

### 2. 接し方

たぶん、これに1番気を使ってると思う。

小さくなったのは、見た目だけではないらしい。静雄も、これには困っているらしいが、感情が、いつもと違う。頭ではわかっているけど、感情がうまくコントロールできないらしく、不安になったりすると、目が涙でうるうるしてくる。しまいには、泣き出してしまうことも。その分、嬉しいことがあったりすると、とても喜ぶ。普段は面に出さないから、なんか不思議な感じ。だけど、すごく可愛い。でも、思考はいつもと変わらないから、頭を撫でたりすると、ほっぺを赤くして、苦々しげな顔で、やめる、とか言う。可愛い。

### 3. 僕への影響

これ、1番重要なこと。



静雄のせいで、僕がシヨタコンに目覚めそう。

以上が、全然よくない点のうちの3つ。

3つ目が、非常に危険。冗談とかじゃなくて、本当に、危ない。でも、あと4日の辛抱だ。4日間耐えれば、また元の生活に戻る。

しかし、本当に耐えられるだろうか。今の時点で、もう十分危険なんですけど。

少し、遅れたね。今の僕の状況を説明するよ。

午後2時3分。暖かい日の光が、リビングに射し込んでくる。こういう天気、僕、好きだなあ。その光を浴びながら、本を読んでいる。内容も、なかなか面白い。できれば、集中して読みたい。さつきから視界に入ってくるのは、字じゃなくて、猫毛の茶髪。規則正しい、寝息と鼓動が感じられる。

冒頭の台詞を、もう一度言わせてもらおう。

誰か、助けて。

皆さん、予想はついたでしょう。そう。今、僕は、静雄に抱きつかれています。読書をしはじめて数分後、膝の上に、僕と向き合っている状態で座っていた静雄が、そのまま僕に抱きついて眠ってしまいました。これ、傍<sup>はた</sup>から見れば、いいなあ、とか思っただろうけど、実際やられていると、きつい。

それが長時間になると、もう大変。ソファだったからまだよかったけど。ずっと同じ体制だから、腰の辺りが、地味に痛くなってくるんだよね。だから動きたいんだけど、静雄が上に乗ってるから、動けないんだよ。起こせばいいとか思うでしょ？ 僕も思ったよ。でもね、よく考えてみて。今起こしたら、絶対にぐずるよ。いくら、思考がいつもの静雄と同じだからって、行動は、子供みたいなどこがある。それは、本人の意思とは別……、つまり、無意識にしてしまうものだから、油断はできない。だから、僕は、1時間、ずっとこの体制でいるのだ。

「はあ……。これじゃあ、読書にも集中できない。どうしようかなあ……」

僕は、本にしおりを挿んで横に置く。そして、静雄を見た。茶色の猫毛。幼い顔。あのころの静雄。懐かしいなあ。

細い腕。この頃はまだ、静雄の怪力は出てなかったんだよねえ。初めて出たのは、幽くんが静雄のプリンを食べちゃったときだよ。よね。怒りにまかせて、近くにあった冷蔵庫を持ち上げたら、首の骨が折れちゃったんだよねー。その話、聞いたとき、僕、腹筋が攣るかと思うほど笑ったんだよ。おかしすぎて。

静雄は、感情の起伏が激しいから、化け物みたいな力があると、厄介だよな。

そう思いながら、静雄の頭を撫でる。すると、静雄は、少し、くすぐったそうに身を振った。おっと。危ない。起こすところだった。

ふう……。そういえば、僕も眠たくなってきたなあ……。起きててもやることないし、静雄と一緒に寝ちゃおう。

僕の意識は、そこで途切れた。

「……んっ」

目が覚めると、もう外は暗くなっていて、時計の針は、6時をさしていた。うわっ。僕、4時間もねてたの!? すごっ!

膝の上には、まだ静雄がのっかっている。そろそろ、起こそう。

「しーずーおー。起きろー」

「んうっ……。ほえ……。ゆずる……」

起こすと、静雄は、眠そうな顔でこちらを見てきた。うわっ。可愛いつ。

「もう6時だから、夕飯、作るね」

「ん……」

僕がそう言うと、静雄は目を擦りながら、膝の上からどいた。

「ふああ……。よし。夕飯作るぞーっ!」

欠伸をしながら立ち上がって、気合をいれるために、言う。

今日は何を作るかなあ。久しぶりに、肉じゃがにでもするかっ。

「静雄、もう寝ないでね」

「…むりかも……」

「寝たら、夕飯あげないよ」

「それはやだ」

「じゃあ、起きてるの」

「うう……」

「起きてようと思えば、起きてられるよ」

僕がそう言っていると、静雄は少しだけ、眉根を寄せたけど、

「はやくつくらないと、ねる……」

と、言った。

さ。じゃあ、静雄が寝ないうちに、肉じゃがを作ってしまったおう。

静雄が寝て、起きてきたときに腹が減ったとか言われても、面倒

だしね。

そう思いながら、僕はエプロンをつけて、台所に立ったのだった。

×10 袖留さん、2日目の午後に腰が痛くなる（後書き）

ちわっす。2日目を書き上げたぜ。この話を書いているときに、腰に鈍い痛みが走ったから、書いてみた。タイトルと話の内容、あんまり関係ない（ここだけの話、タイトルがなかなか思いつかなかったから、このタイトルにした）。

さあ、どんどん書いてくよおっ！

× 1 1 袖留さん、3日目に正臣さんたちが来る（前書き）

正臣兄さんのキャラが、音を立てながら崩れていく……。  
キャラ崩壊注意。

× 1 1 柚留さん、3日目に正臣さんたちが来る

やつほう。こんにちわつ。ナンパするのがだーいすき、皆のアイドル、紀田 正臣だぜ！

……ちよ、帝人。そんな白い眼で見てるなよ。わかってる。謝るから。全力で謝罪するんで、そんな白い眼で見てるの、やめろよ。傷つくだろ？

「紀田くん、柚留さんの前で変なことしたら、手の甲にボールペン、刺すからね」

「な、な〜に言ってただよ、帝人〜。俺は、人前でそんなことするような恥ずかしい奴じゃないぜ〜……」

黒い帝人が降臨した！ 恐ろしい。目が。目がマジだ……。

「二人とも、もう少し、真面目な会話を……」

ああ、すまん、杏里。だから、帝人をなんとかしてくれない？

おっと。ごめん。皆のことを忘れていたねえ。相手しないと、寂しいよな〜っ……、だ、誰だ！ 俺に向かって物を投げてくる奴は！ なつ、ちよ、トマト！？ トマトは勘弁してくれ！ それ、ぐじゅってなるから！！ ……はー、はー。今日は、初っ端から散々だな、俺。

今日は休日。俺は、親友の帝人と杏里を連れて、ある場所に向かっていた。

穴戸鬼門 柚留さんの家。そこに、今、噂になっている、喧嘩人形こと、平和島 静雄がいるらしい。その真相を知るべく、俺たち三人は、柚留さんの家に向かっているのだ。

「最近、平和島 静雄の姿を見なくなっただ人が増えたんだよな〜。あの静雄さんが、風邪なんて引くはずもないし、やつぱり、いんのかなあ。柚留さんの家に」

「ここまで来たんだし、行くしかないよ。正臣」

「そうだな〜、って、今日はやけに積極的だな、帝人。どうしたん

だ？」

俺は、帝人がいつもと違うことに気づいた。どうしたのだろう。

「いや。そうでもないよ」

「そうか　　って、着いた」

話をしているうちに、柚留さんの家に着いた。

インターホンを押す。

ピンポーン

数秒後、柚留さんが出てきた。その顔が、なぜか、いつもと少し違う気がするのだが。

「こんにちは、柚留さん」

「や、やあ。久しぶりだね。みかどくん、まさおみくん、あんりちゃん。どうしたんだい、急に」

「いや。最近静雄さんを見かけなくて、柚留さんなら知ってるかなあ、と思って」

この間は、臨也と静雄さん、二週間も監禁してたからなあ、柚留さん。また、そうなのか？

静雄さんの事を言った途端、柚留さんは、さっき問いかけてきた時の笑みを浮かべたまま、汗を流し始めた。どうしたんだ？

そう思っていると、俺たちは、三人同時に、柚留さんに引っ張られて、家の中に入れられた。

なっ、なんだあっ!？

ぼかんとしていると、柚留さんは、少し、困ったような顔をしてから、言ってきた。

「今から見るもの、絶対に、誰にも言わないって、約束してね」

「……………かつ…!？」

「わあ……………」

「……………」

「ん、ゆずる、だれかき……………あ」

柚留さんの家のリビングには、男の子が一人、うさぎとじゃれて  
いた。男の子は、こちらに気づくと、顔を一気に青くさせた。

「静雄……」

「ゆ、ゆずる……。なんでこいつらがきてんだ……」

静雄と呼ばれたその子は、俺たちの後ろから顔を出した柚留さん  
に、問いかける。

「さっきのお客、この子達だったんだよ……」

「お、おれ、こいつらにみられても、へいきなのか？」

「来良の子だし、知り合いだし。大丈夫だと思うよ……。ね？ こ  
のこと、ばらさないでしょ？」

そう言いながら、柚留さんは、俺達のほうを向く。その顔は、笑  
っていた。顔は。目が、完全に笑っていない。その笑っている顔も、  
『言ったら、君たちでも容赦しないよ』と、語っていた。

「ぜ、絶対にばらしませんよ！ 口が裂けても言いません！！ な、  
なっ、帝人、杏里」

「はい。絶対にばらしません」

なんでこの二人は、こんなに冷静なんだよ。おかしいだろ。池袋  
最強と呼ばれている静雄さんを、説教したり、監禁までする人だぞ  
！？ この人こそ、真の最強だろ！？

「ほら。三人とも、こう言ってるし、大丈夫！」

「……まあ、おまえらは、いいやつだしな……」

そう言いながら、その男の子、静雄さんは、顔を俺達から  
背ける。

柚留さんの話によると、2日前、静雄さんが薬のせいで小さくな  
ってしまい、その静雄さんの面倒を、柚留さんが見ているそうだ。

小さくなる薬がある時点で、おかしいけど、そこは、スルーだ。  
この人達の周りでは、なんでもありなのだから。

そんなこと、世間に知れたら、大変なことになるよな。きっと、  
静雄さんのことだから、いろんな人達に、奇襲をかけられてしまっ  
たろう。この状態じゃあ、戦えるわけが無い。だから、なるべく外



には出ないようになっているそうだ。そのほづが、いいだろうな。この状態なら。

それより……!

静雄さん、可愛すぎる……!

さつきから、袖留さんの飼っているうさぎとじゃれてるんだけどさあーっ、もうさあ、ヤバイ。うさぎのもふもふに顔を埋めたりしてる。それが、堪らなく可愛い。

「……正臣。鼻血出てるよ」

「!? い、いつの間……!」

「紀田くん、気持ち悪い……!」

「ぐはあっ!? 杏里がっ! 杏里が俺に気持ち悪いって言った! 普段そんなこと言わない人に言われると、傷が100倍深い!」

「事実だから、しょうがないよ」

「まさおみくん、鼻血、とりあえず拭いて」

袖留さんが、ティッシュをくれる。ああ、どうも。

「いや。でも、ビックリしましたよ。あの静雄さんが、こんなになつてるなんて、思いもしなかった」

「おれも、ゆめにもみなかつたよ……!」

帝人の言葉に、静雄さんは、暗いオーラを放出させる。

帝人、お前、余計なこと言いやがって。

そんな目で見ると、帝人は、申し訳なさそうな顔に戻った。

「ほら、いじけない。ちゃんと、元には戻るんだから」

「うう……!」

いじけてしまった静雄さんを、袖留さんが抱き上げて頭を撫でる。そうすると、静雄さんは、少し拗ねたような顔をしながらも、顔を赤くして、下を向いた。

「……。もう、ヤバイな。」

「帝人、杏里」

俺が呼びかけると、二人とも、頷いた。

「それじゃ、俺達は帰ります」

「え。もう行っちゃうの？」

「はい。あんまり長居もよくないと思いますし。お邪魔しました」  
「ああ、うん。また来てね」

「……しばらく、袖留さんには行かないようにしよう」

「そうだね」

「そうですね」

あの家は、今、最も危険な場所だと、三人は思ったのだった。

×11 柚留さん、3日目に正臣さんたちが来る（後書き）

ぶ、ブラック帝人が来た……。いやー、それより（自分で言っ  
て、それよりってなんだ）、もふもふシズちゃん。これ、非常に危  
険です。危ない。そんな静雄さんに萌える、来良生徒3人組み。

×12 袖留さん、4日目に静雄くんに童話を聞かせる

「……つまんねえ……」

静雄の口から、そんな言葉が、ポツンと漏れた。

皆さん、こんにちは。穴戸鬼門しほせもん 袖留ゆずりです。

さて。静雄が小さくなってから、4日目。元に戻るまで、外に出れない僕たちは、家で、お互いに好きなことをして過ごしていた。そんなことをして2時間。短気な静雄だから、我慢したほうだと思う。さすがに飽きてきて、苛々しはじめた。小さくなくても、そこは変わらないんだね。

そんなこと思ったけど、急にキレられても困る。いくら静雄の体が小さくて、いつもの怪力がだせなくても、元から力が強いから家の物を破壊しかねない。まあ、そんなことはしなれないと思うけど。

「そろそろ2時間経つしね。なんか、別のことしようか」

「うん」

僕は、静雄にそう言う。ちなみに、僕は、うさぎのリンゴとじゃれていた。2時間。

「何しようか」

「う〜ん……」

飽きたといっても、やることがない今、どうするべきかわからない。

二人で散々唸って、30秒。僕は、いいことを思いついた。

「静雄に、話を聞かせてあげるよ」

「はなし?」

僕の言葉に、静雄は首を傾げる。ああ、もう！ 可愛いな！

「そう。シンデレラとか、桃太郎とか」

「……」

静雄が、冷めた眼で僕を見てきた。酷いなあ、静雄。

「いいじゃん。どうせやることないし」

「……まあ、そうだな」

そう言って、静雄はおとなしく、僕の話に耳を傾けた。

「あるところに、シンデレラという娘がいました」

シンデレラは、毎日、毎日、継母と姉二人に、扱き使われていました。あるときは、山へ芝刈りに

「ちよつとまで、ゆずる」

「ん？ なに、静雄」

「シンデレラは、やまへしばかりにはいかないぞ」

「え？ そうだっけ」

「まあ、いい。つづける」

「うん」

あるときは、山へ芝刈りに。またあるときは、竹やぶに竹を取りに行きました。

「……たけはとりにいかないだろ……」

ある日。シンデレラの家に、お城から、舞踏会の招待状が届きました。シンデレラも、その舞踏会に行きたかったのですが、三人にお前は家にいると言われてしまいました。

そんなこんなで、舞踏会の日。三人はお城へ向かって、家を出て行きました。シンデレラは、家で一人、「私も行きたい……」と呟きました。と、そのとき。眩しい光と共に、黒い服を身に纏ったババアが現れました。シンデレラが驚いて口をあんどぐり開けていると、ババアは言いました。

『おいしいリンゴはいらんか「はい、ストップ。ゆずる、ストップ」

「なんだよ、静雄。今度はあつてるでしょ？」

「ぜんぜんちがう！ どくりんごをづりにくるのは、しらゆきひめのまじよだよ！ シンデレラにでてくるのは、まじよじゃなくて、まほつつかい！」

「あれー？ そうだっけー？」

「……もういい。はなしをすすめる。(こいつにはもう、なにもつっこまない)」

『おいしいリンゴはいらんかね……?』

シンデレラは、言いました。

『いいえ。そのリンゴはどう見ても腐っているので、いりません』

シンデレラの言葉に、ババアは大きな舌打ちをして、そのリンゴをかごの中に戻しました。すると、今度は、杖を出しました。

『お前のその雑巾のような服を、ドレスに変えてやる』

『本当に? ありがとう、おばあさん!』

ババアが杖をふりました。すると、シンデレラの服は、あっという間に、真っ黒の喪服に変わりました。

『わあ、すごい!』

『じゃあ、次に、馬車を用意しよう』

また、ババアが杖をふりました。すると、ババアが持っていた腐ったリンゴが人が乗れるサイズになって、そのリンゴを、七人の子ヤギが引いていました。

『これに乗って、お城まで行きなさい』

『ありがとう、おばあさん!』

『ただし、12時には戻ってこないと、魔法が解けてしまう』

『わかったわ!』

ババアの言葉に返事をして、シンデレラは、お城に向かいました。

「おい、ゆずる」

「ん? 何?」

「もういい」

「へ? なんで。まだ途中だよ?」

「いいんだ。もうまんぞくしたから。おれ、やることみつける」

「そっか。じゃあ、終わろう」

柚留くんの滅茶苦茶なシンデレラに、ウンザリした静雄くんは、もう二度と、柚留くんの童話を聞くまいと思いましたとさ。おわり。

×12 柚留さん、4日目に静雄くんに童話を聞かせる(後書き)

4日目。なんか、すごいことになった。この話を書くとき、内容を全然覚えてなくて、とても大変だった。うん。意外と覚えてないもんだね。童話と違って。ま、書いてて楽しかったから、いいけどねっ！

×13 柚留さん、シヨタロンに目覚める臨也さんを目撃する

やつほー、情報屋の折原 臨也だよ！ お久しぶり！ 皆、元気だったかな？

さて、俺は今、池袋にある、親友の穴戸鬼門<sup>しほひまかど</sup> 柚留<sup>ゆずる</sup>の家に向かっています。

理由は簡単。俺の恋人である、シズちゃんこと平和島 静雄が、なんと。小さくなったからです！ いやね、1回見たよ。シズちゃんのシヨタ化。でもさ、そのときは仕事で急いで、ゆっくり見ていられなかったんだ。どうせなら、小さいシズちゃんと遊びたいじゃん！ そう思って、俺は会いに来たのだ。

柚留の家に着いて、インターホンを押す。俺がこんなことするなんて、らしくないでしょ。俺も、思うさ。気持ち悪いって。でもね、前にインターホンを押さないと柚留の家に入ったら、柚留に半殺しされたんだよ。「人の家にかかるときには、インターホンを押せ」って。恐いよね、柚留。誰よりも恐いよ。

「それはしょうがないよ。だって、インターホンを押さなかった臨也が悪いんだから」

「ギヤアア！！？」

気がつくと、柚留が玄関のドアを開けて立っていた。いつからいた！？

「てか、なんで俺の思ってることわかるの！？ 魔法！？」

「いや、臨也が声に出してただけだよ。前もこんなことあったよね。君、どんだけ口が緩いんだよ」

え、俺、また口に出してたの？ 本当に口緩いな。

「ところで、臨也は何をしに来たの？」

「え？ そんなの、決まってるじゃん！ シズちゃんに、会いにきたんだよ！」

「さようなら」



「ちょーっつと!?!」

俺が言った瞬間、柚留がドアを閉めようとした。俺は、咄嗟に足を出して、ドアが閉まらないように、ストッパーにする。あ、ちょっと、手段を間違えた。足が痛い。

「ど、どうしてドアを閉めようとするのかな、柚留くん?」

「当たり前だろ。お前、絶対になんかするだろ、静雄に」

「そんなことないよ!! ただ俺は、小さいシズちゃんのを、角膜が炎症を起こすほど焼き付けて夜のおかずにギャアアアア!! ! もげる! 足の指がもげるうっう!! !」

「テメエはおかず無しの白飯食ってりゃあいいんだよ。むしろ道端の石ころ食ってる」

今の俺の発言で、柚留がブチギレた。ぶ、ブラック柚留が降臨したあ!! !

「柚留、冗談だから! 今の、冗談だから!! お願い、ドアを閉めようとしなさいで!」

「自分で抜けばいいだろ」

「君が本気で閉めようとしてて、足が抜けないんだよ!! !」

「そんなの、できればとっくにしてるよ!と。」

「ゆずる。そろそろやめろよ……」

そんな声が聞こえた。はっ。この声は、

「静雄」

「シズちゃん!」

シズちゃんだ!! !

「シズちゃん、俺をかばってくれん」

「おれがやるときに、やりがいなくなるだろ?」

鬼! ここに鬼がいる!! !

「し、シズちゃんっ。ちょっと落ち着こうよ」

「なにをいつているんだい、いざやくん。おれはいつだってれいせいだよ?」

「いや、それはない」

あ、袖留と八毛った。

って、そんな暢気なこと考えてる場合じゃない!!

「シズちゃん、ちよっ」

「うせる、のみむし!!」

「い、いやああああっ!!」

ゴキッ

「ああ……。俺、よく生きてるな……」

数分後。俺は、シズちゃんにフルボッコにされた。まあ、いつものシズちゃんじゃないから、鉄棒から飛び降りて全身強打したくらの痛みなんだけどね。

「ったく。おまえ、ほんとにへんたいだな」

「静雄。臨也こそ、真の変態なんだよ」

「袖留くん、袖留くん。俺のシズちゃんに変なこと吹き込まないでよ」

ただでさえ、小さい子の口から放たれるキツイ言葉に傷ついているというのに。

「なにが、おれのしずちゃんだ。ばか。うじむし」

「うじっ……!!? シズちゃん、宇治金時と間違えただけだよね。」

そうだよ。そうだよって」

袖留め！ シズちゃんに変なこと吹き込みやがって!!

「ところで、おまえ。ほんとうになににきたんだ？」

華麗にスルーされたけど、シズちゃん、本気でウジ蟲って言ったのかな。ちよっと、刺さるよ。

「まさか、本当に静雄を夜のおかずにするわけじゃないだろうね？」  
袖留の目が、狩りをするときの獣のように光る。

「いやだなあ、袖留。俺、小さい子をおかずにするほど変態じゃないよっ。」

シズちゃんですんなことしたら、柚留に殺されちゃうじゃん。ていうか、皆、俺がどれだけ墮ちた人だと思ってるんだろ。たまに気になるよ。

「じゃあ、なにしにきた？」

「シズちゃん、その言い方、ちょっとつかかりを覚えるよ。それじゃあまるで、俺がそのためにここに来たみたいじゃん」

俺が言うと、シズちゃんも柚留も、「違うのか？」という顔をした。なんか、あれだね。ここまで来ると、もう、なにも思わなくなるよ。

「シズちゃんは、俺の恋人だからね。様子ぐらい見に来ないと、彼氏失格じゃん？」

これ、本当だからね。半分。もう半分は、小さいシズちゃんを可愛がるためだよ。

「そうか。こんなでも、臨也は静雄の恋人だしね。様子を見に来ても、おかしくはないか」

「こなんてなんだよ。すごく気になるよ。」

「そうだったのか、いざや……」

「そう。俺、数日間シズちゃんに会えなくて、すごく寂しかったんだよ？」

俺が言うと、シズちゃんは、少し顔を赤くした。ああ、もう！  
シヤイだなあっ！

「可愛いかわいいカワイイ！！」

「わあっ！！」

俺は堪らなくなつて、シズちゃんを思いつき抱きしめた。

シズちゃんは、最初は抵抗したが、少し経つと、俺の肩に顔をうずめた。

「どしたの、シズちゃん」

「……いざやにだっこされるの、好き」

……。

「柚留。俺、シヨタコンに目覚めそう！！ てか、目覚めた！！」

シヨタシズ萌ええ!!」

「……それは否定できないから、手が出せない……」

デレデレじゃん、シズちゃん! 何、小さくなると、こんなに変わっちゃうんだね! まずいよ、この子。小さい頃、なんで誘拐とかされなかつたんだろう。不思議でたまらないよ。

「いざや、いざや」

「なあに、シズちゃん?」

俺の肩から顔を上げたシズちゃんに呼ばれた。

「なんでもないっ」

? なんだろう。そう思っていると、俺から降りたシズちゃんが、言った。

「いざやのかお、みたかつただけ」

満面の笑みを浮かべるシズちゃん。

か、かかかか可愛いな! なんだよ、顔見たかつただけとかつ。ああもうっ、元に戻ったら、こんなこと、言ってくれなくなっちゃうんだろうなっ。そんなシズちゃんも好きだけど、こんなシズちゃんもいい!

「袖留、この子、危険だよ!」

「うん。十分知ってる」

「? なにがきけんなんだ?」

小首を傾げながら、俺たちのほうを見上げてくるシズちゃん。

ぐはあっ!! 見上げるとか、反則だろ! けしからん。実にけしからんっ! でも、可愛いから許しちゃっ。

「ううん。なんでもないよ。それよりシズちゃん。何する?」

「なんでもいい」

「ううん。なんかあつたっけー」

シズちゃんを膝の上に乗せて、俺はソファに座る。袖留は、腕を組んで唸りはじめた。

「あっ、じゃあ静雄。昨日のシンデレラのつづ」いざや、おれ、ねむい」

柚留の言葉を、なんとなくシズちゃんが言わせまいとしているように見えたのは、気のせいかな。

「そっか。じゃあ、寝ていいよ」

「ん」

「なんかかける？」

「いい」

シズちゃんはそう言って、俺にもたれかかってきた。

少しすると、シズちゃんは、規則正しい寝息をたてはじめた。

はあ。小さいシズちゃん、可愛いなあ。うん。すごく。でもなあ

……

「シズちゃん、早く戻ってほしいなあ……」

俺は、どんなシズちゃんでも好きだけど、やっぱり、いつものシズちゃんが1番好きだよ。

シズちゃんの猫毛を撫でながら、俺は思った。

よし。もとに戻ったら、いっぱい可愛がって、いっぱい愛でてあげよう。でも、シズちゃん、嫌がるかなあ。そんなことはないよね！そんなことを思いながら、俺も、眠りについたのだった。

数時間後。

「ん……っ。ふああ……」

「ほえ……？」

「あ、シズちゃん。起こしちゃった？」

「いや、べつに……。んう……」

「可愛いなあ、シズちゃん！もっかい寝てもいいよ……」

「静雄の寝顔が見たいだけでしょ、臨也」

「きも……」

×13 柚留さん、シヨタロンに目覚める臨也さんを目撃する(後書き)

5日目！ 臨也さん、久しぶりの登場です！ はい。なんか、最初のほう、すごいことになっちゃったよ。でもまあ、なに、ブラック柚留が書ければ全てよし。以上ー！

×14 袖留さん、6日目に静雄さんとしりとりをする

皆さん、こんにちは。穴戸鬼門しつじんきもん 袖留ゆだるです。

さて。静雄が小さくなってから、とうとう6日目がやってきました。そう。明日になれば、静雄がもとに戻っているかもしれない日です。

で、そんな今日。僕は、何をしようか考えていました。でも、どうしてもいい案が浮かばないんです。だって、童話を聞かせようとする、静雄、なぜか全力で拒否してくるし。じゃあ、外に行つて遊ぼうといえ、そうするわけにもいかないし。

とにかく、暇というわけで。何もすることが無いという事で。

「なあ、ゆずる」

そんなことを思っていると、静雄が話しかけてきた。

「ん？ 何、静雄」

「からだがちいさくなってから、もう6日目だけど、おれ、いつになつたらもともにもどるんだろう……」

目に涙を溜めながら、僕を見上げてくる静雄。

……うわぁ……。これは、危険だよ。ものすごく危険だよ……。普通にしてても可愛い静雄が、涙目で上目遣いなんて、ヤバイよ。

そんな静雄に、僕は、鼻血を堪えつつ言った。

「うーん。そ、そろそろじゃないかな？」

「……おれ、ほんとうにもともにもどるのかな……」

…僕、最低な奴だなあ。静雄がこんなに不安になつてるのに、可愛いなんて思つて。鼻血出しそうになつて。こんな僕、死ねばいいと思うよ。

幼馴染がこんなに不安になつてるんだ。なんとか励ましてあげないと。

「大丈夫だよ。そんなに不安にならないでもっ。元気出せ、静雄」

「……うん……」

僕の言葉に、静雄は、間を空けてから頷いた。

うーん……。なんか、静雄の元気が出るようなもの、あったっけ。プリンは、今、家に無いし……。あ。そうだ。

「静雄」

「……なんだ」

「しりとりをしようっ」

「……はあ？ しりとりい？」

僕が言うと、静雄は、思いつきり眉間に皺を寄せた。う。そんな顔しなくてもいいじゃないか。

「そうっ。気分転換に、しりとり！ どう？」

「つまらないからやりたくない……」

「そんなこと言わないでっ！ やらないと、静雄、プリン一週間無しだよ」

「ええっ。じゃ、じゃあやるっ！」

静雄は、シヨツクな顔で僕に言った。

「よしっ、はじめよう！ あ、負けたほうは、臨也に、『私はしりとりで負けました。申し訳ありません臨也さん』って言いながら土下座ね」

「なぜそれだけのことであいつにどげざをしなきゃならねえんだっ！？ で、でも、やらないと……。まけなきゃいいんだし……っ」

「じゃあ、僕からね。り、り……。リンボーダンス！」

「スキーっ！」

こうして、自分のプライドを賭けたしりとりは幕を開けた。

「……く……。杭……」

「い、い、い……。異世界ファンタジー……」

数時間後。僕たちのしりとりは、まだ続いていた。ブツ続けで口



を動かしているため、口の中はカサカサで、喉はカラカラ。そろそろネタも無くなりつつある。

それでも負けじと粘るのは、僕も静雄も、絶対に、何があっても臨也に土下座なんてしたくないからだ。僕ってこう見えても、負けず嫌いなんだよ。

「じ……。ジーニアス……」

「なんだよそれ……」

「天才のことだよ。ほら、静雄。君の番だよ……」

「す……。スキー板」

「それ言ったよ」

「え……。じゃあ、すのこ」

「こ……」

「恋人同士なんだから、1回ぐらいセックスさせてよシズちゃん！  
はいつ、『ん』がついたから終わり！」

「「つつつ！?!?」」

僕の後ろから、急に臨也が出てきた。

い、いつのまにいつ?!?!?

「い、臨也、いつ来たの？」

「さっき」

僕の質問に、当たり前のように答える臨也。ねえ、インターホン  
押した？

「押したに決まってるでしょ！　押さないと、俺の命が危ないんだ  
から!！」

え、じゃあ、なんでいるの？

「いくら押しての返事がないから、俺、勝手に上がらせてもらった  
んだよ。もしかしたら袖留がシズちゃんを襲ってるんじゃないアアアア  
アアアアアツツ!?!?!　取れるっ、マジ取れるからっ!?!　ごめ  
んなさいっ、もう二度とこんなこと言わないからっ、袖留っ、手え  
離して!?!　じゃないと俺の下半身がグチヨグチヨにいいいいっ!  
!」

「臨也くん。僕はいいんだよ、別に。怒ってないよ。全然。ただ僕は君の下半身を再起不能にしたいだけなんだよ。それくらいいいよね？ 減るもんじゃないし」

「減るつつっ！ というより無くなるつつっ！！ ごめんなさいいいいいいいっ！！」

臨也が十分苦しんだみただから、僕は、臨也を放す。さすがに上半身だけの親友なんて見たくないからね。僕、そんなに趣味悪くないからさ。

「はあー、はあー……。ま、マジで死ぬかと思った……………」

「おまえ、いつペンしねばいいのにな」

「うわっ、シズちゃんがそんな辛辣なことをつつっ！！ でも、俺がいなくなったら、シズちゃん、生きていけないでしょ？」

「う……………」

「それに、俺、シズちゃんとセックスするまで死なないから」

「僕が殺してあげようか？」

「すみません、柚留様。命だけは、ご勘弁を」

僕の一言で、臨也は土下座をしてきた。

「静雄。結局、僕たちじゃなくて、臨也が土下座することになったね」

「ん〜。まあ、べつにいいんじゃないの？ おれたちがせずにするだし」

「そうだね」

このしりとりで負けたのは、僕でも静雄でもなく、最後に『ん』をつけた臨也だった。

×14 袖留さん、6日目に静雄さんとしりとりをする(後書き)

ふーっ。6日目、終わりましたあーっ。今回は、しりとりをさせてみました。いかがでしょうか。結果的に、臨也さんが土下座して終わりでしたが。まあ、『ん』がいたら土下座だから、ルール通りなんだけどっ。

さてさて。次回は、シヨタ化編最終話。ま、最終話なのに、静雄さん、シヨタじゃありませんけどね。じゃっ、次回！ また会いましょう！



「わかってくれればいいんだ……」

俺のテンションの低さに、始めは驚いていた柚留だが、少ししてすぐに気づいた。コイツが察しのいい奴で、本当によかったと思う。「そ、それより静雄。朝ご飯食べようよ。もうズボンも履いてるし、終わったことだからっ。ねっ」

「……………うん……」

柚留に励まされながら、俺たちはリビングへと向かうのだった。

「それにしても、よかったね、静雄。もとに戻って」

「ああ」

穴戸鬼門家、リビングにて。

柚留のメチャクチャ美味しい飯に、心の中で感動していると、柚留が言ってきた。

本当に、よかった。もし、あのままもとに戻れなかったら、本当に、困っただろう。てか、困っただっていうレベルの問題じゃあないだろ。

「本当によかった。もしあのままだったら、俺、すっげー困ったよ」

「うん。僕も困ったと思うよ」

その言葉のあとに、柚留が小声で、「僕の世界とか、シヨタコン悪化とか」なんて言った気がするのだが、気のせいかもしれないから、スルーする。

「でも、急になんだっただらうなー。体が小さくなるなんて」

もしかして、新羅の薬か？

俺がそう言うと、柚留の顔が少し、ほんっとーに少し、引きつったような感じがした。

「そんなわけないだろう、静雄。新羅はそんなに悪い人じゃないよ。そんな小さくなる薬なんて、静雄に渡すはずないじゃん」

「うーん。考えてみればそうだな。新羅はノミ蟲とは違うからな」

180度、完全に。

それに、俺は、新羅に薬をもらった覚えがない。だから、絶対に

新羅ではないと思う。

そう思っていると、なぜか柚留が泣き出した。

「どっ、どうした柚留!!」

「痛いっ！ 君の純真さに、胸が痛いっ!!」

とつとつ柚留までもが、ノミ蟲のようになってしまったのだろうか。だとしたら、俺も泣きたい。

「と、ところで柚留。ここ何日か、本当にありがとな」

「いや、いいんだよ。静雄は僕の大切な幼馴染だからね。これくらい、なんてことないさっ」

柚留が涙を拭いて言う。ああ、俺、いい幼馴染をもったな……。

神様、ありがとう。

「俺、この飯食ったら、少し休んで、帰るわ」

「え。もう帰るの?」

「ああ。あんま長居しても、迷惑だからな」

「いや。全然、迷惑なんかじゃないよ。むしろ大歓迎だよ」  
俺の言葉に、柚留が言う。ほんとに、コイツはいい奴だ。

「ありがとな、柚留。でも、俺、何日も世話になってるし。そろそろ仕事もあるから」

「そっかあ。ちよつと残念だなあ」

柚留がガツカリしたように言う。

そんなことをしていると。

ピンポーンっ

インターホンが鳴った。ん、誰だ?

「はいっ」

柚留が走って出て行った。

と、数秒後。

「シiiiiズuuuuちやあああんっっ!!」

「わぶっ!?!」

いきなり後ろから飛びつかれた。俺は、びっくりして、飯を噴出しそうになった。が、ここは我慢。

「シズちゃん、シズちゃん、シズちゃああんっ！ もとに戻ったんだねっ！！」

こんな呼び方する奴は、アイツしかいねえ。俺は、しぶしぶ後ろを振り向く。そこには案の定。

「臨也。てめえ、何しに来た」

全体的に黒い奴……、俺の恋人である折原 臨也がいた。

「何しに来たって、シズちゃんがもとに戻ってるか見に来たんだよ！ よかったああっ、今日は戻ってて！」

臨也はそう言いながら、俺に抱きついてくる。

「なんだ。俺のこと心配してたのか」

「心配しないわけがないでしょう！！ シズちゃんは俺の恋人なんだから！」

その言葉に、俺は少し、キユンときた。

ああ、やっぱり臨也は、俺の恋人なんだなあ……。

「それに、俺は、こっちのシズちゃんのほうが好きだよ。かつこいいからねっ」

そんなこと言われると、嬉しくなるな、なんか。

「あと、小さいと、むやみに手が出せない」

前言撤回。こいつに言われたことで喜べるものなんてない。

「まあ、小さい子にセクハラなんて、ただの変態がやることだしね」

「そのとおーりっ！ 柚留くん、よくわかってるねえっ！ 俺は、変態じゃないって、これで認めるかな？」

「微妙」

「何、二人そろって即答とか。超傷つくんですけど」

俺たちの言葉を聞いて、臨也がおもつきし落ち込んでいる。でもまあ、気にしない。

「柚留、世話になったな」

「あははっ。いいのいいの。静雄は利口だったから、全然、いつもと変わらなかったよ」

「じゃあ、俺、そろそろ行くわ」

「ん。気をつけてね」

「臨也は置いていって平気か？」

「うん、大丈夫。行っていいよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて……。お邪魔しました」

「じゃあねっ」

こうして、俺のちびっ子生活は幕をおろしたのだった。



×15 静雄さん、もとに戻る(後書き)

はいつ、しゅりょーうっ!! とうとう終わりました、シヨタ化編! いやあ、シズちゃん可愛かったなーっ。今度は袖留くんとかでもしてみよう!

では、これにてシヨタ化編は完結!

次回をお楽しみに!! バイバイっ!

## イベント小説 バレンタインデー

2月14日。バレンタインデーとかいうやつだ。確か、女が好き  
な男にチョコを渡す日だったか？ まあ、そんなこと、俺には関係  
ない話だ。

………つたはずなのに。

「バレンタインデーキスっ」

なんで俺、チョコなんて作ってんだらう。

俺、平和島 静雄は今、幼馴染の家のキッチンで、チョコを作っ  
ています。

その幼馴染……穴戸鬼門 袖留しんじゆうは、ノリノリでバレンタイン・  
キスを歌っている。男のくせに。むだに女みたいな声で。

「………どうしてこうなった」

「臨也のせいじゃない？」

ああ、そうだ。てか、思い当たるのは、あのノミ蟲しかない。

「静雄ー、手が止まってるよー」

「あっ、スマンっ」

それで、なんで俺はチョコを作ってたよ。

「惚れた弱みでしょ？」

「つつっ!?!?」

ヤバッ、声に出てたっ！

………まあ、そうなんだろうが……。

さかのぼること数時間前。

「ねえ、シズちゃんっ」

「ああ？」

ノミ蟲の家のソファで雑誌を読んでいたら、ノミ蟲が話しかけて

きたのがはじまりだった。

「明日は2月14日だねっ」

「……そうだな」

臨也の声色から、悪い予感しかしなかった。

でも俺は、相槌をうつといた。

「2月14日……。なんの日かわかるかな、シズちゃん？」

「……建国記念日」

「シズちゃん、建国記念日は11日だよー。それくらい覚えなさい」

んなこたあ知ってらあ。ただ俺はお前の言いたいことを阻止して  
るだけだ。

「ねえ、シズちゃん」

「……」

「俺、シズちゃんのチョコ欲しい！」

「知るか」

思ったとおり。

俺が即答すると、臨也は非難の声を上げた。

「いーじゃんシズちゃん！俺たち、恋人どうしなんだよ！！チョコの1つや2つ、くれてもいいじゃーんっ！！」

まあ、恋人同士ということは、間違っていないのだが。

第一に、俺は男だ。チョコなんて作ったことが無い。まあ、作る  
うと思えば作れるが。

第二に、

「……あんで俺がテメエにチョコなんざ作んなきゃなんねけんだよ  
？」

これだ。確かに恋人同士だが、チョコなんか作らなくても、お互  
いの気持ちぐらいわかってるだろう。だから、必要ないはずだ。

「……あのねえ、シズちゃん。君はほんとに人間のことを知  
らないね。人間は、欲深いんだよ。欲しいものが手に入れば、さら  
に欲しいものが出てくる。ましてや、俺なんか独占欲が強い。俺は

めでたくシズちゃんをゲットしたけど、シズちゃんのチョコだって欲しいさ。来神のころももらってたけど、あれは、ジャンケンで俺が毎回勝ってたからだし。付き合い始めてからのチョコは、また違うよ」

「……そのことを言わないでほしい。」

「……わかった」

「えっ、くれるの?」

「ああ。お前が金をくれたら、俺がmeijiの板チョコを買ってきてやる」

「……そういうことじゃないんだよ、シズちゃん。わかってよ……」

俺の言葉に臨也が肩を落とす。

作るのなんて面倒なんだよ……。

そう思っていると。

「こんにちわぁー」

聞き慣れた声が、玄関から聞こえてきた。

「あ、はい」

臨也が玄関に行って数秒後。

「やつほー、静雄っ」

「袖留!」

ドアから袖留が顔を出した。

なんでここにいんだ?

「さあ、僕はなんでここに来たでしょう!」

袖留は後ろに何かを隠している。

なんだ?

「なんでだよ」

「ふふっ。答えはぁ……」

袖留が持っていた小さな袋を前にだして言った。

「臨也の子守をしてくれてる波江さんに、チョコを渡しに来たんです!」

「柚留、その言い方は無いと思うよ」  
後ろで臨也が泣いている。

「でも、波江さんいないみたいだねー」

「波江は今日はいないよ。明日ならいるけど」

「そっかあ。じゃあ、僕帰るね」

柚留はそう言って、去ろうとした。が。

「静雄、臨也にチヨコ作らないの？」

「……余計なこといいやがって……！！！！！！」

俺はブチギレそうになしたが、コイツには敵わないので、我慢する。

「よかつたら、僕と一緒に作ろうよ」

「へ？」

唐突な提案に、俺は思わず間抜けな声を出してしまう。

「いいでしょ？ 作ってあげなよ。恋人同士なんだし」

「うっ……」

で、今に至る。

あまりに自然な流れで事が進んでいったため、俺は自分を失いかけた。コイツ、ほんとに危険だ…。

「ふーっ、終わった終わったあっ！！」

「あとはラッピングだな」

「うん。静雄、今夜は泊まってきたよ」

「え、いいのか？」

「いいのいいのっ」

柚留が言うので、俺は、泊まっていくことにした。

翌日。2月14日、バレンタインデー。

「じゃあ、がんばってね、静雄。波江さんによろしく言っといて」

「お、おう…っ」

俺は、小さな箱と、ピンクの袋を持って、柚留の家を出た。向かっているのは、新宿。臨也の住んでいるマンションだ。やることなんて、決まっている。臨也にチヨコを渡しに行くのだ。あー……。アイツ、ほんとに喜ぶのかあ……。？ そんなことを思いながら、臨也の家に行く。

数十分後。

臨也の住んでいるマンションについた。

あー、ヤベ……。なんか緊張してきた……。っ。

震える手でインターホンを押す。

しばらくすると、波江さんが出てきた。

「あら、静雄くん。どうしたの？」

「あの、波江さん。これ、柚留から……」

「あ。チヨコ」

「臨也がいつも世話になっててすみませんって」

「ああ。ありがとう。あなたは、臨也に用事？」

「……はい……」

俺が俯いたのを見て、波江さんは、少し笑った。

「あがって」

「……あー……っ……っ……」

波江さんに、ここで待ってて、なんて言われたから、待ってるけど、落ち着かない……。っ。

そう思っていると。

「シズちゃんっ……っ……」

「うわ!？」

ドアが開いて、臨也が飛び掛ってきた。

「チヨコ持ってきてくれたのーっ?」

臨也が俺に頬擦りしながら聞いてきた。

「……あ、ああ……っ……」

俺は、顔が熱くなるのを感じながら頷いた。

「ほんとに!？」

そんな俺に、臨也は目を丸くした。

「なんでだよ」

「だって、シズちゃん、あの調子だと、作ってきてくれそうになかったから」

俺、そんなだったか？

首をかしげていると、臨也が笑っていった。

「ありがとう、シズちゃん。ほんとうに嬉しいよっ」

そう言つて、臨也が俺の頬にキスをしてきた。

………っつっ!!!

俺は、急なことに、びっくりして、後ろにひっくりかえりそうになる。

「あははっ。シズちゃん、顔真っ赤ーっ!!!」

「うっ、うるせえっ!!! テメエのせいだろ!!!」

結局、俺は臨也にチョコを渡しました。

「シズちゃん、愛してるよっ!!!」

「お、俺も………っ」

(シズデレ萌えっ!!!)

イベント小説 バレンタインデー（後書き）

バレンタインデー……。これこそイベント界の王道だと思う。あ  
ー、もう、シズちゃん、かわいいっ！！



×16 シヨタ化編 オマケ

「……静雄」

「………なんでしよう」

「こんにちは。穴戸鬼門くちまに 袖留そでどめです。

僕は今、静雄のお説教中です。あ、でも、今回は、臨也と喧嘩したからじゃないんだ。それなら、僕、もっと怒ってるから。今回は、いつもには無いパターンのお説教なんだよ。してる僕も、なんか変な感じがしてたまらない。

「ねえ」

「………はい…」

「なんで朝起きたら、君たちが僕の家の中にいるワケ？ しかも、どうして窓ガラス割れてるの？」

「………知りません」

静雄にしては珍しく、僕の家のを破損したのだ。朝っぱらから。1番重要かつ取り付けが面倒なものを。いや。そんなことは、今どうでもいい。今1番聞きたいのは、

「どうして臨也は小さくなってるの？」

静雄の背中にいる臨也のことについてだ。

「こ、これは本当に知らねえっ！ 俺の家にいたんだよっ！ このちっちゃいのが！」

「ちっちゃいっていわないのっ！ おれだっすきでこんなになっただんじやないんだからあっ」

「うーん、とりあえず静雄。今の発言で、君がわざと窓ガラスを割ったのは確実にあったよ。」

「はあ………。まあ、窓ガラスを割っちゃったのは、だいたい予想がつくよ」

きつと、小さくなった臨也を見て、動揺しちゃってたんだろっね。許してあげよう。修理代は、臨也と静雄に半分ずつ払ってもらおう。

「なんで臨也は小さくなっちゃったの？」

「……………きのうしんらにのまされたくすりかげんいんかなあ……………」

「臨也。君は一体新羅になにをしたんだい？」

「よっほどの事じゃないと、新羅がこんな目的不明な薬を飲ませるわけ無い。」

「んつと、しんらのはくいをまっくろにした」

「白いところを全く残さずに？」

「うん」

それじゃあ、しょうがない。それは臨也が悪い。

でも、よくその格好で池袋に来れたよなあ。まあ、臨也だし、不可能ではないね、そんなこと。

「んで、池袋に来て真っ先に向かったのは、静雄の家で、小さくなつた臨也を見て動揺しちゃって、街のあらゆる物を破壊しながらここに来た、と」

「……………ごめんなさい」

外を見たら、道路がボコボコになっていて驚いた。どんだけ動揺してたんだい、静雄。

「やっちゃったもんはしょうがないからね。あとで市役所行って謝つてきなね」

「……………はい」

本当に、お騒がせしてしまって申し訳ない。  
で。本題。

「この小さいの、どうする？」

「ちいさいっていわないでっ！」

「それを相談してきたんだよ……………」

僕は、ガラスの破片を適当に掃いながら、イスに座る。あとで掃かせよ。

「う〜ん……………。どうしようか」

そう言いながら、僕は臨也を抱き上げる。

大きな紅い瞳。真っ黒な髪。小さい体。

「臨也にも、こんなに可愛い頃があったなんて……」

「しつれいだなっつ!!」

あっ、つい本音が漏れた。

「ごめんごめん。不貞腐れないですよ」

僕は、不貞腐れている臨也を膝の上に乗せて、頭を撫でる。

すると、臨也は嬉しそうな顔をした。可愛いなあ。

「ねえ。静雄、世話したら?」

「はあっ!? 俺が臨也の世話あ!?!」

「そっ。案外いいかもよ?」

僕の言葉に、静雄は顔をしかめた。静雄、僕よりも失礼な仕草だよ、それ。

「いいじゃん、別に。小さい子、見てると、癒されるよ? たとえそれが臨也であっても」

「……………うん……………」

「きみたち、ほんとにしつれいだよねっつ!!」

でも、臨也だから仕方がないでしょ。

そう思いつつ、静雄を説得する。それでもまだ迷っている静雄に、

僕は、とどめの一撃をさした。

「それに、恋人同士なんだしっ」

「っつっつ!!」

その言葉に、静雄の顔が、一気に赤くなる。あ、おもしろっ!!  
「ねっ」

「……………っ。しっ、しかたねえから、じゃあ、俺がやるよ……………」

「しずちゃんっつ!!」

静雄の言葉で、臨也の顔がパツと輝いた。まあ。嬉しいだろうね。普通に。

「じゃあ、頑張ってるねっ、静雄!」

「お、おうっ」

「困ったことがあったら、聞いてきてもいいからっ」

「じゃあねっ、ゆずるっ!」

「いや。その前に君たち、ガラスの片付けしてっね」

柚留に怒られながらガラスを片付けた後、俺は家に帰った。そのときに誰にも会わなかったところが幸いだ。

それより。

小さくなった臨也をどうするべきだろう。

掃除の後に柚留から聞いたのだが、俺が小さくなったのも、新羅のせいだ。それを聞いて、俺は、すぐにアイツをボッコボコにしてやるうと思っただが、柚留に話を聞いて、新羅はわざとやったわけじゃないそうなので、やめた。イラっときたけど。

そんなことを思っていると。

「しずちゃん、しずちゃんっ」

「ああ？」

臨也が俺の服の裾を引っ張ってきた。

「おなかすいたんだけどっ」

臨也に言われて気づいた。そういえば、朝飯食ってねえな。慌てて柚留の家に行ったからな。

「おかず、なんかあつたっけっか……」

そう言いながら、俺は、冷蔵庫を覗く。……卵があつから、玉子焼きでも作るか。昨日の残りの味噌汁もあるな。

数分後。

食卓には、玉子焼きと味噌汁、白米があがっている。

「わあっ、おいしそう！ しずちゃんって、りょうり、できたんだねっ！」

「失礼極まりない感想だな、それ」

ほかになんかあるだろ。

そう思いながら、飯を食い始める。ああ、やっぱり玉子焼きは甘いのにかぎるよなあ。

「おいしいっっ！ おれ、こうこうのときにしずちゃんのをてびくり

クッキーたべたんだよね、こっそり」

「そんなことしたのか!？」

「でさ、それ、すっごくおいしくて。びっくりしたよ! しずちゃんがりよりうりできるなんて!」

「2回も言わなくていい」

地味に傷つく。俺って、そんなに不器用に見えるのだろうか。

「ああ、おれ、しあわせだなあつ。しずちゃんのとりのうりをどうととたべれるなんてっ」

感動するところはそこなのか。

臨也が小さくなって1番はじめにしたのは、朝飯を食うことだった。

午後1時。

昼飯を食い終えた俺は、携帯をいじっていた。いや、とくに意味は無いが。

そんな俺のところへ、臨也が歩いてきた。歩き方がなんか可愛いとかが思ってしまう。

「ねえ、しずちゃん」

「なんだ、臨也」

わかっているのか、わかっていないのか知らないが、俺を上目遣いで見てきた。ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ! こいつ危険だよ!! 俺、二週間もつのか!？ ショタコンに目覚めそうだぞ……!!

「な、なんだ……?」

「ねむい……」

そんな俺のこと知らないで、臨也はさらなる危険な行動をしてきた。

眠そうな顔で目をこする。

………かわいい……っ。

「……こっち来い」

「ん……………」

俺が言つと、臨也がよじ登ってきた。

「寝ろ」

「……………ん……………」

臨也は、数秒経つと、あつという間に、眠ってしまった。はやっ。

……………かわいいなあ、臨也。

小さくて華奢な体。俺がすぐに壊してしまいそうだ。

そつと頭を撫でてやれば、くすぐったそつに身じろぎする。

……………かわいいっ！

臨也が小さくなった二週間、シズちゃんは、それはそれは癒された。おしまい。



×17 女体化in静雄（前書き）

タイトルのとおりの内容。苦手な奴は、今すぐここから逃げるんだ  
—————！！！！



×17 女体化in静雄

東京・池袋。

いつもは騒々しい街なのだが、今日はやけに静かだ。

それもそのはず。今日の池袋は、24時間戦争コンビが暴れまわっていないからだ。その前に、その2人の姿さえも見かけない。なぜだろう。人々は疑問に思っていた。

そんなとき。

人々の間を走っていく金髪。

金髪といえば、アイツしかいない。

なのに、振り向いたところにいるのは、平和島 静雄ではなかった。まあ、似ているのだが。

走っていくのは。

金髪ロングヘアで、胸元が若干はだけているバーテン服を来た美人。

人々はその美人に目を奪われる。が、美人はそんなことに気づかずに走っていく。

こんにちは。穴戸鬼門 柚留です。

こないだのシヨタ化事件から数日経って、やっといつもどおりの生活に戻った……。なんて思ったのもつかの間。今度は、女体化らしいですよ……。うんざりだ、もう……。

これは、数十分前の話。

僕が朝食を終えて、ゆっくりしようと思っていたら、急に玄関から声がしてね。女の人の声だったんだけど、インターホンも押さなかったから、失礼な奴、なんて思ったんだよ。でね、苦情を言うついでにリビングを出たんだ。それで、玄関に行ったわけ。そしたらそこにね、猫毛の金髪美女が立ってたんだ。そこまではいいんだけど

どき。驚いたことに、その女の人の格好が、胸元が若干はだけたバ  
ーテン服で。顔をよく見ると、なんとなーく、静雄に似てたんだよ。  
僕が言葉を失っている、その女の人が、家にあがってきて、僕  
に泣きついてきたの。

「どっ、どうしたんですか!？」

僕は、女の人が強く抱きついてくるせいで当たる胸と、泣いてい  
るということにしどろもどろしながら聞いた。

そしたら、女の人はこっちを見上げて言ったんだよ。

「柚留……っ、女になってた……!!！」

っっていうわけ。

その女の人は、静雄だったんだよ。

シヨタ化の次は女体化なんて、なんの漫画だよ、って感じなんだ  
けど。

そんな静雄は今、僕の家のリビングで、テーブルに突っ伏して泣  
いてます。静雄が泣くなんて、普段ならありえないんだけど、女に  
なったせいで、涙腺がいつもより緩いらしい。そういえば、背も少  
し小さくなったよね。

「静雄。あんま泣いてると、目、腫れちゃうよ」

僕は、しくしくと泣いている静雄の肩に手をかけながら言った。

「だって、だってよお柚留っ!!！」

僕に言われた静雄は顔を上げ、こちらを向いてきた。その顔は、  
なんていうか、あれだった。テレビに出てる女優とかよりも、すご  
く可愛かった。こんなこと考えるなんて、自分でもキモいと思うけ  
ど。ほっぺは赤いし、目も潤んでるし。極めつけは、上目遣いとい  
うところだった。

「……ま、まあ、落ち着きなよ。お茶、淹れてくるから」

「……………ん」

お茶を淹れて、静雄にだして。静雄はそれを飲むと、少しだけ落  
ち着いたようだ。まだ鼻はすすってるけど。

「なんで、こんなになっちゃったの？」

「知らねえよ……。新羅にも聞いてみたんだよ。この前のことがあるから。でも、アイツ、そんな薬は作ってないって……。グスッ」「そっか……。なんでだろうね……。……。あ。静雄、臨也には電話した？」

「……？ してない……」

僕の言葉に、少しキョトンとした静雄。だけど、すぐに僕の言いたいことがわかったようだ。その証拠に、涙で潤んでいた静雄の目が、爛々と、まるで獲物を捕らえようとしている獣のように光っている。恐ろしいな……。

「聞いてみよう」

「わぁーっ！ ほんとに女になってるーっ！！」

臨也に電話をした。答えはもちろん、YESだった。

電話の後、すぐに臨也が来た。それが今だ。

女になった静雄を見て、それはそれはしゃいでいる。コイツ、自分の命の危険とか考えないのだろうか。静雄は、もうキレる寸前だ。まあ、それは僕もなんだけど。

「なんでこんなことしたんだい、臨也」

僕は、とりあえず事情聴取をすることにした。しなくても、おふざけってことはわかるのだが。

「だって、女になったシズちゃん、見てみたかったんだもんっ！」

臨也の一言に、とうとう、静雄がキレた。

「ざけんな臨也ーっ！！！」

そう言って、静雄は臨也に右ストレートを叩き込んだ。  
が。

「……あれ……？ 力が、出ない…………？」

臨也は、ビクともしなかった。

「ははっ。シズちゃん、君は今、そこらの女子高生と同じぐらいの力になってるんだよ。だから、俺を殴り飛ばそうとしても、残念ながらできないんだよっ」

痛いっちゃん、痛いけど。

臨也が付け加えた。

ほほう。だからそんなに余裕なんだね、臨也くん。

でも、君は重要なことを忘れちゃいないかい？

「…君も、ほんとに飽きないね、臨也」

「へ？」

「僕に何回お仕置きをされれば気が済むのかな？ 君は真正のドMだね」

「……あ」

駄目犬は、ちゃんと躑けないと。

全く、臨也は本当に馬鹿だ。静雄の力が無くなることばかりに気をとられて、僕のことを忘れるなんて。呆れるよ、ほんとに。

「で、なんでこんなことしたの？」

「……女になったシズちゃんが見たかったからです…」

「たったそんだけ？」

「たったそんだけです……」

呆れてものも言えないって、まさにこのことを指すんだろうな！。臨也。君はどんだけ変態なんだよ。

「はぁ……。これ、どれくらいで元に戻るの？」

「……2日ぐらい……」

「そう……」

僕は、静雄のほうを向く。静雄は、これ以上ないくらい、臨也を辛辣な眼で見ている。しょうがないか。

「静雄。2日ぐらいなら、我慢できるよね」

「臨也をブチのめさせてくれたら、我慢する」

「いいよ」

「ちよつ、袖留っ……………」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

「し、シズちゃん…っ…!!」

「ふー」

「気が済んだ？」

「ああ」

数分後。庭から静雄が帰って来た。臨也が戻ってこないのは、気絶してるんだろう。静雄、臨也は恋人なのに、容赦しないな！。

「つたく。この体、困るなあ……………」

動きにくいつたらありやしねえ…。

静雄がそう言いながら肩を揉む。

「肩凝ったの？」

「ああ、まあな。胸が重いんだよ」

あー…。静雄、割かしデカいしね……………。胸デカいと肩凝るって、ほんとなんだ！。

「てか、迂闊にそういう発言はやめようね、静雄。僕だって、一応男だしね」

「ん。スマン」

はあ……………。

溜息を吐いて、静雄を見してみる。

シャツがはだけてるな！。

「静雄、シャツぐらい、ちゃんと着たら？」

僕が指摘すると、静雄は顔を真っ赤にしながら言った。

「むっ、胸がデカくてボタンが閉まらねーんだよ…!!」

「……………ごめん……………」

静雄の着てるバーテン服は、男用だ。女が着るようになって作られていない。それ故、胸の部分に余裕が無く、閉まらないんだろう。ああ、哀れな静雄。

「なんなんだよ、あの変態は……………っ…!!」

静雄が舌打ちをする。

声がいつもより高い。その上、顔立ちが可愛らしい。そんなことするのは、とてももつたいない。

「静雄、女の時ぐらい、穏やかな言葉使いとか仕草とかしなよ。可愛いのに、もつたいないよ」

「ゆっ、袖留までそんなことを！！俺、ショックだ！！」

「ごめん、ごめん。つい、ね」

僕が言うと、静雄はほっぺを膨らませて、「むう……」なんて言っただ。

……可愛いなあ……っ。なんだよ、この子。超可愛い。

「静雄、可愛いねっ」

「んなっ！！ ゆっ、袖留の馬鹿っ！！」

ああ、これが所謂ツンデレか。きっと、静雄はツンデレの女王だな。そんな変態思考になってしまう。僕、そろそろ末期かな？

そんな暢気なことを考えていた僕にも、人生最大の屈辱が待ち構えていることを、僕はまだ知らないのだった。

×17 女体化in静雄（後書き）

内容中途半端っ！ なにこれ。ただの自己満足だよ、もっ。ごめん  
なさい、皆さん。スライディング土下座で許してっ。ん、でも  
まあ？ 信じるものは都合のいい妄想を繰り返して映し出す、ドラえ  
もんの道具みたいな鏡だけだし？ 然程気にしないっ。

## イベント小説 じゃんじゃんじゃんの日

さて。この猫ちゃんどうしよう。

あ。皆、こんにちわっ。情報屋の折原 臨也だよー。元気？ 今、俺は、自宅の仕事部屋で、膝に猫ちゃんを乗せながら仕事してるんだ。いや。俺は、もともと猫なんて飼ってないよ。動物は好きだけど、うちはマンションだしね。じゃあ、なんで俺の家に猫ちゃんがいるか。説明してあげるよ。

朝。俺は、なんとなく、体の上に違和感を感じた。重くは無いんだけど、何か乗っかってる感じ。俺は、昨日の残業のおかげでごく眠かったんだけど、違和感のせいで、寝れなかった。体の上のものがないかと確認しようとして、俺は、重たい瞼を、ゆっくりと開けて、ベッドの上を見た。すると、そこには。

金色の毛の仔猫が、ちょこんと俺の上に座っていたのだ。

俺は、驚いた。なんで仔猫が、こんなところにいるんだ？ 昨夜、鍵はかけておいたはずだ。そう思って窓のほうを見ると、窓ガラスが割れていた。ああ。割って入ったのね。なんて横暴な仔猫なんだろうと思ひ、仔猫を見た。仔猫は、コテンと首を傾げて、俺のほうを見上げてきている。

かつ……………、可愛いーっ！！！！

俺は思わず、その仔猫を抱きしめた。仔猫は、苦しそうにもがいている。なにこの子。超可愛いんですけど。そんなこと思っている、顔面に猫パンチが飛んできた。俺は、仔猫を離してしまう。仔猫は、キレイにベッドの上に着地すると、毛を逆立てて、「うーっ！っ」と唸ってきた。ん？ 窓ガラス割って入ってきて、顔面に猫パンチをかまして。この行動、あの人とそっくりだなあ…。俺は、思わず、「シズちゃん」と呼んでしまった。すると仔猫は、唸るのをやめて、にゃお、と言ってきた。なんとなくしかめっ面。も



しかして、この子……、

「し、シズちゃん、なの……………」?

「にゃあ」

なんか文句あんのかノミ蟲、とでも言いたそうな声だ。

やっぱり、シズちゃんなんだ。驚いた。人間って、獣になれるんだ。……いや、そこじゃないだろ、俺。自分の思ったことに自分でツッコむ。

また変な薬でものんでしまったんだろう。ああ、哀れなシズちゃん。

「今回は、俺じゃないよ、シズちゃん」

多分、彼は俺の仕業だと思ってここに来たのだろう。でも、今回は俺はしていない。確かに、今日は2月22日。にゃんにゃんの日だ。俺は、シズちゃんに、1日、「にゃ」をつけて喋ってもらおうと思っていた。ついでに、ベッドの上でも鳴いてもらおうとも思っていた。だから、彼を猫にするなんてことは、一切考えていなかった。まあ、猫耳とかは生やしたかったけど。俺の言葉に、シズちゃんは、疑うような視線をなげつけてくる。

「ひどいなあ、シズちゃん。ほんとだつて。俺は、君に猫耳を生やしたりはするかもしれないけど、猫にはしないよ」

そう言いながら、シズちゃんの頭を撫でてあげる。毛がふわふわで、とても気持ちいい。シズちゃんは、頭を撫でられると、自分から頭を擦りつけてきた。くあっ、かあいいいっ!

「ふふっ。可愛いね、シズちゃん。きもちいの?」

「にゃー」

こんな感じだ。

仔猫になつてしまったシズちゃんを、俺が世話してるわけ。

それにしても、可愛い。非常に可愛い。仔猫故に、ちんまいわけ。片手で持てるほど。なんであんなデカいシズちゃんが、猫になると

こんなに小さくなってしまっただろう。まあ、可愛いからいい。それで、頭とか、首の下とか撫でてあげると、気持ちよさそうな顔をする。眠たそうな、とろん、とした表情。それがたまらなく可愛い。喉も鳴らす。もう、なにもかもが可愛かった。それで、ビックリしたのが、行動だった。俺が仕事をしようと、膝に乗せていたシズちゃんを下ろして、立った。そしたらシズちゃんが、寂しそうな声で、「にゃあ……」と鳴いてきたのだ。しかも、その後に、足に頭擦りつけてくるし。可愛くて、可愛くて。俺は、シズちゃんに、「膝の上、おりこうさんにしてるなら、乗っててもいいよ」と言うと、シズちゃんは、「にゃっ！」なんて鳴いて、更に体も擦りつけてきた。で、それから数時間後の今。俺は、やっと仕事を終えて、椅子から立とうとした。が、シズちゃんが膝の上において、立てない。シズちゃん、寝てるし。

「シズちゃん、起きてー」

体を撫でて声をかけると、シズちゃんは起きた。欠伸を一つする。かわいいなあつ。

「……にゃあ……」

シズちゃんが俺のほうを見上げてきた。なんだろう。何か言いたげだな……。

「どうしたの？」

「にゃー……」

俺の問いに、シズちゃんは時計を見た。俺もつられて時計のほうを見た。と、あることに気づく。

「あ、お昼」

「みゃあっー！」

ああ、シズちゃん、お腹が空いてるんだねつ。仕事に集中していて、すっかり忘れてた。

「ごめん、シズちゃんっ。今、ご飯用意するからっ」

「にゃあっ」

俺が言うと、シズちゃんは短く鳴いた。

数分後。俺は、シズちゃんに、ツナを出した。猫が食べれそうなものは、これしかなかった。ごめん、シズちゃん。こんなにお粗末なものしか用意できなくて。そう言っつて、シズちゃんにツナを出した。すると、シズちゃんは、ガツガツ食べはじめた。ああ、そうか。ツナは、原料が魚だから、猫は好きだ！

「おいしい？ シズちゃん」

「にゃあっ」

俺が聞くと、シズちゃんは、こちらを向いて、鳴いた。可愛い……っっ！！ 猫になると、こんなに変わるんだね。まあ、見た目からして違うんだけど。

俺もちゃっちゃと昼飯済まそう。それで、午後はシズちゃんとのんびりしよう！！

「シズちゃん、おいで」

俺は、ソファに座って、シズちゃんを呼んだ。すると、毛繕いしてたシズちゃんが、こちらに歩いてきた。歩き方がぼてぼてして、見るだけで癒される。かわいいなあ。そんなこと思っていれば、シズちゃんは、あっという間に俺の膝の上に飛び乗ってきた。そして、俺のほうを見つめてくる。

「うにゃ？」

黙っている俺が不思議なのか、シズちゃんは小首をかしげる。かわいいなあ、ほんとに。俺は、シズちゃんの首の下を撫でてやった。そうしたら、シズちゃんは気持ちよさそうな顔をした。それでもって、すりすりと体を寄せてくる。普段からこうだったらいいのに、なんて、少し思ってしまった。俺の馬鹿。

「ここ、暖かいねー」

「にゃあ」

「俺、眠くなってきたやつただけだ。ヤバイ」

「みゃ？ ……ふにゃ〜…」

「シズちゃんも眠いの？」

「じゃあ……………」

俺の膝の上で、シズちゃんがうつらうつらしている。そっと頭を撫でてやると、気持ちよかったのか、すぐに寝てしまった。

「寝ちゃったか……。はあ。シズちゃんの毛、ふわふわだなー。きもちー…」

そんなことを思っていたのだが、俺は、ふと、ある重要なことを思い出した。

「シズちゃん、いつになったら戻るんだろ…………？」

それで、なんでこんなになっちゃったわけ？ ……ま、可愛いからいいか。

数日後、静雄は完全にもとに戻れていなくて、大変な目にあうのは、またべつの話である。

イベント小説　にゃんにゃんにゃんの日（後書き）

わーいつ、猫静雄ーっ！！　仔猫萌えーっ！！　これ、こないだの志　動物園見てて、子犬があまりにも可愛すぎて、半ば勢いで書いた。てか、シズちゃんはこんなじゃない。

シズちゃんは、なんでシズちゃんからキスをしてこないのだろう。

「それは臨也がキモイせいじゃない？」

「うわっ、何その答え！ 柚留、いくらイラついてるからって、俺にあたらないでほしい！」

みんな、こんにちは。日本を代表する、素敵で無敵な情報屋の折原 臨也です。

さて。俺は今、友人、穴戸鬼門 柚留の家にお邪魔しています。

この家の主である柚留くんは、現在、非常に不機嫌です。俺が来てるせいで。ごめんなさい。

「そんなこと言いに来ただけなら、さっさと帰ってくれない？ 君に僕の時間をあげるなんていうもったいないこと、本当はしたくないんだから」

「ドS発言！！ 何コレ！？ 柚留くん怖い！！」

柚留は、こんなヤツじゃなかったはずだ。いや。こんなになってるから、実はこういうヤツなんだろうけど。信じたくない。

「真剣な眼差しで家に来たと思ったら。出てきた言葉は、そんなことかい。君、普段から何を考えてるんだい？ イカレタ奴ってことは知ってたけど、そこまで堕ちてたんだね。ああ、哀れな臨也くん」

柚留が、爽やかな顔で毒を吐いていく。恐いです。この人、ほんとに恐いです！

こ、こんなことはいいか。

俺が柚留の家に来てからの第一声は、冒頭のセリフだ。

みんな、馬鹿馬鹿しいと思うだろう。俺だって、他人のことだったら、そんなこと知るかってなるんだけどね、こんな阿呆な悩み。でも、自分のことだから違うんだよ。これは、本当に真剣に悩んで

いるのだ。ああ、これぞ人間の習性の1つだよ。他人のことはどうでもいいけど、自分のことになると、他の人間なんかよりも重要ははは。これだから人間は面白い。欲にまみれた人間。これほど面白いものは、ないと思うよ。

で、だ。どうして、俺がこんなことで悩んでるかって？ そんなの、決まってるよ。シズちゃんのせいだ。

シズちゃんは、池袋最強と言われている、バーテン服にグラサン、金髪がトレードマークの、俺の可愛い可愛い恋人だ。いつもは喧嘩ばかりしてるけど、2人きりの時なんか、普段からは想像もつかないような甘い雰囲気になる。俺らの邪魔は誰もできないよー。あはは。

そんなシズちゃんと、付き合って一ヶ月以上経つ。それで気づいたのだが、シズちゃんは、自分からキスをしてこない。たぶん、恥ずかしいのだろう。最初のうちは、それも可愛いと思っていた。いや、今でも思ってるけど。けど、だんだん足りなくなってきた。いつも、いつも、キスをするのは俺からだ。今まで、何度かシズちゃんに、キスをせがんでみた。しかし、全部拒否された。片っ端から容赦なく。

それで、俺は思った。『どうしてシズちゃんは、自分からキスをしてこないのだろう？』と。

……誰だ、馬鹿って言った奴。殺されたいのかい？ こっちは真剣に悩んでるんだけど。

「なんでだろう……」

「ほんとに真剣に悩んでるんだね……」

「そうだよ。ってか、なんで急に？」

柚留がそう言ってきて、俺は聞き返した。さっきまで、イライラしてたのに。

「いや。臨也のクセでねー。わかっちゃったよクセ？」

柚留の言葉に俺は、首を傾げる。クセって、なんだろうか。俺に

は、真剣に悩んでいるときにする行動が、何かおるのだろうか。

「クセつて、自分じゃ気づかないんだよねー。臨也が、悩んでいるときにするクセはね、頬杖をつくんだよ」

「頬杖？」

「そう。頬杖。いつもしてるかもしれないけど、悩んでいるときの臨也の頬杖は、いつもと、ちょっと違うんだよ」

クスクスと笑いながら、柚留が言う。

なんだ？ いつもと何が違うんだ？？

「あのねー。両手で頬杖をつくんだよ」

「両手？」

「いつもの頬杖は、片手なんだけど、悩んでいるときは、両手なんだよ」

そうだったのか……………。

柚留に言われて、少し恥ずかしくなった。何が恥ずかしいかって、成人男子が、両手で頬杖をつくのさ。どこの純情乙女だ、と言いたくなる。

いやっ、そんなことより！

「どうして、シズちゃんは自分からキスをしてこないんだーっ！」「これを解決したい。」

「しょうがない。臨也に、僕から1つ、アドバイスをしてあげるよ」

「ほんとにっ！？ ありがとう、柚留！！」

「いや。友達の悩みだしね」

ああ、やっぱり柚留はいい奴だ。俺は、改めて実感した。

「静雄はさー、ほら。ああ見えて、以外と恥ずかしがりやさんなんだよね。だから、そういうことを、自分からできないんだと思うよ」

柚留の言葉に、俺は納得した。シズちゃんは、案外、シャイだ。

そこがまた可愛い。が、今回はそれが仇になったようだ。

「だからさー、説得とかじゃなくて、自然な流れをつくってみたら？」

「おおっ！！ 流石柚留！！ 頭いい！」



「あはは。そんなことないよ」

「じゃあ、俺、早速シズちゃんのとこ行ってくるね!」

こうして、俺の『シズちゃんにキスしてもらっちゃおう 大作戦』は始まった。

どうして、俺は自分から相手にキスができないのだろう。

いや。理由はわかってるんだ。恥ずかしいんだよ。自分からとか相手からされるだけでも恥ずかしいのに、自分からするなんて、とんでもない。

え。なんで急にこんなこと言い出したかって? いや。この前の出来事を、ふと思い出して。

それは、一昨日のことだ。

久しぶりに臨也と俺の休日が重なったから、その日は、臨也の家で、2人きりで過ごすことにしたのだ。で、その時のことだ。

「シズちゃん。いつもキスするのは俺からだから、たまにはシズちゃんからしてきてくれてもいいんじゃないの?」

「ブツ!?!?」

「やだっ。シズちゃん汚いっ!」

「てっ、テメエのせいだろうが!! なんだよ、急にっ!!」

「えー。いや、シズちゃんからキスしてもらったことないなって思ってたさ」

これから始まった。

確かに、俺から臨也にキスしたことはなかった。だって、恥ずかしいし、臨也が急にしてくるから、タイミングがつかめないし。

そう言うっつと、

「じゃあ、今してよ」

臨也が急にそんなことを言ってきた。

お前らは、そんなことを言われて、できるだろうか。俺は、無理だ。しかし、そのときの臨也は、マジだった。だから、断りにくか

った。でも、俺は、なかなかできないわけで。痺れを切らした臨也は、じゃあいいよ、と言って、拗ねてしまったのだ。

こんなことがあったのだ。

俺だって、臨也のことは好きだ。本人には言わないけど、カッコイイとも思う。キスだって、したくないわけではない。できないだけなんだ。

「はー……………」

自分が嫌になる。なんでキスくらいできないんだろう。恥ずかしいのなんて、我慢できるだろう、俺。

そんなことを思っているよ。

「シズちゃんラブっ！！俺はシズちゃんを愛してるっ！！」

「！？」

こんな声とともに、後ろから何かが飛びついてきた。言うまでもない。臨也だ。

「臨也っ！？」

「やつほー、シズちゃん。遊びにきたよー」

人の家に無断で上がるなよ。

「シズちゃん！俺からお願いがあるんだけど！！」

「なんだよ」

「キスして！！」

「！？」

驚く、なんてレベルじゃない。啞然だ。

来て早々、何なんだよ。キスしてって。

「なんで、だよ……………」

「愛の確認」

「クロス」

「ごめんなさい」

茶目っ気づいてる臨也の頭を引っつかんで、持ち上げた。

「でもね、愛の確認するのは本当だよ。シズちゃんが俺のこと、愛してるなら、キスしてよ。しなかったら、シズちゃんは俺のことを

愛してないって、解釈するから」

そう言って、臨也は真剣な眼差しで、俺を見つめてきた。

ここで、俺からキスをしなかったら、愛していない、ということになってしまふ。そうしたら、臨也は俺から離れていってしまっただろ。

……やるしかないのか。

「いつ、臨也っ!」

「ん?」

ちゅっ。

「……っ。これで、いいか……?」

「シズちゃん……」

俯いている臨也。なんだろう。そんなに気に入らなかつたのだらうか。

心配になって、臨也の顔を覗き込もうとしたら、臨也が急に飛びついてきた。

「ありがとうっ!っ!」

「うわあっ!」

「俺もシズちゃんを愛してるよっ!」

そう言って、臨也は俺の首やらなんやら、体中にキスマークをつけた。

翌日。

「おはよー、しず……!?!?どうしたの、そのマフラー……。もう十分暖かいから、要らないと思うんだけど……」

「聞かないでくれ……っ」

「あれ、シズちゃん、マフラー? 要らないでしょ、こんなの」

「うるせえっ!……!」

「……キスマークでもつけられたか……」  
「喧嘩しないでよね」

× 1 8 K I S S M e ! (後書き)

静雄くんはきつと自らキスができないだろう、と思って書いてみました。ああ、もう、キス迫られてホッペ赤くしてたら萌えるよ！  
ついでに全力で拒んでなかったら尚更萌えるよ！！

× 0 0 始まり

「あれがオリハラ イザヤ……」

「新宿在住。池袋を活動拠点として、裏で動いている情報屋」

「資料を見た感じ、オタクっていうのしか想像できなかったけど、実際見てみると、超イケメンじゃんっ。今のうちに写メっとこつと

」

「んー。あの人、すごい好みだなー。彼女はいないらしいし、どうせなら付き合ってもらおうかなー」

「でも、そしたらパパは怒るかなー。まあ、みいのお願いなら、聞いてくれるし、いつか」

「オリハラ イザヤを彼氏にしちゃおう」

」

× 0 0 始まり（後書き）

はい。非常に短いです。これ、新編の始まりです。これから、強烈  
かもしれない キャラが登場しますっ！ 皆さん、ご期待を！！  
（しなくてもいいです。てか、しないで。プレッシャーかかるから、  
ほんとに）

都内・池袋。

「今日もこの街は賑やかだ。賑やか、賑やか……」

「いーざーやーああああああつー！！！」

「わー、恐い恐い。可愛い顔が台無しだよ、シズちゃん！」

「つな、！！！」

お前ら、さつきから五月蠅いんだが、少し黙れないかな。

そう思いながら、目の前を飛び交っていく物の1つ、自販機を、

僕は蹴り飛ばした。途端、物が飛び交うことを止める。

「ゆ、袖留……っ！」

「本当に、お前らは俺に殺せと言ってるようなもんだよなあ？ その行動は。お置きされないと、気がすまねえのか？」

「すいませんでした」

僕の前に正座する2人は、情報屋の折原 臨也と、喧嘩人形で有名な平和島 静雄だ。この二人、24時間戦争コンビという名で通っている、犬猿の仲。………なのだが、恋人同士だ。もちろん、このことは、ごく一部の人間しか知らない。というか、一部というほどの人数はいないだろう。僕、宍戸鬼門 袖留は、この二人の同窓生であり、静雄の幼馴染だ。何ヶ月か前に、5年ぶりに池袋に帰ってきたのだが、二人の仲は全く良くなっておらず、帰ってきて以来、二人が喧嘩をするたびにお説教をしている。昔も、こんな風に二人をよく叱った。

「謝罪は聞き飽きたから、もっと別のものをください。例えば、二人が仲良くしてるところとか、二人が仲良くしてるところとか、二人が仲良くしてるところとかっ！！」

「そんなに俺らに仲良くしてほしいのか………」

そんなの、当たり前だよ。二人が喧嘩さえしなければ、周りの人の迷惑にもならないし、公共物は減らないし、尚且つ、僕の日常が



平和になるからね。いや、生まれたときから、僕は平和なんて領域にはいないのだが。

「とにかく、もう喧嘩はしないでほしいな。いや、するなどは言わないから、もう少し静かにし」

「あーっ!!! イザヤくん見つけたあっ!!!」

「へぶっ!?!」

「っ!?!」

お説教を締めくくろうとしたら、臨也に女の子が飛びついてきた。後ろから飛びかかれたから、勢いで、臨也は前のめりになって倒れる。あ、鼻ぶつめた。いったそー……。

「探したんだよ、イザヤくんっ! ああ、会いたかったーっ!?!」  
そんな臨也に関わらず、女の子は、臨也をぎゅうぎゅうと抱きしめる。

「ぐ、ぐるじ……っ」

「あっ、ごめんなさいっ! イザヤくん、大丈夫!? イザヤくんっ!?!」

苦し紛れに呟いた臨也の声を聞いて、女の子は、臨也の体を自分のほうに向けて、体をガクガクと揺さぶる。ああ、臨也も今日でお別れなんだな……。

「あんまり揺さぶると、臨也が酔っちゃうから、放してあげようか」  
「きやつ!?!」

いくら臨也でも、お別れはしたくないので、とりあえず、臨也から女の子を引っぺがす。よかった。もぬけの殻みたいになってるけど、息はしてる。

「はっ、放してよ! みいちゃんはイザヤくんの傍にいたいんだから! それに、あんまり襟を引つ張らないで! この服、お気に入りなの!?!」

「ああ、ごめんね」

ジタバタと暴れる女の子を、地面に降ろす。小柄だったから、軽かったな。

「君、名前は？」

「笹川 彌みはね霸は禰ね」

「歳は？」

「18歳」

「嘘はいけないよ？」

「ほんとだよっ！！」

身長は気にしてるんだからあっ！と、彼女は言う。いや、でも、18歳で156センチくらいは、きついだろ……。

彌霸禰ちゃんは、小柄で、くりくりに巻いてある茶色の髪を、高い位置でツインテールにしている。服は、派手だ。ロックバンドの人が着るような服を着ている。スカートは短くて、ブーツがかなり長い。ウエストバックをつけている。

まあ、それより、

「臨也。この子、臨也の知り合い？」

「し、死ぬかと思った………！ あ、え、何？ 違うよ。全然知らない」

知り合いじゃないのか。じゃあ、どうして急に、臨也に抱きついたらんだろう。

「彌霸禰ちゃんは、臨也のこと、知ってるの？」

「うんっ！ イザヤくんのことなら、何でも知ってるよ！」

何でも？ この子、臨也と同じで、情報屋でもやってるのかな？

それとも、ただのストーカー？ 気になるな……。でも、ストリートに聞けば、違っつて言うに決まってるし……。

「みいちゃんねっ、イザヤくんの写真をたまたま見かけてね、それで、一目惚れしちゃったのーっ……！」

それで、その写真を手がかりに、イザヤくんを、ずっと探してたんだよー！！ 今日、やっと見つけたあつ！」

そう言っつて、彌霸禰ちゃんは、また臨也に抱きつく。今度は、後ろからじゃなく、正面からだ。それでも、不思議なことに、臨也は彌霸禰ちゃんを離そうとしない。なんでだろう。そう思っつて、よく

見ていると、どうやら、彌霸禰ちゃんの力が強くて、離すことができないうるようだ。

そういえば、静雄はどうなってるんだろう？ さっきから、全然声が聞こえないんだけど。

「静雄？」

「なんだ」

「あ、いた。さっきから、話に入ってこなかったから、どっかに行っちゃったのかと思ったよ」

そう言いながら、静雄の顔を見てみると、なんとなく、青筋が浮かんでいた。あ、怒ってる。そりゃあ、そうか。なんせ、恋人が女の子に抱きつかれてて、それを離そうとしてないんだからね。てか、静雄は、彌霸禰ちゃんのせいって気づいてないんだ。

「静雄。怒っちゃ駄目だよ。今、一番困ってるのは、臨也なんだから」

「はあ？ どこがだよ」

「気づかないの？ 臨也、必死で離そうとしてるけど、彌霸禰ちゃんの力が強くて、離せないんだよ」

「？」

僕の話を聞くと、静雄は、臨也のほうを見つめた。数秒後、やっと気づいたようで、「ああ」と、納得した。よかった。ここでキレられると、面倒だからね。

「みーはーねーちゃん。臨也が困ってるから、離してあげたらー？」

「えっ、ほんとに！？ キヤッ！ みいちゃんたら、つい。ごめんね、イザヤくんっ！」

彌霸禰ちゃんがやっと離れて、臨也はなんかホツとしている。まあ、恋人の前だったしね。静雄がキレないか、心配だったんだろう。「あつ、そういえば、あなたたちのお名前、聞いてなかったっけ。なんていうの？」

「僕は、穴戸鬼門 柚留だよ。よろしくね」

「平和島 静雄だ」

静雄は、さっきのことが、余程気に入らないのだろう。声色が不機嫌そうだ。

「よろしくですっ！ … あっ、もうこんな時間っ！！ みいちゃん、用事があるから、今日は帰るね！」

イザヤくん、また合いに来るからねっ。じゃあ、さよなら！」

そう言っつて、彌霸禰ちゃんはその場から去っつていった。

なんだろう、あの子は。まるで、嵐のような子だ。

「シズちゃん、ごめんねっ！ 俺にもう少し力があれば、あんなの、振り切れたのに！」

僕がしみじみとそんなことを思っていると、臨也の声が耳に入ってきた。ああ、さっきの謝罪か。まあ、それが正しいよね、恋人としては。

「別に、かまわねえよ。あれは、お前のせいじゃねえんだし」

「本当に！？ ありがとう、シズちゃん！！ 愛してるよ！！」

「っな、馬鹿！ こんなところでそういうことを言うな！！」

「……バカップル」

二人に呆れつつ、僕は、彌霸禰ちゃんみはねが去っつていった方向を向く。なぜか、胸騒ぎがする。きつと、あの子のせいだろう。

これから、たぶん、大変なことが起こるだろう。

僕のこのときの予感、悲しいくらい、的中してしまうのだった。

「オリハラ イザヤ。やっぱり、イイオトコだったにやあっ」

「今日、実際に会っつてみて、更に欲しくなっつちゃった」

「……………それもいいけど、あの二人、邪魔だなー」

「あの、ヘイワジマ シズオとかいう奴。みいちゃんが帰ったあと、

オリハラ イザヤに、『愛してる』なんて言われてたなー」

「オリハラ イザヤとヘイワジマ シズオは、恋人みたいだしー」  
「ムカツクなあっ。どうしようかな」

「一番手っ取り早く、あの二人の縁を切るには、ナニがいいかにやあー」

「……………そうであっ！！ イイコト思いついちゃったあっ！！」

「ふふふっ これで、あの二人は恋人でいられなくなるよ！」

「ヘイワジマ シズオの傷ついた顔を見るの、楽しみだにやあっ！」

「それで、きつと、オリハラ イザヤも傷つくんだらうけど」

「それはそれで、またいいかも」

「だってだって」

『人間は、傷ついた時の顔が一番美しいんだもの』

× 0 1 彌霸禰（後書き）

始まりました、新章！！ 新オリジナルキャラクターの彌みはね霸禰ちゃ  
んも加わって、賑やかになってまいりましたあ。この話、書くのが  
楽しすぎて、アイディアもどんどん浮かんできて、テンション上が  
りすぎて、ショートするかもしれない。頭とか、いろいろなものが  
危ない。

では、また、次回にご期待（という名のプレッシャー）を！！

×02 きつかけは関節

「イーザーヤークーン。池袋には二度と来るんじゃないやねえって言うてるよなあ？」

池袋を歩いてたら、シズちゃんに遭遇した。いや、シズちゃんに会いに来たから、ちょうどいい。

「シズちゃん、探したよー。今日、俺は君に用があつて来たん」  
「ああつー！イザヤくん発見ー！」

俺が言いかけたところに、この前のアイツが来た。

笹川 彌霸みはね。コイツは、わけがわからない。情報屋である俺が、個人情報を入手できない人物の一部だ。以前、親友である穴戸鬼門ししとくもん 柚留ゆずるに、シズちゃんとお説教されてるとき、急に俺に飛び掛つてきた奴だ。

この前と同様、今日も派手な格好だ。今日はツインテールじゃなくて、ポニーテールだけだ。

「一昨日ぶりだねえっ！！ 会いたかつたよーっ！！」  
「うわっ」

そう言いながら抱きついてこようとする彌霸みはねちゃんを、俺はギリギリで避ける。この子に抱きつかれると、色々と厄介だ。力が強いから、離そうにも無理だし、今はシズちゃんがいるし。

「うわって、酷いじゃーっ。どうして避けるの?? ……あ。もしかして、恥ずかしいの?? やだあ、イザヤくんったら、カワイイにやあ」

キモイんだけど、本当に。しかも、俺よりシズちゃんのほうが何億倍も、いや、もっとカワイい…誰だ、キモイって言った奴。これは俺の本心だ。真実だ。嘘でできている俺の、数少ない本当の部分の一部だ。

「そついえば、今日もシズオくんと一緒にいるんだねー？」

「ん？ まあ、俺たちは、運命の赤い糸で結ばれプキヤアアアッ

!？」

「黙れノミ蟲」

「わっ、イザヤくん大丈夫ー!? 関節がすごい方向に曲がってるよーっ!？」

シズちゃんの照れ隠しのおかげで俺の関節が、普通の人なら、生きていくうえで絶対に向かないような方向に曲がっている。わぁ、シズちゃん怖いよ。

「けっ。自業自得だな」

ねえ、俺たち、本当に恋人だよね? 割れ物のように扱えとは言わないから、せめて生物なまものぐらいには扱ってほしい。高温を避けてください。

「酷いよっ、シズオくん! イザヤくん、痛そうじゃん!！」

「痛くないよ、全然。変な方向に曲がってるせいで、痛みすら感じないから」

「これも、シズちゃんの愛かな？」

「ツチ」

「シズちゃん。何その舌打ち。それじゃあ、まるで、『激痛が走ればよかったのに』みたいな感じじゃん」

「いや、決してそんなことは思っていないぞ、臨也。俺はただ、今度からはもつと痛がるようなことをしようって思っただけだ」

「俺、愛されてる!？」

俺はこんなにシズちゃんを愛してるのに!!

「イザヤくん、可哀想……っ」

そんな彌霸禰ちゃんの声がかして、見てみると、彌霸禰ちゃんが、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

それを見て、俺もシズちゃんも、ギョツとする。

「イザヤくんは、何もしてないのに……っ。シズオくん、いつもこんなことしてるの!? 酷いよ!！」

「彌霸禰ちゃん……っ」

「イザヤくんだって、人間だから、痛いと思うんだよ!! もっと



考えてあげてよ!！」

「……………」

彌霸禰ちゃんの言葉に、シズちゃんの顔が、少し歪んだ。いつもなら、こんなこと言われても、青筋立てて喧嘩するだけなのに、今日は違う。どうしてだろう？

「イザヤくんの腕、どうしよう……………」。直すときも、きつと、痛いんだろうな……………」

「彌霸禰ちゃん、俺は大丈夫だから。心配しなくてもいいよ」

関節なんて、来神時代に、よく、袖留にはずされてたし。あの頃は、関節がおかしな方向を向くのが、当たり前になつてたなあ……………。

俺が遠い昔のことを思い出していると。

「……………すまん、臨也……………」

「へっ?」

シズちゃんが、俺に謝ってきた。いいのに、謝らなくてっ。

「いいよ、謝らないで、シズちゃんっ」

「でも、臨也は、あれしか言っていないのに、俺は、こんな酷いことしちゃった……………」

「シズちゃん……………」

シズちゃんが、俯いてしまった。たぶん、俺に嫌われたとでも思っているんだろう。そんなこと、絶対に無いのに。

「大丈夫、大丈夫! 関節なんて、外れ慣れてるからね!」

なんでだろう。今の自分の発言が、すごい悲しいものに聞こえた。袖留にやつてもらえば、一発で直るよ! 新羅だっているし!」  
そう言うと、シズちゃんは、顔を上げた。なんとなく、疲れているな。

「彌霸禰ちゃんも、心配ありがとう。俺は、大丈夫だから。それにもとはといえは、俺が変なことを言いかけたせいだし……………」

「変なこと…………?」

彌霸禰ちゃんは、どうやら聞いてなかったようだ。よかった、よ

かった。

「じゃあ、俺は早速、袖留のところに行つてくるよ。彌霸禰ちゃん、シズちゃん、今日はごめんね。じゃあね！」

「あ、イザヤくんっ!!」

俺は、二人に一言告げて、その場を立ち去った。

あー、袖留はきつと荒作業なんだろうなあ……。

そう思いながら、歩いていて、後ろで話す二人の会話なんて、俺は、全く聞こえていないのだった。

「ぎゃああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

「うつるさいなあ、ちよつとは我慢してよ」

「無理無理無理無理無理っ!! 超痛い!! 超痛いよ袖留!!」

あれから数分後。俺は今、袖留に、関節を直してもらっている。やっぱり、荒作業だった!

「はい、直った」

「しっ、死ぬほど痛かった!!」

「いや、今現に生きてるよ、臨也」

関節直すの、プロっているのかな……。あ。そういえば、

昔、ドタチンに直してもらって、全然痛くなかったんだ!!

あーっ、クソ!! ドタチンのところに行けばよかったあああ!!

「この関節、静雄がやったんだよね？」

「ああ、うん」

「はあ……。本当に、君たちは仲が悪いね……」

「ははっ。まあ、これでも恋人同士なだけだね」

そういえば、シズちゃんはどうしたのだろう。あのまま、二人をおいてきちゃったけど。

「用が済んだなら、帰ってくれないかな？ 僕だって、仕事あるんだけど」

「仕事？ 袖留って、仕事してんの？」

「してるよ。失礼だなあ……」

袖留の言葉に、俺は驚いた。してたんだ、仕事。

「僕は、店長だから、だいたい家で、金のこととか、色々してるんだよ」

「店長!？」

え、君、店長だったの!？」

「そっだよ。もういいでしょ。帰った、帰った」

しっしっ、と、まるでニワトリのような扱いをされた。袖留は、本当に俺の親友なのだろうか。

そんなこんなで、今日初めて知った事実とともに、俺は、袖留の家を出た。シズちゃんには、また、明日、会いに行こう。

「今日も、楽しかったなあーっ」

「オリハラ イザヤとヘイワジマ シズオの縁を一気に切るようなことは、できなかつたけど」

「でも、少しは効果あつたかな」

「あのとときのヘイワジマ シズオの顔は、とっても良かったなあ」  
「傷ついたって顔してたなあっ」

「喧嘩人形と呼ばれる化け物、ヘイワジマ シズオ」

「その怪物のような力のせいで、人から愛されない、可哀想な子羊ちゃん」

「故に、オリハラ イザヤからの愛を、とても嬉しく思っている」

「きつと、あの言葉だけでも、かなり傷ついたみたいだねー」

「あれだけで、あんなだから、オリハラ イザヤとみいちゃんがくつついてるの見たら、狂っちゃうだろうなあっ」

「うふふっ」

「楽しみだなあっ!！」

「あんなの見たら、もう止められないよねえっ」

『愛を絶たれたお人形喧嘩人形さんは、どうなっちゃうのかなあ？』

×02 きつかけは関節（後書き）

静雄さああん！！ 私の関節も外してくs（） 失敬。ここ  
で、このお話を書き始めた理由を発表します。

なんかー、超ドロドロに歪んだ、昼のメロドラマとか、韓ドラマた  
いな話を書きたかっただけなんだよねえ。

……… ノリが軽くてすみませんでした。これからは、真剣に本当に  
ちよつとだけと真剣に書いていきます。だから読むのやめないでー  
ーっ！！

× 03 喧嘩人形は思う

最近、俺と臨也と一緒にいる所に、笹川 彌霸禰とかいう女が、割って入ってくるのが多くなった。その度に、彌霸禰は臨也に抱きついたりして、媚をうっている。臨也が嫌がっているのにも、公衆の面前ということにも、俺がいるのにも関わらず。ベタベタとひつついて、甘ったるい声で。

「今日もそうだ。」

「イザヤくん、またシズオくんと一緒にいるんだねえっ！」

「そうだね」

「どうして、いつも一緒にいるの？」

「俺は、シズちゃんとは腐れ縁だから」

「そうなんだあつ」

臨也は、彌霸禰の相手をするために、俺にかまってくれない。俺がいるのに。いつもなら、しつこいぐらいに寄ってくるのに。

「イザヤくんは、いつもカツコイイね！」

「ありがとっ」

彌霸禰の言葉に、臨也は、満更でもなさそうだ。そりゃあ、褒められれば、誰だって嬉しいだろう。人間だから。

人間。

臨也が愛している、人間。臨也が愛してほしいと止まない、人間。あの日、彌霸禰にあの言葉を言われてから、俺は、よく、このことを考えるようになっていた。

あの言葉。

それを思い出すたびに、胸がきゅうつと絞められたような感覚になって、絶望しそうになって、泣きたくなる。

『イザヤくんは、アナタを人間として見てないよ』

『だって、アナタは化け物だもの』

『誰からも愛してもらえないアナタに興味が湧いて、少し相手してあげてるだけかもしれないよ』

『そのうち、厭きてしまつて』

『アナタを愛することを已めるかもしれないよ』

こんなの、彌霸禰みはねが臨也とくつつくために言った、俺への脅しだ。でも。

嘘とは言い切れない。

俺は、昔から、アイツに言われていた。

『俺は人間を愛している！ まあ、シズちゃんは化け物だから、いらないけどね』

こう言われていたから。今だって、臨也が本当に俺を愛しているのか、という疑問が、生まれている。

こんなことを考えている時点で、俺は臨也を、心の底から愛していないのかもしれない。

### 上辺だけの愛

俺の愛に名前をつけるなら、これがピッタリかもしれない。

「俺は、もう帰るな、ノミ蟲」

「えっ？ シズちゃん、待ってよっ。俺、話したいことあるんだけどっ」

「今度にしてくれ」

今は、お前とは口をききたくないんだ。

そう言つて俺は、臨也と彌霸禰みはねに背を向けて歩き出した。

そのときに、彌霸禰みはねがうっすらと笑った気がした。

『どつした、静雄。今日は、いつもと違うな』

「ちよつとな……」

家に帰ろうという気もしなくて、そこら辺をブラブラしていたら、セルティに会った。

他愛のない話をした後、俺もセルティも、黙ってしまった。話すことがない。そう思ってたポーっとしてみると、セルティにそんなことを言われた。

別に、俺は、何かを言ったわけではない。ただ、空を見ていただけだった。それだけなのに、セルティは、今日の俺は、いつもと違うことに気がついた。それは、俺をよく見ているからだろう。それなら、新羅や、柚留や、門田、もちろん、臨也も同じだろう。

『何かあったのか？』

「……………ああ」

ここで意地をはって、いや、なんて言う気力もない。セルティが相手だから、というのもあるけど。

「俺は、化け物だよな、セルティ。こんな力、普通なら無い」

『……………』

「この力のせいで、俺は誰からも愛されない。みんな、俺を恐がって、遠くに行ってしまう」

セルティは、俺の話を、何も言わずに、ただ、聞くだけだった。けど、それは、今の俺には、とてもありがたかった。

この力のせいで、大切な人を傷つけてきた。この力のせいで、人から愛されなかった。でも、この力は、俺にはどうすることもできない。ただ、暴れるだけ。

「……………話したら、気が楽になったわ。ありがとうな、セルティ」

『いや、いいんだ。静雄には、私も世話になってるからな』

やっぱり、セルティはいい奴だ。

俺は、改めてそう思った。

「お人形さん、今日は辛そうな顔、少ししかしなかったなあ」



「今日はつまらなかつたよ」

「オリハラ イザヤも、ヘイワジマ シズオが帰ってから、上の空だったし」

「でも、二人の距離は、少しずつだけど、確実に広がってるよねえっ！」

「オリハラ イザヤがみいちゃんのモノになるまで、あとどれくらいかかるかなあ？」

「まあ、急がなくなつてオリハラ イザヤは、必ずみいちゃんのトコロにくるからねっ」

「それに、お人形さんともうちよつと遊んでみたいし」

「シシドキモン ユズルは、動いてくるのかなあ？」

「ふふふっ 楽しみだなあっ、楽しみだなあっ、楽しみだねえっ！！」

「みいちゃんの可愛い可愛いお人形さんたちは、遊び甲斐がありそうだなあっ！！」

「でも、もっと面白いことをしたいなあー」

「じゃないとさあ、」

『ファイナーレ  
最後が盛り上がらないよ?』

×04 目撃とお誘い

臨也が、笹川 彌霸禰と一緒に歩いていて、それも、手を繋ぎながら。

何かの見間違いだろうと思ったが、本当だった。

なんでだ。どうして臨也が、あの女と手を繋いでいる？ 俺と違って、繋いだことないのに。どうして、恋人でもないアイツの手を握っている？

ショックで、ショックで、その場に貼り付けられたみたいに、動けなくなった。

だんだん遠くなっていく、二人の後ろ姿。

俺は、それを見つめるしかできなかった。

なぜか、彌霸禰ちゃんに、食事に誘われた。

俺は、断ろうとした。しかし、彌霸禰ちゃんが話をどんどん進めていっちゃって、なぜか行くことになってしまった。

そして、今。俺、折原 臨也は、彌霸禰ちゃんと、手を繋ぎながら、そのレストランに向かっている。どうして、手を繋いでいるかって？ 俺だって知らないよ。彌霸禰ちゃんから、俺の手を握ってきたんだ。俺は、彌霸禰ちゃんの力に勝てなくて、それで、このまま、手を繋いでいるのだ。こんなところにシズちゃんが来たら、破局だね。確実に。どうかシズちゃんが、ここに現れませんかように！

「イザヤくん、ここだよ！」

「ん？」

考えていると、彌霸禰ちゃんが立ち止まって、言った。俺は、彌霸禰ちゃんが指をさしているほうを向く。

そこには、

「わ……………。デカイ……………」

「でしょう？ この料理、すっごくおいしいんだよ！！」

へラっとしながら言う彌霸禰ちゃん。どうしてそんなにへラへラできるんだろうか……。俺と彌霸禰ちゃんの前にある建物は、いかにも高級なレストランだ。なのに、どうして普通な顔をしているんだ、この子は……。もしかして、彌霸禰ちゃんって、ご令嬢？

「さっ、入る！ もう、予約はしてあるからっ」

「早っ！」

どうやら、彌霸禰ちゃんは、俺が断ることを考えていなかったようだ。

「……………ん？ つあ。彌霸禰ちゃん、お金は？」

「ああ、それなら、みいちゃんが奢るよ！」

奢る！？ こんな、いかにもセレブ御用達のレストランの料理を、18歳の女の子が、成人男子・社会人である俺に！？

「いや、でも、」

「いいの、いいのっ みいちゃんがイザヤくとこのお料理食べたくて、イザヤくんを連れてきたんだからっ！ イザヤくんは、気にしないで！ あ、予約した笹川です」

戸惑う俺に関わらず、彌霸禰ちゃんは、どんどん事を進めていく。

「イザヤくん、どうしたの？ 早く行こうよ」

「、あ、ごめん」

彌霸禰ちゃんに言われて、俺は足を上げた。

コイツは、正直言って、苦手だ。

なぜか、調子が狂ってしまう。シズちゃんもそうだけど、何を考えているかわからないから。先の行動が読めない。何を企んでいるかわからない。個人情報を集めようにも、その情報源が見つからない。だから、この彌霸禰という子には、あまり関わりたくない。

そう思いながら、俺は、目の前でおいしそうに料理を食べる少女を見つめた。

「んーっ！ 相変わらず、この料理はおいしいにやあっ ん？」

「イザヤくん、おいしくないの?」

「そんな俺に気づいて、彌霸彌ちゃんが心配そうに問うてくる。」

「いや、おいしいよ。でも、本当に、いいの? 奢ってなんかもらっちゃって」

「いいのいいの! お金なんて、パパにもらえばたくさんあるしっ!」

「パパ……? やっぱ、この子は、どこかの令嬢なんだな。そんな雰囲気は全く無いけど。上品そうじゃなさそうだし……。」

「……………そっか」

「うんっ。だから、気にしなくてもいいのっ! どんどん食べちゃって!」

それから、彌霸彌ちゃんは、俺にどんどん話しかけてきた。そのどれもが、シズちゃんと俺の関係とか、小学校のころのことなど、俺の過去を探ったりするような感じのものだった。自分の過去をペラペラ言っちゃうほど、俺は間抜けじゃない。適当な返事を返して、なんとか、俺の過去の事実を洩らさなかった。

「今日は、ありがとう、イザヤくんっ!」

「食事が終わって、時刻は午後3時過ぎ。俺と彌霸彌ちゃんは、駅に向かっていた。」

「いや、こちらこそ。奢ってもらっちゃって、悪かったよ」

「いいってばあ。イザヤくんは、本当に、神経質だねっ!」

「ケラケラと笑う彌霸彌ちゃん。会計のときに、俺は驚いた。彌霸彌ちゃんの財布に入っていた金額が、平民には有り得ない額だったからだ。」

「あ、そういえばね、イザヤくん」

「ん?」

「みいちゃんたちがレストランに行く途中に、シズオくんを見かけたよ?」

「……………え……………?」

彌霸禰ちゃんみはねの言葉に、俺は、それしか言えなくなった。

シズちゃんが、彌霸禰ちゃんみはねと手を繋いでる俺の姿を、見た。

シズちゃんは、俺たちを見かけてしまった。

シズちゃんに、見られてしまった。

「シズオくんは、イザヤくんとお友達なのに、どうして、声をかけてくれなかったのかなあ？」

彌霸禰ちゃんみはねが、首を傾げる。

そんなの、決まってる。

俺が彌霸禰ちゃんみはねと手を繋いでいるのを見て、ショックだったんだ。

それで、その場から動けなかったんだ。

ああ、どうして俺は、彌霸禰ちゃんみはねを拒絶しなかったんだ。

シズちゃんは、俺に捨てられたと思っただろう。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう

「シズちゃん……………」

「あつ、イザヤくん!？」

俺は、シズちゃんに会いに行くために、走り出した。

そのときに、彌霸禰ちゃんみはねが笑っている気がした。

「あはははっ!—!」

「楽しいなあ、楽しいなあ、楽しいなあっ!—!—!」

「オリハラ イザヤとみいちゃんが手を繋いでるところを見たお人

形さんのお顔、とつてもとつても可愛かったなあっ!!」

「シヨックだっただろうなーっ」

「なんせ、今まで自分に愛を囁いていた人が、自分とは別の人と、しかも、女の子と手を繋いでるんだから!!」

「お人形さんは、どうなっちゃってるのかなあ？」

「ふふふっ」

「お人形さんのこと言ったときのオリハラ イザヤの顔も、すっごくキレイだったなあっ!!」

「あれがみいちゃんのものになるなんて、考えただけで嬉しくなつて、ゾクゾクしちゃう」

「シシドキモン ユズルは、いつになったら動いてくれるのかなあ？」

「みいちゃんもそろそろ、あの二人だけじゃあ、つまんなくなつてきちゃったあ」

「みんなで、もっとみいちゃんを楽しませてよ？」

『アナタたちは、みいちゃんの玩具おもちゃなんだから』

×04 目撃とお誘い（後書き）

楽しいなあっ、楽しいなあっ、楽しいなあっ！！ ああ、もう、彌<sup>み</sup>霸<sup>は</sup>彌<sup>な</sup>ちゃんのテンションが伝染しちゃうよ。いや、でも、この話は、すごい書いてて楽しい。こういう話、書くの好きだ。結末を書くのがすごい楽しみだ。なので、最後までみなさんも付き合ってください！ よろしくお願いしまーすっ！

×05 切れた糸

化け物みたいな俺を、誰が愛するといふのだろう。

そうさ。最初から、俺は誰からも愛されない運命なんだ。

だから、臨也も、俺を愛してなんかいなかったんだ。

ただ、暇つぶしとして遊んでいたんだ。

きつと、もう、俺に厭きてしまったんだろう。

彌霸禰みはねの言うとおりかもしれない。

それに、最初から無理だったんだ。

男同士で付き合うなんて。

やっぱり臨也は、女のほうが良かったんだ。

臨也と彌霸禰みはねが手を繋いでいるところを見た俺。俺は、あの後数十分、そこから動けなかった。そこに、いつものように、チンピラどもが絡んできて、今俺は、そいつらをブチのめしている。

こんなことを思いながら。

今日は、それで落ち込んでいるせいで、いつもの調子がでなかった。まあ、全員倒したのだから。

やることもなくなった。今日は、仕事がない。暇だ。

ぼうつとそんなことを考えていると、また、彌霸禰みはねの言葉が、俺の頭の中で木霊した。



『そのうちアナタに厭きてしまつて、アナタを愛することを已める  
かもしれない』

そのことを考えるだけで、苦しくなる。

それと同時に、どんどん、たくさんの疑問が生まれていく。

『俺は、愛されていなかったのだろうか』

『俺は、臨也のオモチャだったのだろうか』

『愛つて、なんだ？』

わからなくなつてきた。

愛が、何か。

俺と臨也は、どんな関係なのか。

俺は今、どこにいるのだろうか。

俺は、何がしたいのだろうか。

俺つて、なんなのだろうか。

わからない、わからない、わからない、わからない。

「いたつ、シズちゃん!!」

「!?!」

俺が混乱してきていると、そこに臨也が現れた。

一番会いたくなかつたヤツ。

どうして、ここに来た。

池袋には二度と来るなつて言つてんだろ。

「シズちゃん、ごめん! アレ、見たんでしょ!?! 違つんだ!

アレは、彌みはね霸は禰ねちゃんが」

「黙れ！」

「っ、！」

臨也の言葉が聞きたくなくて、俺は、臨也の言葉を遮った。

「シズちゃ」

「黙れって言ってるだろ！！」

「聞きたくない。」

「シズ」

「聞きたくない。」

「黙れよ……………」

「聞きたくない。」

「シ」

「お前の話なんて、聞きたくないんだよ！！」

「聞きたくないんだ。」

「言い訳じみた話は、聞きたくない。」

俺が聞きたいのは、臨也が俺を愛してるか、愛してないか。それだけなんだよ。どうして彌みはね霸は禰ねと手を繋いでたかなんて、いいんだ。そんなのは、後で。

「そう言いたいのに。」

「そう伝えたいのに。」

出てくる言葉は、臨也を傷つけるようなものばかりで。

俺は今、何がしたいんだよ。

「ねえ、シズちゃん」

「うるせえっ！！ テメエは、どうせっ、俺を愛してなんかいなかったんだろ！！ 俺で遊んでただけなんだろ！！ やっぱり、男よ  
り女のほうがいいんだろ！？」

「今までの愛は、全部、全部全部嘘だったんだろ！！！！」

誰もいない路地裏に、俺の声が反響した。

目の前には、眉間に思いつきり皺を寄せている臨也。

「そういう風に、シズちゃんは思ってたんだ」

数秒の沈黙の後、臨也が口を開いた。

その声には、怒りが入り混じっている。

「シズちゃんは、俺の愛を、そういう風に思ってたんだね」

「い、いざ」

「いいよ、もう。そんな風に思ってるなら、俺は、シズちゃんのことを愛するのを已めるよ」

「っ、」

「じゃあね」

そう言い残して、臨也は、行ってしまった。

何してんだ、俺。

自分から、愛を手放した。

自分から、愛していた人を捨てた。

捨てられたくない、散々駄々をこねていたのに。自分から。

「捨てられちゃったね、シズオくん」

「!?!」

泣きそうになっているところに、聞き慣れた声が出た。

顔を上げると、そこにいるのは、彌みはね霸はね禰。

「な、んで……。ここに、いるん、だ………」

「イザヤくんを追いかけてきたんだよ。さっきのも、全部見てたよ」

その声と表情は、とても楽しそうだった。

「シズオくんがあんなことを言ったからでしょー？ イザヤくんは、シズオくんのことを、愛していたのに」

「可哀想なイザヤくん。愛していた人に、あんなこと言われちゃつて。シズオくんは、サイテイだねえ？」

「ふふふっ　じゃあ、みいちゃんがイザヤくんを愛してあげよう

じゃあね、シズオくん！」

それは、まるで、オモチャで遊ぶ子供のようだった。

「哀れな子羊ちゃん」

「今日の夕飯はどうしよっかなあー。そういえば、この前エミリがくれたフライパン、あれ、高機能って言ってたっけ？ じゃあ、それを使ってハンバーグでも……………、静雄？」

夕飯のことを考えていたら、横切った路地裏に、静雄の姿が見えた気がして、一回戻って、確認してみる。  
すると、そこには。

「ゆ、ずる……………っ!!」

「!?!」

泣きじゃくっている静雄がいた。

「なっ、どうしたの!? 何があったの!?」

僕は慌てて静雄に駆け寄って、声をかける。一体、静雄に何があったのだろう。静雄が泣くなんて、非常に珍しい。

「う、……………つく、いざやが……………!!」

「臨也? ま、まあ、とにかく、僕の家に行こう! こじじゃあ、

人も通るし! ね!」

「……………うっ、」

なんとか静雄を説得して、僕は家に、急いで向かったのだった。

「キャハハハハっ」

「最高だったなあっ!」

「すごい修羅場だったよねえっ!」

「これで、あの二人の縁は、切れたも同然っ」

「みいちゃんは、オリハラ イザヤを手に入れることができる!」

「でも、まだ油断できないなあー」

「シンドキモン ユズルもいるし……………」

「アイツ、絶対に邪魔してくるなあー」

「どうすれば、アイツを潰せるかなあ？」

「あ、そうだ！」

「パパに始末してもらおうっ」

「みいちゃんの邪魔をする奴は、消さないかね」

「じゃないと、楽しくなくなっちゃうもん」

「お人形さんは、これからどうなっちゃうのかなあ？」

「狂って、壊れちゃうのかなあ？」

「楽しみだなあっ」

『みんなで狂っちゃえば、もっと楽しいんだろっけどなあ』

×05 切れた糸（後書き）

あーははははははり。絶賛迷走中あははは。おかしくなってきたやつ  
たよー。んー。知恵熱がでそうだけ！

×06 人形の糸を握るのは

夕飯のことを考えていたら、静雄に会った。静雄は、なぜか路地裏で泣きじゃくっていた。そんな静雄を、僕、穴戸鬼門ししどきもん 袖留ゆずりは、僕の家に来てもらうため、なんとか説得した。で、現在、静雄は、僕の家のリビングにあるソファに横になっている。おそらく、泣き疲れたのだろう。ぐっすりと眠っていて、起きる気配が全くない。どうして泣いていたか、くわしい理由は知らないけど、きつと臨也が絡んでいるのだろう。家に帰る途中も、臨也がどーたらこーたら言っていた。

「はー……………」  
僕も疲れた。静雄をあやすのときに。というか、慰めるのに。一体、静雄に何があったのだろう。

そう思いながら、僕は静雄を見つめる。  
静雄が泣くのをみたのは、何年ぶりだろう。たぶん、僕が見たのは、高1のとき以来だ。でも、そのときは、こんなに泣きじゃくるほどではなかった。

静雄が起きたら、くわしい事情を聞こう。そのときも、泣くのかなあ……………。

とにかく、今は、『これ』に専念しないと……………。

今僕は、笹川ささかわ 彌霸みはね彌みについて、調べている。臨也も、笹川ささかわ 彌み 彌みの個人情報を入手しようと、頑張っているのだろう。しかし、臨也が使う経路じゃあ、笹川 彌み 彌みの情報は、見つからないだろう。僕が使っている経路は、店の仲間と仁じんさんに教えてもらった、法に触れているものだからだ。いや、臨也の情報入手の仕方だつて、十分犯罪だけだ。僕のは、また少し違うんだよ、臨也のは。

調べていて、彌み 彌みちゃんみはねは凄みい子ねだったことがわかって、衝撃を受けた。なんと、彌み 彌みちゃんみはねは、世界トップ企業である『Sakawa』の創立者の、跡取りだったのだ。

つまりは、ご令嬢なのだ。学校での成績も良く、学力は世界でもトップ。大学も、海外の名門大学に行く予定だそう。それを知って、最初に思うことは、決まっている。

どうしてそんな子が、ここでほっつき歩いてるんだ？

跡取りなら、事業の勉強とか、色々することがあるだろう。なのに、それにかまわず、どうして池袋なんていうところで遊んでいるんだ。たとえ勉強ができたとしても、令嬢がこんな所にいちやあ駄目だろう。

そんなことを、あの企業の社長兼彌霸禰みはねの父親が、許すはずが無い。笹川さんとは、一度、色々あって、知人なのだ。笹川さんの家は、世田谷の住宅地だ。彌霸禰みはねちゃんもそこに住んでるみたいだから、そこから池袋に来ていることになる。そこから池袋に来るってなると、首都高速中央環状線使っても、26分ぐらいはかかるだろう。笹川さんは、どうして怒らないのだろうか。いや。怒れないのかもしれない。最近、『Sasakawa』は一段と忙しいらしいから、家に帰っている暇もないのだろう。奥さんは、病院に入院してるそう。だから、誰も怒る人がいないのか。

「んー……………困ったなあ」

これ以上、彌霸禰みはねちゃんを放っておくわけにはいかない。暴れられても困る。かといって、笹川さんに電話はできない。いや、僕がかまわないんだけど、彌霸禰みはねちゃんが怒られるのは、ちょっと可哀想な気がするし……………。その後がまた面倒臭いし。

「はあ……………。どうしよ……………」

「……………ん……………」

「あ……………」

溜息を吐いたところで、静雄が起きた。

「静雄、起きたね。体調は、悪くない？」

「……………気分が最悪だ……………」



散々泣きじゃくったせいで、静雄の声は、少し噎れていた。水とか、もってきたほうがいいのかも。

「大丈夫？」

「……………ああ。ワリイ」

ボロボロにやつれた、静雄の顔。その顔は、酷く疲れきっていて、傷ついていた。

「あんな所で、何してたの？」

僕は、なるべく優しく、静雄に聞いた。きっと、本人も、あんまり言いたくないだろうから。無理して言わなくてもいい、という意味もこめて。

静雄は、少しの間、黙ったままだった。俯いて、さっきの出来事を振り返っているようだ。

「言いたくないなら、言わなくてもいいよ。強制的に聞き出すつもりはないから」

「……………」

僕がそう言うと、静雄は、ゆっくりと、辛そうに口を開いた。

「……………臨也と、喧嘩したんだ……」

そんなの、いつものことだろう。そう言いそうになったけど、今日は、見るからにいつもの喧嘩とは違うから、僕は、黙って聞くことにした。

「臨也は、悪くないんだ……………。最初、喧嘩になるようなこと言ったのは、俺のほうだから。それに俺は、臨也に酷いこと、たくさん言っちゃった」

話していくにつれ、静雄の声が、涙でぐくもっていく。

「俺、臨也に、俺への愛なんて、嘘だったんだろうって、言っちゃったんだ……………。そんなこと、違うってわかってんだ……………。臨也は、ちゃんと俺のこと愛してるって、知ってたんだ……………。でも、彌みはな霸はな禰ねの奴に言われたことが、どうしても、胸につつかかって、」

そう言ったところで、とうとう、静雄は泣き出した。声を押し殺して。

「……………彌みはね霸は禰ねちゃん？」

どうして、静雄と臨也の話に、彌みはね霸は禰ねちゃんが入ってくるのだろうか。いや、大方予想はつく。臨也と静雄を別れさせたいのだから。でも、静雄は、彌みはね霸は禰ねちゃんに、そんなに酷いことを言われたのだからか。

「静雄、どんなことを言われたの？」

僕は、聞いてみた。

「……………臨也は、誰からも愛されない俺に興味湧いて遊んでいるだけって……………」

「……………は？」

僕は、静雄の言葉に絶句した。

臨也が静雄で遊んでるだけ……………？

彌みはね霸は禰ねちゃんは、何を考えているのだろう。いくらなんでも、それは言い過ぎだ。静雄だって、化け物みたいな力があるけど、人間としての人格は、しつかりある。そんなこと言えば、愛されない人間の気持ちは、すぐに揺らいでしまう。

愛されない人間は、愛しかたも知らない。

故に、愛がなんたるかが、わかっていない。

自分の愛が、本物なのか。自分への愛は、本物なのか、不安で、不安でたまらない。

彌みはね霸は禰ねちゃんは、それを上手く利用して、静雄と臨也を別れさせようとしてるんだ……………。

「それは、しょうがないね……………。そんなこと言われたら、静雄は、不安になるよね。その相手が、臨也だし。信用は、できないかも」  
なんてっただって、臨也は嘘の神様みたいな奴だしね。

アイツの愛情は、歪んでいるし。

「でもさあ、静雄」

僕は、静雄の横に腰をかけた。

「確かに、臨也は嘘の塊みたいな奴だよ。アイツの体は、嘘と人への歪んだ愛情で形成されてるようなものだしね。でも、アイツ、普

段はあんなだけど、芯っていうか、根っていうか、そこは、誰よりも真っ直ぐで、強くて綺麗だと思う」

昔から、臨也はそうだ。すぐに折れない。粘り強い。情報屋だった、中途半端な気持ちでやっていたら、成り立たない。そういうところに、臨也の良い面は出てると思う。人への歪んだ愛情を貫けるってところもね。

「あー、でも、基本アイツは歪んでるから。行動だって、変なことばかりだし、嘘っていう泥で汚れてる汚い奴だよ。そのせいで、アイツの芯の部分が見えないだけなんだよ」

ズル賢くて、昔っから、性格も愛情も歪んでいる臨也。静雄への愛も、男同士って時点で、言いたくないけど矛盾してしまっている。でも、臨也は、どんな奴より芯が通っていて、強い奴。

「だから、静雄への愛も、嘘じゃないと思うよ、僕は。少しぐらい、臨也を信用してみたらいいんじゃないかな、静雄」

僕の言葉に、静雄は、少し固まって、それから、笑った。  
「袖留、お前、さっきから聞いてれば、半分くらい臨也けな貶してるぞ」  
「だって、ああいう表現しか、ピッタリあてはまるものがないから」

「シシドキモン ヌズルが動き始めちゃった」

「アイツが動くと、すごい厄介だなあ……」

「もう。パパはいつになったら、アイツを消してくれるのかなあ？」

「早くしてくれないと、みいちゃんおもちゃの玩具がなくなっちゃうよ」

「でも、ま、オリハラ イザヤは、ヘイワジマ シズオとは縁を切るうとしてるし」

「にははははっ」

「もう少しだなあっ！」

「もう少して、オリハラ イザヤはみいちゃんだけの玩具おもちゃになるん

「だなあっ！！！」

「楽しいなあっ、楽しいなあっ！！！」

「オリハラ イザヤの傷ついた顔、キレイだったなあっ」

「とってもとってもとーっても！」

「ふふふっ」

「後はパパがシドキモン ユズルを消してくれれば、みいちゃん  
の完全勝利だよ！！！」

「早く動いてくれないかなあ」

「お人形さんの糸を持つてるのは、シドキモン ユズルだからな  
あ」

「アイツのせいで、お人形さんが狂ってくれないんだよ」

「まあ、糸なんて、鋏を使えば簡単に切れちゃうんだけどね」

『<sup>ファイナーレ</sup>最後になるころには、みんなはちゃんと動いてくれるのかなあ』

シズちゃんは、俺の愛を、嘘だと思っていたようだ。

そのことを知ったときは、シヨックで、シヨックで、泣きそうになった。それと同時に湧いてくるのは、怒りという感情で。

そのときの俺は、『悲しみ』より『怒り』という感情のほうが勝っていた。

「シズちゃんなんか、知らないよ……………」

俺は、あの後、すぐにその場を立ち去った。シズちゃんが俺の愛を嘘と言ってきて、そういう捉え方をされていたことに、俺はシヨックだった。

でも今になって、俺は思う。

シズちゃんは、誰からも愛してもらえなかったんだ。あの力のせいで。

だから、愛なんてものを知っているはずがないんだ。

シズちゃんがああ言ったのも、無理はない。

普段、嘘で塗<sup>まみ</sup>れている俺のせいでもある。シズちゃんは、俺に愛されているのか、そんな不安が、抑えきれなくなってしまったのだらう。

「はあ……………」

俺は、なんて馬鹿なんだろう。一時的な感情で、愛している人を傷つけてしまった。

いや。

本当の愛があるなら、あんなことは言わなかっただらう。

俺が、シズちゃんにあんなことを言ってしまったのは、

『俺の愛が、歪んでいるから』

これしかない。

俺は、歪んだ愛しかたしかできない人間だ。純粹な愛しかたなんて、知らない。いや、これはもう、愛なんかじゃない。

エゴだ。

シズちゃんは、俺のことを嫌いになっただろう。

シズちゃんは、俺に嫌われたと思っただろう。

シズちゃんは、泣いているだろう。

シズちゃん、ねえ、シズちゃん。

「俺のこと、嫌いにならないでよ……………」

こんなのは、エゴなんだ。

あんなこと言って、シズちゃんが俺を嫌いにならないわけがないのに。俺は、シズちゃんを捨ててしまったんだ。一時的な感情で。

本当なら、愛しているものを、こんなに容易く手放せるわけがないのだから。

どうして俺は、あんなことをしてしまったのだから。

これじゃあ、シズちゃんの言うとおり、俺の愛は嘘になってしまっただろう。

そう考えていると。

「イザヤくんっ!!」

アイツの声がした。

笹川 彌霸みはね。

「急にどっか行っちゃったから、ビックリしたよーっ！ どうしたの？」

心なしか、彌霸みはねちゃんの顔は、とても楽しそうだ。

……………コイツ。

「彌霸みはねちゃん、シズちゃんと俺が別れるように、仕込んでたね？」

「あっ、バレちゃったあ？ そうだよ!!」

どうして俺は、今まで気づかなかっただろう。思えば、コイツが俺らの前に現れてから、何かがおかしくなっていたんだ。

あの時の表情も、そうだったのか。

シズちゃんと俺が別れるような行動をしてたんだ。

コイツは最初から、これが目的だったんだ。

「あははっ　みいちゃんね、イザヤくんのことが、大好きなの！  
！　イザヤくんの過去も、イザヤくんの好きなことも、仕事も、み  
いちゃんは全部知ってるんだよ！」

何も言えなくなっている俺に、彌みはね覇ぱ禰ねちゃんが語ってくる。

「大好きで、大好きで、大好きなの！！　でもね、イザヤくんには  
恋人がいたんだよ。シズオくんね。みいちゃん、どうしても、どー  
っしても、イザヤくんと付き合いたいんだ。だから、イザヤくんと  
シズオくんが別れるように、みいちゃん、少しずつ悪戯してったん  
だ　今日、この日のためにね」

彌みはね覇ぱ禰ねちゃんが、つらつらと言葉を並べていくのを、俺は黙って  
聞いている。

「みいちゃんのお人形さん、今日が一番可愛い顔だったなあっ！  
とつてもとつても辛そうなお顔！　みいちゃん、あの顔見て、すっ  
ごく嬉しくなっちゃった　今回のお人形さんは、みいちゃんが遊  
んできた中でも、一番面白いよ！　可愛くって、可愛くって、だか  
らもつと遊んであげたいんだけどね？　みいちゃんが欲しいのは、  
イザヤくんだから、いいの。それに、お人形さんは、もう壊れちゃ  
いそうだし、色々なところが狂っちゃったから、いらなくなっちゃ  
ったの。そのお人形さんの糸を引くお兄さんも、もうすぐ、みいち  
やんのペットに消されちゃうしねっ！」

お人形さんは、きつと、シズちゃんのことを指しているのだろう。  
俺がわからないのは、お人形さんの糸を引くお兄さんだった。よく  
考えてみる。静雄を操っている人、とか、そういう意味なのだろう  
か？

……………　っ、まさか！！

俺は慌てて、コートのポケットから携帯を取り出して、ある人物  
に連絡を取ろうとした。

しかし

「てやあつ!!」

「!」

カシャンッ

彌霸禰ちゃんみはねが俺の携帯に石を投げつけて、俺の手から携帯が落ちた。コイツ、連絡取らせない気だ……。

「別に、連絡してもいいんだけどね？ たぶん、出ないと思うよ？

ユズルくんは」

だって、もう彼はみいちゃんのペットたちに襲われて、食べられちゃってるもの

彌霸禰みはねが、さつきとは比べ物にならないくらい楽しそうに言った。

なんだ、コイツ……。

「もしかして、シズちゃんがああいう風に言うように仕向けたのも、君？」

「そっだよ あんなに上手くいくなんで、みいちゃん、ビックリしちゃった!!」

「……俺は、人間として君を見て、それで愛されると捉えるならとても喜べるけど……。恋人を傷つける人には、愛されたくないし、愛したくもないよ」

俺はそう言い放つて、懐からサバイバルナイフを出す。

それを見ても、彌霸禰みはねは動じなかった。

「イザヤくんの本性が出たあつ」

そう言つて、ニコニコと笑った。

と思つたら。

「イザヤくん、みいちゃんをあんまり甘く見ないでね」

「っ!?!?」

彌霸禰みはねは俺の傍に近寄ってきて、ナイフを一瞬にして、俺から取り上げた。そして、それを俺の首に押し付ける。彌霸禰みはねが押してきたせいで、俺は後ろに体重がかかって、倒れた。俺の上に彌霸禰みはねが乗っかっている状態になった。

「キヤハハっ ビックリしたでしょー!! みいちゃん、ごっい



うことできるんだよ？」

彌霸禰ちゃんみはねが、楽しそうに言う。

俺は、どうにもできなかった。彌霸禰みはねの力が強くて、起き上がるにも、起き上がれない。

「さあつ、イザヤくん！ 愛し合いましょ！！ みいちゃんと、二人で！！」

そう言っつて、彌霸禰みはねは俺の首に、またナイフを近づけた。

「あははは！！ イザヤくんのこと、みいちゃん、大好きだよ！！」  
少女は、またナイフを近づける。

「全部、ゼーんぶ愛してあげる！！」

また、近づける。もう、俺が動けば首が切れるところまで、ナイフは突きつけられている。

「こ、んなの、愛、じゃな、い……、！！」

俺は、乗られている重みと、ナイフの恐怖で出そうにない声を、肺から搾り出すようにして発した。

俺の言葉を聞いた彌霸禰みはねは、歪んだ笑顔を、また歪ませて言った。  
「知ってるよ。こんなの、愛じゃないことなんて。でも、みいちゃんは愛しかたがわからないからね、自分で考えて、そのやりかたで愛そうつて決めたんだ。だから、いくら歪んでようが、傍から見て愛じゃなかるうが、これは、みいちゃんの愛なの。だから、イザヤくん」

「みいちゃんの愛を、受け止めてよ」

そう言い放つて、彌霸禰みはねは、俺の首を切ろうとした。

ああ、俺、ここで死ぬのか。

そう思ったとき。

「何してんだチビが」

「キヤッ!?!」

そんな声にして、俺の体の上から、スッと、重みが消えた。

「何してんだチビが」

「キヤっ!?!」

18歳の女の子、笹川ささかわ 彌みはね霸はね禰ねに殺されそうになっているところに、聞き慣れない声があった。それと同時に、俺の体の上にあった重みが消える。

「ちよつと、放しなさいよ!! 降ろしてよおっ!!」

起き上がると、目の前には暴れる彌みはね霸はね禰ねと、彌みはね霸はね禰ねを片手で持ち上げている男。

誰だ……。

「断るな。お前を放せば、また厄介なことをするだろうからな。今日は一日このままだ」

「、!?!? ちよつ、ふざけないでよ!! 服の襟が伸びちやうでしよ! てか、アンタ誰よ!!」

男のビツクリ発言に、彌みはね霸はね禰ねが冗談じゃないと反抗する。今の発言には、俺も驚いた。

「というか、本当に、コイツは誰だろう。少なくとも、俺の知り合いいではない。」

「あの……」

「ん? ああ、大丈夫かお前」

声をかけようとしたところで、やっと、男はこちらに気づいた。

「大丈夫です……」

男をよく見てみる。身長は、190センチくらいあるであろう高さ。そのわりには、そんなにいか敵かたつつい感じはなくて、均整のとれた体つきのような。顔立ちも、かなり良い。黒縁の眼鏡をかけている。髪は、前髪の一部だけをバックにしている、茶色と黒が混ざった色だ。

「どれ、ちよつと来い。よく診てやるから」

観察している俺に、男は空いているほうの手で、手招きした。俺は、おとなしくそちらに行く。

「っと、手とかには、怪我は無さそうだな。首はーっと……………」。  
…ん？ あ、微妙に切れてるじゃんか……………」

そう言いながら、男は顔を顰める。そういえば、なんか少し痛い気がする…。

「おい、小娘。テメエな、ザツクリは切れてなかったけど、少し間違えてたら、コイツ死んでたか、重症だったぞ」

「…………… フンっ。みいちゃん知らない」

「…………… あ？」

男に言われて、彌霸禰が拗ねた。それを見た男は、低い声を出す。「なーにが知らないだつてえ？ え？ 譲ちゃんよお。この傷テメエがつけたもんだろっが。違うか？」

「いひゃいひゃいひゃい！！！！ はなひへほ！！ ほおよ、みひひゃんがやつはほほ！！！！」

どうやら男はキレたようだ。思いつきり彌霸禰の頬を抓っている。かなり痛いようで、彌霸禰はすぐに頭を下げた。

な、なんだコイツ……………！！

「ったく。オレが来るのがもう少し遅かったら、手遅れだったよ…

……………」

「あ、あの、あなたは何者なんでしょうか……………？」

俺は、溜息を吐いている男に聞く。

「ああ。そういえば、まだ自己紹介してなかったな。スマン。オレは、伊柁ノ崎 仁だ。袖留から連絡があつてここに来た。よろしくな」

「袖留から？」

どうして仁さんが、袖留を知っているのだろう。知り合いなのだろうか？

「オレはな、袖留の育て親なんだよ」

疑問に思ったことに、仁さんは言う。

育て親？ ということは、柚留の実の親じゃないのか。  
そんなこと思っているよ。

「仁さん！」

柚留の声がした。

「柚留！」

「おう、柚留。お前にしては遅かったじゃんかよ」

柚留の姿を見た仁さんが、そんなことを言う。なんの話だ。

「まあ。一斉に襲われるのは慣れてるけど、今回は、ちょっとやり方が違ったんですよ。少しずつ何処かに隠れていて、厄介でしたよ」

一斉に襲われるのに慣れてる……？ 一体柚留は何者なのだろうか。今のを聞いて、俺は思った。

「そうか。ソイツらな、お前の予想通り、この小娘の手下だった」

仁さんが、柚留の前に彌霸禰みはねを突き出す。すると柚留は、やっぱり、という顔をした。

「あ、臨也。大丈夫？ 大きな怪我とか、無い？」

柚留が、やっと俺に気づいて、声をかけてきてくれた。

「うん。首のところ、少しだけ切れただけだったよ。仁さんと柚留のおかげで」

くわしくはわからないけど、だいたい、柚留がやってくれたんだろ。今まで何度か殺されかけたけど、今回のが一番危なかった。

「そっか。大きな傷じゃなくてよかったよ」

そう言っつて、柚留はいつも通り笑った。

そして、彌霸禰みはねのほうに向き直る。

俺は、驚いた。

柚留の眼が、俺が見たことのない色に変わったからだ。その眼は、普段の柚留じゃあ考えられないくらい、冷徹だった。

「彌霸禰ちゃん。僕は、知ってるよ。君は、『S a s a k a w a』の社長の娘だろう」

それを聞いた瞬間、俺は、耳を疑った。どうして、そんなご令嬢が、こんなところにいるんだ？

彌霸禰ちゃんは、その言葉に、顔を歪ませた。そして、苦々しげに、「そうよ」と呟いた。

「なんで、君はここにいるんだい？」

「……………アナタたちには関係ないでしょ」

「あるよ」

彌霸禰の言葉に、柚留は強く言い切った。

「君のお父さん……………いや。正しく言えば、義父とは、知り合いだからね」

そう言う柚留に、彌霸禰ちゃんは目を丸くした。俺も驚いている。「なんで、私のお父さんが、本当のお父さんじゃないって知ってるの」

「ちょっと調べさせてもらったよ。それに、さっきも言ったけど、君の義父とは知り合いだから」

調べたつて……………彌霸禰の情報は、俺ですら手に入れることができなかったのに、どうやって柚留は調べたんだ？

「どうして、池袋なんて来てるのかな」

「……………」

彌霸禰は、仁さんに持ち上げられたまま、俯いた。それから少し経って、勘弁したのか、口を開いた。

「……………つまらなかつたんだよ。誰も、私の相手をしてくれないから。お義父さんは仕事で忙しいし、お母さんは、病院だし……………。家にいる執事やメイドは、私に自然に接してくれない。学校でも、私は友達がいらない。あんな所、全然楽しくない。だから、私ね、本当のお父さんに、その事言ったの。そうしたら、お金をたくさんくれて、『楽しいトコロに行つてきなさい』って」

彌霸禰は、吐き捨てるように言った。その表情は、悲しそうで。

「彌霸禰ちゃんが言ってたパパっていうのは、血の繋がりがあろほうの父親なんだね？」

柚留が言つと、彌霸禰は頷いた。

「それで、池袋に来て、臨也を見つけて、彼氏にしたかった、と。それで、静雄と臨也を喧嘩させて、別れるようにしたんだ」

「……………そうよ」

柚留が話をまとめると、彌霸禰は認めた。

そうだったのか。彌霸禰は、かまってもらえなくて、寂しかったんだ。だから、こんなことをしたのか。

「寂しくてやったんだろうけど、殺人をしようとしたのは、いけないね」

「……………っ、どうせ、警察に連絡するんでしょ……………っ」

柚留の言葉に、彌霸禰は涙声で言った。まあ、そうなれば、もう18だし、色々と厄介だろう。

「ここは、常識人な柚留なら、連絡は絶対に……………」

「しないよ」

「「へっ?」「」」

柚留が言ったことに、彌霸禰と俺は、思わず間抜けな声を出してしまった。

「なんでしないの、柚留!」

「なんでって、だって、めんどくさいし。警察に連絡したら、僕も仁さんも巻き込まれるじゃん。そんなめんどうなこと、自分からやるわけないよ」

……………柚留は、こういうところの常識はないんだ……………。ふっつーの常識はあるのに、こういうところが抜けていたら、意味がないと思う。

そういうえば、仁さんはどう思うんだろうか。やっぱり柚留と同じ意見……………

「おい、柚留。連絡はしとけ」

「じゃなかった!! 仁さんは常識人だった!!」

「オレは警察が来る前に逃げれば、なんとかなるんだ。お前が巻き込まれても、オレは困らないからな」

「違った!! 仁さんの思考のほうが悪ろしかった!!」

何この人たち!!

「何言ってるんですか、仁さん。行くときはみんな一緒ですよ」  
「袖留。その発言は、非常に恐いよ。俺達、死ぬみたいじゃないんだらう。泣きたくなってきた。」

「死なないけど、死ぬほど面倒だね、警察なんて」  
俺の袖留のイメージが、だんだん崩れていく……。

「なーんて。ごめんごめん、ちょっとふざけちゃった」

俺が絶望しかけていると、袖留がそんなことを言った。ちよっとじゃないよ。さっきのは。

「じゃ、じゃあ、やっぱり連絡するの……?」

彌みはね霸はね禰ねが聞く。

「いや。それは、しないよ。めんどうだから」

「なんだよ、お前!!」

俺は、おもわずそんなことを言ってしまった。

「警察にはね。でも、君の義父さんには、させてもらつよ。重要なことだから」

そう言う袖留。

…やっぱり袖留は、しっかり者なんだな。

こうして、俺は殺されずに済み、この事件は、幕を閉じたのだった。



×08 事実（後書き）

新キャラの仁さんが出てきました。オリキャラばっか出してスンマセン。反省しています。

幕はまだ閉じきっていなかったああああああっ！！！！

どうしようどうしようどうしよう！！！！

柚留ゆずると仁さんが彌霸みはね彌みちゃんを連れて行った後、俺は家に帰ってきた。それで、さっき気づいたのだ。

まだシズちゃんに謝ってないじゃん。

彌霸みはね彌みちゃんに殺されなかったことに安心して、シズちゃんと喧嘩したことをすっかり忘れていた俺。

シズちゃんにあんなこと言っちゃったんだから、謝らないと、本当に別れることになっちゃう！！

全く、彌霸みはね彌みちゃんも余計なことをしてくれたもんだ！

俺はそう思ったけど、なぜか、彌霸みはね彌みちゃんに嫌がらせをしようなんて気にはならなかった。それは、たぶん、彼女のあんな表情を見てしまったからだろう。いつもなら、人の感情なんて気にせず、自分に何かやってきた奴には容赦しないでいろいろなことを仕掛けるのだが。今回は、そんな気分にならなかった。

今はそれより、シズちゃんだ！！

どうしよう。シズちゃんにあんなこと言っちゃって。あんなこと言ってきたシズちゃんも悪いけど、俺のほうが、何万倍もシズちゃんより悪い！ いや、元凶は彌霸みはね彌みちゃんなんだけども。

愛するのを已める、なんて言っちゃったけど、そんなの、俺が無理だ。そのことにシズちゃんが気づいてくれれば、謝るときにも少しは楽なんだけど……………。シズちゃんがそんなことに気づくはずがない。

それに、こんな風に楽をしようなんて考えるのは、たぶん、しっかり反省していないせいだ。自分が楽をしようなんて。まあ、人間なんて、所詮そんな生き物なんだけどね。自己中で、欲深い。どんな生き物よりも醜くて、どんな生き物より興味をそそられる。

自己中と言えば、愛もそうだ。

俺は、シズちゃんを愛している。それは、シズちゃんもそうかもしれない。今はよくわからないけど。でも、俺は喧嘩をしたときに「愛するのを已める」と言った。言ってしまった。こんな発言は、自己中以外のなにものでもない。愛なんかじゃない。エゴなんだ。だって、シズちゃんに告白したのは、俺からだ。なのに、シズちゃんのおんな言葉だけで、俺は、自分で手に入れたものを手放すようなことを言った。

付き合っつて、と言っつたのは、俺。

愛するのを已める、と言っつたのも、俺。

俺は言うまでもなく、自己中人間だ。誰よりも、何よりもね。でも、このことに関しては、自分でも、自己中すぎると思った。ああ、馬鹿な俺。

そんな俺を、シズちゃんは愛してくれてたのに。

「はあ……………。どうしよう……………」

俺はとりあえず、考えるのをやめて、今日は寝ることにした。

臨也にあんなことを言っつてしまった。

彌霸禰にあんなこと言われたから。俺が人を愛したことも愛されたこともないから。いくらなんでも、あんなのは言い過ぎだと、自分でも思う。

臨也の愛は、偽者なんかじゃないのに。嘘なんかじゃないのに。ちゃんと俺を愛してくれてた。俺はわかっていたのに。

彌霸禰の一言で揺らいでしまうこの気持ちは、愛なんかじゃない

んだ。

愛されているのか、不安だった。愛しかたがわからなかった。こんなのは、恐いから逃げるための言葉なんだ。

本当に臨也を愛していれば、こんなこと、関係ないのに。俺は、みんなが言つとおり、やっぱり馬鹿なんだと、改めて思う。

臨也に謝らないと。

悪かったのは、俺なんだから。まあ、喧嘩の元凶は彌霸禰みはねだが。

けど、彌霸禰みはねは、俺にまあ言っただけだ。俺が臨也に言わなければ、喧嘩にはならなかったはずだ。だから、俺からしっかり謝らないとでも臨也は、俺を愛するのを已めるって言つてたな……。あれは、もしかしたら本当かもしれない。臨也の顔がマジだったから……。いや、でも、別れることになっても、しっかり謝らないと。

俺は、今から泣きそうなのを堪えて、明日臨也に謝れるように、色々考え始めた。

池袋。

昨日と何一つ変わっていない、いつもどおりの街。

俺、折原 臨也は、ガッチガチに緊張して、冷や汗ダラダラで、ある人物を探していた。

平和島 静雄

いつもなら、思ってもいないのにバツタリ会うのに、今日という日に限って、彼の姿が見当たらない。どうしてなんだよ！……！

俺はイライラしてきて、そこら辺にあった壁に頭をぶつけ始めた。たくさんの人に見られてるけど、そんなの気にしない。自分のイライラを治めるための行動なんだから！

そんなとき。

「……………臨也……………」

耳に入ってくる、大好きな声。

振り向くと、そこには。

「……………シズちゃん……………っ!!」

探していた、平和島 静雄の姿があった。

「……………何してんだよ、お前……………」

喜ぶ俺に対して、シズちゃんはすごい引いた顔をしている。なんだよ。そんな顔しなくてもいいだろ。

「だって、臨也……………。壁に血が……………」

「……………あ……………」

二人の間にある沈黙を、パトカーのサイレンが引き裂いた。

「君は、本当に何がしたいんだい!？」

あれから数時間後。長い長い事情聴取の末、偶然警察署に来た柚留が、俺たちを助けてくれた。

「「ごめんなさい……………」」

「静雄はいいよ、謝らなくて! 臨也だよ、臨也!!」

俺と一緒に謝るシズちゃんに柚留が言う。

「壁に頭ぶついたりして……………! ほんつとに、なんなの!! おかげで、壁は真っ赤になっちゃうし、臨也の頭診せに病院にわざわざ行く破目になるし! 壁の赤色、落ちなかつたんだよ!?! どうしてくれんの!! 変な都市伝説とかできちゃうでしょ!?!」

「すみませんでした……………!!」

柚留コワイ……………。

「全く。今日はもういいよ。僕も用事があるし。それに、なんか重要なことの前みたいだったしね」

そう言いながら、柚留はちらつとシズちゃんを見る。すると、なぜか急に、俺とシズちゃんの間、変な空気が生まれる。

「はぁ……………。頭痛いよ……………」

袖留は、こちらの空気に気づいているのに、そう呟いて行ってしまう。

途端、変な空気がどんどん膨らんでいく。

どうしよう………！ さっきは、なんか変なことだったから気にしなかったけど、今になって、緊張してきた……っ。

シズちゃんも、俺と同じことを考えているのだろう。下を向いている。

言にくい………。けど、ずっとこのまま、っていうわけにはいかないんだ……。言え、俺……っ！！

「し、シズちゃ」

「臨也……！」

俺は覚悟して口を開いた。が、その声は、シズちゃんの見事にかぶってしまった。その上、シズちゃんのほうが声が大きかったから、俺の声は掻き消されてしまった。

「な、何………？」

とりあえず、聞き返す。

シズちゃんのほうを見ると、その体は震えていた。でも、眼差しは、全く曲がっていないかった。

「あ、あのな、その………っ」

シズちゃんは、どもりながらも言い始めた。

「その、昨日は、あんなこと言っちゃまって、ごめん………。臨也の愛が嘘なんて、酷いこと……。俺、愛されてるのか、不安だったのかもしれない。でも、こんなことは、言い訳だ。あんなこと言っちゃまったのは、たぶん、本当に臨也を愛してなかったからだと思っ………」

言っていくにつれて、シズちゃんの声は小さくなっていった。だから、最後のほうは、聞き取りにくかった。けど、不思議と、ちゃんと耳に入ってきた。

「だから、前のは全部嘘になるんだ……。好きって言ったことも全部……っ」

涙声になっている。このままじゃあ、シズちゃんはきつと泣き出してしまつたろう。

そう思って、俺は、また口を開こうとした。けど、意味がなかった。

「こんなの、わがままだ……っ。だけど、言わせてくれ、臨也……」

「……俺のこと、嫌いになんて、ならないでくれ……っ！」

そう言うシズちゃんの声は、震えていて。目には、今にも溢れ出しそうなくらいの涙が溜まっていた。

全くさあ……。

「本当に、シズちゃんは馬鹿だよな……」

「……っ、やっぱり、俺のことなんて……っ」

「俺がシズちゃんのこと、嫌いになるわけじゃないでしょ？」

そう言うと、シズちゃんは、呆然としてしまった。まるで、どうして、と言いたげな顔で。

しょうがない。お馬鹿さんなシズちゃんのために、教えてあげよう。

「だって、シズちゃんのこと、大好きだもん」

「………な、んで……だよ……っ。俺、あんなこと言ったのに………」

「そんなの、お互い様だよ。俺だって、シズちゃんに酷いこと、たくさん言っちゃったからね」

だから、ごめんなんて言葉じゃあ、繕いきれないんだよ。その代わりに、シズちゃんをたくさん可愛がってあげるよ。

「でも今は、愛してるじゃなくて、大好きね。愛してる、は、今言う嘘になっちゃっから」

そう言つと、シズちゃんは泣き出してしまった。最初は戸惑ったけど、俺は、シズちゃんの背中をさすつて、たくさん「ごめん」と言った。今までに無いくらい。

たくさん傷つけたけど。たくさん泣かせちゃったけど。

これからは、その何百倍もの愛を、君に注ぐ。

それが、繕いになるならば。

だから、

「もうあんなこと言わないでね、シズちゃん」

そうすれば、俺は一生君の傍にいるから。

「はあーあ」

「結局、みいちゃんの玩具、オモチャなくなっちゃった」

「みんなどうして、みいちゃんを楽しませてくれないんだろ」

「でも、いつか」

「オモチャはいつか壊れるものだし、」

『臨也さんと静雄くんは、オモチャじゃなくて人間だもんね』

それに、私もいつまでも子供じゃいられないもの。



×09 結ばれた糸（後書き）

仲直りい      よかったよー！      全部書けたよー！！      ひゃっふうっ

あれから一週間が経った。

俺と臨也は、ちゃんと仲直りできた。まあ、その後はいつもと変わらず、顔を合わせれば喧嘩で、柚留に怒られるということの繰り返しだ。こんなふうにいられることが、とても幸せだと、あれからよく思うようになった。

今日は、臨也の家で、臨也と一緒に過ごしている。

ゆっくりと時間が流れていく。俺は、何をするというわけでもなく、ただ、仕事をしている臨也の横顔を見つめているだけだ。何か意味があるわけではないが、これはこれでいい。何がいかと聞かれても困るが。

そう思っていると、今まで黙っていた臨也が口を開いた。

「もういないんだね、彌みはね霸はね彌みはねちゃん」

彌みはね霸はね彌みはね。

アイツは、臨也と仲直りした翌日、俺たちに謝りに来て以来、ぱったり姿を見せなくなった。柚留によると、家に帰ったらしい。もともと彌みはね霸はね彌みはねはお嬢様だったし、その上、世界トップ企業の跡取りだから、その勉強もするのだろう。まだ高校も卒業したばかりかみただったし。

「俺たちのこと別れさせようとしたけど、なんだかんだで、根はい子だったよね」

「そうだな……………」

嵐のような奴だったせいで、急にいなくなると、非常に寂しい感じがする。

「まあ、世田谷だから、会いに行こうと思えば行けるんだけどね。家の場所さえわかれば」

確かにそうだが。金がかかるから嫌だ。

そんな話をしている。

「こんにちはあーっ！……！」

「ちよっ、彌霸禰ちゃん！」

玄関のほうから、こんな声が聞こえた。

彌霸禰………？

俺と臨也が、なんだ、と思って顔を見合わせていると、部屋のドアが吹き飛んだかと思うほどの勢いで開いた。俺たちは驚く間もなかった。

「いっくん！……！」

「がふうっ！！！」

ガタンッ、という音とともに、臨也が椅子ごとひっくりかえった。なっ、なんだ！？

そう思って臨也のほうを見ると、そこにいたのは、

「みつ、彌霸禰！？」

臨也に抱きついていている彌霸禰がいた。

「あ、しーちゃんだっ！ ひさしぶりいっ！！！」

「わあっ！！！」

俺に気づいた彌霸禰が、今度は俺に抱きついてくる。てか、しーちゃん………？

「会いたかったよ、二人ともっ！！！」

「そっか、そっかー。そりゃあ良かったねえ、彌霸禰ちゃん」

「うんっ、よかつ………、あ」

「人様の家に入るときは、インターホンを押しましょうね、彌霸禰ちゃん」

「いっ」

「いいいやああああああああっ！！……！！……！！」

数分後。気絶していた臨也も目が覚めて、俺と臨也は、どうして彌霸禰がここにいるのかを、柚留に話してもらおうことになった。

「ありがとう、静雄」

紅茶を出すと、柚留は、それはそれはキレイな笑顔で礼を言ってきた。俺は、それに見とれてしまった。そのせいで、臨也が拗ねている。

「拗ねるなよ、臨也」

「ふんつ。シズちゃん、柚留のほうがいいの？」

「俺は、臨也が一番好きだぞ」

そう言いながら臨也の頭を撫でれば、臨也は、「シズちゃん……っ！」と言いながら、俺に抱きついてくる。

「柚留。みいちゃん、こんなバカツプル見たこと無いよ」

「僕もだよ。ねえ、さっさと話したいんだけど」

マズイ。柚留がキレそうになっている。俺は、臨也を放してイスに座った。

「スマン、柚留。で、どうして彌霸禰がここにいるんだ？」

本題はこれだ。そう。どうして世田谷に帰ったはずの彌霸禰が、池袋にいるのか。

「あのねー……。この話聞いたとき、僕もびっくりしちゃったよ。」

一昨日ね、僕、彌霸禰ちゃんのお父さんに会いに行ったんだ。それでさ、彌霸禰ちゃんのお父さんが、僕に彌霸禰ちゃんの世話を頼んできてね……………」

「そうなの。お父さんがね、柚留は色々上手いから、見習ってきなさいって。つまり、みいちゃん、これから柚留くんと一緒の家に住んで、いろんなことを勉強するのっ！」

そう言う彌霸禰は、とても楽しそうだった。この前までの笑顔とは違って、今日はイキイキとしている。

「……ってことは、彌霸禰ちゃんは、一昨日から、池袋に移り住んでるんだね？ 柚留と一緒に」

「そゆことっ！ だから、これからは毎日のようにいっくんとしーちゃんに会えるんだよー！」

「いっくん！？ しーちゃん！？」

彌霸禰の言葉に、臨也が耳を疑っている。

「そうだよ？ イザヤくんは、いっくん、シズオくんは、しーちゃん。いいでしょ？」

「全然良くなむぐつ！？」

「ああ。すげえいいと思うよ」

俺は、言いかけた臨也の口を手でふさいだ。そのときに、勢いがよかったから、臨也の口を叩いてしまった。スマン、臨也。

「ありがとうっ！」

「じゃあ、僕たちはこれを言いに来ただけだから。今日はもう帰るね」

「ええっ！ もう行くの！？ みいちゃん、もうちょっといっくんたちとお話したい！」

「今日はダメ。これから仕事に行くから。ほら、出ないと」

「むー……。わかった………」

「はい、お利巧」

そう言いながら彌霸禰の頭を撫でる柚留。彌霸禰って、本当に18だよな……。

「急に来ちゃって、ごめんね。二人とも」

「いや、いいよ。また来な、彌霸禰ちゃん」

「うんっ！！ 毎日来るよ！」

「いや、それは勘弁」

そんな会話をしてから、柚留と彌霸禰は帰っていった。

「やつぱり、なんかすごい子だね。彌霸ねちゃん………」

「まあ、これからいつでも会えるようになったし、よかったんじゃねーの？」

「そうだね。じゃあ、なんか集中力も無くなっちゃったし、俺も今日は仕事お終い！ シズちゃんと遊ぼう！」

「！ 本当か、臨也っ」

この後、俺は臨也に神経衰弱で連敗したのだった。

× 0 0 再来（後書き）

終わったーっ！！ 彌みはね霸禰ちゃんシリーズ終わったよー！！ あー、  
楽しかった。ここまで書けたのも、読んでくれる人がいたから。こ  
れからも頑張ります！ さてさて、この章は、これでお終いです。  
次回は、どうしようか迷ってます。まあ、頑張って考えます。じゃ  
あ、また次回！

×19 オリキャラ紹介（前書き）

注意

・会話文

・何がしたかったんだろう自分

・腐要素あり

・後半作者が大暴走・大迷走

・なんかゴチャゴチャしてて読みにくい

・いつもながらワケがわからない

・「今更オリキャラ紹介かよ」は禁句

・オリキャラ紹介なのに、新しいオリキャラ出てくる

・なのにソイツらは紹介しない

×19 オリキャラ紹介

エ「あー、眠い………………。マジ眠いんだけど、どうしてくれるのよ、これ……………」

圭「お前、まだこれからだぞ」

エ「めんどくさい………………。ねむ………………。は……………」

圭「あ、もうはじまってんぞ。ほら、さっさと言え、エミリ」

エ「ああ？ んどくさいわね………………。まあ、これが終われば帰れるし、やっちゃおうか」

圭「おう、そうだ、エミリ！」

エ「あい。皆さん、はじめまして………………。小池 エミリです………………。今回は、『税込み245円の愛。』の作者である、0.5%以下、テンゴ（）が読者のみなさんにオリキャラを紹介したいとか、わけのわからないことを言い出したので、それを実行するために、私たちを使ってきました……………」

エ「なので、今回は小説ではなく、オリキャラ紹介の場としてここを使わせてもらいまーす……………」

圭「エミリ、もう少し感情こめて……………」

エ「眠いのよ。あんのハゲが。人の安眠を妨害して………………。これくらい自分でやりなさいよ、ネクラ野郎……………！！」

圭「え、エミリ……………」

エ「あー、もうムリ………………。限界よ………………。ふあああ……………」

圭「え、ちよ、」

エ「あとは圭士郎よろしく………………。ふあああ……………」

圭「なっ、エミリ待て……………」

「い、行つちまった……………」

「アイツは、本当に……………」

「仕方ない。オレがやるか」

「えーと、何をすれば………………。ん？ なんだこれ……………（ポケットの



中ゴソゴソ)」

「あ。アイツ、オレのポケットにカンペつっこんでいきやがった」  
「本当に、準備がいいというか、ちゃっかりしてるな……」

「いや、そんなことより、早く始めよう」

「皆さん、はじめまして。小池 エミリに代わって、ここからは、オレ、佐久間 圭士郎が事を進めていきたいと思えます」

「さつきも言ったとおり、今回は、『税込み245円の愛。』に出ている、テングのオリキャラを紹介したいと思います」

「なお、オレたちは、今後もこのような場面で駆り出されることがあるかもしれないので、お見知りおきを」

「えーっと、まずは……」

「柚留についてか……」

「最初に、テングのオリキャラ第一号の、しつじゆもん六戸鬼門 柚留ゆずりについてを紹介します」

柚「あれー？ 圭士郎、何やってんの？」

圭「ギャア！！ ゆっ、柚留っ。お前、なんでここにいんだよっ」

柚「え？ みはね彌霸禰ちゃん、仁さんに会いに行くところだよ？ て

か、そんなに大声上げなくても」

彌「柚留、この人誰？」

柚「あれ。みはね彌霸禰ちゃん、僕の店でコイツ見なかった？」

彌「うん。見てない」

柚「コイツは、佐久間 圭士郎だよ。僕の店で働いてくれる」

彌「そうなんだあつ。はじめまして、圭士郎くんっ。かさかわ笹川 みはね彌霸禰  
ですっ！」

圭「よ、よろしく」

柚「ところで、圭士郎は何してるの？」

圭「ああ。お前ら、ちょうどいいところに来たよ。今、小説のオリキャラ紹介を始めるところだったんだ。本人がいたほうが、色々と個人情報が聞きだせるから」

柚「プライバシーの侵害だよ、それ」

圭「いいじゃねーか。じゃ、時間ももつたないし、始めます。まず、袖留。ちなみに、設定画は、『みてみん』にアップされています。見たいお方は、不知火と検索しましよー」

袖「人の顔設定画とか言わないでくれる？」

圭「細かいことは気にするな」

圭「はい。じゃあ、年齢から。お前、何歳だっけ？」

袖「25だよ」

圭「つたく。若いつていいよな。オレなんて、もう28だぜ」

袖「年増を迎えるわりには、年齢より若く見えるから、いいじゃん」

圭「余計なお世話だ。それに、オレは女じゃない。まあいい。つと、誕生日は」

袖「6月20日だよ」

圭「血液型」

袖「O型」

圭「えーと、性格は……。作者、字きたない汚きたなつ！ 読みづらいことこの上ねえよ……」

彌「どれどれー？ ……ほんとだ、何コレ。みいちゃん、全然読めないんだけど……」

圭「んー……。つ。ああ、誰にでも優しいか。まあ、少し読めれば、だいたい筆記体でわかるか。えっと、袖留の性格は、『誰にでも優しい。温厚な性格。が、怒ると誰も手がつけられなくなる。面倒見が良い』だよ」

袖「まあ、そうだね」

圭「で、身長は？」

袖「188くらい？」

圭「なんでオレの年下なのに、オレより背が高いんだ！」

袖「さあ……？」

圭「体重は」

袖「74キロ」

圭「よしっ、袖留！ 今度焼肉屋に行こう！ オレが奢ってやるか

ら

彌「あつ、みいちゃんも連れてってー！」

柚「いいけど、僕は食べても太らないよ？　ちゃんと鍛えてるから」

圭「柚留のバカ！」

柚「はいはい」

圭「ううー…っ。ったく。年上をからかって」

柚「すみませんねー（からかったつもりはないんだが……？）」

圭「もういいよっ。じゃあ、次。えっとー、『静雄より力が強い。』

基本常識人だが、たまに常識の範疇から思い切り外れたことを言う」

。これは、事実だな」

彌「だよー。みいちゃんも、前にビックリしちゃったもん」

柚「うるさいな」

圭「喧嘩するなよ。はい、次、んーと…『実はマフィアのボムぎゅ

ぐっ！？』

柚「な、何を言ってるんだい、圭士郎。マフィアって？　な、何か

なー？」

圭「ぷはっ！　びっ、ビックリしたじゃんか！　なんだよ、急に！

言っっちゃいけないのか！？」

柚「当たり前でしょ！　言ったら、僕は確実に警察行きだよー！」

彌「？　柚留、何言ってるの？」

柚「い、いや。なんでもないよ、彌みはね霸はね禰ちゃん。気にしないで？」

圭「？？　お前なら、警察なんて一発で殺せぎゃふっー！」

柚「今日の圭士郎は、おかしいね」

彌「みいちゃんは、柚留のほうがおかしく見える……」

圭「柚留！　テメエはオレを殺す気か！？」

柚「そんなことは、全く思っていないさ」

圭「わけわかんねーよ！　もういいよ！　お前の紹介はこれで終わ

るー！」

柚「そうかい」

彌「次は、みいちゃんの番！？」

圭「うーんと……。ああ、そうだな。お前だ」

彌「わあい！！」

圭「で、設定画は柚留と同じです」

彌「作者さん、本当に雑だね。さっきは柚留のだったから言わなかったけど、なんでみんなが見るのに、シャープペンでザツと書いたよ。うなのを普通に載せるのかな。てか、色くらい塗ってほしいわ」

圭「すごい根性だな」

柚「色々めんどくさいみたいだね」

圭「まあ、いいじゃんかよ」

彌「納得いかないなあっ！ みいちゃん、もっと可愛いんだけど！！」

柚「はいはい。あとで書き直してもらいなよ」

彌「そうするわっ！！」

圭「じゃ、まずは、年齢」

彌「18歳ですっ！！」

圭「さば読んじゃダメだぞ」

彌「読んでないわよーっ！！」

柚「まあ、言動行動身長、何1つとして18歳には見えないからね……」

彌「失礼ねっ！！」

圭「でも、感想一覧にも書いてあったぞ？ 『彌霸禰が小学校高学年に見える』とか、『精神年齢5歳』とか」

彌「ソイツラヲコロスワ」

柚「彌霸禰ちゃん、おちついて。片言になってるよ」

彌「何よ！ 小学校高学年って！ 学力は世界トップよ！！」

圭「きつと、そういうことが言いたいんじゃないと思うぞ……。まあ、話を進めよう……」

柚「そうしな、圭士郎」

圭「えーと、誕生日と血液型教えて」

彌「9月7日生まれ、AB型ですっ」

圭「はいらないから。性格は……。……作者はオレに、死ねと言いたいのだろっか」  
柚「どうした、圭士郎。見せて。……こりゃあ、そう言ってると思えないね……」  
彌「えー？ なになにー？ 気になるから言っよー」  
圭「ぜっ……。絶対に、怒らないか、彌霸禰」  
彌「怒らないよー」  
柚「本当に？」  
彌「ほんとにつ！ だから早くー！」  
柚「だって、圭士郎……」  
圭「うー……。性格、『腹黒』。男に媚を売るのが趣味・得意。まあ、本当はいい子』」  
彌「死になさい、この年増が」  
圭「嘘吐きーっ！ 怒らないって言っただろー！？ てか、怒るならオレじゃなくて作者に言えよー！」  
彌「言ったアンタが悪いのよ」  
柚「……。……お気の毒に……」

### 数分後

圭「まっ、マジ殺されかけた……。……！」  
彌「なんで柚留は、みいちゃんの邪魔をしたの！？ あと少しで圭士郎を殺せたのにー！」  
柚「彌霸禰ちゃん。世の中には、して良いことと悪いことがあるんだよ。そこら辺を承知して」  
圭「彌霸禰こわい……。っ！」  
柚「よしよし。ほら、仁さんでしょ、次。もう着いたから、さっさと聞いちゃって」  
圭「うう……。っ。しょ、しょうがないんだっ。殺されなかっただけいいと思おうっ」

柚「そうそう。じゃ、入ろうか。仁さん。こんにちはー」

彌「仁の家って、超おつきい……。しかも、みいちゃんちと違って、平屋だし、古いし……」

圭「まあ、仁さんの先祖は、將軍だったらしいからな……」

彌「將軍!？」

仁「あ……。あんだ、柚留……って、彌霸禰と圭士郎もいるじゃねえか。なんだこりゃ」

彌「和服だあつ!!」

仁「ん？ 小娘、和服着たことねえのか？」

彌「うんつ。無いよつ。七五三は、ドレスだったから」

圭「ドレス!？ 彌霸禰って何者!？」

柚「世界トップ企業の跡取り」

圭「マジカヨ」

仁「おい、圭士郎。大丈夫か、お前。片言になってるぞ。てか、何しに来たんだ、お前ら」

柚「僕たちは、仁さんにちょっと話があつて。圭士郎は、小説の作者さんのパシリだつて」

仁「そうなのか」

圭「まあ。はい。『小説のオリキャラ紹介しよう』とか言つて、テングがオレをつかつてきました。本当は、エミリがやる予定だったんだけど……」

仁「ははーん。アイツのことだから、放棄したんだろ」

圭「眠いから、とか言つて……」

柚「可哀想な圭士郎……」

圭「これで終わりになるから、いいけどな。ってことで、仁さん。

仁さんの個人情報を洩らすために、聞かせてもらいます」

仁「わあつた、わあつた」

柚「個人情報なのに、いいんですかあ!？」

彌「すごいっ、仁!!! プライドのプの字もない!!!」

仁「黙れ小娘」

彌「煩い、年増」

仁「……………小娘にプレゼントだ」

彌「いっただいっただいっ……っ！！！！脳みそが出るからやめて……っ！！！！」

仁「出てしまえ！」

柚・圭「（どうすればいいんだろう）」

圭「はい、みなさん、お待たせしました。仁さんと彌覇禰の喧嘩が終わったようなので、早速、紹介を始めたいと思います」

仁「つたく……………」

彌「もう……………」

柚「二人とも、また喧嘩したら外に出すよ」

仁・彌「すみませんっしたあ！！」

圭「あはは……。柚留はやっぱりボぶぎゃあっ！！！！」

柚「さつさと始めて」

圭「すみませんっしたあ！！こえーよ、柚留。お母さんだよ」

柚「文句あんの？」

圭「いえいえ滅相もございません！さあっ、早速始めましょう！

仁さんの設定画も、ほかの二人と同じように見れます！」

仁「人のことを設定画とか言うな」

圭「そういえば、仁さんの苗字を覚えていない奴がいるかもしれないな  
い。じゃ、仁さん、自己紹介してください」

仁「ああ？ めんどくせーなあ……。伊柁いたのゆきノ崎じん 仁だ。もう二度と、

オレの口からは言わねえからな。しっかり覚えとけよ」

圭「だそうですので、皆さん、しっかり覚えておきましょう。では、

仁さん。年齢は？」

仁「……………32歳」

彌「年増……」

仁「クロス」

柚「まっ、まあまあ、落ち着いて仁さん……」

圭「彌霸禰も余計なこと言うな、バカ!!」

彌「ごめんちやい」

柚「彌霸禰。調子にのってると、家に帰ってからお仕置きだけど」

彌「ごめんなさい!!」

圭「(一体柚留は何をしているのだろうか……………)はい。じゃあ、誕生日と血液型は?」

仁「8月13日生まれのA型」

圭「えーと、性格は、『優しいっちゃあ優しいけど、それをあまり表にださない。気まぐれ。興味のないことはどーでもいい。ついでに性格ではないけど、超モテる』だとさ」

柚「その通りだね!」

仁「おい、柚留。お前、今若干『興味のない仕事もやれや』って目エしてたぞ」

柚「そうですね。仁さん、全然仕事してくれないんですから。給料減らしますよ」

仁「しつかりやる……………」

彌「わあっ、仁が柚留に怒られてる! 柚留のほづが、7つも年下ののにいつ!!」

仁「つるせえっ!!」

彌「きゃはははっ!!」

圭「ん?なんだ。まだなんか書いてある……………」

柚「え、何が書いてあるの?」

圭「えーと……………」  
『仁さんは総攻めだよね! 絶対に!! 受けなんかありえない!』……………」

柚「……………」  
ん?

圭「『カップリングは、基本誰とでも合うけど、やっぱり仁×柚留が一番だよ!』……………。は?」

仁「流石、作者だな。わかってらあ。オレは柚留が誰よりもす」

柚「ギヤアアああああああああああああああああ!!……………」  
言っ  
なああああああああ!!……………」



仁「は？　なんでだよ。別にいいだろ。オレたち付き合っ

袖「二人とも今すぐここから出てけ！！！」

彌「え、なん」

袖「早くしろ！！！！！」

圭・彌「わかりましたああっ！！！」

彌「袖留、すごい恐かったんだけど……っ」

圭「そうだな……。オレ、軽くトラウマになりかけたよ……」

彌「みいちゃん、やることないな……」

圭「オレは、やること終わったから、もう帰るわ」

彌「そう。じゃあ、またね。おつかれさま」

圭「ああ。じゃあな」

圭「ただいま……」

作者「おかえりーっ！　おつかれさま！　どうだった？　しっかりできた？」

圭「しっかりも何も、お前の余計な書き込みのせいで、後半大変だったんだからな！！！」

作者「え？　余計な書き込みって……。あ！　あれね！！　いやあ、メンゴメンゴ　思ってたこと、つい書いちゃって！　テヘッ」

圭「テヘッ　じゃない！！」

作者「あ、今の圭士郎兄さんのテヘッ、可愛かった！　もっかいやって！　写メるから！！」

圭「なっ、ざけんな！！　くたばれ変態！！」

作者「変態は褒め言葉」

圭「キモイわ！！　わけがわからん！！」

作者「おっと。圭士郎兄さんがキレかけてますねー。龍汰くん呼ばないと。じゃっ、そういうことで、みなさん、さようならー！！」

圭「龍汰は呼ばなくていい！！！」

×19 オリキャラ紹介（後書き）

はっはっはぁ。迷走。自分は何がしたかったんだろう。みなさん、ここまでお付き合いくださって、ありがとうございます。さて。一回区切りもついたというところで書いてみた、オリキャラ紹介。わけがわからない。今更オリキャラ紹介とか、なんだよ自分。バカなのか？死ぬのか？本当にすみませんでした。反省しています。

しかし！今回だけでは気がすまないので、また今度、こういうのやってみたいと思います。話に関係ないオリキャラをまた引きずり出してきて。

そのときはまた、お付き合いを願います。

ついでに、図々しいですが、これを読んでみて、良かった点、悪かった点を書き込んでもらえると、また書くときに少しは活かそうと思います。よろしくおねがいします。

では、また次回にお会いしましょう！

## イベント小説 エイプリルフール

4月1日。この日は、忘れると損する日だ。

そう。今日、4月1日は、エイプリルフールだ！

俺、折原 臨也は、この日を全力で楽しもうとしていた。楽しもうとしていた《……………》。

なのに。それなのに！

「……………つく、ひっ、」

「し、シズちゃん、泣かないでよっ」

今日、この日は、『恋人を泣かせてしまった』という、最悪の日になった。

どうしてシズちゃんが泣いているかって？ まあ、みんな大体の予想はついているだろう。

俺はシズちゃんに、言うてはいけない嘘を言ってしまったのだ。

数分前。

俺は、シズちゃんに嘘を吐こうと池袋に来ていた。

シズちゃんに吐く嘘は、決まっていた。でも、あまり良いとはいえないものだ。

『シズちゃんに、「嫌い」と言うてみよう』

最初は、軽いノリで思いついたのだが、よく考えてみて、やっぱりやめようと思った。なぜかって、この前の出来事があるからだよね、覚えてない？ ほら。俺とシズちゃんが破局寸前までいきかけたときの。まあ、彌霸禰みはねがいけなかったんだけどね。ほとんど。

でも、俺は思ったんだよ。いくらシズちゃんでも、今日のこととはわかってるだろう。だから、軽く流してくれるだろう。と。

しかし……！

俺は、シズちゃんの鈍感さを甘く見ていた。アイツは、自分の誕

生日ですら忘れるような奴だ。だが、俺がそのことに気づくのは、嘘を言つてシズちゃんが泣き出してからだった。

で、その時点では全然考えずに行動していたわけ。シズちゃんに嘘を言う、という楽しみで、頭の中がいっぱいだったからだ。

そんな感じで浮かれていると。

「おい、臨也」

「あつ、シズちゃん！」

シズちゃんが現れた。片手に標識を持って。

ああ、もう。また余計なもの持ってきて。面倒だなあ。

そんなことを頭の片隅で思いながら、俺は、シズちゃんに声をかけた。

「ねえ、シズちゃん」

「ああ？ なんだ。自分から殺されに来るたあ、いい度胸じゃねえか」

「やだな、シズちゃん。俺がいなくなったら、シズちゃんは泣いちゃうでしょ？」

「っ、うるせえ！ ブツ殺す！！」

俺の言葉に、シズちゃんは真っ赤になって、持っていた標識を振り上げてきた。俺は、それを避けて言った。

「ねえ、シズちゃん。俺、シズちゃんのこと、大っつつ嫌いなんだ」  
思いつきり、嫌な感じの笑い方をしながら。

ふふっ。シズちゃんはどんな反応をしてくれるのかなあ？ エイ  
プリルフルだって知ってるだろうし、「はあ？」って顔するんだ  
ろうなあ。

頭の中に、次々と浮かんでくる楽しみ。しかし、それも長くは続  
かなかつた。

「.....え、臨也.....」

「ん？ 何、シズちゃ.....っ!？」

シズちゃんの声に俺は、シズちゃんのほうを向く。とても楽しそ  
うな表情を浮かべながら。

が。

俺の目に入ってきたのは、ポロポロと涙を零すシズちゃんだった。  
「なっ、ちよ、シズちゃん!? なんて泣いてんの!?!」

「だ、って、おまつ、俺のこ、ひつく、嫌い、て、」

「だあああああつ!!! 嘘だから! 今の嘘だって! シズちゃん、今日が何の日か知ってる!?!」

予想外の反応をするシズちゃんに、俺はすごく動揺した。

「、んなっ、知るかつ」

「し、知らないの!?! 今日、エイプリルフルだよ!?!」

「エイプリルフルって……………」

「嘘ついてもいい日だよ! 俺、シズちゃんがわかってると思って嘘ついたんだけど!」

「知らね、つよ、」

俺の言葉に、シズちゃんがまた泣き出す。ああああ、俺のバカ!  
! シズちゃんはこの子なのにな!

「ごっ、ごめんね、シズちゃん! 俺、シズちゃんのこと大嫌いなんかじゃないから! むしろ大好きだから!!!」

そう言っつてシズちゃんを慰めるけど、シズちゃんは泣き止んでくれそうにないのが、今の現状だ。

ああ、もう、本当に俺はバカだ。他人のことバカバカ言ってるけど、俺のほうがバカじゃんか!!!

「シズちゃん、ほんとにごめん!」

「つく、じゃ、いざやは、ひつく、おれのこと、嫌いじゃないのか、うつく」

「嫌いじゃないよ! だから、大好きだってば」

「、うそじゃ、ね、だろっな」

「嘘じゃないよ!!--」

ああ。普段の行いがこんなだから、シズちゃんもあんなこと言っただらうな……。これからは、こづいっことしないようにしよう。

「大好きだから。泣かないで、ね?」

「……………うん……………」

なんとかシズちゃんが泣き止んでくれた。はあ。どうなるかと思っ  
っちゃった。

俺が安心していると。

「いざや」

まだ涙で潤んでいる瞳と赤い鼻をしたシズちゃんが、俺に話しか  
けてきた。

「何？」

俺は、なるべく優しく返事をする。

なんだろう。俺に、何か言いたいことでもあるのだろうか。……

まさか、別れ話！？

そんな不安に苛まれている俺に気づかず、シズちゃんは言った。

「もう、こんな嘘つくなよな……………」

嫌いなんて、言うな……………！

そう言うシズちゃんが可愛すぎて、俺は思わず、シズちゃんに抱  
きついてしまった。

「ねえ、あつひ 袖留」

「何、みはね 彌霸禰ちゃん」

「みいちゃん、本当は小学生だったんだ！」

「……………どつりで行動とかが小学生レベルだと思った。ランドセ  
ル買ってあげるから、おいで」

「え！？ 袖留、今のは嘘だよ！！」

「ごめん。本当かと思っちゃった」

「袖留の馬鹿！！」

イベント小説      エイプリルフル（後書き）

エイプリルフルはははは！！ この日を待ちに待っていたよ。なんてね。あー、でも、臨也がバカになっちゃったなあ。ま、いいか。キャラ崩壊なんて、いつものことだしね。てか、彌霸禰ちゃんは小学生とか言っても全然イケそうなことに、なぜか悲しくなった。

×20 生物が家に届いていました

やつほう！ 世界を代表するキューティーガールの、笹川 彌霸  
襦ねだよつ！ みんな、元気かな？

今ね、みいちゃん、柚留ゆずると買い物に来てるんだあ。今日の夕食とか、必要な物を買いにね。みいちゃん、お買い物とか大好きだから、テンションが上がってるんだよねえっ あ、でもでも、今日はいつくんとしーちゃんに会えないから、ちょっと残念だなー。今いるお店はね、雑貨屋さんだよ。

「あつ、柚留、これ可愛い！ 欲しい！」

「ダメ。必要ないから」

可愛いクッションを見つけて、みいちゃんは柚留に強請せうべいつてみた。けど、柚留は「ダメ」と即答する。

「ケチっ！ いいじゃん、別に！ クッションはあっても困らないよー！」

「クッションなんて、家にあるから。それに、あつたら邪魔になるでしょ」

「むーっ……。柚留のケチ！」

「言つてな」

反抗すると、柚留に頭を軽く叩かれて、流された。ほんとに、柚留はお母さんみたいだなあつ。

そう思っていると、柚留のケータイが鳴った。あ。柚留のケータイについてるキーホルダー、可愛い！

「もしもし。あ、仁さん。どうしたんですか？ ちょ、彌霸襦ちゃん、邪魔しないで」

邪魔なんかしてないもーんつ。キーホルダーいじってるだけだもん！ そう言ったら、柚留に全力で叩かれた。いったい！ 柚留の力、強いのに！

「すいません。で、なんですか？ ……へ、届け物？ それって、



何ですか……。って、ちょっと、仁さん、仁さん！」

黙って袖留を見ていてわかったことは、袖留がなんか困ってることだった。しかも、急に電話、切られたみたい。

「仁から電話？」

「うん。なんか、うちに届け物が届いてるって……。それも、結構デカイ奴だって」

「ふーん。なんだろうね？ あっ、大きいテディベアとか」

「違う」

「なんでわかるのおっ！ てか、最後まで言わせてよ！」

「絶対に違うという保障ができるよ」

そう言う袖留の眼は、呆れていた。まるで、小さな子供を見るときのように。

ちよっと待って。その眼は、まるでみいちゃんが小学生みたいな眼じゃん。どうしてよ。

「とりあえず、さっさと帰ろう。生物なまものだったら、傷んじゃうだろうし……」

なんで無視したの！？ ひどいよ、袖留！

そんなやりとりをしつつ、みいちゃんたちは、急いで帰ることにした。

「ただいまー」

「ただいまあっ！」

みいちゃんたちは、そう言いながらドアを開ける。何が届いてるのかなあ

そういえば、家に帰ってくる途中に袖留が、「どうして僕たちが留守なのに、届け物を届けられたんだろう……」ということに気づいた。みいちゃんが思うに、仁は袖留の家の合鍵を持ってるから、それを使って、仁が直接家に入って置いていったんだろうね。そう言うのと、袖留は納得していた。たまには、みいちゃんだって役に立つ

よ！

でも玄関には、ダンボールも、届け物という感じの物は、1つも無かった。

「あれ？ 何も無いよ？」

「あの人、リビングに置いてったのか……？」

柚留が顔を歪ませる。そんなに入ってほしくなかったのかな？

じゃあ、合鍵なんか渡さなきゃ良かったのに。

「とりあえず、上がろう。それから見つからなかったら、仁さんに電話を」

「おかえりなさいっ！！」

「「え？」」

柚留が言いかけたところで、返ってくるはずのない言葉が、聞き覚えのある声で聞こえた。

この声は、いつくんの声だ！ あれ。でも、いつくんの声は、もう少し低い気がする……。

柚留くんもいつくんのだとわかっていよう、眉をひそめてい。いつくんがうちに來てるわけないんだけどなあ。だって、柚留の家の合鍵、いつくんは持ってないもん。

みいちゃんと柚留が不思議に思っていると、リビングから、何かが出てきた。なんだろう？

リビングから出てきたのは、なんと！

「……………いざ、や……………」

ピンクのコードが出ている白とピンクのヘッドホンをして、真っ白でキレイなファーコートを着たいつくんらしき人物だった。

でも、よく見てみると違う。いつくんの瞳は紅いはずんだけど、みいちゃんたちの前にいるいつくんは、瞳がディープピンクだった。それも、どことなく機械的で、なんとなくだけど無機質な感じ。

「ん？ いざや？ あっ、ぼくのオリジナルか！」

「おりじなる?? へ??」

「彌霸禰ちゃん大丈夫？ 状況が上手く呑み込めてないみたいだけ

ど」

「だいじょうぶ?」

いっくんに似てる子が、心配そうにみいちゃんの顔を覗き込んできた。ああ、大丈夫じゃないかな。

「とりあえず、上がるう。話は、リビングで聞くよ」

「みいちゃん、頭がおかしくなりそう……」

「大丈夫だよ。もとかからおかしいから」

「失礼だなあっ!」

「あ。でも、これ以上悪化したら、僕は過労死するな……」

「すればいいのに!」

リビングには、もう一人、しーちゃんにそっくりな子がいた。こちの子は、青色の羽織と着物を着てる。なぜかそれが、金髪によく映えて見える。

「おかえりなさい」

「ただいま」

その子の声も、しーちゃんより少し高い。てか、袖留すごい。もう状況を呑み込めてる。みいちゃん、しーちゃんにそっくりな子見て、更に混乱してきてるんだけど。

「えっと、とりあえず二人とも座ってて。僕は仁さんに電話してるから」

「はあい!」

「わかった」

そう言っつて袖留は、リビングを出て行った。

数秒後、外から袖留の声がしてきた。

『仁さん。はい、帰ってきましたよ。とりあえず、1つ言わせてください』

袖留、やっぱり怒ってるよねー。帰ってきたら、こんなのがいるんだもん。怒鳴るのかなあ。やつぱ、給料減らす?

『ダンボールに貼ってある『生物注意』ってやつありますよね。あ

れ、生物せいぶつと読むんじゃないですよ」

「そこなの!？」

確かに、この子たちは生物せいぶつかもしれないけど!

『てか、なんなんですか、あれ。もうアンタからの届け物は、引き取らないようにしますけど。………は? オートマタ? え、仁さん、ちよ、仁さん! 仁さん!?!』

あ、切られた。なんなんだろう、仁って。自由すぎるよなあっ、ほんとに! 柚留が可哀想だよっ!

そう思いながらドアのほうを見ていると、柚留がブツブツ言いながら入ってきた。

「はあ………。本当に、なんなんだろう、あの人は………。まあ、今日はいいや。お説教は、また今度にしよう……。」

今の発言で、柚留は7つも年上の人にもお説教をすることがわかった。きつと、柚留は、お説教をする人の年齢なんて関係ないんだろうな。ていうか、みいちゃんにあたってこないといいなあ……。

「君たち二人は、オートマタなんだね?」

そう思っていると、柚留が二人に笑いながら言った。さっきの表情からは、考えられないくらい笑顔で。

「そうだよ!」

「うん」

柚留の言葉に、二人が肯く。

「名前は、なんていうの?」

「ぼくはサイケ!」

「……津軽……」

二人が名前を言う。へえっ。いつくんに似てる子が、サイケで、しーちゃんに似てる子は、津軽っていうんだあ。

「彌霸彌ちゃん。この子たちは、仁さんが作った、オートマタなんだって。なんで作ったかは知らないけど。たぶん、暇つぶし」

「へー。そうなんだあっ! みいちゃんはね、笹川 彌霸彌っていうの! よろしくね、サツちゃんに、津軽!」

「僕は、穴戸鬼門 袖留だよ。よろしく」

「よろしく！」

「よろしく」

自己紹介をして、二人を観察してみる。サっちゃんは、瞳がディープピンクで、いっくんがモデルの子。なんか、無邪気な感じがする、悪そうないっくんとは違って。津軽は、瞳がメデイウンプルで、青と白が鮮やかな羽織と着物を着ている。これ、本当にオートマタなんだー。すごいなあ。仁って、こんなことできるんだーっ！というか、さっきから気になってることがあるんだけど…。

「ねえ、二人とも、いっくんとしーちゃんより小さくない？」

これなんだよねえ。どう見ても、二人とも本人たちより幼い。

「ああ。そうだよ。仁さんが言ってたけど、通常の姿は、本人たちより小さい、17歳に設定してあるんだって」

「そうなんだ！ マスター仁が、なんかわからないけど、17歳って設定したの！ あ、でもね、ぼくと津軽、これとは別の大きさにもなれるよ！」

「うそっ！ すごーいっ！！ 仁って、そんなことしてるなら仕事すればいいのに！」

「彌霸禰ちゃん、それを直接仁さんに言ってあげて…」

みいちゃんの発言に、袖留くんが、額を押さえながら涙を流していた。ああ、泣かないでよ。みいちゃんが悪いみたいになっちゃうじゃん。

「えつとねー、ちよつと待ってて。んーと……」

「サイケ、このファイル」

「あつ、ありがと津軽！」

なんか二人で話してるけど、みいちゃんたちにはよくわからない。きつと、二人の間でプログラムのやりとりとかしてるのかも。知らないけど。

「はい、見ててね！ へんしーんっ！」

サっちゃんがそんなことを言うと、サっちゃんの体が光った。眩

しくて目をそむけてしまった。光が消えて、目線をもとの場所に戻すと、そこにいたのは、小さいサッチャんだった。

「わあっ、ちっちゃい！ 可愛い！！」

「えへへっ。でもね、でもね、つがるのほづがもつと可愛いよ！」

サッチャんがそう言つと、津軽は、顔を赤くした。……………この子たち、こういうところは変わらないんだなあ、本人たちと…。

「すごいな、あの人……………」

これには、袖留も感心している。まあ、こんなの作れる自体がすごいけどねえっ。

「そういえば、袖留。この子たち、今日からこの家で暮らすんだよね」

「うん。そうだよ。オートマタだから、食事はしないって言ったよ。まあ、充電とかは必要みたいだけど」

電気代がかかるなあ…。そんな表情をする袖留。まあ、頑張つて働いて。

こうして、みいちゃんたちに新しい家族ができたんだ。これから楽しくなりそうだなあっ！

「わあああつ！！ ちっちゃい津軽可愛い何ソレ!?!」

「あーっ、みはねちゃん、ぼくのつがるだよ！」

「いいじゃーん！ 減るもんじゃないんだから！」

「わわっ……………。ゆずる、たすけて……………」

「あー、もう。津軽泣かしちゃ駄目でしょ。津軽のことで喧嘩するなら、二人とも、津軽に触らせないからね」

「「すいませんでした」」

×20 生物が家に届いていました(後書き)

はい、サイケたんと津軽が登場しましたあっ！ ああ、津軽可愛いよ、津軽萌えるよハアハア。ん？ どんだけ都合のいい機能ついでんだよって？ それは言っちゃ駄目だよ。ははは。あー、柚留くんでもやってみたいなー。よし。今度やろう。柚留くんに歌ってほしいヒット曲を探して、やっっちゃおう！

×21 ご対面

昨日、柚留ゆりおの家に、サイケと津軽とかいうオートマタが来たらしい。なんでも、仁さんが作ったとか。そんなもって、その二体、俺とシズちゃんにそっくりだとか。そんなことを聞いて、俺が行かないわけがない。だから今日、俺は、シズちゃんと一緒に柚留の家に行くことにした。今は、柚留の家に向かっている途中だ。

「ねえ、シズちゃん。サイケと津軽って、どんな奴だろうね。俺すっごい楽しみだよ！」

「そうか？ 俺は、サイケには会ってみてえけど、津軽ってやつは、ちよつとな……」

そう言いながらシズちゃんは、少しだけ顔を歪ませた。

「どうして？」

「だって、自分の顔にそっくりな奴だぜ？ 俺は、あんまり会いたくねえな……」

ああ。自分の顔を見てるみたいで、気持ち悪いって、シズちゃん  
は言いたいのかな？

まあ、確かに、自分と同じ顔で自分とは違う行動をしていたら、  
ちよつと変な感じかも。

そんな会話をしているうちに、柚留の家についた。

いつもどおり、インターホンを押す。ほかの人の家ではやらないけど、柚留の家のインターホン押すのは、クセになっちゃったんだよね。柚留の家の前に来て一番最初にしたくなることは、インターホンを押すことっていう。これ、なんか悲しい。

「楽しみだなあっ　どんな子たちなのかなあ　」

「お前、すごいしやぎようだな……」

「だってさあっ、だってさあ！」

シズちゃんと話していると、ドアが開いた。

「あっ、柚留！ 早くサイケと津軽見た」



「いつくん！……！」

「へぶうつ！？」

出てきたのが袖留だと思ったら、彌霸禰ちゃんみはねだった。

いつものとおり、飛び掛られる。そして、後ろに倒れる。もう、後頭部を打ちすぎて、そこだけ丈夫になっちゃったんだよね。全然痛くないんだけど。どうしよう、泣きそう。

「会いたかったよ、いつくん……！」

「わっ、わかった！ わかったから彌霸禰ちゃん、離れて！」

「えー、やだあつ！！ なんちつて ほいほい。いつくんには、

しーちゃんがいるもんねー。しーちゃんも、会いたかったよ！」

「おう。久しぶりだな」

そう言いながら、シズちゃんのほうに行く彌霸禰ちゃん。シズちゃんは、彌霸禰ちゃんの頭を撫でている。あの子、今度は俺じゃなくてシズちゃんに目つけたのか！？ させないからね！ シズちゃんは俺のものだよ！

そんなこと思っていると。

「僕の家の前で、馬鹿やらないでくれる？ じゃないと、僕まで馬鹿に見られるから」

袖留登場。なんだよ、馬鹿つて。袖留だつて馬鹿だろう！

そんな眼差しで見っていたら、袖留に蹴られた。やっぱり袖留は超能力者なんだ。俺の考えていることがわかるんだ！！

「さ、変態は置いといて、みんなはうちの中に入ろうか。サイケと津軽も待つてるし」

「待つて、袖留！ 謝るから、俺も家の中に入れて……！」

「臨也、サイケと津軽を見ても、変なことしないでよ………、つて言つても、無理か……」

「何その失望した感じ！！ 俺もできるだけ頑張つてみるけど！ 最初から無理つて決めつけないで！」 なんとか袖留を説得して、家の中に入れさせてもらった。

シズちゃんに「ざまあ」って感じの目で見られながらリビングに

入る。そこにいたのは。

可愛い可愛い天使さん二人でした。

「あつ、つがる、きたよ！ いざやくんとしずおくん！」  
「きた…っ」

俺に似てる子が、シズちゃんに似てる子に言つと、シズちゃんに似てる子が、嬉しそうにこっちを向いた。

「かつ……………、かわいい！！！！！」

「はい、ちよつと落ち着こうか、臨也。じゃないと、外に放り出すよ」

俺は、思わず抱きつきたくなって、サイケと津軽に向かってダツシュしようとした。が、コートのフードを袖留に引つ張られて、それは叶わなかった。

「ゆずる……………。その変態、もしかしていざや……………？」

そんな俺を見て、俺に似た子が、思い切り嫌そうな顔をした。失礼だな。なんでそんなに嫌そうな顔をするんだよ。袖留、しっかりこの子を躡けて！ そう言おうとしたら、「サイケ」と、袖留が口を開いた。おおっ！ 袖留は言われなくても叱ってくれるのか！

軽く感動して、袖留の言葉を、俺は待った。

「サイケ。それはどうしようもないことなんだ。本当に申し訳ないけど、我慢して。ね？」

「袖留！ 注意するところが違うと思うのは、俺だけ！？」

「うるせえな、ノミ蟲。俺に似たチビが恐がつてるじゃんかよ……………」  
シズちゃんにノミ蟲って言われたあ！！ 彌霸禰ちゃんに縋りつかうと思つたら、彌霸禰ちゃんに「近寄つてこないで……………」みたい  
な顔をされた。ねえ、彌霸禰ちゃん、まだ俺のこと好きだよな？

「津軽、大丈夫だよ。コイツは、こういう奴だけど、きつと手はだしてこないから。な、臨也。お前シヨタコンだけど、いくらなんでも、恐がつてる子に手は出さないよな……………？」

「いやだなあ、柚留。いくらなんでも、そんなことしないよ」  
てか、できない。だって、柚留の目が据わってたもん！！ 手え  
出したら、何されるかわからないもん！！

俺の言葉に安心したのか、不安そうな顔をしたシズちゃんに似た  
子が、俺に似た子の後ろから、そつと顔を出してきた。

かつ、可愛い！！

また叫びそうになるのを、俺は、自分の指を噛むことで、必死に  
抑えた。ここで叫んだら、柚留に追い出されると、直感したからだ。  
指から血が出ているが、かまわない。

そうしたら、シズちゃんに似た子が更に怯えてしまった。それで、  
柚留とシズちゃんに蹴られまくった。

「はあ……………。だから、臨也を呼ぶのに気が引けたんだよ…………。ま  
あ、とにかく座って。紹介するから」

溜息を吐きつつ、柚留が言う。気が引けたって、酷いな。

「あ、津軽とサイケは、僕の膝の上ね。臨也がいつ襲うかわからな  
いから」

そう言う柚留。お前だって、シヨタコンのくせに。心の中で思っ  
ていたら、柚留に脛を蹴られた。やっぱり、柚留がエスパーだ！  
俺、口に出して言っていないのに！

「やったあつ！ ゆずるのおひざのうえ！」

「ゆずるのひざのうえ、きもちくて、すき……」

そんな俺を尻目に、ちびっ子たちはそんなことを言う。なに！？  
柚留、なんか変な手使ったの！？

というか、シズちゃんに似た子が可愛すぎるんだけど。どうしよ  
う。何あの子、食べちゃいたい。

「ノミ蟲、お前、俺に似たチビを変な目で見るな……………」

「あれっ、わかっちゃったあ？ でも、俺の目は、いつでもシズち  
ゃんを見て」

「死ね」

そんな辛辣な言葉で、俺の言葉は掻き消された。シズちゃんが酷

いです…………。

「えっと、こっちの臨也に似てる子が、サイケ」

「サイケだよ！ よろしく！」

サイケが、俺たちに笑いながら言ってくる。うーん、小さいせいなのか、俺と同じ顔なのに可愛いな。

「それで、こっちが津軽。モデルが、静雄だから、静雄に似てるよ」  
「よろしく」

シズちゃんに似てる子は、言わなくてもわかるだろう。すごい可愛い。本当に可愛い。どうしよう。シズちゃんを見ると、サイケを見たときの俺と同じ心境なのだろう。目が優しい。その目を俺にも向けてほしいんだけどなあ…………。

「サイケ、津軽。コイツらは、君たちのモデルの、折原 臨也と、平和島 静雄だよ」

「いざや、しずお。わかった。おぼえた」

「つがるのモデルのひとが、しずおね！ で、そっちが、へんたいのいざや！」

「変態は余計だよ」

俺って、こんなにウザいっけ。

それとも、柚留が変なことを吹き込んだのだろうか。

「あ、二人に言っとくけど、この子たちは、オートマタだからね。で、サイケと津軽は、体の大きさも変えられるんだ。普通は、17歳の設定になってるから」

「えっ、そうなのか。すごいな、仁さん」

「その労力をほかのことに使ってほしいよね……………」

柚留が溜息を吐く。なんか、可哀想になった。

「いつもは、小さい姿でいるんだ。これからお世話になるかもしれないから、よろしく」

「よろしく！」

「よろしく」

はうう…………。津軽が可愛い…………！

「いざやにいつとくけど、つがるはぼくのだからね！ とつちゃだめだよ！」

「む。じゃあ、俺からも言っとくよ。シズちゃん俺のだからね！ サイケになんかあげないんだから！」

とりあえず、サイケとは「すごく」「仲良くなれそうにない。仲良くなれそうだけど。」

「津軽は、サイケのこと好きか？」

「うん。さいけ、やさしいから好き。しずおは、いざやのじゅきらい？」

「うーん……。変態なところを除けばな……」

「そうなんだ。あ、ぼく、しずおのことも、だいすきだよ」

「ありがとな。俺も、津軽のこと好きだぞ」

「うわあっ！！ 金髪の天使さんがぎゅって抱き合ってる！！ 写メっところ……」

「ぼくも、しっかりファイルに保存しておこう……」

「……さいけも、へんたいさんかもしれない……。っ。どっしりぶじ、しずお……っ」

「ああ、よしよし。泣くな。臨也よりは変態じゃないから」

×21 1対面(後書き)

あー、津軽と静雄がぎゅってしてるとか、もうマジでやばいんだけど。

×22 掘り出してきたアルバム

「ねーねー、ゆずるくーんっ」

僕が読書をしていると、サイケと津軽が何かを持って、僕に寄ってきた。

「どうしたんだい？」

僕は読んでいた本に栞を挿んで、二人に目線を合わせた。

「これ、みはねちゃんがみてただけど、なあに？」

「ん？ どれ？」

そう言いながら、サイケは持っているものを僕に見せてきた。

あ。アルバムだ、これ。

サイケと津軽が持ってきたのは、来神時代のアルバムだった。懐かしいなあ。これ、押入れのどこか奥のほうに仕舞いこんだはずなんだけどな。彌<sup>みはね</sup>彌<sup>みはね</sup>ちゃんは、どうしてこれを見つけたのだろう。

そう思っていると。

「ねえ、袖留。そのアルバム、高校のころのだよね？」

彌<sup>みはね</sup>彌<sup>みはね</sup>ちゃんが、ひよこつと、廊下から顔を出してきた。

「彌<sup>みはね</sup>彌<sup>みはね</sup>ちゃん。これ、押入れの奥のほうに仕舞ったはずなんだけど、何してたの？」

僕が聞くと彌<sup>みはね</sup>彌<sup>みはね</sup>ちゃんは、「げっ」と言いたげな顔になった。なんだろう。また余計なことでもしてたのかな？

「えっと、そのね……。袖留が前に、片付けしろって言ってたから、みいちゃん、お部屋のお片付けしてたの……。そしたら、押入れからそれが出てきてね。で、つい見ちゃったの……。ごめんなさいっ」  
ん？ そういえば、そんなこと言ったな。片付けしてたのか。じやあ、怒らないほうがいいな。これで怒ったら、さすがに理不尽すぎるしね。

「いいよ。片付けしてたんでしょ？ それに、彌<sup>みはね</sup>彌<sup>みはね</sup>ちゃんに貸した部屋に、これを置きっぱなしにしてた僕も悪いしね」

「あれ？ 袖留、怒らないの？」

僕を見て、彌霸禰ちゃんはキョトンとする。なぜか、サイケと津軽までキョトンとしていた。

「怒ってほしいなら、怒ってあげてもいいよ？ 勝手に人のアルバム見たしね」

「いえ！ 結構です！」

「つがる。ゆずるくんがみはねちゃんをおこらないなんて、明日はやりがふってくるかもねっ」

「え……………っ。やり、こわい……………っ」

「サイケ。津軽に変なこと言わないの」

やっぱり、臨也がモデルだけあるのか。サイケもたまにウザイ発言をする。こういうところを似せるなんて、仁さんは、そんなに僕が憎いのだろうか。給料増やせって言いたいのかな？

「はー。君たちね、僕だつて怒らないときぐらいあるし、理不尽なお説教はしないよ。僕がお説教をするときは、絶対に駄目なことをしたときとだけなの。わかる？」

「そうなんだあっ！」

「ゆずるって、お母さんみたい！」

「あした、やり、ふってこない？」

「降ってこないよ、津軽」

僕が言うと、津軽の不安そうな顔が綻んだ。可愛いなあ、津軽。頭いいのに、どっか抜けてるところがいいよね……………誰？

今僕のこと、シヨタコンって思った奴は。蹴り殺すけど。

「まあ、そんなことはいいよ。高校のころのアルバムが、どうしたの？」

「あ、あのね、袖留。その中に、修学旅行の写真があったんだけどまあ、あるよね。アルバムだし。彌霸禰ちゃんは、その何が気になるんだろう。」

「修学旅行って、どんなだったのっ？」

僕が疑問に思っていると、彌霸禰ちゃんが顔を赤くしながら聞い



てきた。へ？　どんなだったって？

「もしかして、彌霸禰ちゃん……………」

「…うん。みいちゃん、修学旅行なんて、一回も行ったことないの……………」

話によると、彌霸禰ちゃんは、学校には通っていたが、そういった行事には参加しなかったそう。行く予定だった大学も、結局は行かないことにした。だから、行事に全く参加したことがないそう。

「みいちゃん、修学旅行のこと、教えてほしいの。楽しかったか、どんなことがあったか、それだけでいいの！　お願い、袖留！　教えて！」

そう言う彌霸禰ちゃんは、いつものふざけた感じじゃなくて、心の底から知りたいという顔をしていた。

この子は、普通の子とは、少し違ったんだ。普段は、誰よりも子供なのに、そういった面では大人だったから。

「わかったよ。教えてあげる。減るわけでもないしね。サイケと津軽も、聞く？」

「うん！　きく！」

「ききたい」

「じゃあ、高3のころの修学旅行のことを話すよ」

×22 掘り出してきたアルバム（後書き）

はい。なんか区切っちゃったけど、意味はありません。長くなるから区切っただけです。たぶん、1話くらいかもしれないけど、修学旅行のことを捏造して書く。がんばろう！

×23 修学旅行が始まりました(前書き)

- ・来神時代捏造
  - ・被害者A子ちゃんが可哀想
  - ・いろいろ妄想
- 上記のことがあっても大丈夫なお方のみ、本文へGO!

### ×23 修学旅行が始まりました

僕、穴戸鬼門しつじんもん 柚留ゆずるは、池袋にある高校、来神高校の三年だ。厨二病とかじゃないけど、僕は、ほかの人とは少し…、否、わりと違うかも。いつも騒ぎの渦中にいると言っても、過言じゃないな。生まれたときから、僕は「平和」なんて位置には立っていなかったからな。あはは。

さて。そんな僕は、今日から三日間、修学旅行だ。行き先は京都。まあ、高校の修学旅行では定番かも。

修学旅行は、嫌いじゃない。楽しいからね。友達と集団行動とか一緒に寝たり、建物見たり。普段遊びに行くのとは、少し違うし。だから、修学旅行に行くのが嫌ってわけじゃないんだ。

でも、不安っていうか、面倒臭いというか。そういうことはある。その面倒臭いことが、もう既に起こっているんだけどね。

「死ね臨也ア!!!」

「おー、怖い怖い。死ねだなんて、嫌だなあ、シズちゃん」

「その呼び方はするなっつってんだろっがああ!!!」  
これなんだよね。

幼馴染の平和島 静雄と、親友（親友って言いたくないけど）である折原 臨也の、「喧嘩」という名の「殺し合い」。これが面倒なんだ。

この二人は、犬猿の仲だ。だから、いつでもどこでも、周りなんか関係なく大乱闘をする。その上静雄は、怪力だ。普通にガードレールとか、標識とか、自販機を投げる。ちなみに、僕は静雄より力が強い。静雄とは違って、父親譲りの生まれつきだ。だから、静雄と臨也の喧嘩を止めるのは、僕の仕事だ。

静雄と臨也が違うクラスだったら良かったかも。だって、別行動だから。クラスによって。そうすれば、喧嘩は少なくなっただかも。まあ、臨也がちょっとかいを出しに、こっちまで来るかもしれないけ

どね。

「殺す殺す殺す!!!」

「シズちゃんつたら、本当に化け物みたいだよねえ。その馬鹿力、どこから出してるの?」

「うるせえっ!!! 殺す!」

人を馬鹿にしたような態度の臨也に、静雄は更にムカついたようだ。近くにあった植木鉢を、臨也に投げつける。

「おい、柚留。そろそろ行ったほうがいいんじゃないか?」

「そうだよ、柚留。君しか止められないんだよ、あの二人は。放つとけばいいんだろうけど、修学旅行前に被害者が出たら、面倒だよ?」

傍観している僕に、親友のドタチンと新羅が言ってきた。ちなみに、コイツらも同じクラスだ。

「えー…。んー、そうだねー。でも、めんどくさいなあー」

そんな話をしていると。

「きゃあっ!!!」

「あっ、」

「あらら、シズちゃん、やっちゃったねえ」

女の子の悲鳴が聞こえた。そっちのほうを見ると、静雄の投げた植木鉢が校舎の壁にあたり、植木鉢が割れて、その破片が女の子に当たってしまったようだ。植木鉢の破片で、女の子の足が、少し切れてしまっている。

「どうすんの。何もしてない子、傷つけちゃったけど」

「っ、……」

「くははっ。シズちゃん、やっちゃった! はははぐえっ」

「うおっ!?!」

「臨也も静雄も、いい加減にしなよ」

僕は、静雄と臨也の首根っこを掴んで持ち上げる。いつもそうだよね。喧嘩すんなって言ってるのに、言うことを全然聞かない。それで被害者出して。

「君たち二人は、いつになったら僕の言うことを理解してくれるのかな」

僕の顔を見て、静雄と臨也、周りの人たち、先生たちまで、顔を真っ青にしている。そんなのは気にしない。

「悪いことした子には、お仕置きが必要だよね」

「ぎっ」「ぎっ」

「ぎゃあああああああ！！！！」

こうして始まった修学旅行。これから先が、不安でたまらないよ。

×23 修学旅行が始まりました(後書き)

はい、なんか一話が長いとめんどろだから、とりあえずここで区切る。そんなだけ。すんません、前置きが長くて。次話からが本題です。さあ、高校でまだ青春真っ盛りなシズちゃんを書くぞおっ！

×24 修学旅行について(前書き)

- ・ 目的を見失っている
- ・ 柚留くん哀れ



× 2 4 修学旅行について

僕たちの修学旅行の行き先は、定番かもしれない京都だ。京都というと、京都タワーとか、寺とかが有名だろう。まあ、僕はどこに行くかなんて、どちらでもいいんだけどね。

今大事なのは……。

「二人とも、行き先で喧嘩なんかしたら、自分たちの命は無いと思っ  
つてね？」

「はい……」

二人に喧嘩をさせない。それだけだ。

池袋で喧嘩をするなら、まだいい。いや、全然良くないんだけど、でも、僕たちのことを知らない人たちがこの二人の喧嘩を見たら、警察が吹っ飛んでくるだろう。

これが修学旅行でのことじゃなくて、僕に直接関わりの無い日だったら、別に構わないんだけど。修学旅行となると、先生たちも巻き込むことになるし。それだけは、なんとか阻止しなければならぬのだ。

「袖留って、実は臨也と静雄の保護者なんじゃないのかなあ？」

「ほんとだな……」

ドタチンと新羅がそんなことを言っている。いやいや。この二人の保護者なんて、堪ったもんじゃない！ 最悪だよ！

「全く。この二人が仲良くなる日なんて、こないだろうなあ、きつと……」

電車の中で、僕は一言零したのだった。

午後1時。

お昼を済ませた僕たちのクラスは、自由時間になった。好きな人と回れるらしい。

僕はもちろん、ドタチンと新羅と以下略のメンバーで回る。（え？ 以下略って、どうしてか？ もう、言うのとかめんどくさいし、君たちもわかると思うから）

「とりあえずー、臨也と静雄の間には、柚留が入っとけば？」

新羅がそんなことを提案する。うわあ、最悪だ。修学旅行のときぐらい、この二人から離れたいんだけど。

「まあ、それが一番かもな。いつ喧嘩するかわからねえし」

ドタチンまでそんなことを言い出した。

で、結局、僕は静雄と臨也の間に入ることになった。もう、ほんと疲れる。

「静雄にも臨也にも言っておくけど、ここは観光客の人とか、僕たちのことを知らない人ばっかなんだから、くれぐれも。何があっても！！ 喧嘩はしないように！」

「うるさいなあ……。わかってるって、それくら」

「君たちならやりかねないから僕は言ってるんだよ！ 言いたくもないことを！」

ダルそうに言ってきた臨也に、僕は怒鳴る。ああ、ウザイ。どうしてコイツはここまでウザイのだろうか。

静雄は、おとなしく頷いてくれた。ま、静雄はとりあえず、あの力を抜けは大分常識人だし。少しくらいなら大丈夫かな。

「それにしても、思ったより人が多いねー」

「そうだな。はぐれないように注意しないと。まあ、離れても大丈夫だとは思うがな」

それに、逸れることもないと思うよ。

僕は密かに、心の中で思った。

「じゃっ、行こっか」

いろんなところを見てきて、大分疲れた。いや、たぶん、それに

疲れたんじゃないと思う。静雄と臨也が喧嘩をしないように制御するのには疲れたんだと思う。

でも、大規模な喧嘩はしなかったし、喧嘩っていう喧嘩もしなかった。二人とも、とりあえず高校生だし、それくらいの頭はあるよね。きつと。

時はあつという間に過ぎて、もう夕方だ。もうすぐ風呂の時間になる。

「いやーっ、お疲れ様、柚留！ よく二人を制御したね！」  
「流石だな」

「それ、褒めてもらっても全然嬉しくないから」

「シズちゃんのばーか」

「臨也の能無し」

なんと腐れ縁。僕たち五人、同じ部屋になった。なんでだろうか。先生、アミダになんか仕込んだだろ。

僕と新羅とドタッチンの後ろで、静雄と臨也が何かを言い合っている。きつと、早くもストレスが溜まってきているのだろう。なんだよ。喧嘩できないぐらいで。二人とも、何？ 喧嘩依存症？

「静雄も臨也も、小学生じゃないんだから、そんなことしてないの！」

僕が二人の前に行つて、言う。すると臨也が頬を膨らませた。

「だって、シズちゃんがかえれないから、つまらないんだもん」

「臨也。一言言わせて。キモイから頬を膨らますな。そんでもって

「もん」とか言うな。吐くから」

というか、臨也ってこんなキャラじゃないよね。おかしいよ。

「柚留がひどーい」

「まあ、本当のことだしな」

「なっ、シズちゃん、喧嘩売ってるの!？」

臨也の反応を見て、静雄がケラケラと笑う。それを見て、臨也が若干頬を赤くした。

……………ははーん。

「臨也ー。ホツペが赤いぞー」

「あつ、赤くないし！ 袖留の目おかしいよ！ 眼科行つたら！？」  
からかってやるうと思つて言つたら、臨也にそう返された。コイツは、僕に殺されたいのだろうか。

まあ、面白いからそんなことはどうでもいい。

「鏡見るー？」

笑いを堪えながら、臨也に問う。ドタチンと新羅も「なんだ、なんだ」という感じで寄つてきた。

「うっ、うるさいな袖留！ 赤くないって言ってるじゃん！！」

「はははっ！ そ、そうだね、赤くないよ、赤くないっ。でも、真っ赤な顔で言つても効果が全く無いよはははっ！！」

臨也が面白すぎて、僕はとうとう笑いを堪えられなくなった。

「おーい、お前ら、そろそろ風呂行けよー」

先生が来たので、僕たちは必要なものを持って、浴場に行くことにした。

浴場の更衣室つて、着替えるためにあるはずなんだけど、僕と新羅、ドタチン以外の奴らみんなの手が止まつてる。脱ぎ途中の奴も、その全員の視線は、みんな、同じところに集まつていた。

「……………あ？ なんだ、テメエら。風呂入らねえのか？」  
服を脱いでいる静雄に。

まあ、当たり前だよな。たぶん。静雄の肌、白いし、綺麗だし。

フェロモン垂れ流しだしね。それも無意識に。あー、超厄介だよなあ、これは。

「？ なんな、っ！？ どうしたノミ蟲！？ すごい鼻血だぞ！？」

「い、いや、なんでもないよ、シズちゃん」

臨也の周りが血だらけだ。あー、掃除とかめんどくさそう。臨也を叱らないとなー。でも、その前に。

「静雄。服着て」

「？　なんでだ、袖留」

「いいから、服着て」

「……わかった……？」

僕の言葉に首を傾げつつ、服を着ていく静雄。

「行こ」

「え、なんでだ」

「いいから」

聞いてくる静雄の言葉を遮る。静雄に言っただって、わかるはずないからな。

先生に事情を話すと、なんとなくわかってくれた。その後、僕と静雄以外の男子が出た後に、僕たちは風呂に入った。

風呂の後の食事で、また臨也が鼻血を出していた。

まあ、そのあとの2日間も、なんとか二人は喧嘩をしなかった。いい思い出になったよ。いろいろと。

「それでさしーちゃん、修学旅行って、こんななの？」

「彌みはね覇は禰ね……」

「ん？」

「袖留から聞いた修学旅行のことは、全部忘れるんだ！！　そんなのは修学旅行じゃねえ！！」

数日後。静雄くんは、彌霸禰ちゃんの言う修学旅行のことを聞いて、袖留が危険人物だということを思い知らされたのであった。

『修学旅行』変態にリミッターをかけるのにやたらと苦勞する行  
事だよ、彌霸禰ちゃん』

×24 修学旅行について（後書き）

はっはっはぁ　今まで一番迷走している作品が誕生した。ちよつと、自分は何がしたかったんだ。本当のこと言つと、シズちゃん裸見て鼻血だしてる臨也が書きたかっただけ。んでもって、哀れな袖留くんを書きたかっただけ。

× 〇 〇 独り言のよじな

『ねえ、おいてかないで……!』

『ひとりはいやだよ……!』

『ひとりはこわいよ……!』

『どうして動いてくれないの……!』

『ぼくはまだ、ふたりといっしょにいたいのに……!』

男の子の叫びは、真っ白な壁の部屋に、虚しく反響した。

その前には、冷たく、動かなくなった見慣れた体があつて

その体は真っ赤に染まっついて

真っ白な部屋には、いやに浮いて見えた

突きつけられた厳しい現実と、

あまりにも残酷な光景に、

『僕は狂いそうになった』





× 0 0 独り言のよじな（後書き）

はじまりますよ、新章。また短いです。はい。すいません。

x ?

柚留

「っ、母さん、父さんっ!!」

そう叫びながら、僕は起きた。

口から出た言葉の人物がここにいるはずもなく。

部屋には、僕の荒い息と、カーテンの隙間から零れる日差しと、見慣れた家具たちがあるだけだった。

「は…っ、は…っ、……………。っ…………」

また、あの夢だ。見たくもない、あの夢。

あの夢を見るたびに、僕は苦しくなつて飛び起きる。その後は暫く体調が悪くて、動くのが嫌になる。

こんなことを、僕はあの日から、ずっと繰り返している。最近になつて、見る日が多くなつた。前は一ヶ月に一回だったのに、このところ、毎日見ている。おかげで、若干寝不足気味だ。そう思いながら、ベッドの上で頭を抱えていると。

「ゆっ、柚留！　なんか大声が聞こえたけど、何!？」

ドアが勢いよく開いて、居候している彌霸禰ちゃんみはねが入ってきた。大慌てできたようで、フライパンを持っている。

……………ん？　フライパン？

「彌霸禰ちゃん、何そのフライパン」

「え、これ？　今から朝ご飯作ろうと思つて出したの。そしたら、2階から大声が聞こえたから」

「ゆずるくん…………」

「ゆずる、大丈夫…………?」

彌霸禰ちゃんが言い終わると、彼女の後ろから、僕の家に住んで

いるオートマタの、サイケと津軽が顔を出した。その顔は、心配そうに歪められている。

「…………ん。大丈夫だよ。心配しないで」

僕は笑顔で言う。しかし、彌霸禰ちゃんも、サイケも津軽も、心配そうな顔を綻ばせない。

「どうしたの、三人とも」

僕がそう聞くと、三人が顔を見合わせて、サイケが口を開いた。

「最近ゆずるくん、具合悪そうだから……………。でも、無理してるみたいだし…………っ」

言っていくにつれて、サイケは涙声になっていく。

それを見て僕は、慌てて言う。

「だっ、大丈夫だから、サイケっ。泣かないで！」

サイケに近寄ろうとして立ち上がると、立ち眩みのような感覚が僕を襲ってきた。それに耐えられず、僕はその場に崩れる。

「袖留！」

彌霸禰ちゃんが僕に駆け寄ってくる。

「ねえ、どうしたの？ どの具合が悪いの？ 言ってみてよ」

「いや、本当に大丈夫」

「大丈夫じゃない！」

言いかけた僕の言葉を、彌霸禰ちゃんが強い口調で遮った。それに、僕は驚く。

「全然大丈夫じゃないでしょ！ いつも早起きの袖留が、みいちちゃんより遅く起きるなんて、おかしいよ！ しかも、もう8時回ってるのに起きなかった。袖留、昨日遅くまで起きてなかったじゃん！」

彌霸禰ちゃんの言葉に、津軽とサイケも頷く。

「……………。心配かけてごめん。でも大丈夫だから。それに、これは昔からのことだから」

僕はそう言って、サイケと津軽の頭を撫でる。

そう。昔からのこと。もう、慣れっこのはずだ。

なのに、まだ。

まだ、怖い。

「柚留……………」

「彌霸禰ちゃん、朝ご飯、作ってもらってもいいかな。僕、着替えも何もしてないから」

まだ心配そうな表情の彌霸禰ちゃんに、僕は言う。

「……………わかった」

納得いかない様子だったけど、彌霸禰ちゃんは、下に下りていった。

はあ。

僕は、溜息をひとつ吐いた。

「あの日」から、みんな怖くなった。何もかもが怖くなった。それを、仁さんがなんとかしてくれた。でも。

まだ怖いんだ。

人を信じきることも、人に頼ることも、全部が怖いんだ。もう、大丈夫なのに。

僕には、信頼できる人たちがいるのに。

「柚留ーっ、菜箸の場所がわからなーいっ！！」

そんなことを考えると、彌霸禰ちゃんの声がした。

だから、考えるのも止めた。

×？ 柚留（後書き）

あー、なんか暗いよー。暗いよー。この話、私の中では比較的シリ  
アスな話になる予感がする。わからないけど。続くぜっ！

x?

## 相談

最近、柚留の様子がおかしい。

みいちゃんやサイケ、津軽が話しかけても、反応しないときがほとんど。こんなこと、普段の柚留なら有り得ない。柚留に何があったのだろう。

誰かに相談したいな……。

あつ、そうだ！

いっくんとしーちゃんに相談してみよう！

「つてことでえ」

「……………うん」

「いっくんとしーちゃんのところに来ちゃいましたあつ」

みいちゃんは、サつちゃんと津軽を連れて、いっくんとしーちゃんのところに来た。二人は、みいちゃんが来て嬉しいはずなのに、なぜか複雑な表情をしていた。なんでだろう？

「いっくんもしーちゃんも、なんでそんなに微妙な表情してるの？」

みいちゃんが来たんだから、嬉しいはずだと思うけど……」

「違うよ。津軽とサイケが来てくれて嬉しいんだけど、彌みはね覇は禰ねちゃんがついてきたから、なんとも言えないんだよ」

「いっくんの馬鹿！！ 塩かぶつて死んじゃえ！！」

いっくんの言葉に、みいちゃんはそう言い返した。どうしてみいちゃんが来て、なんとも言えないのおっ！？

不快極まりないよつ。いくらいっくんだからって、言っつていいことと悪いことがあるんだよ！

そう思っていると、津軽とサッチャんに抱きつかれているしーちゃんが、みいちゃんに声をかけてきた。

「彌霸禰。柚留の様子がおかしいって、なんだよ」

「なんだよって……。あのね、柚留、最近ボーっとしてるが多くなったの」

しーちゃんに聞かれて、みいちゃんは話し始めた。みいちゃんの話が少し聞くと、いつくんも、まじめに聞いてくれた。

みいちゃんは、二人に、ここ数日間の柚留のことを話した。

「柚留ね、おかしいの。朝起きるのがみいちゃんより遅くて。柚留は、いつも早く寝るから、そんなことは有り得ないんだけど……。それと、寝てるときに、よく魔まされてる。でね、そのときに必ず出てくる単語があるんだけど…」

それがね。

『父さん、母さん』

なんだよ。

この単語を、うわ言のように言うの。何回も、何回も。それでね、柚留は、

泣いてるんだよ

寝てるのに、涙を流してたの。なんでかは、わからない。でも、言いながら泣いてるの。

「でもね、柚留、言ってくれないの。みいちゃんやサッチャん、津軽に、何も相談してくれないの。大丈夫って、青い顔で言うだけなの。全然、大丈夫じゃなさそうなのに。柚留は、無理してるよ。絶対に」

みいちゃんが言うと、しーちゃんもいつくんも、今まで見たことないくらいに、真剣な顔をしていた。二人も、こういう顔するんだ



な……。。

そう思っていると、いつくんがみいちゃんに言ってきた。

「柚留は、風邪を引いてるとか、そういうんじゃないんだね？」

「うん。全然違う。咳だっしてないし、熱もない。でも、寝起きとか、最近はずっと顔が真っ青なの。ご飯もあんまり食べなくてね……。今にも死んじゃいそうな感じなの……。っ」

柚留の顔を思い出して、みいちゃんは泣きそうになった。

「どうしよう……。柚留が死んじゃったら、どうしよう！ 柚留は、なんでみいちゃん達に相談してくれないんだろう！？ そんなにみいちゃんって、頼りないのかなあ！？」

一度思い浮かべれば、なかなか消えないマイナス思考。それを落ち着かせるために、しーちゃんが背中を擦ってくれた。

「ねえ、彌霸禰ちゃん」

「うっ、なに、いつくん……。っ」

「仁さんの所に行ってみればどうかな」

「えっ」

いつくんの言葉は思ってもみないことだった。

それを聞いて、よく考えてみる。

たしかに、仁は柚留の育て親。柚留がああなった理由も、もしかしたら知ってるかもしれない……。

よし、決めた……。っ！

「いつくん、しーちゃん、ありがと！ みいちゃん、仁のとこ行ってくる！ 行くよ、津軽、サっちゃん！」

こうして、みいちゃんは、柚留の辛く、悲しい過去を知ることになった。



x? 仁

四月になって、気候も景色も、大分変わってきた。暖かくなってきた、花たちも咲き始めた。動物も活発に動くようになった。庭にある桜は、殆ど咲いている。たまに吹いてくる風によって、その花びらは散っていく。

『何事も無かったかのように、散っていく』

少しの間だけしか、晴れ姿を見せることができない桜。それは儚く、風に攫われてしまう。

人間も、動物も、植物も、全て。

すぐに壊れてしまう。

中でも、人間が一番弱い。

何か辛いことがあれば、自殺やらなんやら。どうして人間は、こうにも弱いのだろうか。

心臓を銃で打ち抜かれれば、すぐに死んでしまう。

あまりにも呆気なく。

「仁！ 仁ってばあっ！！」

「……………あゝ？ あんだ小娘、喧しいぞ」

「喧しいじゃないわよおっ！！ みいちゃん、アンタに用があつて来たのに、話、全然聞いてくれないじゃん！！ それとも、何？

耳が遠くて、みいちゃんの声が聞こえないの？ うっわあ、やつぱりもう年」

「小娘、追い出すぞ」

オレの家に、彌みはね霸は禰ねが津軽とサイケを連れて来た。理由は、知らん。なんでって、コイツの話はまともなものがないからだ。だから、

話の9・9割を聞き流していた。そいだら、彌霸禰が騒ぎ始めた。コイツ、オレはまだ32歳なのに、年増だあ親父だあ、煩い。本当に、口を縫ってやりたい。

「だって、仁が話聞いてくれないからいけないんじゃないじゃん！ これ、真剣な話なのに！！」

「はあ？ お前の真剣な話なんて、服がどーたらこーたらだろう？ じゃあ、オレからアドバイスをしてやろう。んなフリフリで重そうな服は着るのをやめ」

「ちゃんと聞いてよ！！」

オレが言いかけたところで、彌霸禰が大声を張り上げた。それに、オレもサイケも津軽も唾然とした。コイツがこんな風に怒鳴ることなんて、ほとんど無い。今回の話は、本当に真剣で、重要な話のようだ。

「……………スマン。しっかり聞いてやる。なんだ」

「…………… 袖留の様子がおかしいの」

その言葉が耳に入ってきた瞬間、オレは一瞬、思考が停止した。袖留がおかしい。

こんなことは、普段なら有り得ない。そうなるのは、あのせいだ。「どづいつぶつに、おかしいんだ」

「…………… 顔色が、すごい悪いの。真っ青なの。それで、寝てるときに、『父さん、母さん』って苦しそうに言ってる。それも、泣きながら。涙を流しながら」

彌霸禰が言う。津軽とサイケは、今にも泣き出しそうだ。

オレはその話を聞いて、やっぱりと思った。

『父さん、母さん』

この単語は、袖留にとって、一番辛いものだ。

“あの日”のことを思い出してしまっから。

「とつても、とつても辛そうなのに。なのにね、袖留は、大丈夫って言う。大丈夫だから、気にしないでって。全然大丈夫じゃなさそうなのに」

「柚留は、みいちゃんたちを頼ってくれない」

彌霸禰は、気づいていた。

柚留が人を頼らないことに。

コイツや、折原。平和島には、話したほうがいいだろう。

ちゃんとした、真実を。

隠していた、本当のことを。

「……彌霸禰。今から、柚留の話をするから、折原と平和島を呼んでくれ」

「……わかった。今から電話する」

そう言っただけ彌霸禰は、居間を出て行った。

「サイケ、津軽。お前ら、今から聞く話は、ファイルには絶対に残しておくな。チップに記録だけしておけ」

「わかった、マスター」

「はい」

今のコイツらは、普通の姿。チビじゃない。チビになると、若干知能が落ちるが、普通のときは人よりいい。まあ、人口知能だから当たり前か。

チップは、記録みたいなものだ。ファイルとはまた別のもの。例えると、パソコンでその日に検索したものがわかる、経歴みたいなものだ。だから、とりあえずはファイルにはならない。ファイルにするには、コイツら自身が重要だと思っただけを整理しなきゃならないからだ。だからといって、チップに記録したものは、勝手には消えない。いや、本当に便利だな。

「コイツらを作った奴も、相当頭いいな」

「仁、すぐ来れるって、二人とも」

「おう。そうか。じゃあ、茶とか用意しねえとな……。お前ら、手伝え」

「……はい」「」



x? “あの日”

折原も、平和島も来た。これで、役者は揃った。

「これから話すことは、ここにいる奴と柚留だけの秘密だ。本当は、容易く言うようなことじゃない。けど、お前らには、言わなきゃならないんだ。柚留は隠し通そうとしてたみたいだが、たぶん、それは無理だな。いくら隠そうが、言う時期を伸ばそうが、これは必ず言わなきゃならねえことだ。真剣に聞いてくれ」

オレの言葉に、野郎どもが頷く。

そう。これは、隠せない。

柚留と親しい人物の一部には、言わなければならないこと。

“あの日”のこと。

柚留、スマン。

お前の秘密を、お前の許可も無しに、言う。

シヨックと怒りの混じった顔のお前を、容易に想像できちまうよ。

そう思いながら、オレは口を開いた。

「アイツは。柚留は」

マフィアのボスなんだ。

こう言った瞬間、ここにいる全員が、信じられないという顔をした。

そりゃあそうだ。温厚で、面倒見がよくて、優しそうなアイツがマフィアのボスだなんて、誰も考えたことなんてないだろう。

でも、これは真実だ。

それに、こうなるように育てたのは、オレなんだから。

「『狂喜カラス』。この名前、臨也や彌霸彌辺りは知ってるだろう」

たぶん、平和島やサイケ、津軽は、聞いたことない。当たり前だ。マフィアは、表に名前を出さないのだから。

オレの質問に、臨也も彌霸禰も頷いた。

「狂喜カラスと言ったら、世界的な大秘密結社だよね。世界各国に必ずと言ってもいいほど支援団体がいる、大規模なマフィア」

「みいちゃんも、知ってる。狂喜カラスは、狂った奴ばっかなんでしょう?」

二人が言う。

この二人は、裏の仕事をすることがあるから、この手のものには詳しいのだろう。彌霸禰の場合は、親がそっちの仕事をするときがあるのだろう。

「そうだ。狂喜カラスは、昔からあるマフィア。かなりデカイようだ。オレは、デカすぎて把握するのが面倒だから知らねえが、柚留なら、知ってると思う」

ボスだしな。

でも、ここで必ず、疑問に思うだろう。

どうして柚留が、マフィアに、しかもボスになったりしたのだろうか。

柚留は一体どこで道を踏み外したのか。

答えるなら、踏み外したわけではない、というのが一番だろう。

なぜかって、柚留の両親がマフィアの幹部だったからだ。逆に、マフィアの息子がマフィアに入らないほうが、違和感があるだろう。

柚留は、自然にマフィアに入った。

ここまでは、直接話には関係ない。いや、柚留の両親がマフィアだってことは、関わっているが。

このことを前提に、これからの話を聞いてほしい。

まず、柚留の両親について。

柚留の両親は、さっきも言ったように、マフィアの幹部だった。

その中でも、最も優れていた。父親の名前は、あつと涙斗。母親の名前は、



柚樹ゆずきだった。二人とも、とてもいい人だった。強くて、優しくて。そんな二人を、オレらは尊敬していた。なのに。

そんな二人に嫉妬してる奴もいた。

柚留が4歳で、オレが11歳のとき。

ソイツらが、二人を殺した。

それも、まだ幼かった柚留の目の前で。

オレも、そのことは知っていた。でも、その場では見なかったから、どんなに酷いものかはわからない。

でも。

病院に搬送された二人を見て、血を見慣れたオレでも、吐きそうになった。

真っ赤に染まる二人の体。服にも、その赤がついていて、白い布にも染みていた。

その光景は、残酷だった。

真っ白な病室に、その赤が浮いて見えた。

幼い柚留には、その光景は、酷すぎた。

アイツの脳裏に、それはくつきりと焼き付けられて、消えなくなつた。

柚留はその日から、周りの全てのものが怖くなった。人を信じられなくなった。当たり前だ。自分の親を殺したのが、親しかった人物だったのだから。シヨックも大きいだろう。

そんなアイツが8歳になったとき。人には大分慣れたが、信用しきれなかった。そのことを踏まえて、オレは、柚留の世話を買つて出た。オレは、15歳だった。

世話と言つても、生活のことだけではない。マフィアに入るための、訓練などもした。

アイツは、オレに懐いた。どんなときでも、一緒にいるようになった。

でもアイツは、オレを信頼しきっていない。  
できないんだ。人が怖いから。いつ裏切られるかが、怖いから。

「これが、アイツの過去だ」

だいたいを話し終わると、サイケと津軽は泣いていた。彌霸禰も泣いていた。折原と平和島は、辛そうな顔をしている。

「彌霸禰が言っていた、寝ているときに「父さん、母さん」って言うのは、あの日からなんだよ。定期的に夢に見てたらしいが、最近  
は毎日みたいだな」

柚留は、“あの日”から夢をみるようになった。同じような。聞いたことがある。その夢は、

涙斗と柚樹が殺される夢

こんなのを繰り返し見ていけば、発狂してもおかしくはない。柚留も、最初は、おかしくなっていた。今では、少し慣れたようだ。

「柚留っ、そんなに辛いことがあったんだ……………」

彌霸禰が涙声で言う。

「柚留は…………。人が怖いんだね…」

折原が零す。

そう。柚留は、人が怖い。だから、それを克服しないと、人を信頼することもできない。

どうにかしないとマズイ。柚留は、ああいう過去があるからこそ、人に頼らなければならぬんだ。

「みいちゃんたちで、どうにかできないのかな……………」

「できないじゃないだろ。俺たちでなんとかするんだよ……………」

彌霸禰の言葉に、平和島が返す。

それを聞いて、オレは、はっとした。

そうだ。できないんじゃない。やらなきゃならねえんだ。

人が怖くて、見えない壁を隔てて人と接しているアイツ。その壁

は、自分で壊すことはできない。オレらが壊すしかないんだ。  
オレは、決意した。

柚留を助けてやろう。

x ?  
壁

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
い怖い

人が怖い。周りのものが怖い。信用するのが怖い。

“あの日”のことが脳裏に焼き付いて離れない。

白い部屋に真っ赤な血。

動かなくなった、冷たい体。

真っ白な顔。

ニヤリと笑うあの口元。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い!!!

人が怖い！ 信じるのが怖い！

信じれば、裏切られる。裏切られれば、後に残るものは絶望だけ。  
ほかは何も残らない。

“あの日”から僕は、自分の周りに壁を作った。相手に見えない  
ようになっている、透明の壁。それで周りと自分を隔離して、怖さを  
紛らわしていた。でも、あの夢だけは、隔離できなかった。それ  
は、自分自身のことだから。隔離することは、絶対にできない。

だから、更に怖くなるんだ。

人を信じることも、全てが。

同じ夢を何度見ても、慣れることができない。むしろ、怖くなっ

ていく。どんどん、どんどん。周りを遠ざけていく。

どんなに親しい人物でも、信用できない。

どんなに親しい人物でも、隠し事をする。

僕がマフィアのボスだって知ったら、彌霸禰ちゃんたちは、どう思うんだろう。やっぱり、僕を怖がって、避けるのかな。

一人は慣れてるから、大丈夫。大丈夫だ。

でも、なんでだろう。

この、胸を抉られるような感覚は。

たぶん僕は、寂しいのかもしれない。一人に慣れてないのかもしれない。

この狭い部屋から出て、みんなと話したいな。でも、怖いよ。人が怖いよ。

僕は、自分の部屋で震えていた。周りと自分を遮断していた。周りが見えないように。少しでも、自分から遠ざけて。

どれくらい経ったかな。今、何時だろう。

ボンヤリとそんなことを思っていた。

すると。

「柚留！ いるか!？」

仁さんの声が外からした。どうして仁さんが、僕の家にいるんだろう。

「柚留、中入ってもいい?」

彌霸禰ちゃんが聞いてくる。中か……。入ってきてほしくないな……。怖いから……。

「ねえ、柚留くん、入るよ!」

サイケが言いながら、ドアノブを回した。

廊下には、臨也、静雄、彌霸禰ちゃん、サイケ、津軽、そして仁さんがいた。

「……………ど、して……みんなここに……………」

「……………柚留。君の過去の話、聞いたよ」

臨也の言葉に、僕は耳を疑った。

昔の話を聞いた。ということは、僕が狂喜カラスのボスだったことも知れた。

………なんで。

「仁さん、なんで言ったんですか……っ」

「………このことは隠せないぞ、袖留。いつか言うことに」

「なんでですか！？ 臨也たちは、僕に直接関わっていないのに！

！」

僕は、仁さんの言葉を遮った。

そう。コイツらは、僕には直接関わりが無い。だから、そんなこと言わなくてもよかったのに。

どうして。

「………関わってるだろが。お前、よく考えてみるよ。お前のごことを隠し通すほうが難しいぞ」

「でも、それは言わなくてもいいことで」

「袖留……！」

言いかけたところで、仁さんが怒鳴った。僕は、呆気にとられて何も言えなくなる。

「テメエはいつまで逃げてんだ！ 人が怖いのはわかるさ！ あんなことがあつたからなあ。でもな。いつまでもそういうわけにはいかねえんだぞ。怖いからって、逃げてちゃ駄目だ。それは、お前もわかってるだろ！」

「………知つたような口きかないでくださいよ……。仁さんは、僕の実の親じゃないんですから！」

そう言い終わる前に、仁さんに頬を叩かれた。強く、強く。

「……ああ、違うさ。実の親じゃねーよ。だからって、年上に向かつてなんつー口のききかただ！ テメエ、1から勉強しなせ！ 態度が違うだろっ！」

「年上がなんですか！ 僕は思ったこと言っただけですよ！」

「っ！ テメエ………！ なんてわからねえんだ！ お前のご心配してる奴、たくさんいんだぞ！」

仁さんがマジギレしながら言う。その言葉に僕は、勢いが少し衰えた。

「それがわからないのは、お前が壁造ってるからだろうが！んな壁いらねえよ！ さっさとどかさねえと、周りが見えねえぞ！！怖いのはわかるが、それに慣れていかないと、どうすることもできねえぞ！」

仁さんが声を張り上げる。

僕は、泣きそうになった。

知っている。この壁が邪魔なことを。わかっている。逃げてちゃあ駄目なことを。

でも。

「……………壁の壊し方が、わかりませんよ…っ！！」

わからない。どう壊せばいいのか。

人との接し方も、全部わからない。

と。

「柚留」

僕の頬に、彌霸彌ちゃんが手を添えてきた。

「大丈夫だよ。私たちがいるんだから。一緒に壊そうよ！ そうしたら、柚留もきつと、怖くなくなるよ！」

「そうだよ、柚留。俺たちがついてるんだから」

「わかってるだろ、んなこと」

「俺も津軽もいるよーっ！」

「柚留と一緒にいる」

「だからさっ」

「こっちにおいで…！！」

そう言われた瞬間、周りの色が明るくなった。何かが崩れていく音がした。

優しくて、暖かくて。

懐かしい。

ひとりに慣れることなんて、できやしないんだ。どんな人間も。

必ず、傍にいてくれる人がいるんだ。

僕の脳裏のあの光景が、ほんの少しだけ薄れた気がした。



×？ 想い

仁さんや彌みはね霸禰ちゃん、臨也と静雄、サイケに津軽がくれた言葉で、僕を困っていた壁は壊れた。一瞬にして、跡形もなく。

あれから、人を信じることが少しずつ、怖くなくなってきている。前よりも周りに目を向けるようになった。

だから、仁さんたちには感謝をしなければ。

母さんと父さんが殺されたあの日から、僕はひとりだった。

何年経っても、あの光景は頭から離れなくて。

怖いのは、今も同じことだ。

でも、昔と違う。今は、全然違う。

今は、頼れる仲間がたくさんいる。信頼できる仲間がたくさんいる。

だから、怖いのも少しなくなった。

あの日から僕の中にある小さな僕。

闇に怯えて、人に怯えていた小さな僕。

君は今、何を思っているんだい？

今はもう、怖くないかい？

夢を見た。いつもとは、違う夢。

小さい頃の僕がでてきたんだ。

その僕は、真っ暗なところで蹲っていた。震えながら、泣きながら。

僕は、もう一人の僕に近寄って、声をかけた。なんて言ったかは、覚えていない。でも、何かを言ったんだ。

すると、小さいころの僕は、泣き止んだんだ。僕は、その子に手を差し伸べた。その子が僕の手を掴んだ瞬間、周りの黒が、ポロポロと剥がれ落ちて、真っ白になっていった。

そして、小さい頃の僕は、僕に言ってきたんだ。

『もう怖くないから、大丈夫だよ』

ここで、目が覚めてしまった。少しだけ。もう少しだけ見ていたかったような、そんな感じがした。

たぶん、もうあの頃の僕に会うことは、一生ない。なんとなくわかる。だって、僕はもう独りじゃないから。

少し寂しくなるけど、いいと思えた。

あの時僕が言ったのは、なんだったのだろうか。覚えていないから、わからない。

けど、たぶん。

『ありがとう』  
だと思っ。

今まで僕と一緒に生きてくれて、という想いをこめて。

さようなら、昔の僕。

もう蓋をしてしまうから、滅多に逢うこともないだろう。

だけども。

もう一度蓋を開けたときには、僕に逢ってくれるといいな。

x? 想い(後書き)

終わったあああつ!! 柚留くんシリーズ終わりました! あー、  
めずらしくシリアスなの書いたな。こういうのは、たまに書くとい  
い。楽しかったっちゃあ楽しかった。

では皆さん! 次回の話をお楽しみにしてください!

×25 カップルに質問！ 前 (前書き)

- ・ 会話文
- ・ 自己満足クオリティ
- ・ オリキャラ導入

×25 カップルに質問！ 前

圭「皆さん、こんにちは。佐久間 圭士郎です。以前も作者に駆り出されましたが、今回は」

龍「圭士郎さん」

圭「ひああっ！！」

龍「……なんですか、その声」

圭「なっ、なんですかじゃねえ！！ テメエ、オレが耳弱いこと知ってて、耳元で声出しただろうが！」

龍「はい、まあ」

圭「ふざけんな！ 変な声出ちまっただろうが！」

龍「可愛かったですけど」

圭「わけわかんねえよ！ 可愛いとかないし！ 年上をからかうな！」

龍「はいはい」

圭「頭撫でてくんじやない！ わかってないだろ、お前！」

龍「えー、今回は作者のわがままで」

作「おい、そんな言い方はないんじゃないー？」

圭「げっ、変態……」

作「そこ。変態は褒め言葉だゾ」

圭「キモイわ！ てか、なんでここにいるんだよ、お前。仕事は」

作「仕事？ 何ソレ、食えんの？」

龍「……………サボリだな」

作「うつるさいな！ 放つといてよー！」

圭「あー、事が進まねえんだけど、どうすりゃいいんだ……」

龍「とりあえず、今回のことについて説明からだろう」

圭「そうだな。じゃ、作者、説明しろ」

作「生みの親になんて口をきくんだ、お前は！ でも可愛いから許す！」

圭「はっ！？」

龍「安心してくださいよ。圭士郎さんは俺のだから、渡しはしませんから」

圭「はあっ！？」

作「あー、はいはい。バカカップルに設定したのウチだけど、やっぱム力つくなー……………」

龍「文句ありますか」

作「ないですー。はあ。じゃ、みんなに今回のことについて説明するよー。今回は、『カップルたちに質問してみた』第一弾ですつ。

第一弾は、臨也と静雄でーすー!!」

圭「あの二人は、袖留と仲いい奴だよな。てか放せ、龍汰」

龍「そうですね。静雄って奴は幼馴染だそうですね」

圭「おい、力強くなってんぞ」

作「じゃっ、早速二人を探しに行こう！」

龍「行きましようか、圭士郎さん」

圭「おいっ、なんで姫抱っこなんだよ！ 降ろせ、ばかー!!」

臨「シズちゃん、ここのシェイクおいしいんだよ！」

静「そうなのか？」

臨「そうなんだよ！ シズちゃんが俺にキスしてくれれば、シェイクを奢って」



作「あーっ！！！！ シズちゃん発見ーっ！！！！」

静「ぬはっ？」

臨「っ！？」

作「ふおおおおお……っ！ シズちゃん久しぶりいいっ！」

静「……………？ あ、作者」

作「あーっ、カッコイイよー！ カッコイイよシズちゃんって、うぎゃあ！？」

臨「お世話になってますねー、作者さん」

作「あー、うぎゃ「い・ぎ・やですー！！」

作「人の話は最後まで聞きなさい！ てか、なんでそんなに怒っちゃってるワケ？」

臨「なんでじゃないよ。俺のシズちゃんに手を出しといて、ただで済むと思ってるの？」

作「うん。だって、いいじゃん。なんかが減るもんじゃないし。ねえ、シズちゃん？」

静「そうだぞ、臨也。コイツには世話になってるし、これくらいいいじゃんか」

臨「よくないよ、シズちゃん！ コイツはシズちゃんのそのキレイ

な体を穢そうとし」

作「臨也。もう小説に出さないよ?」

臨「すみませんでした」

作「まつ、強<sup>あなが</sup>ち違<sup>あなが</sup>つちやいないけどねーっ。あははっ」

臨「最悪だ!」

龍「おい、作者。本題に入らないと、そろそろマズイと思うぞ」

作「はっ。そうだ! あ、まだ圭士郎兄さんは姫抱っこされてるんだ」

圭「降りしてくれねえんだよ!」

作「ま、いつか。じゃ、ウザヤとシズちゃん、ちょっと来て」

静「? 何すんだ?」

臨「ウザヤじゃないんだけど……」

×25 カップルに質問！ 前（後書き）

長いから区切るだけです。意味はありません。

×26 カップルに質問！ 後（前書き）

- ・ 会話文
- ・ この前の続き
- ・ 自己満足クオリティ
- ・ 絶賛迷走中

×26 カップルに質問！ 後

作「はいっ。始めました質問コーナー！ 今回のコーナーでは、小説に出てくるカップルたちに、いろんなことを聞きます！」

龍「なお、この質問は作者が適当にチョイスしたものです。全く役に立ちませんので、そこら辺をご了承ください」

圭「作者は何においても適当だからな」

作「なんだよ！ 適當の何が悪い!!」

龍「あー、うるせー……………」

静「俺ら、なんのために連れてこられたんだ…？」

臨「ねえ、用がないなら帰りたいんだけど」

作「あーっ、これからだから！ 帰っちゃダメ！」

臨「じゃあ早くしてよ」

作「はあーっ。ほんと、臨也はせっかちななあ。まあ、ウチもそろそろ疲れてきたし、帰るね。じゃっ、二人とも、あとよろしくー」

圭「は！？ ちょ、おいつ！ ……………行っちゃまったぞ、アイツ」

龍「いいんじゃないですか。あの人がいると、逆に邪魔ですし。じやあ、本題に入りましょう。平和島さんに、折原さん。今日は二人

に、いくつか質問をさせてもらいます。それに答えるだけでいいです」

静「それだけか？」

圭「おう。そんなだけだ」

臨「なんだ。簡単じゃん。すぐ終わるかも」

龍「じゃあ、早速……。えーと、『相手のどんなところが好きですか?』」

臨「どんなとこって、全部好きだよ！ シャイなところも、ツンデシなところも、全部好き！」

静「……………?」

臨「……………まさか、シズちゃん、見つからないの…?」

静「……………顔……………?」

圭「今だけ、折原に同情する」

臨「シズちゃん、ひどい！ でも、いいよ！ そんなところも好きだよー！」

静「……………いやでも、普段はウザイけど、しっかりしてるときはスゲーかっこいい……………、っ!」

臨「……………シズちゃんラブ!!」

圭「そ、そう落ち込むなよ。な？」

静「最悪だ……………っ!!」

龍「次いきますよ。『相手をカツコイイと思うときは?』」

臨「うーん。シズちゃんって受けのくせに、たまにスツゴイ男らしいこと言っただよねえ。そこが好きだなあっ」

静「真剣に仕事してるとき」

臨「そうなの!?!」

静「それに、そのときだけは静かだからな」

臨「やっぱりそういう方向にはいくのね!」

圭「折原がすごい泣いてる……………」

龍「『恋人のどんなところが嫌ですか?』」

静「ウゼエ」

臨「即答したあ!!」

圭「それくらい酷いってことだろうっ……………」

臨「俺はシズちゃんのこと全部好きだから、嫌いなどところかないけど。我俣言つと、構ってくれないときのほうが多いから、構ってほしい！」

静「ウゼエ……………」

臨「圭士郎くん、シズちゃんが酷い!!」

圭「うわっ、こっち来んなっ」

龍「その穢い手で圭士郎さんを触らないでください」

臨「俺の周りには鬼しかいないの!？」

龍「『恋人を動物に例えるなら?』」

臨「犬だね! わんこ!!」

静「……………ネズミ……?」

臨「なんで!？」

静「その小汚い感じが……………」

臨「シズちゃん、俺泣くよ!？」

静「スマンスマン。冗談だ。猫だな、臨也は」



圭「冗談に聞こえなかったのは、オレだけか……?」

龍「俺も聞こえませんでしたよ」

龍「『恋人のイメージカラーは?』」

臨「黄色かなー?」

静「黒だな。いつもの格好だし」

龍「『別れたいと思うことってありますか?』」

臨「ないよ! 彌霸禰ちゃんのお蔭で、全くないよ!」

静「……………ねえけど、たまに離れたくなる……」

圭「折原、静雄に何してんだよ」

臨「何もしてないよ!?!」

龍「『恋人と一緒にいくなら、どこがいいですか?』」

臨「シズちゃんの行きたいところなら、どこでも! 欲を言えば遊園地!」

静「俺も、臨也と同じだ。俺、そういうのはよくわかんねえから」

臨「え、本当に？」

静「ああ。それに、臨也とならどこ行っても楽しいからな」

臨「……………っ!!」

圭「シズデレってやつか？」

龍「圭士郎さん、よく知ってますね。でもとりあえず、先にティッシュを持ってきましょう。鼻血で周りが酷いことになりそうですからね」

龍「『コイツが恋人でよかった、と思うときは?』」

臨「全部だよ、全部！ シズちゃんが恋人なら、全部の時間が幸せだよ!」

静「……………限定個数のプリンが必ず手に入るから、それ食ってるのかな」

臨「俺って、シズちゃんに愛してもらってないよね」

龍「これで最後ですね…。『恋人に一番言っほしい言葉は?』」

臨「『好き』か、『愛してる』かな！ これ言ってもらえたら、俺、すごい嬉しいよ!」

静「俺は、もうないな。毎回言ってもらってっから」

圭「コイツら、バカップルだ……」

龍「折原に平和島。今日は助かった」

圭「ありがとな。これ、差し入れのプリンだ」

静「プリン……！」

臨「何！？ 圭士郎さんはシズちゃんを餌付けするわけ！？ そんなことさせないよ……！」

圭「はあ？んなことしねえよ」

龍「そうだな。圭士郎さんには俺がいるから十分だし」

圭「っ、な……っ！ばかあっ」

静「……………圭士郎さん、可愛いな……………」

臨「シズちゃんあん！？俺も思ったけど、シズちゃんは俺のだからね！？どこにも行かせないよ！」

龍「俺らも、さっさと帰りましょうか」

圭「そっ、そうだな。じゃ、またな、二人とも」

静「さよなら」

臨「じゃあねー。さっ、シズちゃん。俺らもそろそろ行こつ。シエイク、奢ってあげるよ」

静「ほんとかっ!？」

臨「ん。行こ」

静「おっつ」

×26 カップルに質問！ 後（後書き）

ああ、臨也が哀れ（笑）。圭士郎くんに萌え萌えしたくて書いたとか。冗談です。

×27 家族が増えました

今日は仁さんに呼ばれた。なぜかはわからない。でも、まあ、あの人のことだからくだらないことだろう。

「ねえねえ、袖留っ。今日は仁、なんでみいちゃんたちを呼んだんだろね？」

隣で、ひよこひよこ跳ぶように歩いている彌みはね霸は禰ねちゃんが言う。歩幅が僕と大分違うから、大変かな。

「マスター、なにがあつたのかなあ？」

「楽しいことだといいな……………」

そんなこと思っていると、腕の中にいるサイケと津軽が言った。

津軽は大人っぽいけど、子供らしいよね。いや、サイケのほうの子供か。

「また変なことじゃないといいけどね……………」

心配しながら、僕たちは仁さんの家に入った。

「わあっ、すごい！」

「しずおにそっくり……！」

「わあっ、しーちゃんと同じ大きさだあっ……！」

「……………仁さん」

「……………はい」

仁さんの家の居間に入って、僕はブチギレそうだった。いや。ブチギレた。

どうしてかって？

そりゃあ、決まってるよ。

「どうしてオートマタが増えてるんですか!？」

居間に静雄モデルのオートマタがあつたからだよ。

僕たちが居間に入って目にしたものは、そこには合わない格好を

していた奴だった。

白いスーツ、ディープリングのシャツ、サイケと同じような感じのヘッドホンをしていたのだ。居間にそんなハデな格好は、似つかわしくない。

僕たちは、啞然としてしまった。理由は、静雄モデルのオートマタが増えてたから。これ以外にはない。

そして僕は今、仁さんをお説教中だ。

「アンタ、仕事に1ヶ月も来ないから何してるんだと思ってたら！これ作ってたんですか！？」

「まあな。すごいだ

「すごくないです！！ 仕事しないでこんなことしてるなら、クビにしますけど！」

「すいません、店長。もうしません」

そう。作ったことに怒ってるわけではない。仁さんが仕事に来なかったことを怒っているのだ。

仕事しないで自分の趣味を優先するって、アンタは小学生か！

そう言いたくなるだろう。

言いたいことを言っただけでスッキリしたところで、僕は、彌覇彌ちやんたちのほうを見た。みんな静雄モデルのオートマタとじゃやれている。静雄モデルのオートマタは、困り顔のような、微妙な顔だ。

「仁さん。アイツの名前、なんていうんですか？」

「ああ。教えてなかったな。よし。おい、お前からこっち来い」

仁さんが声をかけると、彌覇彌ちやんたちがこっちに来た。仁さんに手招きされて、オートマタが仁さんの横に立つ。

「えっとな。コイツの名前はサイケデリックドリーム静雄、略してデリ雄だ！」

「マスター、その呼び方はやめてくれませんか」

仁さんの言葉に、デリ雄が露骨に嫌そうな顔をする。まあ、ダサイしね。しょうがないよ。

「じゃあさっ、じゃあさあっ…」

そう思っていると、彌霸禰ちゃんが口を開いた。彌霸禰ちゃんと呼び方思いついたのかな？ でも、ネーミングセンスが、ものすごく微妙だしなー……。臨也はいつくんだし。静雄なんてしーちゃんだし。大丈夫かな……。

「サイケデリックドリーム静雄の、ドリームを日本語にしてー、夢<sup>め</sup>雄<sup>お</sup>なんてどう？」

これには、デリ雄以外のみんなが驚いた。彌霸禰ちゃんって、こんなにいい名前を考えられるんだ。

「彌霸禰ちゃん、そんなにいい名前を考えられる脳みそを、いつ移植してもらったの……！？」

「失礼ね、袖留！ 脳みそはそのままだよ！ それに、みいちゃんはネーミングセンス抜群だからねっ！」

「嘔吐け小娘」

「うるさいわよーっ！！」

あ、仁さんと彌霸禰ちゃんが喧嘩しそう。酷くならないうちに、なんとかしよう。

「じゃあ、夢雄って呼んでもいいかな？」

僕は夢雄に聞いた。夢雄は、満足そうな顔で頷く。良かった。気に入ってもらえたみたい。

「僕は、穴戸鬼門 袖留だよ。この子たちは、サイケと津軽。夢雄と同じオートマタだよ。知ってる？」

「ああ。マスターから聞いている。俺より小さいけど、とりあえず兄貴たちなんだよな」

「とりあえずってなんだよーっ！」

「でも、さいけ。ゆめお、普通のとときのぼくたちより、体、おっきい。だから、お兄さんみたいには、しにくいと思う」

津軽がサイケに言う。確かに。自分より小さいやつを兄貴と思うのは、大分違和感があるだろう。津軽はそこら辺までわかっている。こういうところが大人だなあ。オリジナルより。

「ゆめお。ぼくたちのこと、呼び捨てでいい。普通に接してくれね



ば、じゅうぶん」

津軽が夢雄に向かって言う。

「わかった。よろしくな、津軽。サイケ」

そう言いながら夢雄はしゃがんで、津軽とサイケの頭をくしゃくしゃと撫でた。サイケは、どこか不満気だったけど、満更でもなさそうだった。津軽はふにやふにやと笑っている。

「仁さん。夢雄は、この家にい……………、何してるんですか……………」

……………」

「袖留っつ、仁がみいちゃんのスカート捲ってくるー！」

「はあっ!? ちげえよ! コイツがオレの携帯をスカートの下に」

「……………二人とも、そこに正座しなさい」

結局、夢雄は僕の家に来ることになりました。

×27 家族が増えました(後書き)

デリ雄ーっ!! アタシ的デリ雄設定

・面倒見がいい

・生活面での頭の使い方が超良い

・勉強はできない

・誘い受)(殴

「シズちゃん！」

いつものようにブクロを歩いていたら、臨也に会った。声を聞いた瞬間イラつとした。あ？ 恋人なのにイラつくのかつて？ そりゃあ、当たり前だ。コイツはウザさの化身みたいな奴だからな。言動だって何だって、いつつも先読みして、俺の考えてることもわかっつて、なのにはわからないフリして、本当にムカツク、っつかコイツ前世蟲だろ、なんで蟲が人間になっただよワケわかん

「シズちゃん、どうしたの？ 顔がすごい怖いけど」

考えている俺を、臨也が邪魔した。クソっ。本当にムカツク。でも、殺したいほどではない。最近、捻り潰すくらいになってきた力も、大分安定している。

そんなことは、まあいいか。

「テメエノミ蟲。ブクロに来んたって何回言えばいいんだよ」

「何回も。言われたって、俺は来るけどねー」

ノミ蟲の一言に、若干カチンときた。ぶん殴ってやろうと思っ拳を握った。が、その拳は、次の臨也の一言で形が歪んだ。

「ざけんなノミむ」

「もちろん、シズちゃんに会いにね」

コイツの腹の立つところは、こういうところだ。相手が油断したところで、スキをついてくる。そのせいで俺は、昔にコイツを殺し損ねたのだろう。ああ。本当にムカツク。

そんな思考は脳の隅のほう。今の俺は、恥ずかしすぎて何も言えなかった。言おうとしても、声の上擦って上手く言葉にならない。今、顔真っ赤だろ、俺。テメ、ノミ蟲。ニヤニヤすんな変態。

「真っ赤になっちゃって。可愛いねー、シズちゃん」

「っ、な、可愛くねえ馬鹿！ お前、おかしいんじゃない？  
こんな図体の男が可愛いって！」

クソっ、こんなに声が震えてたら、全然反抗になんねえよ。

「ハハッ。その通りだねえ。でも、俺が言ってる可愛いは、そういう面じゃないんだよ、シズちゃん」

もちろん、そっちの面も含んでるけど。

ニヤリと口角を吊り上げながら言う、目の前の黒。ああ、腹立つ。本当に。俺は、コイツのどこが好きなのだろうか。どこに惹かれた、俺。

「で、シズちゃん。今日は何の日か知ってる？」

「……あ？ 4月20日……？」

「そう。何の日？」

臨也が急に変なことを言う。何の日って……。

「……あつ、」

「わかった？」

「作者のじいちゃんと、作者の友達のじいちゃんと、作者の友達の誕生日か？」

「すごいっばいいるね！ でも違うよ！」

違う？ 何が違うのだろうか。これ以外、思い当たるものがないんだが……。

そう考えていると。

「シズちゃんじゃあ、一生わからなさそうだよなあ……、はあ臨也が額を押さえながら溜息を吐く。

なんだよ。それは俺が馬鹿だつて言いたいのか。ウゼエよノミ蟲。

「今日、4月20日でしょ？ 月日を抜いてみて」

「？ 420？ ……あ。」

「しずお……？」

「ピンポン！ 正解シズちゃん！ 今日おかしは420の日だよ！」  
「うわ、くだらねえ。」

「だからなんだよ」

とりあえず、臨也の真意がわからないので聞いてみる。

「お誕生日の小説を書き損ねた可哀想な作者が、静雄の日ぐらいシ

ズちゃんを好き勝手やらせるやあ、みたいなことを言ってたから、作者に代わって俺がやってやるうと思ってるね！」

作者……。ああ、アイツか。あの変な奴か。確かに、誕生日は書いてなかったな。でも、そんなことしなくてもいいんだが。ただの語呂合わせみたいなことだし。

「シズちゃん。これは俺がやりたいだけだから。むしろハッキリ言っちゃうと、俺の欲望を満たすためにやってることだから」

「もういい。お前帰れ」

「そんなこと言わないでよ。俺、シズちゃんにしてあげたいこと、たくさんあるんだから」

臨也の一言に、俺は腹が立った。コイツのことだ。碌なことじゃねえだろう。

そんな感じの眼差しで見えていたら、臨也が言ってきた。

「もちろん。厭らしいことじゃないよ！ したいとは思ってるけど、シズちゃん、ムリヤリすると怒るから。だから、シズちゃんの要望を聞くことにしたの」

臨也が言う。若干疑ってしまうが、まあ、そのときはそのときだ。そう思いつつ、俺は、要望とやらは、どこからどこまでOKなのか聞いてみる。

「なんでもいいよ。俺にできることなら、なんでもするから」

口角を上げながら言う臨也。

して欲しいことと言われても……。いくら恋人だからって、無茶なことや大事を頼みたくは無い。ささやかなことでもいい。例えば、ウザイことをしないとか。いや。流石にこれはムリだな。

そして、考えに考えた俺の答えは、これだった。

「臨也の家でゆっくりさせてくれ」

シズちゃんたら、どうして遠慮しちゃったんだろう。俺にできることなら、なんでもするのに。きつとシズちゃんのことだから、迷惑かけたくない、みたいな、そういう思考なんだろうな。全然、迷惑じゃないのに。俺がやりたくてやってることなんだから。

でも、予想外のことだったな……。俺の家に来たって。いつでもできることなのに。まあ、シズちゃんの望みなら、いいんだけどね。

「シズちゃん、俺の家で何する気？」

「……特にねえよ？」

そう言いながら、シズちゃんは俺が淹れた紅茶を飲む。あ、喉仏エロい。

「おい。臨也。顔がニヤけてるぞ。キモイ」

「キモイなんて言わないでよ。シズちゃんがエロいんだから、しょうがないじゃん」

そう言うつと、シズちゃんは顔を真っ赤にした。可愛いなあ、本当に。ウブなんだから。

「エロいって、」

「エロいよー？ シズちゃんって存在自体がエロい。本当に。行動ひとつひとつが誘ってるみてー。キモイそれ以上言ったら潰す」

シズちゃんが物騒な言葉を吐く。怒ってると思う人がほとんどだろう。でも、シズちゃんは全然怒ってないんだよ。恥ずかしいだけだつて、現に顔が真っ赤だもん。あー、ツンデレ萌え。

「はいはい。で。なんかやる？ DVDあるけど、見る？」

「……………眠いから寝る」

え、何ソレ。俺の家に来て、やることが昼寝？ ちょっと、何なの。

「ちよ、シズちゃん、寝るって」

「お前、言っただろ。俺の要望なんでも聞くつて。だから、寝る」  
我俣お姫様？ 確かにそうは言っただけど。わざわざ俺の家に来て

することじゃないよね？

「うるせ……、俺ア今ねみいんだよ……」

欠伸を噛み殺しながら言うシズちゃん。言いながら彼は、バーテ  
ン服の上に着ているものを脱いでいる。ちよつと、シズちゃんの着  
てるもの、上がシャツで下がスーツのズボンとか、マジエロス！  
ヤバイんだけど、どうすればいいの、俺。

「シズちゃ」

「おやすみ」

シズちゃんは一言そう言って、横になってしまった。

俺の膝の上に頭を乗っけて。

え、ちよつと、シズちゃんに何してんの。って、もう寝てるし！  
早いよ、シズちゃん。

マジエロスなシズちゃんが俺の膝に頭乗っけて寝るとか、拷問以  
外の何ものでもないよ？ え、これって何、愛が試されてるワケ？  
俺がここでシズちゃんを襲ったら、シズちゃんキレルよね。うん。  
確実に。

「はあ……」

俺の精神が削られていくのを実感しながら、俺は、シズちゃんの  
髪の毛を梳いた。

420の日！

（圭士郎兄さん、どうしよう！ シズちゃんが膝枕されてる、ウザ  
ヤに！）

（おい。お前、覗き見すんなよ。通る人たちの視線がイテエ）

（ちよつかりビデオカメラとデジカメ装備してましたね。しかも、  
かなり値が張る双眼鏡も持ってましたし。出かけるとか言って、観

察する気満々じゃないですか)

(観察じゃねえよ、龍汰。盗撮だ)

(ギャアアアア、シズちゃん、寝顔エロス!!! MAXエロス!!!)

(圭士郎さん。俺たちまで警察の世話になる前に、帰りましょう)

(そうだな)

(静雄ラーラーブ!!! ウザヤそこ代われー!!!)

(ゆずるくん、あそこの人、何してるの?)

(サイケ、津軽。見ちゃ駄目だよ)

(ねえ、柚留。110番呼んでもいいかなあ。みいちゃん、流石に

引くよ……)

(関わらないのが一番だよ、彌<sup>みはね</sup>覇<sup>は</sup>禰<sup>ね</sup>ちゃん)



イベント小説 420の日(後書き)

420の日＝静雄の日！ 静雄の日とは、平和島静雄を愛でる日だ！ さあ、みんなで愛でよう！ 臨也がシズちゃんに膝枕しちゃつてるところを書いていて、臨也の位置をアタシにしようかと思った。本気で。臨也そこかわ(ry

この小説書いているときにヨダレが出たとか、絶対にバラさないで。おじいちゃん、友人のおじいちゃん、友人のH・S、誕生日おめでとう！

「柚留。今から買い物行ってくる」

「え？ でも、なんでこんなに早く？ まだ開店してないよ？」

リビングの片付けを彌霸禰ちゃんたちチビっ子にさせていたら、夢雄がトートバックを持ってリビングに顔を出した。

まだ10時5分前だ。店は10時から。まだ早いだろう。まあ、ここから歩いていけば、店までは5分かかる。でも、わざわざ開店直後に行かなくてもいいだろう。

夢雄に言つと、夢雄は笑いながら言った。

「ああ。でも、開店直後は客があんまりいねえから、セールとかやってんだよ。食費はなるべく軽くしたほうがいいだろ？」

「そうなんだ。あ、でも、その格好だと目立つから、着替えて行きな？ 僕の服、貸してあげるから」

「ん。ありがとう、柚留」

にこつと笑つて、夢雄は僕の部屋に行った。

なんか、静雄がモデルなのに、全然性格が違うなー……。そう思っていると。

「柚留ー、みいちゃんも買い物きたーい！」

「僕もーっ！」

彌霸禰ちゃんとサイケが言ってきた。津軽は片付けを黙々として

いる。  
「だーめ。二人とも、片付けしなさい。ほとんど二人が散らかしたのに、なんで津軽が片付けてるの。おかしいでしょ」

そう。この二人は片付けができない。特に彌霸禰ちゃん。サイケは、やればできる。のに、やらない。彌霸禰ちゃんは、物が多すぎて片付けるところがなくなっている。津軽は、しっかり片付けができる。もちろん、夢雄は当然、できる。

「ほら、さっさと片付けちゃいな。僕は夢雄と買い物に行ってくる

から。津軽、よろしくね」

「わかった。ゆずる、ゆめお、いつてらっしやい」

津軽がふにやっと笑いながら言う。僕が頭を撫でてやると、くすぐったそうな顔をする津軽。可愛いなあ、津軽。後ろでは、サイケが僕をジト目で見ていた。ああ。津軽を取られたみたいでイヤなんだね。じゃあ、早く片付けなよ。

「袖留、これでいいか？」

そんなことを思っていると、夢雄が下りてきた。見ると、僕のワイシャツとジーンズを着た夢雄が、そこに立っていた。

「わあっ、似合うよ、夢雄！　じゃ、行こうか。彌霸禰ちゃん、サイケ。津軽の言うことしっぴかり聞いて、片付けしてね！」

「はあーい……」

「いつてらっしやい」

僕たちがスーパーについたのは、開店直後の、人が少ない時間だった。

「わー、いつも混んでるけど、開店直後ってこんなに人が少ないんだー……」

「そんなに混んでるのか？」

「うん。いつもはね。夕方が特にな」

夢雄の質問に、僕は答える。そう。この店は、夕方によく混む。

まあ、どこの店でもそうだろうけどね。セールとかやってても、全然間に合わないんだよ。

僕が言うと、夢雄はげんなりした顔をした。それから、「そんなに混むなら、俺は夕方は行かねえ……」と言った。

「ははは。まあ、それが一番だね」

そう言ったところで、夢雄が僕の肩越しに目を向けた。なんだろう。

疑問に思ってみてみると、そこには、『タイムセール』の文字が。下に目をやると、ちくわがビッシリと置いてある。

「わ……、安っ！ 何この値段。僕、見たことないんだけど……」  
「やっぱりやってたな、タイムセール。ほかのもあるか見てみつか」  
そう言いながら夢雄は、かごの中にちくわを5袋程入れて、歩き出した。

買い物の結果、セールで安くなっていたものが大半になった。値段も、今までより何倍も安かった。

「夢雄、ありがとう」

「いや。俺がやりたくてやってることだから、気にするな。家事は好きだからな」

ニコニコと笑いながら言う、夢雄。

そういえば。

「ねえ、夢雄。どうして買い物のときに、カートを使わなかったの。今思い出した。夢雄は、かごしかつかっていなかった。重いから、カートにすればよかったのに。」

すると、夢雄から意外な言葉が出た。

「かごのほうが、いいんだよ」

何がいいのだろうか？

「カートだよ、物の重さがわからないから、ポンポン物を入れちまうだろ？ でも、かごと重さがわかるから、必要な物しか買わなくなるんだよ」

そうなんだ。初めて知った。

「少しでも節約したいからな」

こういうことをたくさん知っている夢雄が、僕は主婦に見えてならなかった。

(ただいまー、って、うわぁ……………)

(ゆずる、ごめんなさい……………っ)

(なんでこんなになってんだ?)

(さいけとみはねが、かたづけしなくて、ぼく、キレちゃって……  
…っ)

(あー……………。それは、サイケと彌霸禰ちゃんが悪いね。津軽、落ち込まないで?)

(おい、柚留。二人とも、シヨックがデカかったみたいで、真っ白だぞ)

(ほっといてあげて)

×29 嫉妬したの。。

俺はシズちゃんが好きだ。愛してる。

化け物みたいな力も、実は誰よりも優しいところも、ゼーんぶ大好き。

だからね。

「臨也」

「何、シズちゃん」

「なんで怒ってんだよ、お前」

俺も怒りたくなるときがあるんだよ。

俺は今、すごく怒っている。すっごくね。

理由は簡単。シズちゃんのせい。

今日の昼間に、池袋を歩いていたら、俺はシズちゃんを発見した。それを見て、俺はもちろん、シズちゃんに声をかけようとした。

が、しかし。

シズちゃんの横には、上司の田中トムとかいう男がいた。

それだけでも許し難いことなのに。なのに！

シズちゃんは、あろうことか、とびきりの笑顔で、ソイツと話してたんだよ！

有り得ないよね！ 恋人の俺には、笑顔なんてあんまり見せないのに、上司には簡単に見せるとか！ シズちゃんは何を考えているのだろう！

まあ、こんなことを言ったところで、シズちゃんがどうにかできるわけじゃないんだけどね。だって、シズちゃん気がついてないし。自分の可愛さに。ほんと、サイアクだよ。

で、今俺は、家で仕事をしている。家にはシズちゃんが来てるよ。だから、仕事なんか蹴って、シズちゃんとイチャイチャしたい。だけど、俺は今怒っている。これは、嫉妬だ。自分でもわかっている。自分でもわかっていても、この怒りは抑えきれない。だから、俺はシズちゃんに解消することにした。

ってことで、シズちゃんに構ってあげない。

「なんでだろうね、シズちゃん。自分で考えてみなよ。今、俺は仕事してるから」

そう冷たく言い放つと、シズちゃんは、少し悲しそうな顔をした。「わかんねえよ……………。俺、お前になんかしたのか……………?」

若干上擦っているシズちゃんの声。そちらをちらりと向いた俺は、驚いた。

シズちゃんが半泣きだったのだ。

確かに、やったのは俺だ。イラついてて、シズちゃんに少し冷たく接した。でも、泣くなんて予想外だった。いつものシズちゃんなら、物を投げつけてくるとおもったのに。

「しっ、シズちゃん、泣かないでっ」

「だ、って、いざや、怒ってるの俺のせっ、なんだろうっ」

「ちっ、違うよシズちゃん！俺が怒ってるのはシズちゃんのせいじゃないから！」

泣いてしまったシズちゃんを見て、俺は咄嗟に嘘を吐いてしまった。実際のところ、俺が怒っているのはシズちゃんのせいだ。でも、そんなことを言ったら、シズちゃんは更に泣いてしまうだろう。そうなると、困るのは俺のほうだ。いくらシズちゃんのせいで怒っているからって、シズちゃんを泣かせるようなことはしたくない。

「じゃ、なんでおま、おこってたっ、だよっ」

「えっ」

俺の嘘に、シズちゃんが質問してくる。

マズイ。そのことを考えていない。ここでどもってしまったら、シズちゃんは、「やっぱり俺のせいだ」と言いながら泣いてしまう

だろう。どつしよつ。

やっぱり、本当のことを言ったほうがいいか……………。

「シズちゃん。俺が怒ってたのはね、本当はシズちゃんのせいなんだ」

「っ、う」

「ああっ、泣かないで！ あのね、俺、シズちゃんを田中トムにとられたみたいで、なんか機嫌悪くなっちゃって。その、嫉妬したんだよ、田中トムにっ」

俺の言葉に、シズちゃんはキョトンとして、泣き止んだ。

「トムさんに、嫉妬……………？」

「そう。シズちゃん、俺には笑ってくれないのに、田中トムには可愛い笑顔を向けるんだもん。俺、恋人なのに！ だから、ムカついて、シズちゃんに当たっちゃった……………」

「ごめんね。」

そう言うつとシズちゃんは、口を開いた。

「とっ、トムさんは、俺の上司だし先輩だし、迷惑かけるわけにはいかないから…。俺は、力のせいでただでさえ迷惑かけてるし……………。だから、俺が不機嫌な顔していると、心配するだろうし、喧嘩売ってくる奴いるし……………」

それから、ごによごによと、シズちゃんは言葉を並べていった。

流石に、俺も限界だ。そんなに上司のことが心配なら、俺はどうだっつていいじゃん。

そう言うつと口を開けかけた。けど、シズちゃんのほうが言葉を出すのが早くて、俺の声は遮られた。

「いつ、臨也は、昔からずっと一緒だし、その、互いの本性も知ってるから、その……………。ずっと喧嘩ばかりしてきたから、一緒に笑うとか、そういうのに慣れなくて……………。でも、そのせいで機嫌悪くしてたなら、謝る……………。ごめん、臨也……………」

その言葉を聞いた瞬間、さっきまでの気持ちはどこかへ行ってしまった。それと同時に、シズちゃんへの愛しい気持ちが溢れてきて、



俺は思わず、シズちゃんに抱きついた。

「シズちゃんっ！」

「うわっ！」

「ごめんねっ！ あんなに冷たく接しちゃって！ 今度からは、シズちゃんの話もしっかり聞くよ！ 大好き！」

そう言えば、シズちゃんは顔を真っ赤にした。ああ、本当に可愛いなあ。

「あっ、当たり前だろ、んなことっ……。俺の話はちゃんと聞けよな……っ」

ほんとに、君には参るよ、シズちゃん。

君はいつも、俺の予想の斜め上の行動をしてくれるんだから。だからこそ、君が愛しいんだけどね。

「シズちゃん、俺もたまには、シズちゃんに嫉妬してもらいたいなっ！」

「うぜえ……」

「ひどいー！」

「それによ……、」「ん？」

「俺が嫉妬するってことは、臨也が俺以外の奴とイチャついてるときだけだし……。お前はそんなことしねえだろ………？」

「っ、！ しないよ！ シズちゃんラブ！ だからそんな困った顔しないでー！」  
「ん……」



×29 嫉妬したの。。。 (後書き)

静雄ラァアアアアブ!!! あー、本当に君は可愛いよ。シズち  
やんって一途そうだよね。可愛いよね。うん。

津軽は日向ぼっこが好きだ。ぽかぽかと暖かい日光に当たって寝るのが、何よりも大好きなんだって。俺はどっちかかっていうと、テレビ見てたほうがいいんだけど。でも、津軽が好きなのは、俺も大好きだから、日向ぼっこは俺の好きなことでもあるんだ！

今日も、津軽と一緒に日向ぼっこをしていた。

「柚留の家って、本当に広いよね。俺の家より広いんだけど」

「そう？ これ、仁さんが買ってくれたんだよ。僕が中学2年のとき」

今日は僕たちの住んでいる所。つまり、柚留くんの家、臨也と静雄が来ている。静雄はいいけど、臨也は嫌だなあ……。だって、臨也が津軽を見るときの眼は、とつても、言葉にし難いくらいに厭らしいんだもん！ 津軽の着物も盗んだことあるしさ！ まあ、あのときは柚留くんが漬してくれたけど。柚留くんは容赦ないからね！

「中2なんだ。それまでは、仁さんと暮らしてたの？」

「うん。僕には親がいなかったからね。仁さんが親代わりだったから」

そういえば柚留くんは、小さいときにお父さんとお母さんを殺されちゃったんだっけ。マフィアだったから、いつ殺されてもおかしくはないんだっただらうけど、それが仲間に殺されたんだからね……。辛いよなあ……。

「掃除とかはどうしてたんだ？」

静雄が柚留に聞く。ああ。広いもんね。今は僕たちも手伝ってるけど、その前はどうしてたんだらう。

「えっとね、マフィアの仲間に手伝ってもらってたよ。あいつら、働いてくれるからなあ……」

ニコニコと笑いながら言う柚留くん。マフィアの仕事から随分とかけ離れてるな……。

「それにしても、袖留の家は日当たりがいいな。洗濯物もすぐ乾くから便利だ」

主婦みたいなことを言うのは夢雄。やっぱり、夢雄は主婦思考なんだな。

でも、ここは本当に日当たりがいい。日向ぼっこもできる。特にリビングが一番日当たりがいい。津軽のお気に入りの場所でもある。その津軽を見てみれば、うつらうつらしていた。目が眠そうだ。

「津軽、眠いのお？」

彌霸彌ちゃんもそれに気づいたようで、津軽に聞く。

「ん……………。ねむい……………」

そう言いながら目を擦る津軽。あ、臨也が鼻血だしてる。キモ。まあ、津軽は可愛いから、しょうがないか。

「じゃあ、俺と一緒に昼寝しよ、津軽！」

俺が津軽に言えば、津軽はこくんと頷いた。可愛いなー、津軽。

「二人とも、布団かけて寝ろよな」

夢雄がお母さんみたいなことを言うってくる。それがおかしくて、俺はクスッと笑いながら返事をした。

「シズちゃん、俺らも昼寝し「ウゼエ」

「臨也。変態行為をうちでするのはやめてくれるかな。出てってもらうよ」

「すみませんでした」

臨也は謝ってばかりだな。アホ。

「ちよつとサイケ。アホって何。アホって」

「あ。俺、口に出して言った？ ごめん、ごめん」

思っていたことを口に出していたようだ。臨也に睨まれた。でも、本当のことだから仕方がないよね。

と、そこまで考えて、俺は津軽のほうを向いた。津軽は、もう寝る体制に入っている。ちっちゃいとときの津軽は、お昼寝の準備が早いけど、通常サイズの津軽も、お昼寝の準備は変わらないんだなあ。本当に、お昼寝が好きだなあ。

「じゃっ、俺は津軽の横ーっ！」

「あっ、みいちゃんもいれてーっ！一緒に寝るーっ」

俺が津軽の横に行くと、彌霸禰ちゃんも津軽の横に座った。

「じゃっ、おやすみー」

そう言つて彌霸禰ちゃんは、俺たちよりも先に寝てしまった。彌霸禰ちゃんは、そろそろ二十代に入るのに、行動が小学生並だな！。酷いときにはサル以下だけだ。

「まっ、そんなことはどーでもいっか！津軽、俺たちも寝よう！」  
「ん、ねる……………」

津軽の横に寝転がってから数秒で、俺の意識は途絶えた。

(ヤバイ……………っ。彌霸禰ちゃん以外の二人マジ天使……………っ！！)

(おい、ノミ蟲。写真撮るのやめろ)

(いいじゃないか！あんなエンジェルたちを撮っておかない奴は、頭がおかしいんだよ！)

(静雄。臨也を外に出してもいいよね)

(いつてらっしやい)

(えっ、ちょ、シズちゃん？今君、俺を売ったよね！？躊躇わずに！コンマ一秒も迷わずに！！)

×30 エンジェル (後書き)

あー、サイ津マジ天使。かあいよいよ、二人とも。本当に可愛いよ…。

×31 新オートマタ覚醒！

「よしっ、起動すつぞー！」

「仁さん、アンタまたやってくれましたね……………」

「ねえねえ、つがるっ！ 新しい子は、どんな性格なんだろうーねっ

！」

「やさしいといいな……………」

「外見がこんなだからさあ、やっぱり中身もそうなんですよ、仁！」

「まあ、設定はな」

「とりあえず、オリジナルよりは絶対にまともだな」

「酷いよ、シズちゃん！」

「まあ、本当のことだからな」

「仁さんまで！」

「いいから早く起動しろよ」

「あ、夢ちゃんも楽しみなんだあっ！」

「っ、わ、ワリイかよっ！」

マスターが新しいオートマタを作った。本当に、マスターは暇な人だ。実際仕事とかあって、暇ではないんだろうけど。俺たちを作るぐらいなら、しつかり仕事すればいいのに。

今回のオートマタは、臨也がモデルだ。名前は日々也ひひや。格好が王子だ。金色のマントに王冠。白い服に銀の膝宛。顔立ちは、モデルのとおり端整だ。

日々也に、サイケや津軽、彌霸禰は、興味津々だった。オートマタなんて、普通はあまり見ないからな。でも、もう3体もいるんだからいいだろ。だいたい概要はわかってるだろうし。



が。こんなことを思っている俺も、興味が無いわけではない。少なからず、どんな奴なのかは気になっている。だから正直、起動するのは楽しみだ。

「じゃ、起動するぞー」

そう言つてマスターは、起動ボタンを押した。

緊迫した空気の中、日々也の瞳がゆっくりと開いていく。瞳は、キレイな金色だった。

「わぁ……………っ！」

サイケが目を輝かせている。弟だからな。日々也は。

そんなことを思っていると、日々也が口を開いた。

「初めまして。日々也です。これからよろしくお願いします」

声は臨也と同じだが、喋り方が全然違う。これにはマスター以外の奴全員が驚いた。

「ほら。お前よりよっぽどまともじゃねえか」

「仁さんどうして！ どうしてこんなまともな子を作ったの!？」

臨也がおかしいことを言っている。お前がおかしいだけだろ。

「はじめまして、ひびや！ 僕はサイケだよ！ よろしくねっ。こ

っちは僕の恋人のつがる！」

「ひびや、よろしく」

「よろしくお願いします。サイケに津軽」

三人が自己紹介をしている。と。日々也に黒い影が飛びついた。

速すぎて、姿が霞んで見えなかった。誰だ？

「キヤアアツ、カツコイイーっ!!!」

「え、えっ……………」

ああ。彌霸禰か。アイツ、速すぎなかったか？ 臨也のことが好きなのは知ってるけど、臨也の顔した奴なら誰でもいいのだろうか。ギユムギユムと抱きついてくる彌霸禰に、日々也が若干引いている。

「彌霸禰ちゃん。日々也が困ってるけど」

「えーっ。むう。しょーがないなあ。離れてあげよ」

なんで上から目線なんだよ。

「日々也くん、みいちゃんはね、彌霸禰っていうの！ よろしくねっ！！」

「よ、よろしくお願いします」

軽くトラウマになっただろう。日々也がかわいそうだ。

「日々也。僕は、袖留だよ。よろしくね。で、こっちが君のモデルの臨也」

「折原 臨也だよ。よろしく。こっちは俺の恋人のシズちゃんね。取っっちゃ駄目だよ」

「っ、な、馬鹿！」

臨也の言葉に、静雄が顔を真っ赤にする。

「本名は、平和島 静雄だよ。日々也、臨也はきつとたくさん迷惑をかけると思うよ」

「ああ。はい。わかりました」

「日々也。そこはわかっちゃ駄目なところなんだけど」

袖留に言われて、日々也が頷いた。すかさず臨也がツっこむ。

「あと自己紹介してないのは、夢雄だけかな？」

「そうだな。ほら、夢雄。こっち来い」

傍観していた俺を、マスターと袖留がムリヤリ引っ張る。自己紹介は大切だが、こんなに強引にしないでいいだら……。

俺は、日々也の前に突き出された。日々也が俺のことをジッと見てくる。が、それは気にしない。

「俺はサイケデリック・ドリーム・静雄だ。みんなには夢雄って呼ばれてる。よろしくな」

そう言い終わると、日々也が無言で俺に近づいてきた。なんだろうか。

キョトンとしていると、急に視界が何かでいっぱいになった。その上、唇には柔らかいものが触れている。彌霸禰が「ひゃああっ！」「なんて声を上げているが、なんなんだろうっか。

その数秒後に気づいた。俺の目の前にあるのは、日々也の顔というところに。

なんでだ？ どうして、こんなに近くに顔がある？

唇に当たっているのは、なんだ？

しばらくすると、視界はもとに戻って、その代わり、ニヤニヤと笑うマスターたちと、顔を真っ赤にして笑っている彌覇禰と、頭を抱えている柚留と、それを慰める津軽が入ってきた。

一体何が起コッタ？

呆然と立ち尽くしていると、日々也が俺の前に傳いて、手をとって言った。

「夢雄。私は彼方のことを好きになってしまいました。だから、」

「僕と付き合ってください」

日々也の口から洩れた言葉が、最初、理解できなかった。付き合う。

それはつまり、恋人になってほしいということだろうか？

理解できた瞬間、俺の顔に、体中の熱が集中した。今、顔がリンゴのように真っ赤になっているだろう。

「え、あ、その、っ、あう……………、っ」

「夢雄、付き合っただげるの？ あげないの？」

ニヤリと口角を上げたまま、臨也が聞いてくる。うるせえよ。ちよつとすつこんでろ。

そんなことも言えず。俺は、やっと言葉を口にできた。

「ふっ、不束者ぶつつかものですが、よろしくお願ひします……………っ」

声は、最初裏返ってしまって、それで更に恥ずかしくなってしまう。最後のほうの声がすごく小さくなってしまった。聞こえたかどうか？

チラリと、日々也のほうを見ると、こっちも俺に負けないく

らい真っ赤になっていて、目を丸くしていた。

「い、いいんですか……?」

「……いい……っ」

そう言うと、日々也が俺に抱きついてきた。

「うわあっ!?!」

「ありがとう、夢。これから大事にするよ」

これで、俺は確信した。

俺たちオートマタは、惚れる相手も、オリジナルと同じなんだな。

(また僕の家に来る……。しかもオプションで馬までついてくる……)

(安心しろ。この馬は小さくもできるし、日々也がしまおうと思えば、普段は電腦空間に収納されるからな)

(そういう問題じゃないんですよ、仁さん)

×31 新オートマタ覚醒！（後書き）

アタシ的日々兄設定

- ・イケメン
- ・紳士的
- ・王子様
- ・恋愛に純情
- ・馬を引き連れている
- ・夢ちゃん溺愛

日々也が来てから、家が賑やかになった。というか、イチヤイチヤと甘い空間になってしまった。別に嫉妬してるわけじゃない。ただ、すごいウザったいというか、彌霸禰ちゃんと二人だけっていうのが嫌だ。

でも、みんなが嫌いというわけじゃない。みんな可愛いし、いい子ばっかだ。サイケと津軽は手伝いしてくれるし、夢雄は家事を僕の代わりに殆どやってくれるし、日々也も家の片付けなどしてくれるから、とても助かる。え、彌霸禰ちゃん？ あの子は論外だよ。まあ、たまにだけど、本当に助かることしてくれるけど。

僕は、気づいている。仁さんの意図に。

仁さんは、僕に『家族』というもを感じてほしいんだろう。マフイアのみんなも、僕の家族ではある。けど、それと仁さんの言う家族は違う。それくらい、僕は気づいている。仁さんも、僕が気づいていることを知っているだろう。ただ、口に出して言わないわけで。

ムリヤリにでも僕に押し付けて教えたい『家族』。

嫌でもわかってほしい『愛』。

僕は、仁さんの意図を知っている。

けど、その意図の通りに、僕は動けない。

いくら家族みたいになれても、本物の『家族』にはなれないのだから。

こんな考えが僕を支配して、縛っていて。だから僕は動けない。僕は自分自身を縛っているのだ。

こんなことを、僕は考えていた。

僕の目の前では、オートマタたちと彌霸禰ちゃんが集まってオセ口をしている。それも、トーナメント形式という、大掛かりなもの。どうしてそうなったのかは、僕も知らない。きっと、サイケと彌霸禰ちゃんが言い出したのだろう。あの二人なら、言いかねないだろうしな。まあ、楽しいのならそれでいいんだけどね。

それを尻目に、僕はつまらないことを考えていた。そう。それはそれは、くだらないことを。考えたところで、僕の考えに何か変化があるわけではない。ただ、やることもないし、オセ口に参加する気もないから、考えているだけだ。

家族について。

みんなが知っている通り、僕の両親はマフィアの幹部だった。だから、いつ殺されてもおかしくはなかったんだ。むしろ、殺されないほうが不自然、と言ってもいいほど。でも、小さかった僕には、重かった。親が、二人とも死ぬということは、あまりにも。

それをきっかけに、僕は周りが怖くなった。人も信じられなかった。失くしたものは、たくさんある。

失ったものは、家族と希望。

それと同時に手に入れたものは、

孤独と絶望。

家族を失ってから、色々なものが僕の手の内から零れていった。

僕は、何も無い状態になってしまった。つまり、虚無の状態。

そこに現れたのが、仁さんで。仁さんは、そのとき15歳だった。仁さんは、僕にいろんなことを教えてくれた。マフィアのこととか、ボスがどうあるべきかっていうこととか、防衛線の張り方とか。

まあ、彼が教えてくれたのは、こういうことだけじゃないけどね。勉強だつてしっかり教えてくれた。おかげで僕は、義務教育関係なく小学校をとびこして中学に入学できた。本当は、こんなことできないんだろうけど、仁さんが裏で何かをしたのだらう。今でもそれはよく知らないが。でも、ありがたい。

仁さんと生活を始めてから、僕は、失くしたものを少しずつ取り戻すことができた。

でも。

それでも、取り戻せないものがあつた。

そう。家族だ。

仁さんは家族というより、近所のお兄さんのような存在だったし、先生でもあつた。だから、家族はわからなかつた。

そこで、仁さんは考えたんだらう。

オートマタを作つて、僕に家族というものを味わってもらおう、と。

だから仁さんは、嫌がる僕にムリヤリ、サイケと津軽、夢雄と日々也、それに、彌霸禰ちゃんを押し付けたのだらう。彌霸禰ちゃんも、『お父さんが』なんて言っていたけど、本当は違つんだらう。

僕は、たくさんのものに恵まれている。いい仲間にも、いい先輩にも。これは、感謝すべきだと思う。本当にありがたい。

だけど僕は、気づけない。

家族がどういふものか。

こういふところが、僕は駄目なんだらう。せつかく、人に恵まれているのに。どうしてそれを無駄にしまつんだらう。

馬鹿だな、ほんとに。自分が嫌になる。

でも。



最近、彌霸禰ちゃんやサイケたちに、愛着を感じてきた。

この子たちがいなくなったらと考えると、無性に怖くなる。これがたぶん、『家族』っていうものの一部なんだと思う。

嬉しいとは思う。でも、それと同時に不安になる。

この子たちを失ったときに、僕はどうなってしまふのだろう。きっと、悲しくて、苦しくて、生きているのが辛くなるだろう。

もう、あんな苦しみは味わいたくない。

けど、『死』はどんな者にもくる。それは、ロボットやオートマタ、植物もそうだ。だから、『死』に怯えていたら、何もできなくなってしまう。だから、そんなことより、今を大事にすればいいんだ。

こんなくだらないことを考えていても、しょうがないじゃないか。

今を楽しもう！

僕は、今まで考えていたことを頭の片隅に追いやって、立ち上がった。

「僕もオセロしようかな」

少しでも、この子たちと一緒にいたいんだ

泣いて、笑って、怒って

いろんなことをしたいから

「わぁっ、柚留くんもオセロするの!」

「えーっ、柚留もーっ!？」

「何、彌霸禰ちゃん」

「だって、柚留はオセロ強いんだもん！絶対にチャンピオンになるよーっ!」

「でも、日々也がいるぞ」

「ひび、オセロっよい。僕、すぐ負けちゃう……」

「しょんぼりしないでくださいよ、津軽」

「そうだよ、つがる！みはねちゃんには勝てたんだから!」

「え、何。彌霸禰ちゃんが一番弱いのか？」

「うっ、うるさいなぁっ!」

×32 『家族』（後書き）

日々兄はオセロとかチェスとか、ボードゲームが強そう。

×33 仔ウサギさん

「ゆずるくん、それなあーにー？」

朝起きて、つがると一緒に手を繋いでリビングに行ったら、ゆずるくんとみはねちゃんがソファに並んで座っていた。そこまではいいんだよ。でも、僕が不思議に思ったものは、ゆずるくんが持っているもこもこしたものだ。つがるも、首を傾げている。かわいいなあ。

「あ、おはよ。津軽、サイケ」

「おはよーっ！ 二人とも、こっち来なよ！」

彌霸禰ちゃんに手招きされて、僕と津軽は一緒にそっちへ行く。

ゆずるくんの持つているもこもこを、よく見てみる。と、それがもそもそと動いていることに気づいた。津軽も目を丸くしている。

「ゆずるくん、これ何？」

僕が尋ねると、袖留くんがニコニコと笑いながら言った。

「リンゴとスイカの子供たちだよ」

リンゴとスイカって、あのウザギさんだよ。子供たちってことは、生まれたんだ！

よく見てみると、それは仔ウサギたちの塊だった。

「かわいいよねーっ！」

「うん、かわいい！」

「もこもこ……。かわいい……。っ」

そう言いながら、つがるがもこもこを触る。ああ、つがるのほっがかわいいよ！

そう思いながら、僕はなんとか鼻血を堪えながら仔ウサギの中の一羽を抱き上げた。仔ウサギはまだ小さくて、目も見えていないみたい。

「ふわふわしてるよ、つがるー！」

僕は抱いていた仔ウサギを、津軽に渡した。

「ちっちゃい……。ふわふわ……………!!」

つがるが目を輝かせながら仔ウサギを抱く。わ、可愛いっ!!

「全部で五羽いるんだよ。うちにこんなにいるてもしょうがないから、臨也と静雄に一羽ずつあげようと思ってるんだ」

「じゃあ、うちに残るのは三羽だね!」

「よくわかったね、彌霸彌ちゃん」

「袖留って、みいちゃんのことをどれだけ馬鹿だと思ってるの!？」

言ったみはねちゃんの頭を撫でながら、ゆずるくんが寝る。それに声を張り上げるみはねちゃん。みはねちゃんの扱いが、ゆずるくんは酷い。まあ、しょうがないのかな? みはねちゃんだし。

「そいじゃ、2人を呼ぼうか」

「ただいまー」

ウサギの世話に必要なものを買いに行っていたゆめが帰ってきた。ゆめは本当に働き者だなあ!

「おかえり、夢雄。これから臨也と静雄呼ぶから」

「おう。わかった」

(おじやましー……………っ!!!! 妖精がいる!! シズちゃん、妖精がいるよ!!)

(は? 何言って、っ!?)

(あ。いざや、しずおいらっしやい)

(きゃーっ、いっく〜ん!!)

(ゴフッ!)

(彌霸彌ちゃん、落ち着いて)

(可愛いな、そのウサギ。どうしたんだ?)

(生まれた。しずおといざやにもおすそわけ)

(そうなのか? ありがとな)



×33 仔ウサギさん（後書き）

津軽とシズちゃんが仔ウサギ抱いてたらかなり萌える。萌えて死ぬ。かわいいよ、津軽。ちっちゃい津軽かわいいよハアハア。

×34 棚の上のもの

皿を洗っていたら、サイケと津軽の声が聞こえた。ちらっとそっ  
ちに目を向けると、2人が本棚の上にある何かを取ろうとしている  
ようだった。俺はその様子を、皿を洗いながら観察することにした。  
「ねえ、つがる。あの箱、何だと思う？」

「なんだろう……？」

サイケと津軽が、本棚の上にある箱を指さして言う。ん？ なん  
だろうな、あれ……。俺も見たことが無かったものだったので、若  
干気になった。が、もう少し観察をしたいので、皿を洗うフリをす  
る。

「気になるよねえ。なんなんだろう……」

「取ってみる……？」

津軽がサイケに提案する。

「うんっ、そうしよう！」

「……でも、僕たち、身長足りない……。とどかない……」

が、身長が足りないことに気づき、しょぼんとする津軽。あ、小  
動物みたいで可愛いな。

しょぼんとする津軽を、サイケが元気づける。和むなあー。

「踏み台を使えばいいんだよ、津軽！」

「…それ、いい。サイケ、頭いい……！！」

津軽に褒められて、デレデレと顔の筋肉を緩めている。ああ。そ  
ういうところが臨也に似てるな……。

「じゃあ、踏み台持ってくるね！」

サイケが踏み台を持ってきたのは、直ぐだった。俺も、そろそろ  
皿洗いを終わらせないと、おかしく思われちゃうな。そう思って、  
ささっと皿の泡をながして、皿を乾ほした。さて。次は何をしようか  
……。

「つがるー、持ってきたよーっ」



「サイケ、早く」

津軽がサイケに言う。ああ、サイケにやらせるんだ。ま、いいか。津軽に言われて、サイケが踏み台にのって背伸びをしたが。

「うっ……。と、どかないー……っ」

背伸びをしても、あと少しのところまでどかない。もどかしいな。津軽とサイケの身長は同じだから、津軽がやってもとどかないわけ。さて、どうするか？

「肩車は、この前ゆるくんにだめって言われたし……」  
「気になる……っ」

そう言いながら、津軽とサイケは一生懸命背伸びして手を伸ばす。その光景は、とても和むものだった。可愛いなあ、2人とも。

ずっと見ていたい光景だが、いくらなんでもそれは可哀想なので、俺はある提案をしてやる。

「おい、お前ら。背伸びしなくても手エとどくだろ」

「え、でもっ」

「体のデカさを通常にすりゃいいだろ」

「……あ」

2人とも、今気づいたようだった。うわ、鈍い。

サイケが体の大きさをノーマルに戻して踏み台にのると、余裕で手がとどいた。

その箱は、クッキーが入っていたような缶だった。

「何入ってるんだろー？」

「開けてみる」

津軽が開けると、中身は、大量の、

「……うわあ……」

「臨也」

「……………はい」

「どうして」

「どうして僕の家に大量の静雄のヌード写真があるのかな」

俺たちが見つけた箱の中に入っていたものは、静雄のヌード写真だった。それも、大量の。

これを柚留に訴えると、柚留は臨也を呼び出して、すぐにお説教が始まった。

俺と津軽とサイケ、彌霸禰、ひーくんは、2階の居間に集まって話をしている。

「いざやもバカだねー。よりによって、ゆずるくんの家の棚の上に隠すなんてさー」

「いざや、そういうやつ」

「静雄がスゲエ可哀想だよ、ひーくん……………」

「夢も、気をつけないと狙われるよ。まあ、僕が守ってるから大丈夫だけど」

「ひーくん……………」

「津軽も、僕が守るからね!」

「さいけ……………」

「なんだよ、チビまでラブラブしちゃって! みいちゃんがひとりぼっち!」

×34 棚の上のもの（後書き）

津軽とサイケが背伸びしてプルプルしてたら可愛いなあ、と妄想を膨らませて書いた。可愛い二人が書きたかっただけなのに……。  
どうしてこうなったorz

「……………は？」

朝、PCを開いたら、見たことのないフォルダがあった。

なんだこれは？

僕は、普段からPCをよく使う。まあ、臨也並に。だから、トップにあるフォルダは、だいたい覚えている。

けど、今日開いたら、知らないフォルダがあった。名前は、八面六臂。こんなフォルダ、作ったことないんだけどなあ。また仁さんの悪戯だろうか？

疑問に思って、仁さんに電話をする。

三十回目のコールで、やっと仁さんが出てくれた。あの人は、携帯に出るのが面倒らしく、コールがなくなるまで放置するような人だ。根気強く待つ。

「もしもし、仁さん」

『あんだよ、袖留……………』

「仁さん、僕のPC弄りましたか？」

『は？ 弄ってねえよ。お前のモンに手エでしたら、どうなるかわかんねえもん』

ああ、よくわかってますね。じゃなくて。

「なんか、八面六臂っていうフォルダができてるんですけど、心当たりないですか？」

『ねえよ。なんだよそれ。てか、今忙しいから、もう切るぞ』

「ああ、はい。すみません」

そう言って、僕は電話を切る。

仁さんに心当たりがない。仁さんの仕業ではない。

じゃあ、このフォルダはなんだろう。一体、誰がいつ作った？

「とりあえず、あけてみようかな……………」

そう言っただ僕は、そのフォルダをツークリックしてみた。

すると、フォルダが開いて、なんとなく奥行きがあるような、網目がたくさんある空間が出てきた。

「何、これ……………」

僕は、びつくりしてしまった。こんなプログラム、誰が作った？

と、そのとき。

『はじめまして』

PCの中から、聞いたことのある声が聞こえた。そう。この声は知っている。この声は、

「臨也……………」

そう。臨也の声。どうして、彼の声がPCの中から聞こえてくるんだろう？

画面を見ると、何か細かい、粒子のようなものが集まって、形になった。

それも、臨也そっくりの。違うところといえば、コートのファーとブイネットの部分が赤になっているところぐらいだ。

何、これ。どうなってるの？ 臨也にそっくりなプログラム？

なんだろう。

「えっと……………」、君は、何かな？ どうして、僕のPCの中にいるの？」

そりあえず、冷静に行動する。

『俺は、八面六臂<sup>はちめんろくび</sup>。マスター仁が作った、プログラムだよ』

その言葉を聞いて、僕は近くにあった物を握りつぶしてしまった。マスター仁。

仁さんのことに決まっている。

やっぱりアンタが関わってたよ、仁さん……………！

「どうして、君がここにいるんだい？」

『わかんないんだよ。きつと、なんかの間違いで、このPCに転送されちゃったんだと思うけど』

……わかんない。思い当たることがない。どうしよう。仁さんは、電話をしてもきつと出ないだろう。どうしようか。

仁さんには、後々話をしよう。

だから。

「君、六臂って言ったっけ？」

『うん』

「僕のパソコンの中に住まない？」

そう言つと、六臂が目を丸くした。

『いいの?』

「いいよ。君なら、パソコンの中だし。いても全然かまわないよ。むしろ、大歓迎かな」

そう言いながら微笑むと、六臂は僕に聞いてきた。

『本当に、いいのかい?』

「うん。仁さんにはあとで話すし。賑やかなほうがいいし」

『ありがとう、袖留さん!』

「ああ、さんは付けなくていいから。呼び捨てでいいよ」

『そうかい? じゃあ、よろしく、袖留』

「よろしく」

こうして、僕の家にも、また『家族』が増えた。

「……ろっぴ?」

「そつ。六臂は、パソコンとかケータイとか、電腦空間でしか体を構成できないから。僕たちの次元にはこれないからね」

「そうなんだあ。みいちゃんも会いたいなあっ!!」

「僕もーっ!!」

「でもよ、パソコンはずっと開きっぱなしにしてると電気代がもったねえよ」

「夢は本当に家庭的だね。そんなところも大好きだよ」

「んなっ、!」

「あのね、仁さん実体化のプログラム作ってくれてるから。いつか六臂もこの空間に来れると思うよ」

「わあっ、楽しみ!!」

×35 新住人(後書き)

うほほい、うほほい、うほほほーいっ

わーいっ、ろっぴーーいっ！！！ 六臂の兄貴が好きすぎて

吐きそう、いや、むしろはk(ケポケポケポ

ごほんっ。失礼。いや、テンション上がっちゃった！ テへっ

ろっぴの兄貴を知ってる人は、もう一人知っているでしょう！ あ、

言っちゃ駄目だよ、わかってる人たち！ 楽しみなんだから！！

んじゃ、また次回っ！



×36 カラー心理テスト

夕食中に、シズちゃんがこんなことを聞いてきた。

「白色でイメージする奴って、誰だ？」

「白？」

俺が聞き返すと、シズちゃんがコクリと頷いた。

この流れは、きっと心理テストだろう。絶対に。

でも、俺は心理テストについて、全く知識がない。どんなものがあるかを全然知らない。

俺の答えたことがもしシズちゃんの癪に障ったりしたら、とんでもない。かと言って、答えなければそれもまたいけないだろう。どうする、俺。困ったぞ、俺。

「シズちゃん」

「なんだ？」

「先に言っておくけど、もし、俺がシズちゃんの気に食わないような答えを言っても、怒ったりしないよね？」

「おう。わかった」

俺が心理テストにのったのが、それほど嬉しかったのか。シズちゃんも、嬉しそうな表情をした。可愛いな、シズちゃん。何その顔。そんな考えとは裏腹に、俺は内心超テンパっていた。もし、恋愛に関するものだったら、どうしよう。

「おい、臨也。早くしろ」

「あつ、ああ、ごめん。えっと、白だったっけ？ えーと、白………。袖留かなあ………」

いつもワイシャツ着てるし。そう言うとシズちゃんは、「ふーん」という顔をして、次の質問に移った。よし。これはセーフだった。ふう………。

「次、行くぞ。茶色でイメージする奴は？」

「うーん。やっぱり作者かな。アイツは汚いし」

シズちゃんが、哀れみを含んだ眼で俺を見てくる。なんだろう。俺、なんかヤバイこと言っちゃった？

「まあ、いいか。次。緑は？」

「波江だね。あの人は、いつも緑の服着てるから」

俺の言葉にシズちゃんがなんとなく安心したように見えたのは気のせいかな？

「次。オレンジ」

「仁さん。あの人には、明るい色が似合いそうだな」

そう言つとシズちゃんが若干悲しそうな顔をした。なんだろう。嫌な予感がする。

「じゃあ、紫……」

「彌霸禰」

「ロリコン……」

「なんでっ!？」

俺の答えに、シズちゃんが叫んだ。ヤバイ。ヤバイよ。どうしよう。う。

「次……。青……」

「津軽だね。やっぱり」

俺が言つたら、シズちゃんが少し泣きそうな顔になった。あれ。

「どうしたの、シズちゃん？」

「いいよ、もう。コレで最後な……。黄色は、誰だ？」

「んー、やっぱりシズちゃんか、っ!？ シズちゃん!？ どうして

泣きそうなの!？」

アウトオオオオオオオオオ!！ 今の答えは、アウトだったよ

うだ。シズちゃんが泣きそうだし。

「と、とりあえず結果、教えてよ。シズちゃん」

俺が言つとシズちゃんは、不機嫌そうな顔で結果を言い始めた。

「白は、お前が憧れてる人だ。お前の憧れは、袖留なんだな」

ん。まあ、間違っちゃいないけど。

「茶色は、嫌いな人だ。これは見事に的中したな」

「うん、すごいー!!」

「お前、あとで謝つとけよ……」

「……………そうだね……」

これは流石に。俺の出番がなくなってしまっ

「緑は？」

「友達だ」

ああ。だから、シズちゃん、あの時にホツとしてたんだ。俺、浮気なんかしないのに。

「それで、青と黄色は何なの？」

俺が聞くとシズちゃんは、顔を顰めた。あ、怒ってる……。

「……………黄色が不可解な人で、青が好きな人だよ……………」

これはマズイ。誤解を解かなければ。

「しっ、シズちゃん！俺は、イメージで言ったただけだから！ほんとに！これだけは信じてよ！」

「ああ……。これは心理テストだからな。わかってるよ」  
ふう。よかった。シズちゃんが怒らないでよかった。

安心した俺が。

「でも、紫の答えがどうしても許せねえ……………！」

「え、な、なんなの、それ？」

「SEXの対象人物」

「すみませんでした」

高が心理テスト。されど心理テスト。みんなも、心理テストには注意してねっ



×37 勉強(前書き)

来神パ口っちやってます

「うー……………」

「どうしたの、静雄」

今日は、袖留とシズちゃんが家に来ている。もちろん、俺の家ね。袖留はいいんだけどさあ、なんでシズちゃんが来るんだろうね。本当に、殺したいくらい憎たらしいのにさ。どうして俺の家にシズちゃんをいれなきゃいけないのかなあ。

でも、相手は袖留だ。俺に勝ち目は無い。反抗するにもできないし、俺の家に来た理由で、なんとなくなのだが納得はいった。だから、こうしてシズちゃんを家にあげている。

その理由とは、

「シズちゃんって、本当に勉強できないよねー」

「殺すぞ」

そう。シズちゃんと袖留は、勉強をしに俺の家に来たのだ。だから、俺もシズちゃんを家上げた。え？ だって、これでシズちゃんをからかえば、ストレス発散になるでしょ？ 袖留がキレない程度にすればいいんだからさ。

俺が茶化すと、シズちゃんはシャーペンの芯を折った。

「あ。静雄、シャーペンの芯がもったいないでしょ。すぐに折らないの」

「袖留も細かいこと気にするなあ。いいじゃん、シズちゃんのものなんだからさ」

「違うよ。臨也のためにシャーペンの芯を折るなんて、その分すごい損するじゃん。だったら犬のせいでシャー芯折ったほうがマシだよ」

「ヒドイッー!!」

袖留に言ったら、そんなことを言われた。袖留って、俺のこと親友って思ってないよね。俺は微かに思ってるんだけどさ。辛辣だよ。

「ああ……。柚留の言うとおりだな……。コイツのせいでシャー芯を折るのは、一万円ほど損した気分になる」

「シズちゃんも、いくら俺だからって酷くない。せめてもう少しオブラートに包んで言っただけじゃなかった」

「殺したいほど嫌いなシズちゃんでも、そんなこと言われたら若干傷つく。若干だけどね。かつ、悲しくなんてないんだからね！

「あ？ テメエにはオブラートも何もないだろ、ノミ蟲」

「うるさいよ、シズちゃん。勉強に集中しなよ」

「そうだよ、静雄。臨也にかまってる時間ももつたないよ」

「……そうだな」

泣いてなんかいないよ。え？ 目から出てきてる水は何かって？ これは体内のいらなくなつた汁だよ。決して涙じゃないよ。勘違いしないで。相手はシズちゃんなんだから。悲しいワケないさ。ハハハ。アハハハハ。

「臨也。泣かないでよ。気持ち悪いから」

「なんでだろう。キモイより気持ち悪いのほうが威力高いよね」

柚留にとって、俺はきつとゴミ以下の存在なんだろう。悲しいよ。

「で、静雄。どこがわからないの？」

「……」

優しく問う柚留に、シズちゃんがそこを指さす。ねえ。俺のときと、態度が180度違うよね。なんなの、その差は。

そんなことを思っている俺を尻目に、柚留がシズちゃんに問題の解説をする。こう見ると、柚留ってやっぱり顔立ちがいいな。俺もいいけど。勉強の教え方も丁寧だし。ま、俺もやろうと思えばできるんだけどね。相手が相手だし。柚留もいるし。

「で、この問題はこの公式に当てはめればいいんだよ」

「こうか？ ……あ、できた……」

柚留に教えてもらいながら問題を解くシズちゃん。少しすると、シズちゃんがそう呟いて、嬉しそうな顔をした。

……俺、今シズちゃんのこと可愛いつて思った……？

あのシズちゃんを？ しかも、同性なのに？  
どうしよう。俺、病院行ったほうがいいかも。  
と。

部屋にスーパーマ オの定番の曲が流れた。え、なんで？

俺とシズちゃんがキョトンとしていると、柚留がジーンズのポケットからケータイを取り出した。お前か！！

「もしもし。……ああ、圭士郎？ ……は？ 襲われてる？  
襲われてるって、誰に。……ああ、はいはい。襲撃にあってるわけね。うん。で、龍汰がメツチャキレると？ ……わかったよ、今から行く」

そう言って、柚留は電話を切った。襲われてるって、なんだろう。すごい気になる。

「あのさ、急用ができたから、僕は帰るね。2人とも、喧嘩しないでよね。したらどうなるか、わかってるでしょ？」

そう言い残して、柚留は帰ってしまった。風のように。本当に自然な流れで。

俺の家に残されたのは、シズちゃんと俺だけ。ああ、どうしよう！ 困った！！ シズちゃんと2人きりなんて、これほど最悪なことはないよね。本当に。

シズちゃんも俺と同じことを思っているようで、苦虫を噛み潰したような顔をしている。そういうところは、俺たちって似てるよね。それでも、喧嘩をするわけにもいかないので、俺たちはそれぞれ、やることをやる。シズちゃんは勉強。俺はケータイをいじっている。それから数分後。

「チッ……………」

シズちゃんの舌打ちが聞こえた。問題につつかかっているらしい。苛ついているようだ。やっぱり、教えてあげたほうがいいのか。そうだよ。あとで柚留が怖いもん。

「シズちゃん、どこがわからないの？」

俺がシズちゃんの横に腰をかけると、シズちゃんは若干威嚇した。



そりゃあ、まあ、敵だから当たり前なんだけど。

「大丈夫。袖留が怖いから、喧嘩はしないよ。何されるか、予想もできないからね」

「……まあ、そうだけど……」

「教えてあげるよ。そのほうがいいでしょ。わかんなくて苛ついてシズちゃんが物を壊す前に、なんとかしなくちゃね」

そう言つと、シズちゃんは眉間に皺を寄せたが、おとなしく、俺に問題を見せた。

「ここ？ ……ああ。これはね、シズちゃん、この数字を公式のこの部分に当てはめて。こうするんだよ」

俺が説明すると、シズちゃんはシャーペンを動かした。それから少し経つて、

「……ノミ蟲のくせに……」

なんて呟きが聞こえた。どうやら解けたようだ。ていうか、酷くない。教えてあげたのに。

「シズちゃん、そういうこと言うなら、俺もう教えてあげな」

「でも……」

俺が言いかけたところで、シズちゃんの声が入ってきた。なんだよ。

「わかりやすかった……。ありがとう……」

本当に小さな声で、シズちゃんはそう言った。

え？ あのシズちゃんが、俺にありがとうって言った？ 嘘。幻

聴じゃないよね。うん。絶対に。

どうしよう。

嬉しいんだけど。

俺は、そんな想いを押し込めて、「別に」と、一言だけ返した。

「でも、やっぱりお前に教えてもらってわかるっていうのは、ムカツクな」

「じゃあ、もっと勉強しなよ。まあ、シズちゃんの脳みそじゃあムリだろうけどな」

「殺すぞ」

×38 君の恐怖を。(前書き)

サイ津(小)

「ねえ、つがる」

「なあに、さいけ」

お絵かきをしていたら、さいけが僕に話しかけてきた。なんだろう。

「僕ね、つがるに会う前にね、どこかにいた気がするんだ」

「どこかって、どこ？」

「わかんない。でもね、ひとりぼっちだったの」

さいけは、たまに不思議なことを言う。それは、僕も予想をしないような、不思議なお話。まるで、絵本のなかみたいなかんじの。

「つがると僕は、同じときに起動してもらったけど、僕が起動する前のことなの。真っ白なところで、僕がひとりで立ってたの」

それから、さいけは続けていく。

「僕は、何もしないで立ってたの。なんでかはわからないけど。周りには何もなくなってるね、誰もいないの。それがわかった途端、僕、悲しくなっちゃってね。泣いたんだ。おっきな声で」

さいけは、絵を描きながら僕に話してくる。僕も、絵を描きながら、その話を聞いていた。

「それでね。泣いてたら、周りがだんだん暗くなって行って、白い部分がパラパラ落ちていくの。怖くて、怖くてね。僕は、そこに蹲ったの。でも、崩れていくのは止まらなくてね、怖いも止まらないの」

それを聞いて、僕は、絵を描いていた手を止めて、さいけを見た。それでも、さいけは手を動かしながら続ける。

「でもね。もう少しで、僕も堕ちちゃうってところで、それが止まったの。それで、だんだん白いところが広がってって、そのうち、僕は起動してたの」

そこで、さいけが顔を上げて言った。

「そしたら、つがるがいてね！ 僕、好きになっちゃった！ つがるのこと！」

笑いながら、さいけは言う。僕は、すこしだけ恥ずかしくなっても嬉しいような、複雑な気持ちだった。

「つがる見たらね、そのときの怖いなんて、忘れちゃったんだ。だから、そのときのお礼を言いたい！ つがる、ありがとー！」  
笑顔で言うさいけに、僕は返した。

「うん。僕は、何もしてないよ。だから、ありがとはいらない。その代わり、僕と、ずーっと一緒にいてほしい。何があってもね」  
そう言う僕を、さいけはキョトンとした顔をした。それから、少しして、反応が返ってきた。

「うんっ！！ 約束だよ！」

さいけが小指を出してきたので、その小指に僕の小指を絡めて、指切りげんまんをした。

少し前に、マスターに聞いたことがあった。

『サイケは起動前に、プログラムがウイルスに侵食されかけたんだ』  
今日さいけがしてくれた話は、そのときのことだと思う。

僕は、よかったと思う。

あのときにマスターが正しく、冷静に判断してくれなかったら、今頃、さいけはいなかったかもしれない。

僕は、プログラムが侵食される恐怖を知らない。  
でも。

さいけの怖いのを、僕が失くせるなら、僕はいつまでも、いつだって、さいけの傍にいるからね。



『六臂、ありがとね。僕のPC、やたらとフォルダが多いから、定期的に整理しないと、大変なことになっちゃうんだよねー。六臂が手伝ってくれて、本当に助かったよ。ありがとう』

「いや、いいよ。整理とか掃除は、仁のところで散々させられてたから、慣れてるんだ。それに、好きだしね」

『うん。ごめんね。ありがと』

『袖留ーっ、ジェンガしよー!』

『はいはい、今行くよー。じゃあ、ありがとね、六臂。またね』  
「うん。じゃあね」

そう言つて、袖留はPCの電源を切つた。

俺は、電腦空間にある自分の部屋に帰ろうとした。  
と。

「あつ、あの……………」

聞いたことのあるような声がした。

この声は、シズちゃんの声に似てるな。あと、津軽とデリ。なん  
だろ。誰だ？

そう思つて声のしたほうを向く。そこにいた人物に、俺は驚いた。  
シズちゃんたちにそっくりなのだ。

金髪にバーテン服。違うところは、サングラスが眼鏡になつてるところと、白いマフラーとシヨルダーバックを身に着けているところ、瞳が俺と同じ紅色というところぐらいだろう。見た目はだけどついでに言つと、両手に大きな地図を広げて、口には赤い切符を啜えている。

「何だい？」

俺が近寄つていくと、シズちゃんにそっくりな子は、肩をビクつとさせた。どうやら、臆病なようだ。こちら辺が、まず、オリジナ

ルとは真逆だな。

「え、えと、その……………」

うるたえながら、その子は地図を折りたたんで切符をポケットに突っ込んだ。そして、びくびくしながら俺に聞いてきた。

「こつ、ここ、どこですか……………っ?」

どうやら、迷ってしまったらしい。

俺は、シズちゃんに似ている子が怖がらないように、優しく言った。

「穴戸鬼門 袖留のPCの回路だよ。君、どこに行きたいんだい?」

「ふえっ!? あつ、えと、あ……………、電子回路線走走

てる電車に乗って、前のマスターのところに行きたいんですけど…

……………っ、わかんなくなっちゃって……………っ」

「ああ。そうなんだ」

おどおどしながら話す彼を、俺は可愛いな、と思っていた。この子を助けてあげたいな。

「地図、見せて」

「え、あ、はい…っ」

「どこの回路?」

「えと、世田谷の9・58線……………」

「……………ねえ、君、マスターと別れたのはいつ?」

俺は、彼に聞いてみた。

「えつと、半年前です……………」

「この回路、もうとつくに絶たれてるよ」

「えっ……………!?!」

俺の言葉に、彼は目を丸くする。この回路は、随分と昔からあって、もう使えなくなってしまったのだ。あっても意味がないということ、絶たれてしまった。

「じ、じゃあ、マスターには会えないんですか……………っ?」

「たぶんね。君がマスターと別れた時期が、ちょうど、この回路が絶たれた時期だから。きつと、君のマスターは、この回路にしか接



続していなかったんだろう。それが使えなくなってしまった。この回路に住んでいた君は、このままだと、一緒に消えてしまう。だから、君のマスターは君を追い出した」

俺が言うと、彼は、目に涙を溜めていった。

「ま、マスターは俺のために俺と別れたんですか……？」  
「きっとそうだよ」

「っ、俺、マスターのお役に全然立てなかったのにつ。俺、方向オンチだから、すぐに迷子になっちゃって、ますた、につ、迷惑かければ、つかで……っ、うえっ……。ますたっ、ひっく、ふえ……。っ」とうとう、彼は泣き出してしまった。どうしよう。俺は、こついう状況に遭遇したことがない。対処のしかたもあまり知らない。どうしよう。

でも、このまま放っておくわけにもいかない。よし。

「泣かないでよ。君のマスターは、君を助けてくれただろ？ 君のことをどーでもよく思ってるなら、こんなことはしないよ」

俺の言葉に、シズちゃんに似た子が服の袖で涙を拭いながら顔を上げた。

「でも、じゃあ俺、どこ行けばっ、」

そうだった。この子は、どうすればいい？

俺は、1つの考えを提案した。

「君、ここにいなよ」

「、えっ、でもっ、俺なんかいたら、っ」

「大丈夫。袖留はいい人だよ。それに、」

俺は彼を抱き寄せて言った。

「俺、君のこと好きになっちゃったし」  
一緒にいたいな。

俺がそう言うと、彼は顔を真っ赤にした。

可愛いな。

ん？ そっいえば。

「君、名前はなんていうの？」

名前を聞いていなかった。お互い、自己紹介をしなくては。

「えと、つつ、月島、静雄です……っ」

「ツキちゃんか。俺は、八面六臂。六臂って呼んで」

「はっ、はい、六臂さん……っ」

「よろしくね」

こうして、俺にも恋人ができたのだった。

(ところで、君のマスターはなんていう人だったの？)

(みっ、彌霸禰さんです)

(え)

マスターと月島の感動の再開まで、残り3時間。

×39 回路の迷子(後書き)

月島アアアア！ ヤバイ。月島萌え。マジ萌え。

アタシ的月島静雄

- ・方向オンチ
- ・自分に自信が無い
- ・臆病
- ・引っ込み思案だけど、めっちゃ頭いい。
- ・優しい

ついでに八面六臂も

- ・どこにでもいそうな優しいイケメン
- ・ツキちゃん以上に頭いい
- ・ツキちゃんラブ。俺はツキちゃんを愛してる。
- ・親切

この2人の組み合わせは最強だと思う。大好き！

× 4 0 感動の再開（前書き）

- ・タイトルがクサイけど、そこは気にしないでください。
- ・彌覇禰ちゃんがツキちゃんのマスターっていう設定

「つつ、つつつつつつつつツキちゃんああああんっ！！！！」  
「まつ、マスターっ！？」

彌霸禰ちゃんたちとのジエンガが終わって、僕がPCを起動したら、静雄のそっくりさん、月島 静雄というプログラムがいた。僕が驚いていると、六臂に、「彌霸禰ちゃんを連れてきて」と言われた。今、PCの中にいるツキちゃんを見て、彌霸禰ちゃんがPCの前で絶叫している。なんだろう？

僕がキョトンとしてしていると、六臂が見兼ねて説明してくれた。

「ツキちゃんはね、彌霸禰ちゃんを探してたんだよ。彌霸禰ちゃん、ツキちゃんのマスターだったんだって」

「え？」  
「まだよく理解ができないでいる僕に、六臂がわかりやすく説明してくれた。」

「半年前に切られた回路があつてね。ツキちゃんはその回路にいたんだけど、回路が切れることを知った彌霸禰ちゃんが、ツキちゃんを放したんだよ。ツキちゃんは、彌霸禰ちゃんに会いに、回路線を探してたんだけど、迷っちゃってね。で、ここに来ちゃったんだ」

「……………ふーん」

その説明を聞いて、僕の隣でPCに泣きながら喰い付いている彌霸禰ちゃんを見る。ツキちゃんも泣いている。感動の再開かあ。

「ごめんねええ、ツキちゃんああん！ ごめんねええっ！！」

「いいんですっ。マスターにまた会えたから、いいんですよ……………っ！ それに、マスターは俺を助けてくれたから……………っ」

「だつてみいちゃん、ツキちゃんと離れるのは嫌だつたけど、ツキちゃんが消えちゃうのはもつと嫌だつたもん！！ みいちゃんの家は、あの回路以外使えなかつたから！ あの後、ちよつと引っ越してもうほかの回路に繋いだの！ でも、ツキちゃんには会えなかつ

たっ！！ もう、一生会えないかと思つてたの！！」

でも、また会えた！！

そう言いながら涙を流す彌霸禰ちゃんを見て、僕は、あのことを思い出した。

僕がまだ、小さかった頃。両親が生きていた頃。

本当に少しの間の引越しがあっただけで、その引越し先が、ペット禁止だったんだ。で、誰か預けられるところもなかった。だから、飼っていた子犬を放した。僕は、それが嫌でしょうがなかったけど、引越し先で子犬が捨てられるところを見るのは、もつと嫌だった。だから、そこで放したんだ。

それから数ヶ月後。もとの家に帰ってきたときには、その子犬はいなかった。やっぱり悲しくなった。もう会えないんだな、と思つた。

けど、その次の日に、子犬が家に来た。今まで、野良で生活してきたんだろう。でも、その地域はいい人ばかりだったから、野良犬にエサをやるなんてことは、当たり前だった。だから、子犬も生きれたんだろう。

また会うことができ、本当に嬉しかった。大泣きしたっけ。

だから、彌霸禰ちゃんの気持ちは少しだけわかる気がする。

もう一生会えないとわかっていても、放さなければならぬこともある。

会えないとわかっていて放すことは、何よりも寂しいことだ。

だから、それに会えたときの喜びは、何よりも幸せだ。

僕は、六臂に

「彌霸禰ちゃんとツキちゃんの再開が終わるまで、僕は下にいるよ。終わったら、僕を呼ぶように彌霸禰ちゃんに言っておいて」

『わかった』

2人の再開を邪魔しちゃうあ悪いからね。

僕は下で、サイケたちと一緒に神経衰弱でもしていよう。

『マスター、性格が少しだけ変わりましたね』

「うん。柚留たちに出って、変わったの。なんかおかしいかなあ？」

『いつ、いえ。全然、おかしくありません。今のマスターは、昔より、すっ、すごく素敵ですよ』

「そう？　ありがとう、ツキちゃん。みいちゃん、ツキちゃんに会えて嬉しいよっ！　これからはずっと一緒にいれるね！」

『はっ、はいっ。おっ、俺、迷惑かけること、多いけど、よっ、よろしく願いますっ』

「あははっ。みいちゃんは全然いいよっ！　柚留に言っても、全然。むしろ明るくいって言うてくれるよ！」

×40 感動の再開(後書き)

ツキちゃんが可愛すぎる。もちろん、シズちゃんの次にだけどねっ！  
自分でもどうしようか迷ったけど、結局、彌霸彌ちゃんがツキちゃん  
のマスターだった、っていう設定にした。



× 4 1 好きでも嫌いでもなくて、 (前書き)

・ 会話文

・ 何がしたかったんだ…… orz

× 4 1 好きでも嫌いでもなくて、

「シズちゃん、大好き」

「っ、！ そっ、そっかよっ」

「シズちゃんは、俺のこと好き？」

「べっ、別に………！」

「えー？ 別について何、シズちゃん？」

「別には、別にだよ………っ」

「ふーん。じゃあ、シズちゃんは俺のことが嫌いでも好きでもない  
って取っていいね？」

「えっ、いぢ」

「だって、別になんでもないんでしょ？ だったら、どうでもいい  
ってことじゃん」

「ちっ、違いエよっ」

「何が違うの？」

「俺は、お前のこと、嫌いじゃない………っ」

「じゃあ、何なの？ 俺のこと、好きなの？」

「それは、違う……………」

「……………は？ 何言ってるの、シズちゃ」

「俺はお前のごとっ、そっ、その……………だよ……………」

「え？」

「だぁぁあっ！！ 俺はお前のごと愛してるって言ってるんだよ！  
「一回も言わせんなー！！」

「っ！！ しっ、シズちゃん……………」

「なっ、なんだよ……………」

「俺もシズちゃんのごと愛してるよー！！」

「うわぁっ！！ いっ、いざ、苦っっ」

「苦しいのは俺の愛の強さだよー！！ シズちゃん、愛してるーっ！  
「ー」

「うっ……………、お、俺も、愛してる……………」

× 4 1 好きでも嫌いでもなくて、（後書き）

たまに書きたくなる会話文。ちなみに、この話には何も意味はない。ただただ、「シズちゃんがこう言ったら萌えて燃えるなあ」って思っただけ。

## イベント小説 臨也ハピバ！

『あ、もしもし臨也？』

「やあ、柚留。君から電話なんて、珍しいじゃないか。どうしたんだい？」

『あのさ、今から僕の家に来れる？ 一緒に遊びたいって、津軽やサイケたちが言ってるんだけど』

「そうなの？ 今日には珍しいことばかりだなあ……。まあ、いいや。わかった、今から行くよ」

『じゃ、待ってるから』

5月4日。柚留から電話が来た。内容は、上記の通りだ。

さて、みんな！ 5月4日は何の日かわかるかな？

……え、わからないって？

しょうがないなあ、教えてあげよう！ 5月4日は、なんと！

俺、折原 臨也の誕生日です！

やっぱり、この流からくるとさあ、柚留たちは俺の誕生日会をひらいてくれるのかなあ、なんていう期待をしちゃうんだよね！。みんなは違うかな？

さて。

去年まで、ぼっちで誕生日会をしていた俺。ていうか、ぼっちな時点で会ってつけれないんだけどね。一人何役かやって、自分で買って包装してもらったプレゼントを開けて、バースデーソング歌いながらケーキ食べて。そんなことをして、毎年、秘書の波江さんがプレゼントをくれる。そんな感じだった。毎年。

しかーしっ！！

今年はなんか違う気がするぞ！

だって、柚留も帰ってきたし。シズちゃんっていう最高に可愛い恋人もできたし。彌霸禰ちゃんやサイケたちも増えたし。俺の誕生日を祝ってくれる人が、大分いる！

柚留の家は、どんな感じで装飾されてるのかなあ？　なんて、期待を抱きながら、俺は柚留の家に向かった。

やっぱり、俺の期待は淡かった。ものすごく、儂いものだったよ。柚留の家に行ったら、何もなっていなかった。それはそれは、いつもどおりの柚留の家だった。まあ、シズちゃんがいただけいいんだけどね。ハハハ。

傷ついた心を表に出さないように、俺は頑張っている。

が。それに追い討ちをかけるかのように、みんな。誰一人として、俺の誕生日のことに気づいていない。全然。恋人であるシズちゃんですえも。

しかも、柚留の家に行ったら、「ごめん、サイケと津軽と夢雄と日々也、どっか行っちゃった」なんて柚留に言われた。サイアクだ。楽しみにしていたのに。あのふわふわした小さい二人を見るのを楽しみにしていたのに！

俺の今年の誕生日も、今までとそんな変わりないかもしれない。家帰るときにケーキ買ってこ。泣こう。

夕方の4時半頃になって、俺は、柚留の家を出た。本当に、あの人たちは何も触れなかった。酷い。

がっかりした気分で新宿に帰って、自分のマンションの前に来たところでケーキ屋に行くのを忘れたことに気がついて、さらに泣き

出したくなつた。ああ、本当に最悪だな。

泣き出したい気持ちを堪えて、俺は自分の部屋の玄関に鍵を差し込む。

ガチャリと回してドアを開ければ。中は真っ暗。音も何もしない。この空気が、本当に寂しくなる。

ズタボロの心でリビングのドアを開けた俺と。

パァーンツ！！！！

『お誕生日おめでとう、臨也（いっくん）！！！！』

よく知っているメンツに、見かけない装飾品。俺が買いそびれたケーキ。俺の目の前には、何もかも、そろっていた。

クラッカーの中の紙ふぶきやらなんやら、色々なものをかぶつたまま、俺は何も言えないでいた。

そんな俺に、彌霸禰ちゃんとサイケが駆け寄ってくる。

「いっくん、ハッピーバースデー！！ 帰ってくるの、遅かったね！！！！」

「僕たち、待ちくたびれちゃったよー。あと三分でいざやが帰ってこなかったら、みんなでケーキ食べちゃうところだったんだよーっ！！！！」

2人の話を聞いていると、柚留とシズちゃんが俺に近寄ってきた。「遅かったね、臨也。僕たち、臨也が帰ってくる前につて、急いでここに来ただけだよさあ。君が案外遅かったから、もう少し遅くてもよかったなー、って思ったよ」

「ほんとだよ、ノミ蟲が。主役のテメエが来るまで、俺たちはうまそうなケーキが食べねえんだぞー！」

甘党のシズちゃんがそんな馬鹿なことを言う。

俺は、やっと言葉を発することができた。

「な、んで……………」

俺に、みんなの視線が集中する。

「みんな、俺の誕生日忘れてたんじゃないの……………」

そんな俺の言葉を聞いて、みんなが声を揃えて言った。

『忘れるワケないじゃん！』

こんな誕生日会は初めてだった。こんなに人に囲まれて祝ってもらうなんて、すごく嬉しかった。

「みつ、みんな……………っ！　ありがと……………っ！！」

この日は、俺にとって、最高の誕生日会だった。

後々聞くと、パーティーの準備は、俺が家を出てすぐに行われたらしい。どうやって入ったかは、シズちゃんに渡した合鍵でだ。それで、津軽とサイケ、夢雄と日々が準備をしたそうだ。これ考えたのは、彌霸禰ちゃんだそう。最初は信じられなかったけど、みんながそう言っつて、信じざるをえなくなってしまった。

でも、本当に楽しかった。

やっぱり、持つべきものは友達だよね！

そう実感した、ゴールデンウィークの真ん中。



イベント小説 臨也ハピバ！（後書き）

書いてて思った。

『臨也つて、友達少ない上に誕生日がゴールデンウィークの真っ只中だから、誰にも祝ってもらえないんだらうなあ』。

きつと、これは正論だ。まあ、なんだ。

おめでとーいざやくん（棒読み）。

ぜろ。 カイさんの提案（前書き）

会話文

相変わらず迷走中。（ズダダダダ

## ぜろ。 カイさんの提案

「ねえねえ、袖留っ！」

「ん？ ああ、なんですか、カイさん」

「アタシねっ、いいこと思いついちゃったんだ！」

「……………いいことって、どんなことですか……？」

「あのねえっ！！ 袖留× っていう「死んでください」

「ちよつと、なんで最後まで聞いてくれないの！？ せっかくカイさんが提案した企画だよ！？」

「そんなのやらないですよ！ なんで僕が総攻めなんですか！？」

「貴女、頭どうかしてますよ！？」

「え、じゃあなんなの。総受けがいいわけ」

「殺されたいんですか？」

「「じゅめん」」

「よし、殺します。プチッと殺します」

「やめてよ袖留。アタシが蟲みたいじゃん」

「そうですね。貴女は蟲以下の存在かと」

「生みの親になんていう口をきいてるの、この子！？」

「五月蠅いですね殺しますよ」

「やめてっ！！ いや、でも、この企画だけはしたいから殺されてでもやるよ！！ 絶対に通すからね！！」

「チツ……………。 図太い奴め」

「袖留、今すごい毒吐いたよね？ ね？」

「吐いてません」

「吐いたよね？」

「吐いてないですよ」

「……………ま、いいか。んじゃあ、さっそくみんなに話してっよーっ  
とー！」

「はー！？ ちよ、待ってくださいよ！！ ちよ、カイさん！ カイ

「さあん!？」

柚留× 企画始動!!

(あの人、やたらと楽しそうだった……。死ねばいいのに)

ぜろ。 カイさんの提案（後書き）

お久しぶりでーす。 みなさん、お待たせしましたあっ！！ 新企画  
ですよ、そのアナタ！！ やっふーっ！！（ドンドンパフパフ  
相変わらず迷走してますが、お付き合いよろしくですっ！

いち。 柚留×静雄（前書き）

「え、何だつて？」

「だから。ユズシズするから、シズちゃんを」

「やだねー！ 無理ー！ そんなことシズちゃんはしたく」

「ちよつと、最後まで聞いてよ。ユズシズをするから、シズちゃん  
借りたよ」

「は！？」

「だから、日本語通じないの？ ユズシズするから、シズちゃ」

「シズちゃんカムバアアアアアアック！ー！！」

「はいちよつと待とうかー行かせないよー」

「どうして！ー！」

「アタシが萌えるためなんだから、我慢しなさいよ！ー！」

「なんて自己中な野郎なん、つて、何それちよつと。ちよ、なんで  
俺を縛り始めるの。ねえ」

「邪魔しないように」

「はっ！？ ちよ、え、何コレ、ほどけない。ちよ、どうしよ、シ  
ズちゃん、シズちゃああああああん！ー！！」

いち。 柚留×静雄

「柚留、プリンが食いたい」

僕の家に来た静雄が、一言言った。

「急にそう言われても……………」

僕はとりあえず冷蔵庫を開けて見てみるが、プリンはどこにもない。いつもなら入ってるんだけど、最近では、津軽や夢雄も来たから、減りが早いんだよなあ……………。

「静雄、プリンないよ」

「ええっ!?!」

静雄って、プリンが絡むと別人のようになるよなあ……………。まあ、そこも可愛いんだけどね。

そう思いつつ、落ち込んでいる静雄に後ろから抱きついた。

「うあっ!?!」

「落ち込まないでよ、静雄」

耳元で言うと、静雄は顔を真っ赤にした。そこらへんは、本当に可愛いと思う。

「プリンの代わりと言っちゃあんだけど、ゼリーならあるよ?」

「ゼリー……………っ!」

静雄の好物はプリンだけど甘いものは全般好きだからね。僕の言葉に、静雄はとても嬉しそうな顔をした。

「食べる?」

「んっ、食べる!」

甘いものが絡むと、静雄は本当に子供っぽくなる。

「じゃあ、持ってくるね」

キッチンに行って、冷蔵庫からゼリーを1つ取り出す。おいしそうだけど、僕はいらぬ。静雄が食べてるのを見るので十分だし。ゼリーを静雄に渡すと、静雄は不思議そうな顔をした。どうしたんだろう?」

「どうしたの、静雄？」

「袖留は食わないのか？」

「ああ。うん、僕はいいや。静雄、食べてよ」

そう言うと静雄は、少し納得のいかなさそうな、不満そうな、複雑な表情をした。

が、黙ってゼリーを食べ始めた。

好きなものを食べてるときの静雄は、いつもならキラキラしてて、すごく可愛い。だけど、今日はなんか違う気がした。きつと、食べ始める前の出来事がきつかけだろう。

僕は、静雄に好きなものを、おいしく食べて欲しい。だから、こんな顔して食べている静雄を見るのは嫌だ。

んー……………、あ、そうだ。

「静雄」

「……………なんだ？」

「僕にもそのゼリー、ちょっと食べさせてくれるかな？」

「？ いいぞ？」

「ああ、違う違う」

僕にゼリーとスプーンを渡そうとした静雄に言う。そうすると、

静雄は、顔を顰めた。

「何が違うんだよ」

「あーん」

「……………っ、んなっ、！」

僕の言葉が理解できて、静雄が顔を真っ赤にさせる。

「静雄に食べさせてほしいな」

「うえ……………っ、あー……………、ううー…っ」

僕が言うと、静雄は目を泳がせる。

数秒後、決心がついたのか、スプーンでゼリーをすくって、僕の口もとに持ってきた。

「あ……………、あーん……………っ」

「ん、いただきますーす」



スプーンを咥えると、静雄は羞恥に耐えられなくなったのか、手を放した。

急なことにびっくりしてスプーンを口から落としそうになるが、なんとか啜える。

「……………ん、おいしい。ちよつと静雄。急に危ないじゃん」

「おつ、お前があんな恥ずかしいことさせるからだろうが！ 馬鹿か！」

真っ赤になってそっぽを向く静雄。そんな顔で言っても、効果は全然ないんだけどね。

「静雄、こつち向いてよ」

「……………」

「しーずーお」

「……………つ、なつ、なんだよっ」

僕がかけるプレッシャーに耐え切れなくなった静雄がこちらを向く。

「ゼリーの敬礼」

そう言って頬にキスをする、静雄は耳まで赤くなった。可愛いなあ。

「かーわいいっ」

「んなつ、かわいくねえっ！！」

照れた静雄は、ぱくぱくとゼリーを口に運んでいく。  
そんな姿さえ愛しくて、僕はまた、キスをした。

「ほい、カッター！」  
「おつかれ、しずお」  
「ゆずるくんもおつかれーっ！」  
「いやあ、2人ともいい感じだったよ！ 萌えたよ！」  
「きっ、緊張したあー……………」  
「シズちゃん可愛かったよ！ ナイスだったよ！ アタシ、鼻血がもー、だらだら出てきちゃった！」  
「ティッシュの消費量がハンパないよっ！ それに、みいちゃんの服まで汚れたし！ サイアク！」  
「いやー、この企画が終わるころには、アタシ死んじゃうかも……………」  
「っ」  
「死んでくださいよ」  
「ゆっ、袖留落ち着け」  
「落ち着いてられないよ。なんで触れる寸前のキスもどきの練習をしてまでこんなのに参加しなきゃいけないの。死ねばいいのに」  
「シズちゃん！！」  
「臨也！」  
「もう、なんなのこの人！ ありえないよ！ 俺のシズちゃんになんてことをさせるんだ！」  
「えーっ、いいじゃーん」  
「よくないよ！ 全然！！ シズちゃんの気が変わっちゃったらどうするの！？ 何、ユズシズ！？」  
「おい、臨也。俺はお前以外の奴を好きになったりしねえぞ」  
「っ！？ しっ、シズちゃん……………っ！！」  
「やっぱ視覚てきにはユズシズのほうが」  
「死んでください」  
「冗談だよ、冗談っ！ 袖留には仁がい「殺します」」  
「え、ちよ、袖留やめて。その機材壊されたらすぐこまイヤアア



いち。 柚留×静雄（後書き）

ほいほい、萌えた。きつと萌えた。たぶん萌えた。

これからやる企画、静雄の派生たちに受けてもらいます。そこんと  
こよろしく）キラッ

にっ。  
柚留×津軽（前書き）

「えーっ、津軽をー!?!」

「お願い、サイケたん!」

「うー……………。でも、柚留くんだし……………、いいよ」

「ありがとう、サイケたん!」

「今日だけだからね!!」

につ。 袖留×津軽

自分の部屋から戻ってきたら、リビングのソファで津軽が舟を漕いでいた。近寄ってみると、すごく眠たそうな顔をしていた。

まあ、津軽は普段からこんな感じだけだね。お昼時になると眠くなっちゃう子ども体質。子どもサイズでもノーマルでも、その部分は全く変わらない。こうなったのは、仁さんが設定したからなのかな？

そんなことを考えつつ、津軽に視線を合わせるために、僕は少し屈んだ。

すると、僕に気づいた津軽が、目を薄っすらと開けてこっちを向いてきた。

「……………ゆずる……………？」

「津軽、眠いの？」

僕の問いに、津軽はゆっくりと頷いた。見ればわかるけどね。

「じゃあ、横になって寝たら？」

そう言つと津軽は、首をふるふると横に振った。

「嫌なの？」

「……いやじゃない……………。でも、こっちのほうがいい……………」

そう言つて、津軽はまた眠ろうとした。

が。

ふと、何かに気がついたように、僕のほうを見てきた。ん、なんだろう？

そう思っていると、津軽が僕の腕を引いてきた。

「何、津軽？」

「……………ゆずるのひざまくらがいい……………」

「！」

普段、津軽はこんなこと言ってこない。それに、いつもはされるほうじゃなくてするほうだ。

たぶん、寝ぼけているんだろう。

でも、いつもならこんなことないから、たまにはいいかな。

津軽を見て、僕は思った。

「いいよ、してあげる」

僕はそう言いながらソファに腰掛けて、膝をぼんぼんと叩く。

「おいで」

津軽は、僕の膝に頭を乗せた。顔を覗き見れば、満足そうな顔をしていた。

「よしよし」

そう言いながら髪を梳くと、津軽はくすぐったそうな、気持ちよさそうな、どちらとも言えない顔をした。頭をぐりぐりと僕の膝にすりつけてくる。

「寝ちゃっていいからね？」

「ん……………」

ぼすぼすと体を軽く叩くと、津軽はすぐに寝てしまった。

そんな津軽の顔を、僕は観察してみる。

幼馴染の静雄と同じ顔。今のサイズは、本人と同じだ。でも、ど

こかが違う。雰囲気とか、表情とか、性格とか。

津軽は、静雄と違って、雰囲気とかが幼い。笑った顔とかもそう。温厚な性格だから怒ることもあまりないし。

そう考えていくと、津軽は静雄と全く反対の存在という結論に辿りついた。これには、自分でも少し笑ってしまった。

あ、でも全くってわけでもないかな。

そう思いながら、自分も眠りについた。





「！！ アタシの一眼レフがああああ！！！！」  
「僕、もうすでに限界が近いんだけど……………」

さん。 柚留×夢雄（前書き）

「日々やあああああつ!?!?!?」

「させません!! 夢は僕のもですよ!!」

「ちょ、ムリ!! アタシの欲望は絶対に叶えるわ!! たとえ馬が襲ってこようともね!!」

「あつ、ちよつと、夢!! 夢—————つ!?!?!?」

さん。 袖留×夢雄

「夢雄」

「ん、なんだ袖留？」

俺がクッキーを作っていると、袖留が来た。なんだろう、俺なんかしたか？

「クッキーの作り方さ、彌霸禰ちゃんたちに教えてあげてくれる？」  
ちよつとビクビクしていた俺は、その言葉に拍子抜けしてしまった。

彌霸禰たちに、クッキーの作り方を教える。そんなのは、お安い御用なんだが…………。

「急にどうしたんだよ？」

そう。気になるのはそこだ。急に何だというんだ？ クッキーの作り方を教えて欲しいだなんて。

理由を問うと、袖留が少し赤くなりながら答えた。

「そのさ、僕が夢雄のクッキーがおいしい、って言ったら、あの子たちも作りたい、なんて言い出してね」

なんでか、理由を教えてくださいないんだよ。

そう言いながら袖留は、眉を下げて笑った。

「ごめんね、急に」

「ん、いいんだ。気にするな。勉強は教えてやれねえけど、家事とかなら得意だしよ」

俺がそう言うと、袖留は「ごめん」と言い残して、彌霸禰たちを呼びに行った。

しかし、なんなんだ、あのちびたちは。急にクッキーの作り方なんて…………。袖留に作ってやりたいんだらうか？

そう思っていると、ちびっ子たちが来た。

「ゆめちゃん、よろしくー！」

「ゆめくんよろしくねっ」

「よろしく…っ」

「おう。いいぞ。じゃあ、新しい生地作るかっ！」

クッキー作りも、型抜きまでできた。そこで俺は、柚留の言っていたことを思い出し、ちびたち聞いてみた。

「なあ、お前らさ、なんで急に、クッキーの作り方なんて教えて欲しかったんだ？」

俺の問いに、3人は顔を見合わせて、それから、声を揃えて言った。

『柚留（ゆずるくん）に喜んでほしかったから！』

「！」

その言葉に、なんだか俺が嬉しくなってしまった。

こいつらも、こんなことを考えるのかと。

嬉しくなつて、俺は言つてやった。

「お前らが作ったんだ。柚留、すっげえ喜ぶと思うぞ！」

そう言つと、3人は笑った。

「おう、柚留」

その日の夜。

俺がやることを終えてリビングに戻ると、柚留がソファに座っていた。

「あ、夢雄。今日はありがとね」

柚留は俺の顔を見るなりそう言ってきた。

「ん、別にいいんだ。俺も楽しかったしよ。で、どうだった、クッキー。うまかったか？」

俺の言葉に、柚留は頷いた。

「おいしかったよ。すごく。3人にありがとつて言ったら、とっても喜んでた」

「そうか」

3人の顔を思い浮かべて、少し笑いが零れる。  
と。

「夢雄のおかげだよ。ありがとね」

柚留がそう言いながら、俺の頭を撫でてきた。

それが少し恥ずかしくて、俺は照れ隠しをするために笑った。

「夢っ!!」

「ぬおっ!?!」

「夢、僕のことまだ好き!?!」

「ああ、もー。サイアクだったよ。日々くん怒るしさあ、馬は暴れるしさあ!! もう、柚留の馬鹿!!」

「なんで僕なんですか!?! ていうか、自業自得でしょ、カイさん!!」

「ええい、知るかそんなこと!! アタシの辞書に自業自得なんて言葉はないんだあっ!!」

「なんて都合のいい辞書なんですか!! もう付き合いきれませんよ!!」

「え、ちよつと柚留、まだツキちゃんが終わってな」

「知りません!!」

「え、ちよ、柚留!! あー…、行っちゃった……。しょうがない、ツキちゃんは諦めるか。じゃ、この企画終了だねっ!! うんっ。家帰ろっ」



× 4 2 柚留の部屋

『彌霸禰ちゃん……………』

『あつ、ゆ、ゆずる、……………っ』

『大丈夫、優しくしてあげるから……………』

『で、でもお……………、』

『ほら、開いて……………』

『…っ、やっぱ、むりだよお、……………っ！』

こういうとき、第三者はどう対処すればいいのだろうか。

池袋の素敵で無敵、眉目秀麗な情報屋の折原 臨也は今、人生最大であるうピンチに直面していた。

時を遡ること数分前。

俺は、シズちゃんと一緒に、柚留の家に来た。理由は特にない。

ただなんとなく、遊びに行きたくなっただけなのだ。

シズちゃんと一緒、はいここ重要。

俺はシズちゃんが好きだ、愛してる。誰よりも、何よりもね？

そーんな可愛いシズちゃんと同じ顔をしてるけど、なんか違う子たちが、柚留の家にはいるわけで。

え、それが誰かって？ もう、野暮なこと聞かないでよ。

津軽と夢雄とツキちゃんに決まってるでしょ！

もうシズちゃんパラダイスだよ。俺死んでもいいよ。

それプラスシズちゃん！！ これはもう萌えるしかないんだよ。

シズちゃんが4人という天国を前に、俺は浮かれていたわけね。わかる？

ああ、でもまあ、ちゃんとインターホンは押したよ？ 殺される

からね。首が？げるのはお断りだよ。

で、柚留が出てくると思ってたんだよ。  
しかし。

「……………あれ、夢雄？」

出てきたのは夢雄だった。

別に、この家には柚留以外にもたくさんいるから誰が出てきても  
おかしくはない。

俺とシズちゃんが驚いたのは、そこではないのだ。じゃあ何に驚  
いたのかと言えば、

「おい、デリ……………、目エ真っ赤だぞ？」

そう。夢雄の目だった。

夢雄の目は、真っ赤で涙目になっていた。目元も赤い。

そんな夢雄の顔を手で撫でてやってるシズちゃん萌えとか、言い  
そうになっただけどころいうときに言えるわけない。言ったら、俺の  
体は粉になるだろう。もちろん、シズちゃんの手によって。

いや、そんなことより！

「夢雄、どうしたの？ 日々に泣かされた？」

「ひーくんはお前とは違うぞ！」

「ちよっと待とうか夢雄。その言い方だと、まるで俺がシズちゃん  
を毎回泣かせてるみたいになるよ？」

「違うのか？」

「夢雄酷いっ！」

「夢雄。本当のことでも言っちゃダメだろう。臨也が泣くとめんど  
くせえ」

「ねえ、シズちゃん俺のこと好きだよな？」

俺、最近よく思う。一日一時間ごとに。

「当たり前だろ。つか、本当に何があっただ、夢雄？」

あ、今微かにシズデレが見えた。可愛いね、シズちゃん。

「……………柚留と……………、彌霸禰が……………っ！」

「え、柚留と彌霸禰ちゃん？」



「とりあえず、上がるうぜ」

2階に上がると、柚留の部屋の前で、オートマタ達が固まっていた。サイケが小型マイクをドアに近づけている。何してんの？

そう聞こうと、口を半分開いたとき。

『彌霸禰ちゃん……………』

で、冒頭に戻る。

この家の風紀委員（笑）、柚留くんの部屋から、こんなあるまじき声が聞こえてくるなんて……………！ しかも相手は彌霸禰ちゃんとキタ。

柚留、趣味悪いなあ。なんで彌霸禰ちゃんなんだらう。よりによつて。まあ、ロリコンだしね、柚留は。

「なつ、ちよ、は!？」

部屋から漏れてくる声に、シズちゃんが顔を真っ赤にする。わ、シズちゃんてホントにウブ。可愛いなあ！

「なんでこんなことになつてるの？」

とりあえず、状況把握から。

俺の問いに、日々也が答えた。

「数時間前から、こんな状態です……………。柚留さんが彌霸禰さんを連れて行つて、それから出てこないんです……………」

ふーん。やつぱり、やつてるのかな？ まあ、柚留も成人男子だしね。しょうがないよ。

でもさあ、やつぱりね。

「なんで彌霸禰ちゃんなんだらう」

「お前、色々とずれてるぞ」

一番気になるのは、やつぱりそこだな。うん。

「津軽とかサイケとか、可愛い子がたくさんいるのに、なんで彌霸禰ちゃんなの!?! よりによつて!?!」

「でもよお、そりゃ、本人の好みってもんがあ  
『ひゃあつ、！！』」

ビククウウウウツツ

部屋から、今までよりいつそう大きな彌霸禰ちゃんの声が聞こえてきた。それにびっくりする一同。

「おい、まずくねえか…?」

「そうだね、流石に……、」

「真つ昼間から盛りすぎだと思っ……」

『そこじゃねえよ！！』

みんなに蹴られた。

「痛いなあ、何すんのさ！！」

「テメエ、粉にするぞノミ蟲！！」

「すいませんでした」

なんてデンジャラスな恋人だ。まあ、可愛いからいいけどね。

「邪魔する気はねえが……」

「やるならやつぱり、夜中にやってほしい」

「デリまでそんなことを！！……まあいい。ノミ蟲を潰しとけば」

「ねえシズちゃん。どこをどうすれば、そういう結論に辿りつくの  
かなあ？」

「あ？　んなもん、ちょっと視点を変えれば……」

「光の屈折じゃないんだからね!？」

そんな会話を交えつつ、俺たちは部屋に入ることにした。

緊張する。ああ、やだな、彌霸禰ちゃんの裸。目が腐りそうや  
だよ。

「せーので行くぞ……!!」

「うん……!!」

シズちゃんが息を吸う。

そして。

「せーの、」

ガチャ

「君たち、さっきから何してるのかな？」

『うわぁっ!!!』

ドスンッ!

開けようとしたところで、中から開いた。そのせいで俺たちは、勢いあまって倒れてしまった。

「うつつ……、アレ……?」

起き上がってみると、そこは、いつもの柚留の部屋だった。

ただ違うのは、彌霸禰ちゃんが部屋にいることぐらいだ。

「……? ねえ、柚留」

「何？」

「彌霸禰ちゃんとやってたんじゃないの？」

「相変わらず、臨也は死にたがりのようだね？」

「ギアアアアア!! 違う! 違うよ柚留!! 俺の話を聞いて、ギ

アアアアアアアア!!」

なんで俺がこんな目にあってるんだろうか。

そんなところに、シズちゃんが来た。

「なあ、柚留。お前、彌霸禰と何してたんだよ」

「え? ああ」

「彌霸禰ちゃんと虫歯見てたんだよ」

「」「」「虫歯あ??」「」

予想外の答えに、一同唾然とする。

「虫歯って、……あの？」

「そうだよ。それ以外に何があるっていうんだい？」

柚留がキョトンとした顔になる。ああ、コイツ気づいてねえ。

……でも、まあ。

「よかったね、みんな」

「ああ、そうだな。安心した」

「うん、よかった！」

「よかった……」

「ああ、ホントにな……！！」

「夢、泣かないください」

—安心して、俺たちはリビングへと向かっていった。

柚留と彌霸禰ちゃんは、俺たちを、不思議そうな目で見ていた。

「まったく。こんなになるまで虫歯放っておいて。なんで言わなかったの？」

「だって、歯医者さんだから……っ」

「あのねえ、彌霸禰ちゃん。虫歯って、放っておくと死ぬんだよ？」

「！？ うそ……！！」

「本当。歯から病原体が入ってくんだっけ……？ ま、そんなことはいいや。予約してあげるから、行っておいで」

「……うん……」



× 4 2 柚留の部屋（後書き）

今日は歯医者さんに行ってきましたー。そんな日の小説。虫歯って、放っておくと死ぬんだって。怖いですねー。みなさんも、しっかり歯磨きしましょうね！

× 4 3 傘の日(前書き)

・ 来神時代注意!

× 4 3 傘の日

6月の中旬。梅雨真っ只中であるこの時期に、いつもは鬪牛の如く暴れまわっている静雄と、鬪牛を興奮させる布のような立場にいる臨也も普段より数倍静かだった。それにより、僕が怒る回数も減るわけだから、最近はストレスが溜まらなくてとてもいい。いつもこうだったらしいのに。この時期になると、毎年思う。

「梅雨の時期って、本当に嫌だなあ」

そんなことを考えながらお弁当を食べている僕の目の前で、臨也が零す。

「どうして？ 最高だと思うよ、この時期は」

だって、臨也と静雄が静かだから。

言葉には出さないが、後につけたす。

そう言う僕に、臨也は言った。

「袖留って、どこまでもおかしい奴がよね」

「ははは。君に言われたくないなあ、臨也くん。どうして君はそんなに自殺願望が強いのかな？」

「やだなあ、袖留ー。とびつきりの笑顔で俺の首掴まないでよー」  
食事中ということにも関わらず、僕は臨也の首を掴んで窓の外に投げ飛ばそうと思った。天気は晴れ。雨だったらよかつただけ、ここ4階だし、十分か。

「臨也。生まれ変わったら、もう僕に関わってこないでね」

「ちよっと待って。その台詞は俺が死ぬことを前提で言ってるよね。その上、関わってこないでねって。何コレ？ イジメ？」

「イジメじゃないよ。それ以前に君は虐める価値すらないクズだからね」

「イジメってレベルじゃない!!」

僕の一言に、めそめそと泣き出す臨也。ああ、もう。本当にウザイな。



そんなことをしていると、静雄がやってきた。その手には、購買で買ったイチゴ・オレとメロンパンがあった。

「あ、静雄」

「よお、柚留。……………なんでノミ蟲は泣いてんだ。きもちわりいことこの上ねえんだが……………」

「やあ、シズちゃん。俺は今、柚留から喰らった攻撃のダメージを中和するために泣いているんだよ。だから、君に気持ち悪いなんて言われても、痛くも痒くもないよ」

「ふーん……………」

「ねえ、臨也。目は口ほどにものを言うってことわざ、知ってるかな？」

君の目は今、「シズちゃんまで酷い!!」っていう目をしているよ。

でも、これは口に出さないでおこう。だって、言ったら臨也が煩いから。もうこれ以上騒がしくなるのは嫌だし。ウザイし。

そんな臨也はほっといて、静雄をとなりに座らせる。

「静雄、今日は傘、持ってきた？」

「あ？ いや、持ってきてねえよ。だって、朝晴れてたし」  
それを聞いて、静雄らしいな、と思った。

今日は午後から雨が降る。静雄のことだから、天気予報を見なかったのだろう。弟くんも、最近忙しいようだし、声をかけられなかったのかな。

僕が思っていると、いつの間にか復活してきた臨也が言った。

「えー、何シズちゃん？ 天気予報、見なかったのー？ 今日午後から雨が降ってくるんだよ？」

「臨也うるさい。静雄、折り畳み傘は？」

「……………ねえ」

「この時期になって折り畳み傘持ってないとか、ただの間抜けだよね。まあ、シズちゃんはそれ以下だからしょうがな」臨也、黙らないうと捻り潰すよ」

「すみません」

静雄がキレそうになっているのを見て、僕は咄嗟に臨也を制止した。よし、これで静雄がキレない。僕の手間もかからない。

「そっかー。じゃあさ、学校に貸してもらえば？　それが嫌なら、僕が貸すよ？」

「いや、大丈夫だ。走って帰る」

「え、それは僕が許さないよ？」

風邪を引くようなことを言う静雄に、僕は脅迫の言葉を吹きかけた。

「傘ぐらいなら、僕が貸してあげるから。ね？」

「……じゃあ、借りる……」

「そうしな」

何かを忘れていている気がするけど、それは気にしないでおう。

どうしてこうなった。

俺は今、ノミ蟲とひとつの傘に2人で入っている。所謂、相合傘とか言うやつだ。

なんでこうなったのだろう。

そうだ。

柚留が急用が入って帰っちまったからだ。

だからって、濡れて帰ればいいものを。どうして俺は、殺したいほど大嫌いなコイツと、相合傘なんぞしているのだろうか。

さっさと殺しちまいたいが、大雨の中で殺し合いをしようなんて気にもなれず、俺とノミ蟲のあいだには、居心地の悪くなるような沈黙が漂っていた。

もう少し。もう少しの辛抱だ、俺。後ちよつとで家に着く。そうすれば、この嫌な空気ともおさらばだ。

そのとき。

「ねえ、シズちゃん」

ノミ蟲が、沈黙を破った。

ツチ。コイツとなんか話したくねえよ。

が、とりあえず「なんだ」と反応をしておく。

「俺さあ、シズちゃんのこと、大っ嫌いだなあ」

「…は？」

コイツは、急に何を言い出すのか。おかしかった頭が、とうとう壊れてしまったのだろうか？

そんなこと思っていると、ノミ蟲はまた、一言言った。

「だからさ、今度はもう、傘なんか忘れないでよね。俺、君を傘に入れるのはもう御免だよ」

肩がびしょ濡れになるからね。

そう言いながら、ノミ蟲は肩をすくめる。左肩が濡れていた。

ソレを見て、俺も言い返してやった。

「俺だって、テメエと入ると濡れるから御免だな」

「えっ、昨日2人で帰ったの!？」

「そつ。シズちゃんが大きいせいで、俺、肩がびしょ濡れだったんだよ。まあ、シズちゃんは……」

「静雄は大きいからね」。臨也みたいに、肩だけでは済まなかったみたいだね。今日の様子からして」

「まさか、あんなな化け物でも、雨如きで風邪を引くとは」

「臨也、お見舞い行ってあげなよね」

来神時代の、傘の日のできごと。

× 4 3 傘の日（後書き）

今日、6月11日は、暦上で入梅の日だそうです。だから、傘の日らしいですよ。梅雨の時期はジメジメしてあんまり好きじゃないけど、袖留くんにとっては、一年で一番、幸せな時期だよね。

番外編 初期設定小説1（前書き）

どうもつ。さてさて、いきなりですが、この間、柚留くんの初期設定画と小説を発見したので、今回、何話かにわたって公開したいと思いまーすつ。

ちなみに、柚留くんが女の子です。

しょっぱなからBLだよ

番外編 初期設定小説 1

「死ね臨也アアアアア!!!」

「おつと。危ないなあ、シズちゃん」

「んなこと知るかあああ! 死ねノミ蟲!!!」

「こわい、こわーい」

池袋。

いつもどおり、戦争コンビが喧嘩という名の殺し合いをしている。今日はなぜか、一段とハデなものだった。

それもそのはず。

臨也が静雄にキスをしたのだから。

それも、道のド真ん中 ведь。

恥ずかしさと気持ち悪さが入り混じったなんとも言えない感情が湧き上がってきて、堪えられなくなり、それを忘れたくて、今日はがむしゃらに標識を振っているのだ。

あの喧嘩人形の顔が赤い。人々は、とても不思議に思っていたが、巻き込まれるなんてとんでもないので、なるべく目を合わせないようにしていた。

「顔赤くしちゃって、かーわいいっ」

「んなつ、こ、殺す殺す殺す殺す!!!」

臨也の言葉に、更に顔を赤くする静雄。彼は、持っていた標識を臨也の少し手前に投げた。しかし、それは軽く避けられる。

「死ねノミ蟲イイイっ!!!」

「やだなあ、シズちゃん」

そんな物騒なこと言わないでよ。

臨也がそう続けようとしたとき。

T字路を抜けたところで、大型トラックが走ってきた。

臨也と静雄が気づいたときには、もう遅かった。

大型トラックの運転手は、慌ててブレーキを踏む。しかし、間に合っはずもなく。

ああ、死んだ。

臨也がそう思ったとき。

ガコン

ッ

その場に、大きな音がした。

それは、金属と金属が擦れ合うような、そんな音。

しかし、金属と擦れ合っていたものは、金属ではなく、

人間の拳だった。

周囲の人間は、今起きていることをろくに理解できずにいる。が、人間がどうあるかと、時の流れは変わらない。事はどんどん進んでいっている。



拳ひとつで止められた大型トラックは、前に進むための勢いのやり場をなくし、結果的にその場で止まった。その際に、タイヤが摩擦でアスファルトと擦れ、ゴムの焼ける臭いとその場に充満した。トラックを止めた人物は、その場から、全く、1mmも動いていなかった。手袋も何もしていない素手の拳からは、煙が上がっている。血は出ていなかった。

トラックの運転手も、そこにいた周囲の人間も、臨也も静雄も、呆然としてしまった。

1トン以上はあるトラックが、あの勢いで走っていれば、凄まじいスピードだろう。なのに、それを素手で、その上拳ひとつで止めるなんて。

トラックを止めた人物は、それから拳を離した。拳を叩き込んだ箇所は、へこみが酷く、焦げていた。しかし、本人は普通に振舞っている。みんな、恐怖を覚えた。

そんなとき。注目の的になっている人物が口を開いた。

「危なかったなー」

その言葉に、周りの人間は驚愕した。この場に似つかわしくない間延びした声。

そんなことより、驚いたのは、その人物の声だった。

完全に、女の声なのだ。

そいつを見てみれば、キャップを目深にかぶっていて顔はよく見

えないが、体つきは確かに女のものだった。

なんで、女が!?

その場にいる全員が思った。

当の本人は視線に全く気づかず、臨也のほうに歩み寄っていった。臨也は、警戒して懐に手を突っ込む。いつでもナイフを出せるようにだ。

そんな臨也に、女は言った。

「ひっさしぶり、いざにゃんにシズちゃんっ!」

そう言って、彼女はキャップを取った。

その彼女に、人々は目を奪われた。

美人とも可愛いとも言える、どちらにしる端麗な顔立ちだった。

その顔が、臨也と静雄に笑いかける。

2人とも、見惚れてしまった。

が、すぐに疑問に思った。

久しぶり、?

2人はそれぞれ、記憶の糸を必死で手繰っていた。そして。

「あ、」  
「お前、」  
「譲ゆずる!?」  
「」

今の臨也と静雄の顔は、普段では考えられないような顔だった。それを知ってか知らずか、女は「せういかあーいっ!」と、明るい声色で言った。

状況が呑み込めない周りの人間。しかし、そんな気にせず3人は話を進めていく。

「どうしてここにいんだよ!？」  
「引越したんじゃないのかい、譲？」  
「戻ってきたんだよう。でさあ、2人に顔出そうと思ったんだけどねえ? こんなことになって、びっくりしちゃったよー」  
ケラケラと笑いながら言う彼女。  
彼女より、周りのほうが驚いていたと、2人は言えなかった。

と、思い出したように、譲は、トラックのほうに駆け寄っていた。

そして、言う。  
「運転手さん、ごめんねーっ! トラック、ぼっこぼこになっちゃった! 手加減は、まあしたんだけど、うまくいかなかった! でも、殺人者にならなくてよかったね! だから、許して!」

今、さらっとすごいことを言った。

全員が思うが、譲はそんなこと気にせず、また笑っている。

「じゃっ、これで一件落着ね！　とりあえず、アイスが食べたい！  
いざにゃん、アイス！！」

この言葉で、事件は終わった。……たぶん。

池袋に、恐ろしい人物が一人加わったという情報が街中に広がるのは、そう先でもない未来だった。

番外編 初期設定小説1（後書き）

びっくりした。柚留くんが女の子だったってことに。びっくりした。更に驚いたのは、性格とかが違った。今はまあ常識人な彼。しかし、初期設定ではとても、とても変人でした。なんかもう、すごく、ずば抜けて変な子だった。

まあ、こんな感じで進めていきますね

## 番外編 初期設定小説2

「ガ ガ くんもおいしいよねえっ！ でも、わたしは個人的にホ  
ーランバーが好きっ！！ でもでもっ、やっぱり両方好きだなあ  
！」

俺とシズちゃんは今、目の前で棒付きアイスを何十本という単位  
で平らげている女に呆気にとられている。

数十分前に、俺はこの女に助けられた。

大型トラックを拳ひとつで止めた、この女に。

彼女の名前は、蜘蛛ノ井 譲あやむら。俺たちの高校時代の友人だ。かな  
り変わった子で、好物はアイス。ちなみに、ホーランバーが好き  
だそうだ。

彼女は、性格も変わっているが、変わっているのはそれだけでは  
なかった。

譲は、シズちゃんよりも化け物だった。

可愛い顔立ちをしているが、彼女は、シズちゃんを上回る力を持  
っていた。その上、力だけでなく、言葉で説き伏せることも得意だ  
った。それは、無自覚のうちだろう。譲の垢抜けたキャラが、シズ  
ちゃんを説き伏せるのだろう。俺もこんなこと言っているが、譲に  
は敵わない。

譲のことを知ったのは、高校入学から2ヶ月後のことだった。

そのころから既に喧嘩をしていた俺とシズちゃん。その日も、殺

し合いをしていた。

校舎内で暴れまわっていた俺とシズちゃん。周りの物はほとんど、シズちゃんの手によって壊れていた。きっと、校長や教頭等の教員は頭を痛めるであろう。

時間は放課後。校舎内には、生徒は誰もいない。………はずだった。

いたのだ。俺が逃げ込んだ教室、第一理科室に。

なぜか、棒付きアイスを啜えて、薬品の調合をしている少女が。

彼女は、急にドアが開いて、驚いたのだろう。はっと顔を上げて、こちらを見た。そのせいで、丁度目が合ってしまった。

しかし、彼女の顔をゆっくりと見ることもできず、俺を追ってきたシズちゃんが、理科室に来た。

どこからか持ってきた教卓を投げながら。

俺は、ギリギリそれを避けた。

教卓は、そのまま真っ直ぐ飛んでいく。彼女のほうに。

シズちゃんも彼女の存在に気づいた。しかし、そんなのは後の祭り。教卓は、疾風を纏<sup>まと</sup>って飛んでいく。彼女は、教卓が大分迫ってきてから、それに気づいた。

当たる。

そう思ったとき。

「ふにゃあつ、！」

そんな声とともに、教卓はピタリと止まった。しかも、宙で。

一瞬、何が起こったか理解できず、そちらを凝視してしまう。そして、気づいた。

教卓は、浮いているわけではない。彼女がとっさに上げた右手が教卓の足を掴んでいたのだ。それも、微動だにせず止まっている。

目の前の光景に、俺とシズちゃんは硬直してしまった。

どうして女の子が、教卓を片手で持っているのだろうか？

そんな俺たちを尻目に、彼女は教卓を静かに床に降ろす。

「ねえ」

彼女の声に、はっと我に返る。彼女の声は心地のいい明るいような、優しいような声色だった。

そんな彼女は、残り少なくなっている棒付きアイスを食べながら、こちらに寄ってくる。

俺とシズちゃんは、そこから動けなかった。

「また喧嘩してるの？」

「「え……？」「」

彼女の言葉に、俺とシズちゃんの声が重なる。しかし、今はそん



なこと気にならなかった。それよりも、彼女の言葉が以外だった。危ないと怒鳴られるか、怖がって泣き出すのかと思っていたのに。「2人とも、いつも喧嘩してるからさっ。そんなことばかりしても、楽しくないでしょ？」

ちがうかなあ？

そう言いながら小首を傾げる彼女。きつと、それも無自覚なのだろう。男に媚びているかんじは全くない。コイツはこういう奴なのだろう。

「喧嘩ばっかじゃ、つまんないよー。一緒にアイス食べる？」

にこにこ笑いながら、彼女は言う。アイスは別にいららないんだけど…………。

「ねえっ！ わたしと仲良くしてほしいな！」

そう思っている俺の手を、アイスを食べ終わった彼女が、空いた手で握った。いつもの俺だったら振り払うだろう。しかし、今日はなぜか、うまく動けなかった。

「折原臨也くん、平和島静雄くん！ よろしくね！ わたしは、蜘蛛ノ井 譲だよ！ 気軽にジョーンって呼んでね！」

ぱあっと、花が咲きそうなほど明るい彼女の笑顔に、不覚にも、俺は魅入ってしまった。隣にいるシズちゃんもだろう。横目で見ると、心なしか、シズちゃんの頬は少し赤かった。たぶん、俺も若干赤いだろう。

その日から、俺たちの日常が始まったのだった。

それからわかったことなのだが、譲は、かなりの変人だった。お弁当の中身は棒付きアイスと、たまに少しのおかず。このことから、

かなりのアイス好きとわかった。そういえば、初めて会ったときもアイス食べてたな。

もっと変わっていたのは、彼女の『力』だった。

シズちゃんも怪力だ。標識なんて普通に引っこ抜くし、自販機なんて投げてしまう。

しかし、譲はそれを上回る力を持っていた。

シズちゃんの投げた自販機を、普通に片手で止めたりしちゃうし、俺とシズちゃんより小さいのに、俺とシズちゃんを同時に持ち上げちゃうし。前に野球をやったときに、彼女をピッチャーにしたら、剛速球だったせいでグローブとボールが焦げてしまったことがある。ちなみに、彼女はそうだったことで、よく物を焦がす。

でも、そんな力を持っていても、譲が可愛いことに変わりはない。だから、それなりに人気もあった。

で。

今はどんな状況かというと。

シズちゃんと追いかけてこをしていた俺は、トラックに引かれそうになった。そこに、県外に引っ越したはずの譲が現れて、助けられたってわけだ。今、譲はアイスを食べている。それも、大量に。

「いやあ、おいしかった！ いざにゃん、アイスありがとね！」

そう言いながら、譲がにっこりと笑う。ああ、可愛いなあ。ま、一番はシズちゃんだけだね。

「なあ、譲。お前、これからどうするんだ？」

シズちゃんが、満足気な譲に聞く。たしかに、ソレは気になる。戻ってきたと聞いたけど、彼女はこれからどうするのだろうか？

「んー。とりあえず、池袋に住むけど、どうするかはよく決めてな

いな。ああ、でも仕事はもうあるから大丈夫だよ！」

ああ。そうなんだ。

譲が県外に出たのは、仕事のスカウトがあつたからだ。きっと、そこで就職したのだろう。どんな仕事なのかは、よく知らない。情報屋をやっている俺だけど、譲のことはよく知らない。彼女の情報は、あまり洩れていないのだ。

「んーっ！ じゃあ、そろそろ行くね！ ちょっと用事があるから！ じゃ、またねえっ」

そう言つて、譲は帰つてしまった。

「久しぶりに会つたけどよ……。あんま変わつてなかつたな、アイツ」

「そうだねえ。相変わらず可愛かつたよね」

「……………ああ……………」

「あれ？ シズちゃん、どうしたの？」

「……………別に……………」

「……………もしかして、嫉妬したあ？」

「んなつ、！ んなことねえよ！！！」

「嘘つけないよねー、シズちゃん。顔が真っ赤だよー？ 可愛いなあ、もうっ」

「なっ、うっさい！！ 抱きつくな！！」

「大丈夫だよ。シズちゃんが一番なんだからさ！」

「~~~~~つつつつ」

「かわいいーねえ、ほんとに」



#### × 4 4 実体化しました

仁さんが、あるソフトを作った。

『生きたプログラム』を、三次元に移すソフトだ。

何に使うかなんて、決まっている。

六臂とツキちゃんのためだ。

前々から、彼らをこっちの次元に移して欲しいと、サイケと津軽、彌霸彌ちゃんが言っていた。でも、僕にはそんなハイテクなソフトを作れる技術はないから、仁さんに頼んでおいたのだ。

そうすれば、案の定、仁さんは喜んで作ってくれた。それと同じくらいの勢いで仕事もしてほしいもんだ。しかし、ありがたいので、今日だけは口をつぐんだ。

ソフトのことを知って、三人は大喜びした。それはもう、本当にサイケと津軽が可愛かった。彌霸彌ちゃんは、普段ならそんなことと思わないけど、喜ぶ姿を見て、僕は少し嬉しくなった。

もちろん、このことは臨也と静雄にも言った。2人もすごく喜んでいった。

今から、そのソフトをインストールするところだ。機械を弄るのは苦手ではないので、まあ適当に進めていく。僕の隣では、彌霸彌ちゃんが目を輝かせていた。

こんなに期待しているのだから、失敗はできないな、なんてことを思う。まあ、失敗しても僕のせいじゃないんだけどね。作ったのは仁さんだから。

「じゃあ、インストール始めるよ」

『うん』

『あ、はっ、はい……っ』

インストール開始を、パソコンの中にいる二人に伝える。ツキちゃんは、どこか不安そうだ。そのツキちゃんの頭を、六臂が撫でる。本当に、二人は仲がいいな。

そんなことを思いつつ、僕はEnterキーを押した。

ウイーン……と、パソコンから音がする。僕は、この音が苦手だ。逃げ出したい気持ちを堪えつつ、パソコンの画面を見る。

数十秒後。

ソフトとセットになっていたチップが光った。

と、次の瞬間には、人が二人、立っていた。

パソコンの画面の中で見た、あの二人が。

「やつ………」

「……やったああっ!!」「……」

彌霸彌ちゃんたちが嬉しさのあまり飛び跳ねる。僕は、胸を撫で下ろした。

よかった、失敗しなくて。この子たちの悲しむ顔は見たくないからね。

実体化した二人は、不思議そうに自分たちの体を見ていた。

「ほんとに実体化できた……」

「ふ、ふしぎな感じが、します、ね…っ」  
そう言っている二人の顔は、心なしか、綻んでいた。

「ろっぴくんっ！」

「ろっぴ、っ」

「わっ」

サイケと津軽が六臂に飛びつく。実体化したばかりで、上手く体の感覚がつかめないのだろう。六臂は後ろにふらついた。でも、すぐに体制を立て直して、二人を受け止めた。

ツキちゃんはというと。

「ツキちゃあああああんっっっ!!」

「ふわっ、まつ、ますた、っ」

彌霸彌ちゃんに強く抱きつかれていた。

まあ、彌霸彌ちゃんが一番嬉しいかもね。大好きなツキちゃんが実体化したのだから。今までできなかったことを実際にすることができる。きつと、とても嬉しいだろう。

「ツキちゃん、身長もしーちゃんと同じなんだねっ」

「あ、は、はい、まあ……」

「あ。ツキちゃんいい匂いがするー」

「ふえっ、!?!」

抱きついてきた彌霸彌ちゃんがおかしなことを言い出した。

その言葉に、ツキちゃんが顔を赤くする。

そんな彌霸彌ちゃんを、六臂は引きつった笑みを浮かべながら見ていた。恋人があんなことされているのに、よく引きつり笑いで済ませられるな……。

感心のようなわけのわからないことを思っ。

まあ、なににせよ……。

「ツキちゃん、六臂、これからよろしくね」

今日から、また家が賑やかになったのだった。

「月子、よろしくなっ！」

「ふえっ、つつ、月子!？」

「おうっ。月島静雄だもんな！」

「夢、理由になっていませんよ」

「月島、そのマフラー暑くねえか？」

「い、いえ……っ。丁度いいくらいです……っ」

「マフラーもふもふ……」

「君の恋人可愛いね。月島くん」

「ありがとう。君の恋人も可愛いと思うよ？」

「まあね。シズちゃんだし」

「つがるもかわいいよーっ」

「君たち、ほんとに仲いいよね……」

「ツキちゃんにもうちよっつとひっついてたかったあー……」



× 4 5 缶チューハイ（前書き）

あてんしょんぷりーず！

以下の注意書きに該当する子たち、悪夢を見る前に逃げるんだ！！

- ・BLとかムリー。超ムリー。
- ・15歳以下の純情な子たち。
- ・シズちゃんが攻められてるところなんて見たくない！

そんなにエロくはないけど、エロくないと言い切れない生温いお話です。

それでも、『しょうがねえ、見てやんよ』という心の広いお方は下へスクロールしてくださいっ！

× 4 5 缶チューハイ

家に帰ると、テーブルの上に大量の飲み乾されたチューハイの缶が転がっていた。リビングには、甘い甘い、それなのにどこか苦そうな、缶チューハイ独特の臭いが充満していた。リビングのドアを開けると、そんな臭いが俺の鼻を突いた。思わず顔をしかめる。きよろ、と部屋を見回すと。

ああ、やっぱり……………。

俺は、小さく溜息を吐いた。

ソファには、飲み倒れたシズちゃんがいた。眠くなってしまったのだろう。彼はソファで寝ていた。

……………シャツをはだけさせて。

目の前の俺得な状況に、俺は鼻血を堪えていた。ここは天国だろうか。本当に。

アルコールが回ったせいで紅潮した頬とか！ はだけたシャツからチラチラ見える白い肌とか！！

あれだよね！ 俺、誘われてるよね！？ 襲ってくださいっていう信号だよね、これは！！

そんなことを考えつつ、俺はシズちゃんを起こすために、彼の横に立った。

人影に気づいたのだろう。シズちゃんは、ゆっくりと目を開けた。

アルコールのせいで上手く頭が働かないのだろう。シズちゃんは、しばらくボーっとしてから、俺がいることに気づいた。

「……………ん……………いざ、やあ……………」

「ただいま、シズちゃん」

俺のほうを向いたシズちゃんの瞳は、チューハイのせいで潤んでいた。その上舌つたらずになっている。紅潮した頬に潤んだ瞳、呂律が回らない。この3つがそろえば、俺と理性との格闘開始のゴングが鳴る。

ああ、今回も辛い勝負になりそうだ。

しかし、俺の心内大格闘など知らず、シズちゃんは更なる爆弾を投下していく。

「いざやあ」

「っ、」

アルコールに完全に支配されてしまっているシズちゃんの脳みそは、間違っちゃいないが危険な指令を下している。

シズちゃんは、普段とは違う甘えたような声で、俺の腰に抱きついてきた。

まだだ。俺の理性はまだ頑張れるぞ！ まだいける！

必死で理性にストッパーをかけて、シズちゃんの頭を撫でる。

「シズちゃん、どうしたの？ こんなにお酒飲んで」

「……………??? さけ……………??」

俺の言葉に、シズちゃんが首をかしげる。あ、可愛い。じゃなく  
てね。

「シズちゃん、これお酒だよ？ 気づかなかったの？」

「んー……………。きづかなかった……………?」

シズちゃん言葉に、脱力する。ああ、シズちゃんのことだから、オレンジジュースを買ったはずが、チューハイだったっていうオチかな。まあ、そんなところも可愛いんだけどね。

腰に抱きついているシズちゃんをやるわりとはがして、俺もソファに座る。

どうしよう。シズちゃん、もっぱらアルコールには弱い子だからなあ。困った。このままじゃあ、危ない。何がって、俺の理性とか俺の息子とか、シズちゃんの腰とか。

一番困るのは、シズちゃん本人だった。

普段からフェロモン垂れ流しなのに、アルコールという最強の武器を持ってしまったのだ。まさに、鬼に金棒（あれ、使うところが違う感が否めない）。

俺が困っていると。

「いざやあー」

「うおっ!?!」

シズちゃんにのしかかれた。

攻めである俺だが、今回、理性とも対決中なので、あまり余裕はない。本当に、シズちゃんの腰とか危ないんだけど。

「し、シズちゃん、」

「……………いざやのにおい……………」

はい、ちょっと待とうかー。タイムっ。タイム!!

今のは反則だと思うよ、シズちゃん。俺の肩口に顔つずめながら、小さく「いざやのにおい」とか。しかも、なんか嬉しそうに。絶対

に誘ってるだろ。まさかのシズビッチ？

そんなこと考えつつ、理性は俺に追い込まれていた。ああ、マズイ。リングから出される。このままじゃダメだ。俺なんかに負けるな理性。

深呼吸をして、体制を立て直す。

自分の心を落ち着かせるためかはよくわからないが、俺はシズちゃんの頭を撫でた。シズちゃんが気持ちよさそうに目を細める。可愛いなあ。

「シズちゃん」

「なんだ、いざ、つんう!？」

シズちゃんの名前を呼んでこっちを向かせる。それから、彼の唇に自分の唇を押し付ける。今日のシズちゃんは酔っているから、いつものように反抗してこなかった。こういうシズちゃんも可愛いよね。そんなこと思いながら、キスを序々に深くしていく。舌を絡めれば、甘いチューハイの味が俺の口内に広がった。飲みきれなかった、どちらのものか判らなくなった唾液が、口の端から零れて顎を伝っていく。

キスが下手なシズちゃんは、そろそろ苦しくなるころだ。そう思っつて、口を離れた。そのときに、唾液が銀の糸を引いた。それに、シズちゃんが赤い顔をまた少し、赤くする。

はふはふと酸素を取り込む彼の拭いきれていない唾液が、電気の明かりを反射して、テラテラと光る。その光景は、何かそそられるものがあつた。

口の中は、缶チューハイの味がほのかにしている。

「甘いねえ、シズちゃん」

くい、と口角を上げながら舌なめずりをすると、シズちゃんが、これ以上なくらいに赤くなって目を逸らした。ほんと、ウブで可愛いんだからさ。

いつの間にか、体制が入れ替わっていた。

俺の下にはシズちゃんがいる。

キスでとろとろになってしまった彼に、俺は言う。

「ね、シズちゃん。きもちいこと、しよっか」

そう言いながらシズちゃんの服に手を突っ込んで脇腹をそつと撫でると、シズちゃんの嬌声を上げた。

「嫌かな？」

まあ、君が嫌だと言っても、俺はするんだけどね。そつ思っている。

「い、いたくすんなよな………?」

はい、さよならバイバイ俺の理性。今までよく耐え抜いた。今回はばかりは褒めよう。俺の忍耐を。

でも、最後に煽ったのはシズちゃんだし、俺は悪くないよね！

そう思いながら、俺は甘いキスマークを彼の首筋に落としていった。

「腰がイテエ……………っ」

「ごめんよー、シズちゃん。でもね、俺も腰が痛いんだよー。昨日の夜のこと覚えてる？ シズちゃんったら、もっともっとって言いながら腰ふ「だああああああつ、言うな言うな言うなあああつ……………」

「イタタタタタ、わかった、わかったから放してシズちゃん！  
首もげる！」

「すっ、スマン…っ、」

「でもさ、どうしてあんなにお酒飲んだの？ 自棄酒？」

「ち、ちげえよ……………」

「じゃあ、なんで？」

「…………… ジューズと間違えて、それに気づかなかった……………」

「あー……………。やっぱり」

「やっぱりってなんだよ！ バカにしてんのか！？」

「違うよ。可愛いなってこと」

「はあ！？ 全然理由になっとな、んっ！」

「ん…………… ちゆう。はい、もうおしまーいっ！ じゃ、俺は朝食作ってくるねー！」

「…………… 最悪だよ、もう……………っ！」





× 4 5 缶チユーハイ（後書き）

うふふふ。イザシズおいしいよイザシズハアハア。エロくないのが残念。悶えないのも残念。

× 4 6 ある日の少年たちの青春。(前書き)

・ 来神時代

× 4 6 ある日の少年たちの青春。

シズちゃんの下駄箱に、ラブレターが入っていたという情報を入手した。

それを聞いた俺は、真相を確かめるべく、シズちゃんに聞いてみた。

『ラブレターもらったのって、本当？』

犬猿の仲である俺たち。シズちゃんの天敵である俺に、そんなこと教えてくれるわけではない。

柚留に聞いたところ、本当らしい。

詳しくは教えてくれなかった。

『もらってた、とだけ言っておくよ。詳しいことは、自分で調べんだね、情報屋さん』

こう言われたのだ。

言われた俺は、シズちゃんのラブレターについて、情報を集めまくった。

その結果、差出人は、一年生の女の子だった。

そんなに美人ではないが、どちらかといえば可愛いであろう子だった。

俺は、シズちゃんがない間に、ラブレターをそつと読んだ。

それはそれは、どこにでもあるような、そつけないラブレターだった。こんな紙一枚に、彼女の気持ちはどれだけこもっているのだろう。

丁寧に書かれている字は、女子特有の丸い文字で、控えめに小さく書かれていた。

いろんなことが頭に浮かんだ。

シズちゃんがラブレターをもらうなんて。

彼のどこがいいんだろうか？

化け物のような彼の、どこがいいんだろうか？

わからない。

急にイライラして、俺は、その手紙を破ってポケットに入れた。家にかえったら、さっさと捨ててしまおう。そうして、シズちゃんには困ればいいんだ。

シズちゃんは、その子とのお付き合いを断ったらしい。女の子は泣いてしまったみたいだけど、未練はなさそうだった。

そんなある日。

俺は柚留に聞いてみた。

「シズちゃんって、モテると思う？」

俺の質問に、余程驚いたのだろう。柚留は目を丸くした。普段しないくらいだから、それほど驚いたのだろう。瞳は、臨也がそんなこと思うなんて、とても言いたげだった。それはそれで失礼だが、今は気にしない。気にするほど、俺には気力がなかった。

「まあ、静雄は顔もいいし、それなりにモテると思うよ？ それにね」

静雄、本当はとっても優しい、いい子なんだよ。

柚留は、うつすらと笑みを浮かべながら、俺のほうを向いた。

「短気でキレやすいけど、本当はすごく優しくて、静かな子なんだよね。あんな力があつたり、君と喧嘩してるところがよく見られているから、気づかれてないけどさ。あんな性格だから、そっけない優しさなんだけどね。それって、カッコイイと思うな」

だから、一部の女子では人気なんだよ？

クツクツと喉で笑いながら、柚留は言う。

「まさかね」

そんな柚留の言葉に、俺は肩をすくめた。

俺を見ながら、柚留は言った。

「ま、臨也の前じゃあそんな面は見せないしね」  
君がわからなくても当然なんじゃない。

微笑しつつ言う柚留に、俺はなんとなく腹が立って、カバンを持って教室から出た。

シズちゃんが優しいなんて、そんなわけないだろう。

でも、柚留はシズちゃんの幼馴染だ。彼が言っているんだから、間違っではないだろう。

さっきのことを考えつつ、俺は下校していた。

シズちゃんのかげに、俺をこんなにイライラさせるなんて。本当に腹が立つ。

そう。俺は今、彼のせいでイライラしていた。

たしかに、彼は暴力が嫌いだ。そこらへんは、俺だって知っている。でも、やっぱり喧嘩ばっかしてる彼がモテるなんて、納得がない。

そう思いつつ曲がり角を曲がりかけたとき。

「よしよし」

シズちゃんがいた。

だいぶ離れているからか、シズちゃんは気づかなかった。いつも

なら気づくはずだが、ダンボールに入っている子犬に夢中なのだろう。彼はまったく、こちらに気づかなかった。

よし、いい機会だ。ここで、シズちゃんを観察してやろう。

いつもなら、こんなことは思わない。今日の俺は、きつとおかし  
いんだ。第一に、シズちゃんがラブレッターをもらうこと自体が異例  
なんだ。俺がおかしいのは、みんなシズちゃんのせいだ。シズちゃ  
んがラブレッターなんて………！

ギリギリと親指を噛みつつ、扉の影に隠れる。親指から血が出て  
いるが、今はそんなこと気にしない。

子犬を撫でているシズちゃんの手は、壊れ物でも扱つかのような  
手つきだった。その手は微かに震えている。彼のことだ。自分の力  
が強いから、弱いものをさわるのが怖いのだろう。怯えているんだ。  
彼よりも、何倍も小さいあの生き物を。

そんなシズちゃんの想いも知らずに、子犬はシズちゃんの手で頭  
を擦り付ける。気持ちよさそうな顔をしながら。シズちゃんも、そ  
れが嬉しかったのだろう。子犬のあごの下を撫でてやっている。

その顔は、俺に向けるような凶暴なものではなく。

愛しいものを見つめる、優しい顔だった。

俺には触れられない、すぐに崩れてしまう淡い笑顔。俺を見たら、  
彼はすぐに、いつもの不機嫌な顔に戻ってしまう。

別に、あの笑顔を向けられなくて悔しいわけではない。そんなの、  
俺から狙い下げだ。

なのに、どうして。

この気持ちは何なのだろう。

化け物なのに。彼は、人間ではないのに。

この胸のモヤモヤはなんなんだよ。

君のその笑顔は、一生俺には向けられない。

どうして俺たちは、こんな関係になってしまったんだろう。

「はぁ……………」

「臨也が溜息を吐くなんて、天変地異の前触れかなあ……………」

「ねえ袖留。さらっと酷いこと言わないでくれるかな。俺もとりあえず人間だからね？」

「ごめん。思ったことが口に出ちゃった」

翌日、昼休み。

袖留の横で溜息を吐いたら、辛辣な一言を言われた。袖留はたまに、ものすごい爽やかに毒を吐く。それはもう、少女漫画に出てくるイケメンキャラのような爽やかさで。

俺は今、悩んでいた。

俺は今、どうかしている。

頭の中が、シズちゃんていっぱいなのだ。昨日見たあの笑顔のこと。ラブレターのこと。いつものシズちゃんのこと。

それで困っているのに、袖留はからかってくる。



「ま、聞いてあげるよ。何があったんだい？」

でもやっぱり、柚留は柚留だ。ちよつとム力つくけど、しっかり聞いてくれる。本当は優しい奴。

「……バカにしないでね」

「しないよ」

にこりと微笑む彼を見て、俺は、事を話した。

「君って、頭いいクセに恋愛感情に関しては、静雄と同じレベルだね」

「ちよつと、シズちゃんと同じにしないでくれる？」

話が終わるなり、柚留に言われた。なんなんだ、急に。

「臨也って、静雄のこと好きなのかもよ？」

「……………は？」

柚留の言葉に、俺は耳を疑った。

誰がシズちゃんを好きだって？

俺が？ そんなわけないだろう？ シズちゃんは男だ。それに、俺の天敵。化け物だし、化け物だし、バカだし。

柚留は俺を馬鹿にしたいのだろうか？

「柚留、とうとう頭イカれちゃったの？」

「イカれた奴にイカれたなんて言われたくないねえ。それに、僕は至って正常だよ」

マズイ。柚留が怒っている。どうしようか。

俺が内心焦っている。

「ま、今回は許してあげよう。どうなるかが楽しみだしね」  
「え、ちょ、柚留さん………？」

柚留はそう言いながら、ドアのほうに向かって歩きだした。

「ゆ、柚留、どこに行くの!?!」

「授業に決まってるでしょ。臨也や静雄と違って、僕は授業をサボらないから」

教師を馬鹿にできるからね、授業は。

そうとだけ付け足して、柚留は行ってしまった。

彼が悪魔に見えた。

と、そんなところに。

「「あ」

シズちゃんが来た。

サイアクだ。こんなときに会うなんて。

いつもなら挑発する俺だが、今日はそんな気分になれなかった。それ以前に、彼の顔が直視できない。

シズちゃんから必死に目をそらしていると、シズちゃんに声をかけられた。

「……おいノミ蟲……」

「……………何……………」

「なんか体に悪いもんでも食ったのか……………?」

「君は俺に喧嘩を売っているのかい?」

真顔で言われて、キレない奴がいるだろうか。いないね。俺は断言するよ。

何かが切れて、俺はシズちゃんに歩み寄った。

「俺、今日は君とは喧嘩する気になれないんだよ」

「喧嘩なんてしたくねえ。寄ってくるな、ノミ蟲」

俺が近寄ると、シズちゃんが眉根を寄せた。

ほら、その顔。

俺には、あの顔の欠片さえ向けてくれない。

俺に向けられるのは、いつも、殺意が混じった顔だけだ。

そつだ。

ねえ、シズちゃん。

「俺さあ、君のこと好きなんだよ」

俺にこう言われたら、君はどんな表情をするのかな？

嫌がらせと悪戯心で言った言葉。  
シズちゃんの顔を見てみる。

ああ……………。

「真っ赤だ」

彼の顔は、真っ赤になっていた。眉根は寄せたままだけど、口はパクパクしてて動揺してるみたいだし、目を見開いている。その顔には、微かに怒りが混じっていた。

普段見れないシズちゃん表情を見て、なぜだか胸のモヤモヤが晴れた。

俺は満足して、その場から去った。

あんなのは、嘘だろう。

蟲の言うことなんか、全然信じない。全部嘘だ。

なのに。

「俺は何にドキドキしてんだよ……っ！」

俺もとうとう終わった。

ある日の少年たちの青春。

「臨也も鈍いなあ。新羅にでも教わったらしいのに。恋愛感情について」

イベント小説 七夕

「ただいまー」

「ただいまあつ」

玄関にこだます袖留と彌霸禰の声。少しすると、リビングから津軽とサイケが出てきた。

「おかえりっ、ゆずるくん！」

「みはねも、おかえり…」

「ただいま、サイケ、津軽」

二人の頭を撫でる袖留。二人はくすぐったそうに笑った。  
と。

「おかえりー、袖留」

「よお、おかえり」

普段はあまり見ない人物たちが顔を出した。  
臨也と静雄だ。

今日は、この二人が朝から来ている。

心なしか、二人とも顔が綻んでいる。それは、臨也と静雄に限ったことではない。サイケも津軽も、この家にいる奴らみんながそうだ。

そんな今日は何の日か。

そう、みなさんお気づきだろう。

七月七日。所謂七夕というやつだ。

なんでそれで喜んでいるのかといえば、久々にみんなで集まることになったからだ。柚留と彌霸禰は、そのための買い出しに行っていたのだ。

「笹、買ってきたよ」

そう、笹だ。

柚留の差し出した笹を、静雄が受け取った。

「でかいな」

「すごいでしょー！ それ、みいちゃんのお父さんの会社で作ってるんだよ！」

「作ってるの？」

「そう。栽培」

臨也の質問に、彌霸禰がうなずく。彌霸禰の家は、世界トップ企業の『Sasakawa』なのだ。

「みいちゃんの家裏庭には竹林があるんだよ！」

「みはねちゃん、すごいっ！」

「みはね、かつこいいいっ！」

「ふふふー。もっと言ってもいいんだよ！」

チビっこたちに誇らしげに言う彌霸禰を見て、苦笑する柚留。

彌霸禰ちゃん、前より変わったな。

確実に、彼女は変わっている。周りから見て、それは否定できないものとなった。成長した。何倍も、何倍も。

その光景も、いつもなら引つ叩いてるところだったが、今日はやめておいた。

「さ、早く準備しよう。今日は晴れるみたいだから、天の川も見れ

るよ」

「ろ、ろっぴさん、あ、天の川つて、見たこと、あ、ありますかつ」  
「写真ならね。実際はないよ」

リビングでは、六臂と月島が話をしていた。

「そんなに見れるものじゃないんだよ。今日は見れるといいね」

そんな二人に、袖留が笹を庭に出しながら言う。その言葉に、月島が「はっ、はいっ」と言いながら微笑んだ。それを見て六臂が微笑む。

夢雄と日々也が、2階からペンと細長い色画用紙を持ってきた。

「袖留さん、これでいいですか？」

「ん？ ああ、いいよ。ありがとう」

「日々は、短冊に何書くんだった？」

「秘密ですよ」

「なんでだよ！」

「どうせ後で見れるんですから。今は大人しくしててください」  
拗ねる夢雄を、日々也があやす。

「ねえ、つがる。あまのがわって、きれいなのかな？」

「わかんないけど、きつときれい……」

「みてみたいね、あまのがわ！」

「うん……」

そんな会話をしている津軽とサイケ。  
各カップルを見ながら苦笑する静雄。

そんな彼の後ろから、何かが飛び掛ってきた。まあ、だいたい予想はつくのだが。

「……ノミ蟲、離れる」

「やだなあ、シズちゃん。今日ぐらいはイチヤイチャさせてよ」



「るせえ。なんで七夕にイチャイチャしなきゃなんねえんだよ、殺すぞ」

「怖い怖い。じゃあ、せめてノミ蟲はやめてほしいな」

「ウザ蟲」

「ねえシズちゃん。俺はそういうことを言ってるんじゃないんだ。わかって」

いつもと変わらないカップル。

そんなおかしな光景に、柚留が笑いをこらえていると。

ドオンツツ……、

雷が落ちた。その後すぐに曇っていつて、しまいには大雨が降り出した。

慌てて笹を家の中に入れる。

雨が入らないようにさっさとガラス戸を閉める。

曇って明かりがないリビング。家の中は、一気に暗いムードになってしまった。

しばらくの沈黙から、数分後。

サイケと津軽が泣き出してしまった。

「あまのがわ、みれなくなっちゃったああ……っ」

「あまのがわ、みたかった……っ」

そんな二人をあやす夢雄。そのうち、わあわあと声を上げて泣き出す二人。それにつられて、月島まで泣き出してしまった。

困った。どうにかしないと。

柚留が困っている。

「サっちゃん、津軽」

彌霸禰が二人の前にしゃがんだ。  
ふと、サイケと津軽の涙が止まる。

「泣いちゃダメだよ。今はね、織姫さまも、彦星さまも、機嫌悪いの。サっちゃんと津軽が泣いたら、もっと悲しくなっちゃうよ。だから、泣いちゃダメ」

そう言いながら、そっと二人の涙を拭う彌霸禰。  
その光景に、一同は啞然としてしまった。

あの彌霸禰が、チビっこたちをあやすなんて……。袖留にいたっては、夢でも見ているのかと思っただけだった。  
でも、やっぱり事実だった。彌霸禰に言われた二人は、ぱっと笑った。

「うん…、わかった！」

「なかない…っ」

「よし、えらいっ！」

そう言って笑う彌霸禰。

「ツキちゃんも泣いちゃダメだよ」

「み、みはねさん……」

「大丈夫！ 絶対に天の川見れるから！」

月島まではげます彌霸禰。

若干違和感はあったが、どうにか落ち着いたのでよかったと安心する。

「よし。じゃ、短冊に願い事書いてちょうか」  
「そうだな。短冊に願い事書いて、てるてる坊主でも作るか」  
「うん、つくるーっ！」  
「え、何、シズちゃんも作るの？」  
「ニヤニヤするな、ウザ蟲」

夜7時。

雨はやんだが、雲がなかなか晴れない。サイケや津軽は、柚留たちと外に出ていた。

そんな中、臨也と静雄は家の中で、短冊に願い事を書いていた。

「ねえ、シズちゃん。シズちゃんは願い事、何にした？」  
「テメエに教える必要はねえ。そういうお前は何を書いたんだよ」  
「俺？ 俺は、神様とか信じないからねえ。ま、とりあえずは書いたけど、今は言わないよ。どうせ、後でつるすんだから、そのときに見ればいいじゃん」

へらっと笑う臨也に、若干苛つきつつ、静雄は自分の短冊を見た。

こんなのは、これに書かなくてもいい。

そう思った。静雄が短冊に書いた願いは、本当に他愛のないものだった。もっと別のものにすればいいと、見たは絶対に言うだろう。しかし、これは静雄にとって、特別なものなのだ。

こんなものつるしたら、笑われるだろう。

そう思った。

そんなとき。

「よおっと」

「つぁ、！」

自分の手から短冊が消えた。いや、臨也がとった。

ああ、最悪だ。そう思った。穴があつたら入りたい。それくらい  
恥ずかしかった。

チラリと臨也のほうを見ると、彼の顔は、信じられないくらい赤  
い顔だった。

普段じゃあ見ない顔。

静雄がチラチラと見てみると、臨也が上擦った声で言った。

「シズちゃん、こんなん、俺に言ってよ！」

「シズちゃんに嫌われても、俺はずっとシズちゃんと一緒にいるか  
ら！」

臨也がそう言ったとき。

「臨也、静雄！ 天の川見えたよ！」

柚留が外から顔を出した。

それに、慌てて振り向く二人。

外に出て空を見上げると、そこには、

深い群青の空に雪崩れる星があった。  
ダイヤモンドを散りばめたような空。斑にある赤や青の星。

それはもう、絵に画いたような天の川だった。

「わあっ、すっごいっ!!」

「つがる、きれいだね!」

「きれい…っ!」

「すげえ…!!」

「明るいですね…」

「わあ…っ、ろっ、ろっぴさん、あれ本物ですよねっ?」

「そっだよ、ツキちゃん。大丈夫、本物」

派生と彌霸禰が歓声を上げる。

臨也と静雄は、無言で空を見上げていた。

そんな沈黙を破ったのは、臨也だった。

「シズちゃん」

静雄が臨也のほうを向けば、そこには嫌になるほど綺麗な臨也の顔があった。それに釘付けになる静雄。

「きみと天の川が見れて、俺、すごい幸せだよ」

臨也にしては珍しい屈託のない笑みを静雄に向ける。  
それに顔が熱くなるのを感じながら、静雄は言った。

「……俺も……っ」

庭にある笹には、たくさんの短冊がつるしてある。

臨也と静雄の短冊は、あまりにもありふれたことが書いてあった。

『恋人とずっと一緒にいれますように』

なるべく人に見えないようにつるしたのでろう。しかし、柚留はそれに気づいていた。

あの二人が、なんだかんだで一番ラブラブかな。

寄り添いながら天の川を見るバカップルを見ながら、柚留は微笑んだ。

織姫と彦星は、一年に一度しか会えない

そんな彼らと同じ運命を辿らないように願おう

そんな彼らの分まで、俺たちが幸せになろう

恋人たちの七夕

(絶対に放さないからね、シズちゃん)

(……ん……)

イベント小説 七夕（後書き）

何このぐだぐだ感。しかもめっちゃ内容が中途半端  
繕えないグダグダ感。

否めないグダグダ感。

ま、いつか。ハッピーエンドだからいいよね。うん。ちなみに、  
あたしが短冊に書くとしたら、

『イザシズが気持ち悪くなるほど読みたい』  
絶対に書くよ。



× 4 7 暑いの前書き

・ 迷走。

・ 何がしたかったんだろう

今日もまた、二人が喧嘩をしている。この暑い中、本当によくやると思う。その元気をもつと別のことにいかしてほしい。

僕、穴戸鬼門 袖留は、強い日差しからなるべく当たらぬよう、教室のすみで彼らの殺し合いを見ていた。隣には、新羅とドタチンがいる。二人も呆れたように臨也と静雄を見ている。

僕が溜息をつく、新羅がこつちを見て言ってきた。

「袖留も、傍観しないで止めてきてよ。あの二人の喧嘩を止められるの、君しかいないんだからさ」

「新羅。こんな暑い中、あの二人を止めにあの強い日差しの下に行くなんて、無謀だとは思わないの？」

僕は、窓際で喧嘩をしている彼らを見ながら苦笑した。あれが日陰だったら、まあ止めないことはないんだけどねえ……………。

「なんか一言言ってよ。なんでもいいからさ」

そんなことを新羅に言われる。

正直言つて、喋るのも億劫だ。まあ、一発で静かになってくれれば嬉しいんだけどね。

そう思いつつ、僕は口を開いた。

「静雄ー、臨也ー。そろそろやめないと僕の家を1週間監禁だよー」

「ごめんね、シズちゃん」

「ああ、俺こそすまない、臨也くん」

「袖留つて、軽々と恐ろしいこと言つよね」

「あの二人、偽者じゃねえよな」

新羅とドタチンが何か言っているが、気にしない。よかった、余

計な口を利くことにならなくて。

「二人とも、ちょっとは静かにできないの？ 暑いんだから、やめようよ」

「だって、シズちゃんが、」

「ノミ蟲が、」

「口きかなくていいよ。君たちのその声、今聞くとその喉を引き干切りたくなるから」

その場に二人が土下座をする。無言のまま。僕の言った冗談を真に受けているのだろう。生憎、僕にそんなバイオレンスな趣味はない。だから口を聞いたところで喉元が切れるわけじゃないのに。二人とも、臆病だなあと思う。

そう僕が思っている。

「君が言うつと冗談に聞こえないんだよ」

新羅が笑いながら言った。

僕はそんなに酷いことをしているのだろうか？

首を傾げつつ、新羅を見ると、縦に首を振られた。首を折ってやるるか。いつそのこと、セルティとお揃いにしてあげてもいいんだけどね。

「いや、僕はセルティみたいに煙は出ないから、何も見えなくなっちゃうのは勘弁だなあ」

そう言う新羅は、顔が真っ青で冷や汗ダラダラだ。ていうか、僕

は口に出していたのか。

「とりあえず、今日はもう帰らねえか？ 下校時間はもうとっくに過ぎてんだ」

「ああ、そうだね。もう帰ろう」

暑くて歩くのも嫌になるけど、カバンをとらないと帰れない。早く帰りたいから、行動は早くしよう。

「じゃあね、新羅にドタッチン」

「じゃあねー」

「じゃあな」

新羅とドタッチンに別れを告げて、自分の帰路に向き直る。僕の前では、臨也と静雄が無言のまま歩いている。何か面白いことにならないだろうか。

そう思いながら後ろから二人に付いていく。

でも、面白いことなど一つも起こる気配がない。ああ、つまらないな。喧嘩以外のことならなんでもやってきていいんだけど。

そんなことをぼんやり考えていると、家についてしまった。ここからは、臨也と静雄の二人きりだ。喧嘩しないといいんだけどなあ。

「じゃあね。二人とも、喧嘩はしないようにね」

しっかりと釘を刺しておく。まあ、するんだろっけどね。

「ん。バイバイ、柚留ー」

「じゃあな」

「シズちゃんと二人きりなんて、虫唾が走るね」

「こっちの台詞だ、ノミ蟲」

「おー、怖いこわーい」

「……………ウゼエ」

「あれ？ 今日はまだもうお疲れ？」

「……………ワリイか」

「暑いもんねえ。シズちゃんでも、自然の力には勝てないかあ」

「……………」

「……………俺、夏は嫌いだなあ」

「……………んだよ、急に」

「んん？ ぱっと思っただけ」

「別にお前の嫌いなもんなんてどうでもいいよ。とっととくたばれ、ノミ蟲」

「やだなあ、シズちゃん。酷いよー」

「はっ。手前に酷いなんて感情は必要ねえんだよ」

「ほんとに酷いよ。ま、別にいいんだけどねー」

「でも、」の暑さだけはなんとかしてほしいよ」

暑いのは嫌いだ。

× 4 7      暑いのに（後書き）

夏の暑さで、私の思考回路はショートしました。もう、何このグダグダで意味をなしていない話。もはや話ですらない。

## ひとつ 少年と妖怪（前書き）

- ・まさかのパラレル設定。
- ・臨也は妖怪を見ることができるとある高校生。
- ・シズちゃんが強い妖怪。
- ・なんか臨也がウザくない。
- ・こんなでもいい人は下へとお進みください！



## ひとつ 少年と妖怪

俺、折原 臨也は妖怪を見ることができてる。

こんなこと言っても、信じない奴がほとんどだろう。当然だ。俺だって、こんな力を認めたくない。

だが、何をしても天性的なものだから消すことはできない。

妖怪が見えたところで、いいことなどひとつもない。むしろ、不幸ばかりの生活だ。

変なものに襲われ、変なものに声をかけられ、変なものに憑かれる。

こんな生活をしたがる人がいたら、体を交換したいくらいだ。

とにかく、人と違う俺は、何ひとつとして得をしなかった。

妖怪は、他人には見えない。そのことを自覚していないと、声をあげてしまいそうになる。そうすると、周りの人から訝しげな眼で見られる。俺は、何度もそんなことをしてしまったせいで、周りの人間から煙たがられるようになった。つまりのところ、俺は学校の中でも浮いた存在となってしまうたわけだ。

そんな俺は、今日も今日とて、学校への道を歩いている。この速度で行ったら、きつと間に合わないだろう。

だが、学校に遅れたところで、誰もどうも思わないだろう。

俺のことを、教師たちも嫌っていた。

『おかしな子』だと、よく言われている。

どうせ学校へ行っても怪しい眼で見られるだけだろう。  
それなら。

いつそのこと、学校をサボってしまおう。

学校をサボったって、親は注意してこない。親でさえ、俺のことを避けているのだから。

学校へ続く曲がり角とは別のほうへとびる道に進む。  
ここをしばらく真っ直ぐ行くと、丘があるのだ。

町が一望できるくらいの高さ。整備されていないから、柵などはない。危険な場所だ。  
でも、風が気持ちよくて、大きな木の葉がザワザワと擦れあう音が心地いい場所なのだ。  
俺の唯一の安らぎの場だ。

数分歩くと、丘が見えた。その上に立つ。下を見ると、家々がよく見えた。丘の斜面は、下にある畑へと広がっている。

ああ、なんて気持ちいいのだろう。  
ここには、誰もいない。  
俺を拒絶するものは、何もなし。

大きな木の下に寝転がって、目を瞑る。風の音と葉の擦れあう音。目を開ければそこに広がるのは、大きな真つ青な空と、太陽の光で透けている緑色の葉と、逆光で深緑に見える影と、木漏れ日。

それから、色白で細い腕

……………、うで…？

「○#\$ % @!?!?」

どこのぞのホラー映画のワンシーンのような光景に、俺は慌てて上体を起こす。

そんなに驚くことはないだろうと思うが、体の一部だけ出ているというパターンには、未だに慣れないのだ。

驚きと恐怖で口をパクパクしている俺の上から、声が出た。

『俺が視えるなんて、珍しい人の子だな』

姿は見えないが、妖怪なのは確実だ。言ってることが少しおかし

い時点で気づくが。  
そんなことを思いつつ、俺は頭の片隅でまた別のことを思っていた。

声が、綺麗だ。

体の芯に響くような、深いテノール。低いが、決して纏わりついてくるようなものではなく、流れていく水のような声だった。

いや、声に騙されるな、俺。声が綺麗でも姿が酷い場合がある。油断すると、シヨックがデカイぞ……！

襲われてもすぐに逃げられるように身構えてから、上を向いて声をかける。

「お前、妖怪か！」

『ああ、そうだが、何かあるのか？』

何かあるって……。今までにないパターンの切り替えしだ。変わった妖怪だな……。

「何かって、お前妖怪だろ？俺を喰うとか、そういつ……、」  
そう言いかけて、俺は墓穴を掘ったことに気づく。  
何自分から喰われるようなこと言ってたんだよ！  
が、時すでに遅し。

少ししてから、妖怪が動いた。

『お前、喰われないのか？』

「そつ、そんなわけないだろ！」

喰われるなんて、堪ったもんじゃない。

俺は、ガサガサと動き出した妖怪から逃げようとして、足を踏み出そうとした。

そのとき。

「あ……、っ！」

俺は足を滑らした。

支えを失った体が、後ろへと倒れていく。

丘の斜面のほうに。

マズイ……っ！

落ちる速度は遅くなることはない。そのまま後ろへと落ちていく。このまま落ちたら、骨を折るだろう。下は畑だ。網を支えている木の上に落ちたら、骨は確実に折れる。この速度だったら、死んでもおかしくない。斜面もだいぶ急だ。

ああ、落ちる。

俺はこのまま死ぬのだろうか。

そうしたら、悲しんでくれる人はいるのだろうか。

いや、きっといないだろう。

このまま死んでも、いいかもしれない。

そんな考えが頭を過ぎったそのとき。

「飛ぶことができないなんて、人間は不便だな」  
「っ、え？」

あの白い腕に、手首を掴まれた。

驚いて顔をあげた俺は、目を疑った。

金髪で色白な妖怪が、蛇の目を片手に俺を見て微笑んでいた。全てを見透かしているような琥珀色の瞳は、長い睫毛に縁取られている。金髪は、太陽の光を反射してキラキラと光っていた。弧を描いている唇は、薄い桜色。蒼く染められている着物から出ている腕は白く。

ただ純粹に、綺麗だと思った。

俺が生きてきた中で、一番綺麗だった。

たくさん見てきたどんなに美しい妖怪たちよりも、とても。

思わず見惚れてしまった。

そんな俺を不思議に思ったのか、美しい妖怪は首を傾げた。  
その仕草に、胸が高鳴る。

やっと我に返った俺は、パッと、彼から視線を外した。そんな俺  
がおかしかったのだろうか、妖怪はクスッと笑った。

妖怪は俺の手首を掴んだまま、スウ、と丘の上に戻った。  
地面がちゃんとあることを確認して、妖怪が俺を降ろす。

「ほら、」

「あ、ありがとう……………」

俺を降ろすと、妖怪もゆっくりと地面に足をつけた。そして、開  
いていた蛇の目を仕舞う。あの蛇の目は、飛ぶための道具なのだろ  
うか…………？

そんなことを思っていると、妖怪に声をかけられた。

「人の子」

「な、何だよ」

「お前、俺に喰われないのか？」

そう問われて、俺は焦った。

そんなのは御免だ。さっきあんなこと言わなければよかった…。

「そ、そんなわけないだろ……………」

「まあ、当然だな。わざわざ妖怪に喰われないなんて捻くれた奴も

いねえだろっに」

ケラケラと笑う妖怪。

不思議に思っつて、俺は聞いた。

「お前は、俺を喰わないのか？」

その問いに、妖怪はキョトンとしてから、また笑みを浮かべて言つた。

「お前は妖気が高いから、うまそうな匂いがする」

妖怪の言葉に、寒気がした。喰われるのだろうか…？

「だが、俺はお前を喰う気はない」

「え、？」

「俺は人間を喰うなんていう悪趣味なことはしないんだ」  
だから、喰われないなら他を当たれ。

口の端を上げながら言う妖怪に、俺はゾっとした。  
喰われるなんて、御免だと言っただらう。

そう思っつている俺の顔が、そんなに变だつたのだらうか。妖怪は  
クツクツと喉の奥で笑つた。その笑顔に、また鼓動が早まる。

ああ、俺は………、

「なあ」

「っ、え、なっ、何!？」

「お前、名前はなんていうんだ？」



妖怪から、そんなことを聞かれるなんて。珍しいこともあるんだな。

そう思いつつ、俺は名前を言った。

「折原、臨也……」

「イザヤ？ 変わった名前だな。妖怪の名前みたいだ」

その言葉に、俺は胸が痛んだ。

変わった名前と、よく言われる。それはしょうがないことだ。名前はどうしようもない。

でも、妖怪に言われるなんて想定外だ。ちよっと傷ついた。

そんな俺を尻目に、妖怪は言葉を紡いでいく。

「俺は、静雄だ」

「し、ずお……？」

「ああ。人間みたいな名前だろ？ 周りからよく馬鹿にされるんだ」

そう言う彼は、可笑しそうに笑った。

コイツと俺は、似ている。でも、全然違う。

綺麗なコイツと違って、俺は…。

と。

「イザヤは、俺が視えるのか」

ふと、妖怪が言葉を漏らした。それに、俺が顔をあげる。

「視えるけど……、」

「ああ、気にするな。こっちの話だ」

そう言う彼は、心成しか嬉しそうな顔をしていた。

美しい妖怪に会った日のこと。

（俺、君のことシズちゃんって呼ぶね）

（！ なんか女みたいで嫌だ！）

（でも、静雄って呼びにくいしさ。減るもんじゃないし、いいじゃん）

（嫌だ！）

妖怪は、思ったより子どもっぽくて、アホだった。

## ひとつ 少年と妖怪（後書き）

なんか、中の人繋がりみたいになった。でも全然その気はない。というか、ウザくない臨也になんともいええない違和感を覚えた。

新シリーズ突入、こんな感じですが、よろしくです。

ふたつ 金盞花

ふわり、

優しく風が吹いてきて、どこからか花弁を運んできた。それと同じに、花の匂いがした。

風が吹いてきたほうを見ると、そこには、蛇の目を持った金髪が、もう片方の手を花でいっぱいにして立っていた。

「シズちゃん」

俺は、この男を知っている。

俺、折原 臨也には妖怪が視える。そのせいで、周りから煙たがられて、いつも独りだ。

先日も、今日と同じように学校をさぼった。そのとき、この場所で、美しい妖怪に命を救ってもらったのだ。

彼の名前は静雄。聞いたところによると、彼は『雨男』という妖怪らしい。藍色に染まった着物を着ていて、いつも蛇の目を持っている。髪の毛は金色で、瞳は琥珀色。彼は、この世の『美』をすべて固めたような生き物と言っても、過言ではなかった。

「……その呼び方やめろって、いつも言っているだろう」  
「だって、可愛いじゃん」

「俺は男だ。男が愛らしくても、気持ちが悪いではないか」

「シズちゃんは気持ち悪くないよ」

そう言っていると、シズちゃんは不服そうに眉間に皺を寄せてこちらに歩いてくる。

「その花、どうしたの？」

隣に腰掛けた彼に問う。すると彼は、少しキョトンとしてから、思い出したかのように花を見た。

「この花か。知り合いの妖怪から貰ったのだ」

「妖怪から？」

「ああ。金盞花の妖怪だ。ソイツがくれた」

そう言いながら花弁を弄るシズちゃん。その姿が、とても綺麗で、俺は思わず魅入ってしまった。

俺に気づいたシズちゃんがこっちを向いて首をかしげる。

「どうした、イザヤ」

それに慌てて「なんでもない」と言う俺。すると彼は、俺をじっと見てから、金盞花をひとつ手に取った。

そして、それを突き出してくる。

「へ、？」

「やるよ、お前に」

「え、でも、これはシズちゃんが貰ったのだし、」

俺が言っていると、シズちゃんは笑いながら言った。

「ああ。俺が貰ったものだ。だから、この花をどうしようと、俺の勝手だろう？」

だから、やる。

そう言いながらシズちゃんは俺の手を取って、その上に金盞花の花を乗せた。

俺は、暫く呆然としてから我に返った。そして、手のひらに乗っかっている花を見る。

黄色とオレンジの混ざったようなその花からは、甘い匂いがした。甘いけど、花にこびり付くようなしつこい匂いではなく、ふわりとした匂い。

そつだ。これはまるで、

「シズちゃんみたいだね、金盞花って」「は？」

俺の言葉に、シズちゃんは「どうしたんだ、急に」という顔をしてくちらを見てきた。

別にシズちゃんに言ったわけではないが、とりあえず説明するよつに言葉を補う。

「金盞花って、キレイだし、甘い匂いがする。シズちゃんと同じだ」そう言いながら笑うと、シズちゃんが顔を赤くした。

あれ？　なんで赤くなつたんだろう？

不思議そうにシズちゃんを見てみると、シズちゃんは恥ずかしそうに口を開いた。

「確かに、俺は甘いもの好きでよく喰っているが……。甘味の匂いつけながら歩いてるのか、俺は？」

シズちゃんの言ったことに、俺は少し固まってしまった。

シズちゃんは、いつも甘い匂いがする。花の匂いか何かかと思っていたが。ああ、そういうことが。

「シズちゃんって、甘いもの好きだったんだね」

「なつ、わ、悪いか！」

「うっん、全然。可愛いよ」

「んなっ、」

俺の言ったことに抗ってくるシズちゃん。そのせいで、急に吹いてきた風にシズちゃんの持っていた金盞花が飛ばされてしまった。

「「あっ」「」

それをどうにかすることもできず、俺とシズちゃんはそれを見るだけだった。

「もつたいないな……。どうする、シズちゃん？　もしよかったら、俺が買ってくるけど」

俺が言うと、シズちゃんは笑いながら首を横に振った。

「いや、いい。飛ばされてしまったら、どこかへ落ちて、そこでまた育つだろ。そのほうが、きつといい」

「そう。じゃあ……」

「それに」

俺が言いかけたところで、シズちゃんが言葉を付け足した。それに、今度は俺が赤くなった。

「お前に渡せたから、それで十分だ」

### 金盞花

花言葉のひとつは、『静かな想い』。

その花言葉を知ったら、お前はなんと思っただろうか。



ふたつ 金盞花（後書き）

もう、甘いもの好きなシズちゃんとか超可愛いよね！ 萌えだよね！ 萌えの真骨頂だよね！ もう、なんだか臨也が別人で気持ち悪い。

## みつつ 白い猫

俺、折原 臨也には妖怪が視える。  
今まで、これが嫌でたまらなかった。

が。

最近、視えてよかった。なんて思うことが多々ある。  
なぜかって？  
そんなのは簡単さ。

なぜって……、

「イザヤ」

「うわあっ!？」

金髪のキレイな妖怪に会ったからだ。  
数週間前、俺はシズちゃん……、雨男の静雄という妖怪に会った。  
俺が足を滑らせたときに、彼が助けてくれたのだ。その後、喰われるかと思っただが、シズちゃんはそんなことしなかった。

シズちゃんは、とても美しい。

太陽の光を反射させる金髪。長い足。綺麗な琥珀色の瞳。藍染の  
着物が映える色白な肌。

こんな綺麗なものを視ることができないなんて、もったいない。  
そう思えるくらい、彼は美しかった。

「なっ、何、シズちゃんっ?」

「何っていうか…。驚きすぎだろう。そんなに俺の顔は醜態か?」

「そんなことないよ! ただ、いきなり声をかけられたもんだから、びっくりしちゃってさ」

俺が驚いたのは、シズちゃんが急に声をかけてきたからだ。

そう言つと、シズちゃんは安心したように笑った。その笑みに、俺の心拍数が増す。

そんな俺を尻目に、シズちゃんが話をきり出す。

「今日はな、俺の友人を連れてきたんだ」

袖留

シズちゃんは、誰かの名前を呼びながら木の上のほうを見た。それに倣つて、俺もそちらを見る。と。

「やあ」

「っ、!?!?」

木の枝の上に、背中に赤い何かの模様がある真っ白な猫が、こちらに笑いながら声をかけてきた。

尻尾を見てみると、2本。よく見てみると、大きさも並より大きい。

俺が驚いて硬直していると、その猫が飛び降りた。

地面に着地したと思ってそこを見てみれば、立っているのは猫で

はなく人。

俺は、それを凝視してしまう。

少し長めの茶髪を束ねた頭。白の着物に赤紫色の羽織。長身痩躯。人間では有り得ないほどの端整な顔立ち。瞳は、猫のような黄。

そして、真っ白な猫耳と2本の尻尾。

はい。

まあ、シズちゃんが妖怪だからね、友達もそりゃ妖怪だよ。でもさ、こっ、もうちょっと可愛い子っていうか。いや、かつこいい。この人もかつこいいよ。でもね、シズちゃんがこの人と仲いいって思うと若干凹むわけ。うん、友達だよ。大丈夫。友達だ。

「イザヤ、こいつは俺の」

「死亡フラグが立ちましたああああ!!」

「!? い、イザヤどうした!?!」

「もうそこから先は言わなくていいよ。わかったから。うん。俺の居場所は結局ないんだ」

「いや、だから。まだ何も言ってないだろうが。コイツは俺の幼馴染の、袖留だ」

「へ?」

シズちゃん言葉に、俺は拍子抜けする。

そんな俺を、シズちゃんはわけのわからないようなものを見るような眼で見してきた。それは酷いよね。確かに俺の早とちりだったけど。

「だから。俺の幼馴染だ」

「ほ、本当に?」

「ここで嘘を吐いたところで、利益は全く得ないぞ」  
呆れたように言うシズちゃんを前に、俺は安心していた。

……………ん？

なんで俺は安心してているんだ？ さっきだって、シズちゃんの恋人だったら、とか考えて焦ってたし。

やっぱり俺って、シズちゃんのこと……。

そう思っただけで俯いていると、ふいに、誰かに顎を掴まれて顔を上に向けられた。

目の前にあつたのは、柚留の端正な顔。

「っ、！？」

「君がイザヤか」

鼻先を息が掠めるほど近くにある柚留の顔。目をそらしても、顔が近く過ぎて視界から外すこちができない。戸惑って目を泳がせていると、柚留と目が合った。

その瞳を見た瞬間、俺はそれから目を逸らせなくなった。

さっきと瞳の色が違う。

くすみのない、真っ赤な猫目。

まるで、俺を威嚇しているような、燃えるような紅<sup>あか</sup>。

それに驚いたせいで動けないでいた俺を、柚留はじっと見ていた（俺には睨んでいるように見えた。なんとも言えない威圧感）。

しばらくすると、柚留は目を瞑って、そっと、俺から離れた。

妙な緊張感から開放された俺は、腰が抜けてしまい、その場へたれこんでしまった。

「おっと、ごめん。大丈夫かい？」

それに、袖留が心配して声をかけてくれた。彼の瞳を見ると、桜色に変わっていた。

差し伸べられた手を取りつつ、俺は『なんだ、コイツ……』と思っただ。

威嚇するような赤だったと思えば、人を安心させるような柔らかいピンク。

一体どんな妖怪なんだ……？

「つい、いつものクセでさ」

「……クセ、？」

「うん。随分と昔に、静雄は親しくしていた人間に殺されそうになってね。それから、怪しい奴は妖怪でも人間でも、こうやって威嚇するようにしたんだよ。それで、初めて会う静雄の知り合いには、片っ端から威嚇しちゃうんだ」

笑いながら言う袖留。

なんて厄介なクセだろう。

舌打ちをしたくなかったけれど、そんな苛立ちを、他の思いが打ち消した。

シズちゃんは、俺のように独りではない。

ちゃんと、守ってくれる人がいる。

俺には、そんな人はいない。親も、教師も、同級生も、みんなが敵だ。

そう思って、俺はなぜだか、悲しくなった。今までは、こんなふうに悲しくはならなかったのに。

嗚呼。

そうだ、こんなふうになったのは。

シズちゃんに会ったからだ。

俺に優しく接してくれたのは、シズちゃんが初めてだった。

俺は、それが嬉しかった。たとえ、シズちゃんが妖怪でも。

俺はこれから、こつやつて目の前で優しさを見るたびに、こんな感情に浸るのだろうか。

弱くなった。随分と、弱くなった。

「おい、イザヤ」

そんなことを考えていると、シズちゃんの心配そうな声が聞こえた。

何？ そう言つと、シズちゃんは俺の頬に手を伸ばして言った。

「なんで、そんなに悲しそうな顔をしているんだ？」

俺は、そんな顔をしているのか？

そう思いながらシズちゃんを見ると、シズちゃんが眉をさげて、顔を歪めながら言った。

「お前の悲しそうな顔を見ると、胸が痛いんだ」

だから、笑ってくれよ。そう言つ彼を見て、俺は少し驚いた。それから、ぎこちない笑みを浮かべて言った。

「ありがとう、シズちゃん」

シズちゃんの肩越しに見た袖留の瞳は、  
酷く冷たい蒼だった。



みつつ 白い猫（後書き）

柚留くんのポジションってなんかこう……。動かしくいんだよね。うん。この人嫌い。あ、いや、キャラクターは好きなんだよ。このポジションが嫌いっていうだけであってね。

## よつつ 昔見た妖怪

夢を見た。

周りは何もなく、ただ闇が世界を包んでいるだけだった。

俺だけがそこに立っていた。

一人だった。

けれど、そんなことに慣れてしまったせいで、寂しいという感覚は麻痺してしまった。だから、俺は何も思わなかった。

そう思って立ち尽くしていると、目の前に二つの真っ赤な瞳がこちらを見つめているのが見えた。

何かはわからないそれは、だんだんと俺に近寄ってきた。

俺は逃げもせず、それを見ているだけだった。

そして。

真っ赤な瞳の下から、小さく鋭い牙がビッシリと生えている口が開き、俺を食べようと迫った。

「っ、うわぁああっ!!」

そこで、目が覚めた。

周りを見れば、そこはいつもどおりの自分の部屋だった。カーテンの隙間からは朝日が差し込んでいる。いつもならそれは心地よく感じるが、今日は不快でしかなかった。

額に流れる汗を手で拭いながら、俺はベッドから降りて、そのまま洗面所へと向かった。俺以外に誰も住んでいない家。俺のひたひたという足音だけしか聞こえない。

蛇口を捻ると、水が出てくる。それはいつもどおりだ。ただ違うのは、俺の感覚だった。水に触れると、なんともいえない違和感を覚えた。いつもならさらさらと指の間を通っていく水の感覚が気持ちいいのに、今日は、水が手に絡みつくような、そんな感じだった。その気持ち悪さに耐えて、顔を洗う。

水に濡れたその顔を上げれば、いつもより疲れた自分の顔があるはずだった。

なのに。

そこにあるのは、皺だらけで醜い顔だった。

それは、小さな頃に俺を襲ってきた妖怪そのものだった。

「っ、な、」

恐ろしくて鏡から離れようとして、尻餅をついた。それでも俺は洗面所から出たくて、立たない腰をなんとか上げてその場から走り去った。

学校があることなど忘れて、俺はいそいそと着替えてあの丘へと走った。

丘を見ると、俺が会いたかった彼は、飛んできた小鳥と戯れていた。

そこまで、俺は必死で走る。

彼が居る場所までが、とてつもなく長く感じた。まるで、何キロも走っているような、そんな感覚だった。

そんな俺に、シズちゃんが気づいて笑いかけてくれた。  
それを見て、俺は泣きそうになった。

俺は、シズちゃんの懐へ飛び込んだ。いくら体が俺より大きい彼でも、俺のような男子高校生が突っ込めば、後ろへとひっくり返るだろう。

「うわっ、！」

俺が突っ込んだのと後ろにひっくり返ったので、シズちゃんはびっくりして素っ頓狂な声を上げた。

懐にいるのが俺だとわかったシズちゃんは、起き上がって俺を引き剥がして聞いてきた。

「い、イザヤ！ どうしたんだよ、急に！」

俺はそれに答えることができなかった。

ただただ、安心してた。

シズちゃんの温度と、花の匂いと。

わけのわからない不安が一気に失せ、今度は涙が込み上げてきた。このまま顔を上げるのは情けなくて、俺は首をふりながらシズちゃんの胸に顔を押し付けた。

「い、イザヤ？ 大丈夫か？」

そんな俺に、シズちゃんが不安になったみたいで頭を撫でてきた。涙も引っ込んだところで、顔をあげる。

そこには、心配そうな顔をしたシズちゃんの綺麗な顔があった。

それを見て、また安心する。

「ごめんね、シズちゃん……」

「な、なんで謝るんだよ！ お前何もしてねえだろ！ 確かにお前が突っ込んできてビックリしたけどよ、そんなこといいんだよ。どうしたんだ、イザヤ？ すごい疲れた顔してるぞ」

質問攻めしてくるシズちゃんを宥めて、俺は今までのことを話した。

話し終わると、シズちゃんがなぜか泣いていた。

「ちよ、なっ!?!? なんでシズちゃんが泣いてるの!?!? 俺なんかシズちゃんに言った!?!?」

「ち、ちげえよ……っ、ぐすっ。おま、お前がひとりで、ひっく、不安だったなんてっ、知らなくて、っ、色々聞いちゃってっ、ひくっ……、」

実際俺は何もしていないが、彼を泣かせたのは俺だ。とにかく、なんとか泣き止ませる。

シズちゃんが落ち着いたところで、柚留が来た。

「やあ、なんだか朝から騒がしいね。……どうして静雄は泣いているんだい?」

「ゆっ、ゆずる! 聞いてくれ、いぎ、いざや、イザヤがっ」

「どうしたんだい、静雄? イザヤに何かされた?」

「違うよ! なんでそうなるの!」

「だって、イザヤしかいないし」

柚留といつもどおりのやり取りをしてから、さっきあったことを話す。

すると、シズちゃんの背中をさすりながら柚留が神妙な顔つきで言った。

「イザヤ、君、小さい頃にその妖怪の顔を見たのかい?」

「え、まあ、うん」

俺の答えを聞いて、柚留は黙り込んだ。

それを、俺とシズちゃんが見つめる。

数秒後、柚留は真剣な顔で俺に言ってきた。

「イザヤ。君はたぶん、その妖怪に狙われてるんだと思うんだ」

「は? な、なんで?」

柚留の急すぎる言葉に、俺とシズちゃんは呆然とする。

そんな俺たちに、柚留が言ってきた。

「これは単なる推測にすぎないけど……。その妖怪は、イザヤが気に入らないんだと思う」

そこまで聞いて、俺とシズちゃんはだいたいが納得できた。

「知ってると思うけど、妖怪の中には、人間に見られているということ嫌悪する者がいる。そいつらは、だいたい力が強く、人間を憎んでいる。視える人間が気に入らない。だから、その人間を殺そうとする。殺すとまではいなくても、痛めつけるだろう。眼をくりぬき潰すか、体の一部を食べてしまうか。そうすれば、彼らは気が済む」

柚留はそう言うのと、俺の顔を見た。

その目は俺を哀れむような空色だった。

「イザヤ。たぶん、その妖怪は近々君を襲いに来るだろう」

そこまで言っつて、柚留は口を噤んだ。おそらく、死ぬ覚悟はできているかと聞きたいのだろう。

俺がそれに答えようとした。

が、それより早く、シズちゃんが口を開いた。

「じゃあ、俺たちがイザヤを守ればいいじゃねえか！」

それに、俺は驚く。柚留はシズちゃんがこう言うことを予想していたようで、溜息をついた。

そして言っつ。

「静雄。君は昔、助けようとした人間に殺されかけただろう」

「イザヤはそんな奴じゃない！」

「でも、そいつ、静雄のこと襲うよ、絶対」

「イザヤはそんなことしない！」

「ちよつと待つて、今のおかしい」

襲うつて何！？ しかも絶対つて断言したよね！？

「おかしくないよ。だって、静雄を見る君の眼つて、ときどき厭らしいんだもん」

え、嘘。

「イザヤが俺を襲うわけないだろ！」

純真無垢なシズちゃんが言っつ。

シズちゃんにそう言われたら、襲えるもんな襲えないよね。つて、

襲わないし！

「とにかく、俺はイザヤを守るぞ！ 柚留になんと言われようとな  
！」

言い出したら聞かないシズちゃんに、柚留は少し考えてから折れた。

「はあ……。しょうがないなあ」

「よっしゃー！」

「ただし」

喜ぶシズちゃんに、柚留がピシヤリと言う。

「ムリはしないこと。静雄は確かに強いけど、不浄なものには弱い  
んだから」

「……わかってるよ、んなこと……」

柚留の言葉にむくれるシズちゃん。

そのやり取りを見ながら、俺は完全に安心していた。

けれど、それはあつという間に碎かれた。

## いつつ 捕獲

たぶん、俺は常人より早死するだろう。別に俺が常人じゃないってわけではないが、本能的に、そう感じていた。

だが、

まさか、デカくて醜い妖怪に殺されるなんて、予想もしていなかった。

俺、折原臨也は先日、悪夢を見た。飛び起きた後も、まだ夢から覚めていないような、そんなことが起こった。

最近知り合った妖怪、袖留によれば、俺が小さい頃に見た妖怪が、今になって襲ってきたとかだ。

俺は何もしていないが、妖怪は俺が気に食わないらしい。どうもソイツは、人間に姿を見られるということが嫌いなようだ。

警戒するように言われたが、妖怪より人間のほうが劣っている。妖怪は姿を消せるが、人間はそんなことできない。

袖留に警告されてから三日目の今日。俺はあの日から、身にまとう空気をピリピリとさせながら周りに警戒していた。家で飛ん



る八工にさえ、注意をはらっていた。ちなみに俺は虫が嫌いだ。

だが、やはり能力の差を埋めることは何をしてもできない。そう。

俺はシズちゃんに会いに行く途中に、あの妖怪に捕まってしまったのだ。

というか、捕まっている。現在進行形で。

本当なら、こんなに暢気に君たちと会話をしていられる状況ではない。

しかし、俺はなぜか、変に落ち着いていた。

なぜかはわからない。怖いものに変わりも無い。

だけど、心のどこかで、俺はボンヤリと思っていた。

俺がこのまま殺されても、周囲の人間が悲しむというわけでもない。

俺はどこに行っても、結局のところ独りで苦しむのがオチなのだ。今日だって、シズちゃんに会う前にこんな状態になっている。このままシズちゃんが来なければ、俺はこの妖怪に殺される。それも結局、独りと同じ状態なのだ。

『憎い憎い憎い……、お前が憎い……！ 人間のくせに、私の姿を見ることができなんて、許せぬ……！！』  
「うっ、……」

妖怪が醜い顔を更に歪めて、手に力を込めた。その手は俺をつまめてしまうほどの大きさに、当然、握られれば苦しいなんていうものじゃない。

だんだん力が加わっていく手に、俺はもう少して潰れてしまっ  
んじゃないかと思ったそのとき。

ドンッッ！！！

俺の目の前の妖怪に、雷が落ちた。

そのせいで、妖怪は俺を放す。

急なことで身構えていなかった俺は、地面に落ちた。

痛みが引くのには時間はかからず、俺はふと、不思議に思った。

……………感電してない？

俺はあの妖怪に握られていた。あの妖怪に雷が当たれば、俺に  
だつて感電するだろう。なのに、なんともなっていない。  
なんでだ……………？

不可解に思っていると、妖怪の後ろに見慣れた姿が見えた。  
俺は驚愕する。

「シズちゃん！！」

そう。番傘をさしたシズちゃんが、そこにいたのだ。

よかった。彼は俺を助けに来てくれた。  
妖怪なのに。人間の俺を助けてくれた。

そんなことで泣きそうになっていると、俺は、ある違和感を感じた。

シズちゃんの顔が、いつもより陰っているのだ。

俺に柔らかい視線を浴びせてくる眼は、比喩物にならないくらい冷たいものだ。

シズちゃん……？

怪しく思っただけ俺が立ち上がると、シズちゃんがその眼でこちらを見してきた。

そして、俺に向かってシズちゃんが飛び掛ってきた。それも、尋常じゃないスピードで。

俺が避けようと思ったときにはもう遅かった。彼は俺に、番傘を振りかざしてきた。

もう終わりだ。

そう思ったとき。

腕を何かに掴まれて、俺は上へと凄い力で引っ張られた。  
驚いて上を見ると、柚留がいた。

「柚留！」

「よかった。間に合った」

柚留はいつもと変わらない口調で言った。しかし、その顔はいつ

もより真剣で、瞳の色は紅だった。

これは、袖留が警戒しているときの眼の色だ。  
なんで……？

そんなことを思っていると、袖留が俺に言った。

「イヤヤ、聞いて」

「……何？」

その声色が、とても重くて。何かに怒っているようで。なのに、  
すごく悲しいもので。

俺は、嫌な予感しかしなかった。

それを知ってか知らずか、袖留は口を開いた。

その言葉は、俺にも袖留にも、シズちゃん自身にも悲劇でしかないものだった。

「静雄の中に、もう僕たちはいない」

大きな雨粒が、俺の頬に落ちてきた。

いつつ 捕獲（後書き）

なんかもう、うわあってなってきた。どうしよう。こねデユラじや  
ない；

## むっつ 暴走

「静雄の中に、もう僕たちはいない」

袖留の口から発せられた言葉は、耳を塞ぎたくなるようなものだった。

言っている意味がわからず、俺は問い返す。

「それ、……どういう、こと………?」

「どういうことも何も、言葉のままさ。静雄は、僕たちのことを忘れてしまったんだ」

袖留が冷静な口調で言う。

俺はそれを聞いて、更に混乱した。

シズちゃんが、俺と袖留のことを忘れた?

なんでだ?

「忘れたって、何も、かも?」

「そう。僕たちのことは、何も覚えていないんだ」

「なんで!?! なんでそんなことになったの!?!」

俺は信じられなくて、袖留の問い詰める。

袖留はそんな俺をなだめた。

「落ち着いて、イザヤ。事情は今から説明するから」

そんなこと言われて落ち着けるほど、俺は冷静沈着じゃないんだ。しかし、事情を説明されてそれを理解するには、落ち着かなければならない。じゃないと、話が全く呑み込めない。

一度深呼吸してから、柚留の話を聞く体制に入る。柚留のほうを見直すと、柚留は「さすがイザヤ」とでも言いたげな満足気な笑みを浮かべる。

「静雄があんなになっちゃったのはね、イザヤが襲われてるのに気づいたからなんだ。まあ、僕のほうが上なんだけど、静雄も嗅覚がよくてさ。イザヤが襲われてるのに気づいて、暴走しちゃったんだ」

昔もこんなこと、あつたんだよ。

後から付け加える柚留。

その言葉に、俺は眉根を寄せる。

「あのね。昔、君みたいな子に一度会ったんだよ。でね、その子、虐待されててさ。しばらく姿が見えなくて、その子のところに行ったら、ちようど親に打たれてるところだったんだ。そんなところ見たら、静雄が暴走しちゃうのもしょうがないんだけどさ。静雄、キレちゃって。静雄、キレると周りが見えなくなっちゃって、何もかも頭から吹っ飛んじやうんだ。落ち着いてから少しすれば思い出すんだけどね。

で、何もかも忘れちゃうわけだから、関係ない人まで攻撃しちゃうんだ。そのときは、その子を傷つけた。それで静雄は、自分が嫌いになっちゃったんだよ。だからね、人にも、妖怪にさえも関わらないようになつたんだ」



袖留の話を聞いて、俺の中に罪悪感が芽生えた。

シズちゃんが、そんな辛い思いをしてきたのに。

俺が、妖怪に狙われてるなんて話をしなければ。

シズちゃんに助けに来てもらったなんて喜んで。

シズちゃんの心の傷を抉ってるだけじゃないか。

独りなんて、俺は馬鹿なんだろうか。

一番辛いのは、俺じゃないだろう？

悲しくて、苦しくて、人とも妖怪とも関わらないように生きてきたシズちゃんのほうが、ずっと孤独じゃないか。

一番辛い思いをしてるのは。

大切なものを助けようとしてそれまで壊してしまう、彼じゃないか。

俺は、下を見下ろす。

そこには、あの醜い妖怪を始末し終えたシズちゃんが周りを見回していた。

「たぶん、俺たちを探しているのだろう。」

大切なものを守るために、始末しよう。

俺は、腹をくくった。

それから、袖留のほつを見て言った。

「袖留」

「…なんだい、イザヤ」

俺の様子で、袖留は気づいたようだ。俺の言葉を予想しているであろう袖留が、口の端を上げながら聞いてきた。

それに、俺は言う。

「シズちゃんを、止めに行く」

俺の言葉を聞いた袖留の瞳の色は、喜びと嘲りが混ざった琥珀色だった。



## ななつ 落下

さて。

シズちゃんの暴走を止めると言ったはいいものの、どうやって止めればいいのか。

やっぱり、能力の差は埋められない。それに暴走したシズちゃんは、袖留でも止められないほど強いらしい。それなのにシズちゃんのところに行けば、自分から死亡フラグを立てているようなものだ。

そんな感じで袖留と悩んでいると。

すごい勢いで何かが頬を掠めた。

驚いて何かが飛んできた方角を見ると、シズちゃんがいた。

その手には、小粒だが角ばった石が握られていた。さっき飛んできたものは、きっと石だったのだろう。

って、そんな暢気なことを考えている暇じゃない！

「どうしよう、袖留！ このままじゃ殺られる！」

「落ち着いて、イザヤ。大丈夫。僕は、静雄には勝てないとは言ったけど、静雄の攻撃を防げないとは言っていないだろう？」

その言葉に、俺の気持ちは一気に軽くなった。

が、シズちゃんの攻撃が止まることはなく、石が次々と飛んでくる。

それを防ぎながら、柚留は俺に言ってきた。

「あのね。静雄の暴走を止めるには、一回眠らせるか気絶させればいいだけの話なんだ。そこまでができるかどうかなんだ。今の静雄には、近づくことさえ難しい。でも、ひとつだけ、一か八かの方法があるんだ」

柚留のその言葉に、俺は「どんな？」と問うた。

それに答えるために、柚留は俺の耳元に口をよせてきた。

それから、俺の耳に入ってきた言葉は、本当に一か八かの方法だった。

下手をすれば、俺が死ぬ。

正直言つと、死ぬのは嫌だ。

でも。

「いいよ。俺やる。シズちゃんのこと好きだからさ」

好きな人のためなら、かまわないさ。

柚留の言う作戦とは、いたって単純なものだ。

俺が囮になって、シズちゃんを捕まえてから、柚留がシズちゃん

を眠らせる。

しかし、囿の俺がシズちゃんを捕まえなければならぬ。逆に捕まってしまうと、この作戦は失敗だ。

俺が覚悟を決めて、柚留に降ろしてと頼んだ。

柚留は頷いて、俺を降ろした。

否。

落としした。

「はっ!?!」

「あ、っ!」

俺の腕を掴んでいた柚留の手に、石が当たったのだ。

予想もしなかったことに、柚留は思わず俺の腕を放してしまったのだ。

重力に従って、俺はそのまま遠い下へと落ちていった。

空中でどうにかできるはずもなく、俺はボンヤリと思っていた。

ああ、なんて不憫な死に方だ。

誰かに大切にしてもらえなかった上、落とされるなんて。

そんな俺の頭に、ある言葉が過ぎった。

『飛ぶことができないなんて、人間は不便だな』

そうだね、シズちゃん。

人間は不便だよ。

そんなのも、今日で終わりさ。

助けてくれて、ありがとう。

さようなら、退屈だった世界。

背中から全身に走る衝撃。

それから、俺の上に見える影。

シズちゃんが俺の上に乗ってきたのだ。

いつもだったら嬉しいその行動も、今は全く違うものだ。

でも、好きなひとに殺されるなら、かまわないさ。

ただ、最後に君の綺麗な笑顔が見たかったかな。

暴走したシズちゃんが蛇の目を振り上げる。それで俺を刺すんだね。ああ、刺せばいいさ。思う存分痛めつけければ良い。

「イザヤー!!」

袖留の叫び声が上がって聞こえた。

ありがとうね、袖留。これでいいんだ。

これが、俺の運命だったんだ。

そんなもんだろう、人間なんて。

勢いよく振り下ろされる蛇の目。

それより少し早く、俺は一言、言葉を零した。

「好きだよ、シズちゃん」



蛇の目は、俺の喉元へと振り下ろされた。  
そして、

ピタリと止まった。

## おわり 気持ち

降ってないも同然だった雨が、一気に降りだした。

俺は雨に打たれながら、いつまでたってもこない衝撃を訝しく思い、目を開けた。

すると、そこにいたのは。

蛇の目を下ろして、ぼろぼろと涙を流しているシズちゃんだった。

それに驚愕して、俺は慌てて上体を起こそうとする。  
が、シズちゃんが乗っているのと落ちたときの衝撃とで、それはムリだった。

変わりに、シズちゃんに声をかける。

「し、シズちゃん、どうしたの!？」

数秒の沈黙の後、シズちゃんは俺に抱きついてきた。  
それから、一気に喋りだした。

「すまん、イザヤ! 俺、また……っ! また、大切なものを傷

つけた！！ イザヤを助けようとしたのに、殺そうとした！！」

その後からは、泣き声で全くわからなかった。

俺はシズちゃんを引き剥がすことも、声をかけることをできず、ただ彼の背中をさするだけだった。

数分すると、シズちゃんは疲れてしまったのか、そのまま寝てしまった。

そんなシズちゃんを袖留が抱き上げて、片方の手で俺を起こしてくれた。体のふしぶしがとても痛い。

「イザヤ、ごめんね。あの時俺が手を放さなかったら……」

「いいよ、袖留。気にしないで。俺は殺されないで済んだしさ」

「……………そうかい」

袖留は、口では納得したようだったが、その眼は不満そうな納戸色だった。それが少しおかしくて、思わず笑みが零れる。

少ししてから、俺は袖留に家まで送ってもらった。家についてからの記憶は、一切と言っていいほどない。疲れてそのまま寝てしまったのだ。どうやってベッドまで行ったか覚えていない。

あれから、ちょうど一週間が経った。

なんとか動けるようになった俺は、丘へ行った。

天気はいい。

風も心地良い。

ほんわかした気持ちでぼーっとしていると、後ろから声がした。

「イザヤ」

それに、俺はバっと振り向く。

そこには、シズちゃんが立っていた。

彼の申し訳なさそうな顔を見て、俺はあることを思い出す。

『好きだよ、シズちゃん』

あのとき、うっかり言ってしまった言葉だ。

シズちゃんはそこまでの記憶がないらしく、幸い、そのことは知らなかった。

それでも、それを知っている俺は、一人で恥ずかしい思いをしていた。

シズちゃんの顔を見て、あのことを更に鮮明に思い出してしまう。

たぶん赤いであろう顔を隠すため、俺はさっと顔をそらした。

シズちゃんはそんなことに気づいていないのだろう。俺の横に座って、ポツリポツリと話し出した。

「あ、あのな、イザヤ」

「う、うん」

「その……………」

「う、うん」

「俺な、い、イザヤのこと、す、すき、なんだ…………っ、」  
「う、うん……………、え？」

今、好きって言った？

俺の思考は、一気にフリーズした。

しかし、そんなことお構いなしにシズちゃんは話を進めていく。

「で、でもな…。俺、イザヤを殺そうとしたらどう…？ だからな、イザヤは、俺のことを嫌いになっただろうから、俺、別の場所に行こうと思うんだ」

「…は？」

「イザヤが来ない、遠いところに」

「ちよっと待ってよ！」

シズちゃんの信じがたい言葉に、俺は声を荒げる。

「いつ俺が、シズちゃんのこと嫌いになったの!？」

俺の大声に、シズちゃんは目を丸くする。

「俺、シズちゃんのこと嫌いになってないし！ ていうかむしろ好き大好き愛して「……………」」

そこまで言って、俺は我に返った。

俺、今なんかすごいことカミングアウトしなかった？

が、今更気づいたところでどうにかなるわけでもなく。シズちゃんのほうを見ると、顔を真っ赤にして俺のことを凝視していた。

俺はやってしまった。なんて思いながら、熱くなっている顔を隠した。

何してるんだ、俺。

二人ともどうすることもできずに、ただ顔をそっぽに向けているだけだった。

どれくらいが経っただろうか。

気まずい沈黙を打ち破ったのは、以外な人物だった。

「二人とも、いつまでそうしてるの?」

それに驚いて、俺とシズちゃんはそろって顔を上げて声のしたほ

うを見た。

そこにいたのは。

「「ゆっ、柚留!?!」」

にこにここと笑う柚留だった。

「静雄がソワソワしてるから付いてきてみれば、こんな甘酸っぱい状態になってたなんてね!。びっくりだなあ」

ははは、と人の良さそうな笑みを浮かべている柚留を、俺とシズちゃんは真っ赤な顔で睨んだ。

が、そのせいでリラックスできた。

俺は恥ずかしさを堪えながら、シズちゃんに言った。

「し、シズちゃん」

「な、なんだ……?」

「おっ、」

声が震えてるけど、

裏返ってるかもしれないけど、

でも、今伝えなかったら、一体どこで彼に思いを述べるといつの

だ。

漢<sup>おとこ</sup>なら、ここで決めるべきだろう。

「俺は人間で、妖怪のシズちゃんよりは色々なことが劣ってるけどつ。でも、どんなものからでも君を守る。それから、どんなものより幸せにするから、」

「俺の短い人生を、貰ってくれませんかっ、！！」

俺の言葉を聞いたシズちゃんは、顔を更に赤くしてから、俺にとびついてきた。

そして、涙声で俺に言ってきた。

「しょうがねえから、貰ってやるよ」



これから先、辛いことや苦しいことがたくさんあるだろう。  
それでも、君と一緒に乗り越えることができると言い切れる。  
前は、俺なんかいなくても、なんて思っていたけど、今は違うよ。  
大切な人も、大切なものも、たくさんある。  
最近、親と少しづつだけ話せるようになった。  
それも、君のおかげだ。

もう孤独じゃないから。

粗末にはいけない命だから。

自分の力精一杯を尽くして生きていこう。

そうすれば、また何かに気づくだろう。

「シズちゃん、ありがとね」

「なんだよ、急に。気持ち悪いな」

「ははっ。まあ、らしくはないかもね」

おわり 気持ち(後書き)

終わった……!! よかった!! 無事に終わった!! 正直こ  
のシリーズ終わるか心配だった!! でもよかった!

× 4 8 喧嘩の内容(前書き)

来神時代

× 4 8 喧嘩の内容

校庭の木も赤く色付きだして、早いものはすでに葉がほとんど落ちてしまっている。

最近はやたらと風が強く、落ち葉がそれに連れ去られていく。そんなものをボンヤリと眺めていると、後ろから喧騒が聞こえた。

「テメエ臨也、ざけんな！」

「ふざけてないよ。俺はなーんもしてないよー」

毎度お馴染み、静雄と臨也の喧嘩だろう。でも、今日は何かが違う。

いつも二人の喧嘩の理由を事細かに聞いている僕には、すぐにはわかった。

僕は窓の外へと向けていた顔を教室の中央へと向けなおす。

そこには、いつもと同じような形相をした静雄が、臨也に向けて何かを突き出している姿が見えた。

視力はいいほうだから、静雄が持つてるものはつきりと見えたけれど、それが信じられなくて、見間違いかと思って見直したけど、やっぱり見間違いじゃなかった。

僕はそれに溜息を吐く。

クラス全員の視線が僕に向き始めた頃、僕はしぶしぶ腰をあげて二人のもとまで行った。

「二人とも、何してるの？」

「柚留！ 聞いてよ、シズちゃんがさあ！」

「違うぞ、袖留！ 臨也が言うことは全部嘘だ！」

「は？ 何言ってるの、シズちゃん。おかしいのはシズちゃんではない？ 俺は何もしてないってば！」

「嘘吐け！ お前しかいないだろうが！」

「二人とも落ち着こうか。じゃないと絞め殺すよ」

「「すいません」」

また言い争いを始めた二人を脅して黙らせる。

それから、僕は真っ先に静雄に質問した。

「ねえ、静雄」

「な、なんだよ」

「なんで君は、だいぶ高い店のプリンを持って怒っているんだい？」

そう。静雄は、今話題になっている高級洋菓子店のプリンを片手に持っていたのだ。

プリンは彼の大好物だ。だが、なぜ彼がそのプリンを持って怒っているのか。僕にはまず、それが意味不明だった。

僕の問いに、静雄が答えようとすると、横から臨也がわって入ってきた。

「聞いてよ、袖留！ シズちゃんがさ、俺がこのプリン買ってきたって言うんだよ！ 俺じゃないのに！」

「だって、こんな高いプリン買えるのなんて、お前ぐらいしかないないだろうが！」

「だから！ 俺じゃないってば！」

臨也の話を聞いて、僕は絶句した。

嗚呼、なんてくだらない喧嘩の内容なんだ。小学生でもしないような喧嘩じゃないか。

僕は呆れて、溜息を吐いた。

それから、言い争いをしている二人に言う。

「静雄、聞いて」

「なんだよ、袖留」

「そのプリン買ってきたの、僕なんだ」

その言葉に、静雄と臨也、それから周囲にいたクラスメイトたちが呆然とする。

そんなのを気にせず、僕は話す。

「こないだ、その店の近くまで出かけたから、ついでに買ってきたんだよ。で、今日渡そうと思ったんだけど、静雄がいなかったから置いていたんだよ」

ま、こんなことになるなんて思いもしなかったけどね。

後から付け足すと、静雄と臨也が真っ青になった。

それを見て、笑いそうになるのを堪える。本当、いじりがいるなあ、この子たちは。

僕の前できつちり45度の角度で礼をしながら謝る一人を横目で  
見ながら、僕は外を見た。

外はもう、木枯らしがふいている。



×49 こんぶれっくす。(前書き)

- ・来神時代！
- ・シズちゃんがまだ臨也に気づいてなかった頃を捏造しました。

×49 こんぶれつくす。

今日もやってしまった。

喧嘩をふっかけられたから、そいつらをブチのめした。それは、自分の身を守るためのことだから仕方ないだろう。

でも、それは言い訳になるかもしれない。

いつもこうなのは、短気で沸点が近いせいだ。

相手を見殺しすればいいだけのこと。

なのに、むかついてそれができない。

わずかな自我をもちながら、標識を振り回すなど、拷問だ。

神様かなんだか知らないけれど、俺はあなたに何かしたかい？

どうしてこんな力を、俺にもたせたんだ？

どうにもできない力のことをウジウジ言う気はないけれど。

こんな力は、俺に授けなくてもよかつたんじゃないかねえのか？

「静雄」

そんなことを考えながら呆然と立っている俺の後ろから、声が出た。

聞き覚えのある、心地よいテノール。

俺は、ゆつくりとそちらを向いた。

「……袖留」

穴戸鬼門 袖留。

俺の幼馴染だ。

幼馴染ゆえか、彼は俺のことを十分に理解してくれる。その点では、新羅もそうなのだが、あいつはすぐに解剖がなんちゃら言い出すからなんか嫌だ。

それに、袖留は俺のリミッターのようなものだ。

キレそうになるのを止めてくれる。

袖留は、俺より強い力をもっている。

でも、彼はちゃんとコントロールができるのだ。だから、俺のように物をすぐに壊したりなどしない。

俺も、袖留には勝てないことを知っているから、反抗はしない。

袖留は、地面に打ちひしがれている不良たちを避けながら、こちらに歩いてきた。

「まあ、派手にやったもんだね」

「……スマン」

「そうだね。静雄ももうちょっと自制ができるよつになるといいんだけど。でも、大丈夫だよ」

何が大丈夫なんだ。

そんな視線を向けると、柚留が笑って言った。

「この不良たちが誰に仕向けられて静雄を襲ったか、わかってるか」

その言葉を聞いて、俺は一瞬耳を疑った。

仕向ける？

わけのわからない、というような顔をしているであろう俺の顔を見て、柚留がクスッと笑う。

「静雄は、自製の仕方を覚えないとね。不良たちの襲撃は、僕がなんとかするからさ」

だから、そんなに落ち込まないでよ。

そう言いながら、柚留は俺の肩をぽん、と叩いた。

別に落ち込んでいるなんて素振りは見せていないのに。

柚留の言葉に、俺は驚きつつ、『こいつに隠し事はできないかなんて思った。』

わて。

このどうしようもない小学生のようなイヤガラセを、どのように止めようか？

僕はそんなことを思いつつ、彼の元へと向かって歩いていった。

彼は頭がいいのに、どうしてこんな手段しか思いつかないのだからか？

しばらく考えてから、ひとつの結論にたどり着いた。

うん、頭悪いんだな。

それに納得してから、僕は、目の前にある家のインターホンを押した。

「珍しいね、柚留が自分から俺の家にくるなんて」

まあ、座つてよ。

僕の前にいる黒づくめの人物は、厭味ったらしい笑みを浮かべながら言った。

それを聞きつつ、僕は彼を頭からつま先まで眺める。

「相変わらずゴキブリみたいな格好だなあ……………」

「柚留も、相変わらず爽やかに毒を吐くね」

あ、思ってたこと口に出てた。

苦笑いしながらコーヒーを入れるゴキブリ　　もとい折原臨也

は、僕の一言に厭味をぶつけてきた。

そんな臨也に、僕は笑いながら言う。

「ごめんね。今は思ってたことが口に出ちゃっただけだから、毒を吐いたとかじゃないんだよ」

そう言うと、臨也は眉根を寄せて「最初の一言思いつきり厭味」

と言った。

それに、笑いが漏れる。

僕の最初の振る舞いで気を悪くした臨也は、不機嫌さを滲ませながら僕に尋ねてきた。

「で、何？ 俺に何の用？」

その質問に、僕はうなずく。

「ま、用が無きゃ君のところから自ら訪ねてきたりはしないよ」

「…………… さつさとその用とやらを済ませて帰って欲しいもんだね」

普通の人になら見せないであろうこんな面も、僕の前では出してしまうらしい。まあ、僕の前で余裕ぶっこいてると酷い目に遭うのは、彼が一番わかっているだろうからね。

そう思いつつ、僕は用件を言った。

「静雄のことなんだけどさ」

そう言つと、臨也の顔が少しだけ強張った。

「シズちゃんが……………何？」

「あの不良たち仕向けてるの、君だよな？」

「…………… そうだけど？」

彼の返答に、僕は呆れたように溜息を吐く。

やっぱり。

少し間をおいて、臨也に言った。

「静雄は、君が不良を仕向けていることを知らない。もう少しすれば気づくだろうけど」

そうなる前に、やめてほしい。

そう言えば、臨也は口角を吊り上げながら言う。

「どうして？ 袖留には直接関係ないと思うんだけど」

「幼馴染として、関係あるんだ」

僕の言葉に、臨也はあの厭味ったらしい笑みで言ってきた。

「どうしてだい？ 幼馴染ってだけなのに。シズちゃんは、怪我をしたってすぐに治るだろう？」

「静雄の怪我の心配なんて、微塵もしてないよ」

肩をすくめると、臨也は舌打ちをした。

「僕は、静雄の怪我を心配してるんじゃない。静雄の『心』の心配をしてるんだ」

それに、臨也は訝しげな表情をする。

「静雄は、自分の力にコンプレックスを抱いてる。散々化け物と呼ばれてきて、周りの人から避けられて。君も、知っているだろう？」

そう言えば、臨也は笑いながら言った。

「知ってるさ。彼は化け物だ。周囲の人間が彼を避けている事だっ  
て知ってるよ」

「じゃあ、どうしてこんなことをするんだい？」

答えは明確だ。

だけど、彼に聞かなければ、話が進まない。

「シズちゃんが嫌いだからに決まってるじゃない」

予想通りの答えに、僕は半ば呆れながら、さらに問うた。

「どうして静雄のことが嫌いなんだい？」

「そんなの、シズちゃんが化け物だからだよ。俺は人間を愛してる。けど、化け物は愛せない」

ああ、なんて厨二な奴だ。

目の前の青年の痛さに額を押さえつつ、僕は早く終わらせてしまおうと思ひ、トドメの一言を放った。

「じゃあ、わざわざ不良なんか仕向けないで、君が直接静雄に会いに行けばいいじゃないか」

それに、臨也が眉根を寄せる。が、そんなこと気にしないで、僕はさらに続けた。

「君は、静雄のことが嫌いらしいね。だったら、無視すればいいだけのことじゃないか。敢えて不良を使うなんてことは、しなくてもいいはず」

「なのに、君は不良を使う。それは、静雄のコンプレックスのことを知っているから」

「静雄は第六感が野獣の如く冴えているから、君のことを見れば、一目で自分が気に入らないタイプの人間ということに気づくだろう。だから、君のことを傷つけようが、心は痛まない。殺そうとするかもね」

「君が不良を使うのは、静雄がコンプレックスに更に胸を痛ませるようにするためだろう?」

「不良たちを倒した後の虚しさを感じさせるためだろう?」

僕の言葉を聞いた臨也は、身動きひとつ、とれないでいた。それくらい、驚いているのだろう。

「臨也。知ってるかい?」

「…、な、何を……」

しどろもどろしながら、臨也が問い返してくる。

僕は、出してもらったコーヒーを一口飲んでから、ニマリと笑いながら言った。

「好きな子を虐めるなんて行為は、小学生と同レベルなんだよ?」

なんて幼稚な行為なんだろうか?



そう言っただけだと、臨也は呆然として固まってしまった。  
そんな彼に、なんとなく満足した。

出してもらったコーヒーを飲み干す。ブランド物のコーヒーだなあ、なんて思う。

からになったカップをおいてから、僕は立ち上がる。

「ご馳走様。用事がすんだから、僕はもう行くね」

まだ硬直したままの彼をおいて、僕は玄関へと向かう。  
と、その前に。

「臨也」

急に名前を呼ばれて、我に返る臨也。

そんな彼に、僕は笑いながら言った。

「僕、コーヒーより紅茶のほうが好きなんだ」

ブランド物より、市販のティーバックで淹れたやつ。

それから、

「今度は静雄も連れてくるから、ちゃんとプリンも用意しておいてね？」

そう言い残して、僕は臨也の家を出た。

こんぶれつくす。

( 袖留のせいで、俺のコンプレックスはシズちゃんになってしまったじゃないか )

数日後、臨也と静雄が殺し合いを始めて僕がマジギレするのは、また別の話。

×49 こんぶれつくす。(後書き)

おはこんにちばんわ！ 生きていました0.5%ですぐ)

最近更新サボっててスイマセン；メッセージいただいてもうす

っごい申し訳ない気持ちになっちゃいました。ごめんなさい。

久しぶりに更新しましたけど、また頑張ります！

応援よろしくお願いします！

× 5 0 昔の話（前書き）

シズちゃんと柚留くんが初めて会ったときの話

彼と初めて会ったのは、中学のときだった。

彼はよく暴れると有名で、その情報は当然、僕の耳にも入っていた。  
ていた。

一番最初の彼の印象は、やさぐれたつまらない不良だった。  
でも、喧嘩の一部始終を観察してから、彼の印象は変わった。

『愛を求める一匹狼』

別に、彼が自分から「愛されたい」と言っていたわけじゃない。

これは、僕をつまらない解釈だ。

でも、僕にはそうにしか見えなかった。

僕も同じような力を持っていたけど、彼とは違った。自分でコントロールのできる、天性のものだったから。けれど、彼の場合は体と共に成長していくものだった。扱いがわからないのだ。

よくわからないまま標識を振り回して、ボロボロになるまでやめない。  
ない。

そんなことを、彼は毎日繰り返していた。

ある日、僕は、彼に話しかけてみた。

「しずおくん」

僕の声に、彼は少しだけ反応したものの、あとは無視だった。おそらく、自分が好奇の目で見られていると思ったのだろう。実際、好奇の目で彼を見て、それで話しかけるような子もいた。彼は、それが気に入らないのだろう。

無視されたことは気にせず、僕は話を続ける。

「きみって、友達いないの？」

「……………いるわけ、ないだろ」

僕の問いに、彼はボソッと答える。今思うと、この質問は相当彼を傷つけたかもしれない。ただでさえ寂しがりやなのにね。

でも、幼い僕はそんなことに気づかなかった。

「一人、寂しくない？」

寂しいに決まっているだろう。化け物と呼ばれて恐れられていて、みんなから避けられるなんて。小学生には、こんな現実、厳しすぎる。

それでも、彼は強がって言った。

「……………弟、いるし。寂しく、ない……………」

「嘘、よくないよ」

「嘘じゃない」

「嘘だよ。だって、しずおくん、悲しそうな顔してるんだもん」

「っ、」

そんな強がり、すぐに見抜ける。彼は顔に出やすいタイプの人間だ。

その目は、悲しさで満ちていた。

喧嘩が終わったときなど、とくに酷い。  
僕は、それを知っている。僕がそれを知っていることを、彼は知らない。

僕は、彼に言った。

「しずおくん、本当は寂しいんですよ。暴力、嫌いだよね。その力だつて、大嫌いだよね」

彼は暴力が嫌いなのだ。

ただ、静かに過ごしたいだけなのに。

こんな化け物のような力を持つてしまったばかりに、彼の『日常』は取り上げられてしまった。

何より悲しいのは、そこだった。

彼は、悲劇の主人公を気取りたいわけでもなく、唯平凡に毎日を過ごしたいだけなのだ。勉強や人付き合い、ときには恋に悩んだり、友達と笑いあったり、先生に怒られたり。

誰もが通る道を、ただ歩みたいだけなのに。

僕は、彼と違う。同じ力を持つていても、使い方が違う。

彼は、制御の仕方がわからない。

だから、傷つけたくないものまで傷つけてしまう。

人を守りたいだけなのに。

それを、周りは気づいてくれない。だから、彼はやさぐれてしまった。

こんなに、ボロボロになってしまった。

「僕はね、穴戸鬼門 袖留。君と同類。同じ人類で、同じ男。それで、『化け物』だ」

僕が笑って言うと、彼は呆気に取られていた。そう。僕は化け物。こんな力を持ってしまった彼と同類。

「よろしくね、静雄くん」

本当はすごく優しく、寂しがりやな彼と出会ったことは、幸運だと思う。それは、彼にとっても、僕にとっても、後に現れる宿敵にとってもそうだ。

無邪気な笑顔の彼は、誰よりも子どもらしくて、とても美しかった。

「死ね、ノミ蟲!!」  
「やあーだねーっ」と  
「君たち、いい加減にしてくれるかな？」

……………それでもやっぱり、時々会わなきゃよかったと思うよ。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3596q/>

---

税込み245円の愛。

2012年1月13日23時55分発行